平成 27 年度　博士学位請求論文

初期アビダルマ論書における多変量構造解析

佐　野　靖　夫

Preface

「天の蒼蒼たるは、それ正色なるや、それ遠くして至極する所無きや。その下を視るや、亦是の若くならんのみ。」『荘子』逍遥遊篇の一説である。九万里の上空を飛ぶ大鵬の目から見れば、地上のさまざまな色は消えうせ、ただ青一色があるだけであるという。この文は 25 年前に仏教学を志した時の最初の卒業論文の Preface に載せた言葉である。いままた自分がこの分野において、論文を書くなど当時は思いもよらなかったものである。仏教は因果論に「縁」というもうひとつのファクターを挿入することによって、本来原因から一方向にしか進まない結果に、さまざまなヴァリエーションを与える。実際自分の未来というものは、全く予測がつけられないものだし、その自由意志の存在が仏教のもつ大きな特徴のように考える。

これまで、思想を勉強してきて、また教理を深く考えることから、テキストの取り扱い方にとても大きな興味と違和感をもっていた。仏教も宗教のひとつであることから、多くの神話が存在することは重々承知しているつもりであるが、「方便」という概念や「仏の真理」という人間を超えたパースペクティブを、当の人間が認識することは可能であるのだろうか。宗教であるからこそ、信仰の重要性については異論がないのであるが、本当にそれだけであろうか。それらの疑問を踏まえて、論理というものをどこまで容認するかということが、仏教の思想において、あるいは現代思想において重要な意味を持っているよう思われた。というのは、誰でもない私たちが仏となると説く思考形態は、人間の可能性において全幅の信頼が無ければ成り立たないものに思えたからである。

コンピュータはとても便利な道具である。たしかにひとりの力量では限りがあるものについても、上手く活用すれば思いもかけない成果を得られる。仏教のテキスト群は、いうまでもなく他の宗教のそれを圧倒するまでの膨大な量が存在する。個人ではもちろんのこと、すべてを渉猟することは不可能である。コンピュータという道具を扱うことは、それらに対してひとつの示唆を提供することができるだろう。けれども、そこには意味のないデータを放り込んでも、なにがしかの出力があってしまうという危険性がつきまとうものであることも事実である。出力結果だけに左右されない、論理性と実証性に踏みとどまり、まさに魅力的な誘惑に打ち勝つことが課題であった。

正直のところ本論稿が、どの程度成功したものであるかわからない。しかしながら、何もないところにチャレンジすることだけはできたのではないかと自負している。もしも気づいた点があればご指摘いただければ望外の喜びであるし、ご指導いただければなによりと思う次第である。

平成 28 年　弥生

佐　野　靖　夫

Texts and Abbreviations

ADV.	Abhidharmadīpa-Vibhāṣāprabhāvṛtti	Skt. ed. P.S.Jaini (1977)
AKBh.	Abhidharmakośabhāṣya	Skt. ed. Pralhad Pradhan (1967)
AKVy.	Sphutārtha Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra	Skt. ed. 荻原雲来 (1989)
AN.	Aṅguttara Nikāya	PTS. ed.
Bj.	Brahmajāla sutta	DN. PTS. ed.
DN.	Dīgha Nikāya	PTS. ed.
Kv.	Kathāvatthu	PTS. ed.
AKLak.	°Abhidharmakoṣaṭīkālakṣaṇānusāriṇī-nāma by Pūrṇavardhana	Tib. D. ed. no.4093. Tib. P. ed. no.5594.
MN.	Majjhima Nikāya	PTS. ed.
SBC.	°Samaya bhadoparacana cakra （異部宗輪論）	Tib. D. ed. no.4138. Tib. P. ed. no.5639.
Sp.	Samañña phala sutta	DN. PTS. ed.
TA.	°Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma by Sthiramati	Tib. D. ed. no.4421. Tib. P. ed. no.5875.

『集異門足論』	阿毘達磨集異門足論	Chin. T. no. 1536. G.
『法蘊足論』	阿毘達磨法蘊足論	Chin. T. no. 1537. G.
『識身足論』	阿毘達磨識身足論	Chin. T. no. 1539. G.
『界身足論』	阿毘達磨界身足論	Chin. T. no. 1540. G.
『品類足論』	阿毘達磨品類足論	Chin. T. no. 1542. G.
『施設足論』	施設論	Chin. T. no. 1538. G.
『発智論』	阿毘達磨発智論	Chin. T. no. 1544. G.
『大毘婆沙論』	阿毘達磨大毘婆沙論	Chin. T. no. 1545. G.
『八犍度論』	阿毘曇八犍度論	Chin. T. no. 1543
『鞞婆沙論』	鞞婆沙論	Chin. T. no. 1547
『六十巻婆沙』	阿毘曇毘婆沙論	Chin. T. no. 1546
『倶舎論』	阿毘達磨倶舎論	Chin. T. no. 1558. G.
『顕宗論』	阿毘達磨顕宗論	Chin. T. no. 1563. G.
『順正理論』	阿毘達磨順正理論	Chin. T. no. 1562. G.
『舎利弗阿毘曇』	舎利弗阿毘曇論	Chin. T. no. 1548
『十八論』	十八部論	Chin. T. no. 2032
『宗輪論』	異部宗輪論	Chin. T. no. 2031. G.
『部執論』	部執異論	Chin. T. no. 2033
『雑阿含』	雑阿含經	Chin. T. no. 99
『雑心論』	雑阿毘曇心論	Chin. T. no. 1552
『大乗涅槃經』	大般涅槃經	Chin. T. no. 374

『長阿含』	長阿含經	Chin. T. no. 1
『梵網經』	佛説梵網六十二見經	Chin. T. no. 21

有部	説一切有部
羅什	鳩摩羅什

A.B. = after Buddha, A.D. = *anno Domini*, B.C. = before Christ, bibliog. = bibliography, c. = century,

cf. = confer, chap. = chapter, Chin. = Chinese translation, D. = *sDe dge*, do.= ditto, ed. = edition or editor, e.g. = *exempli gratia*, esp. = especially, etc. = *et cetra*, f. = and the following, G. = 玄奘訳, ibid. = *ibidem*,

intro. = introduction, Jap. = Japanese translation, K. = 国訳一切経, N. = 南伝大蔵経, n. = note,

no. = number, op.cit. = *opere citato*, P. = Peking, p. = page, PTS. = Pāli Text Society, qtd. = quoted,

repr. = reprint, T. = 大正新脩大蔵経, trans. = translation, Skt. = Sanskrit,

Tib. = Tibetan translation, vol. = volume,

Contents

Preface i
Texts and Abbreviations iii
Contents v

Introduction : アビダルマ研究のための予備的考察と準備 1

Intro. 1. 問題の所在と取扱い方法 3
Intro. 2. 初期アビダルマ論書 7
Intro. 2 - 1. 南伝パーリ語系論書群 9
Intro. 2 - 2. 北伝漢訳系論書群、特に説一切有部系論書 10
Intro. 2 - 2 - 1. 第1期の論書 10
Intro. 2 - 2 - 2. 第2期の論書 11
Intro. 2 - 3. 本論で取り扱う初期アビダルマ論書 13
Intro. 3. 玄奘の訳出に関する問題整理 15
Intro. 3 - 1. 玄奘による阿毘達磨関係訳出論書の翻訳年代 15
Intro. 3 - 2. 訳出の諸傾向――特に阿毘達磨論書を中心に 16
Intro. 4. 多変量構造解析の手法とテキストマイニング 19
Intro. 4 - 1. アビダルマテキスト論理構造分析への試み 19
Intro. 4 - 1 - 1. 問題の所在 19
Intro. 4 - 1 - 2. 準　備 20
Intro. 4 - 1 - 3. 概　要 21
Intro. 4 - 1 - 4. ケーススタディ 22
Intro. 4 - 1 - 5. 小　結 26

Chapter 1. アビダルマ論書における多変量構造解析の実際 27

Chap. 1 - 1. アビダルマ論理構造導出のためのデータとテキストマイニング 29
Chap. 1 - 1 - 1. テキストマイニングの概念と手法 29
Chap. 1 - 1 - 2. 利用基礎データの構造とテキストマイニングの実際 32
Chap. 1 - 1 - 2 - 1. テキストマイニング〔I〕 単純文字数と文字種類数 33
Chap. 1 - 1 - 2 - 2. テキストマイニング〔II〕
語句の切り出しとコンテキストデータベースの構築 36
Chap. 1 - 1 - 2 - 3. テキストマイニング〔III〕 同一語のチェックとTF-IDF（重み付け） 39

Chap. 1 - 1 - 3.　ネットワーク分析　46
Chap. 1 - 1 - 3 - 1.　ネットワーク分析の概念と手法　46

Chapter 2.　『阿毘達磨法蘊足論』におけるネットワーク分析　47

Chap. 2 - 1.『阿毘達磨法蘊足論』の論理構造　49
Chap. 2 - 1 - 1.　論理構造導出の実際　49
Chap. 2 - 1 - 1 - 1.　ケーススタディ〔I〕　愛染　単概念　50
Chap. 2 - 1 - 1 - 2.　ケーススタディ〔II〕　愛染　複数概念　66
Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 1.　第三釈　vs　第四釈　66
Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 2.　第三釈　vs　第五釈　69
Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 3.　第四釈　vs　第八釈　vs　第十釈　72
Chap. 2 - 1 - 1 - 3.　ケーススタディ〔III〕　愛染　全概念　72
Chap. 2 - 1 - 1 - 4.　ケーススタディ〔IV〕　初静慮　論理概念　77
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 1.　正勝品　80
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 2.　静慮品　80
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 3.　通行品　83
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 4.　修定品　84
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 5.　覺支品　88
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 6.　縁起品　88
Chap. 2 - 1 - 1 - 5.　ケーススタディ〔V〕　初静慮　全概念　90
Chap. 2 - 1 - 2.　小　結　92

Chapter 3.　『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』
における多変量構造解析　93

Chap. 3 - 1.　データの構造とテキストマイニング　95
Chap. 3 - 1 - 1.　語句の切り出しとコンテキストデータベースの構築　95
Chap. 3 - 1 - 1 - 1.　『阿毘達磨識身足論』　95
Chap. 3 - 1 - 1 - 2.　『阿毘達磨品類足論』『阿毘達磨界身足論』
『阿毘達磨集異門足論』　97
Chap. 3 - 1 - 2.　同一語のチェックとTF-IDF（重み付け）　99
Chap. 3 - 2.　ネットワーク分析と初期アビダルマ論書の論理構造　100
Chap. 3 - 2 - 1.　ネットワーク分析結果　100

Chap. 3 - 2 - 1 - 1. 論理構造導出の実際 100
Chap. 3 - 2 - 1 - 2. ケーススタディ〔I〕『品類足論』初靜慮 100
Chap. 3 - 2 - 1 - 3. ケーススタディ〔II〕『集異門足論』愛染 105
Chap. 3 - 2 - 1 - 4. ケーススタディ〔III〕『阿毘達磨倶舎論』 111
Chap. 3 - 2 - 1 - 4 - 1. 愛染 111
Chap. 3 - 2 - 1 - 4 - 2. 初靜慮 112
Chap. 3 - 2 - 2 小 結 115

Chapter 4. アビダルマ教理をめぐる諸問題 117

Chap. 4 - 1. アビダルマにおける業伝達の解釈 119
Chap. 4 - 1 - 1. 問題の所在 119
Chap. 4 - 1 - 2. 業と殺生業道 120
Chap. 4 - 1 - 3. 命令者の意志の強弱と実行者の意志の強弱 123
Chap. 4 - 1 - 4. 命令者と、異なる客体である実行者との相互に働く動因の主体 125
Chap. 4 - 1 - 5. 小 結 127
Chap. 4 - 2. 三世実有と現在有体過未無体――時空座標解釈からの試み 129
Chap. 4 - 2 - 1. 問題の所在 129
Chap. 4 - 2 - 2. 『大毘婆沙論』における実有 129
Chap. 4 - 2 - 3. 三世実有の論証 133
Chap. 4 - 2 - 4. 時空座標解釈のモデリング 137
Chap. 4 - 2 - 5. 小 結 143
Chap. 4 - 3. 禅定体験の記号言語化について 145
Chap. 4 - 3 - 1. 問題の所在 145
Chap. 4 - 3 - 2. 説一切有部の記号言語化 145
Chap. 4 - 3 - 3. 禅定体験の記号言語化 148
Chap. 4 - 3 - 4. 小 結 154
Chap. 4 - 4. 諸心起染 155
Chap. 4 - 4 - 1. 問題の所在 155
Chap. 4 - 4 - 2. 『識身足論』にみられる諸心起染 155
Chap. 4 - 4 - 3. 小 結 158
Chap. 4 - 5. 大不善地法成立に向けての論理構造分析 159
Chap. 4 - 5 - 1. 問題の所在 159
Chap. 4 - 5 - 2. 準備ならびにデータマイニング 161

Chap. 4 - 5 - 3. コレスポンデンス分析結果 169
Chap. 4 - 5 - 4. 小 結 172

Conclusion: 初期アビダルマ論書における多変量構造解析——結論と展望とによせて 173

Conc. 1 - 1. 思想史における非連続と連続 175
Conc. 1 - 1 - 1. 問題の所在 175
Conc. 1 - 1 - 2. 思想史というカテゴリーにおける《非連続性》と《連続性》の問題 176
Conc. 1 - 1 - 3. 小 結 183
Conc. 1 - 2. クラスター解析にみる初期アビダルマ論書 185
Conc. 1 - 3. ネットワーク分析結果よりみた初期アビダルマ論書の論理構造 188
Conc. 1 - 4. アビダルマ研究の今後の課題 189

【補 - 1】 付論、『大毘婆沙論』見蘊見納足遡及の外道と異部 191
【補 - 2】 Data List & Program 別冊 資料編

Bibliography 235

Acknowledgements 249

Introduction：アビダルマ研究のための予備的考察と準備

Introduction：アビダルマ研究のための予備的考察と準備

Intro. 1. 問題の所在と取扱い方法

アビダルマは新しい。これは逆説でもなんでもない、素直な物言いである。たしかにアビダルマは仏教教理思想の中では、最古層の一つに位置する。およそ 1,500 年ほど前に日本に仏教が伝来して以後も、奈良時代南都仏教のもとに倶舎学が大乗仏教理解の基礎学として研鑽され、特に江戸時代においては漢訳経典に基づいた、まさに職人芸のような詳細な綱要書群が編まれた。鎖国がとかれ、ヨーロッパ型の近代的仏教学が移入された明治期からは、パーリー語、サンスクリット語、チベット語などによる関連テキストを横断的に駆使比較して、研究に著しい成果を上げてきたことは言うまでもなく周知の事実である。アビダルマを研究するにおいては、これまで幾度かの流行[1] を経て多くの研究が重ねられ整理されてきたために、従来の手法をもってしては、もはや新テキストの発見（発掘）か、もしくは、煩瑣な重箱の隅をつつくようなマイナーな分野におけるものでしか、飽和状態の現況を打開するすべをなくしてしまったかのような、ある意味、一手法の完成限界のような事態にたどりついてしまった感がある。古層のテキストであればあるほど、現存するテキストの数は限られ、また、本来インドで成立したテキストにもかかわらず、他時代、他地域、他言語の翻訳テキストしか現存しないという現実は、従来からのアビダルマ研究に重くのしかかっているものである。そのため一方でアビダルマ教理という分野にとどまらず、大乗教理やその他の仏教教理との関係、あるいは、他の宗教思想との関係、もしくは思想のみならず、文化、歴史、習俗、社会、芸術などとの関連を模索する分野での研究に、新しい活路を求めるようになった。

しかしながら、思想と思想どうしの関係、さらに厳密にいうなら、記述されたテキストとテキストの間においての「語」の使用において、たとえ同じ「語」が使用されていたとしても、《意味内容》において同じであるという確証をどのように担保するのであろうか。というのは、仏教は、その独自性として「テクニカルタームの同一性と収斂性」[2] という特徴をもつ思想体系と考えられるからである。

---

[1] 木村泰賢博士、宇井伯壽博士等が活躍された 20 世紀初頭、その後中期、後期など、もちろん分類の仕方はさまざまであるが、日本にとどまらず世界の各地域において諸先達の夥しい数の論文が発表されてきた。詳細は Bibliography 参照。

[2] 仏教用語のキーワードとして知られる、例えば「仏」「菩薩」「涅槃」「さとり」等の語は、使用されるテキスト、時代、地域などによって、含意する意味内容が大きく異なる場合がある。というのは仏教思想においては、仏教であることの正当性を主張するためにも、概念を同一の語句へと収斂させていく傾向が強くみられる。これは、ヨーロッパ哲学が古典の時代から、新し

このような特徴を持つ仏教において、さらに厳密さを期すならばアビダルマ教理の理解において、おそらく西暦紀元前成立のテキストとされる『集異門足論』、『法蘊足論』と、紀元前後をまたぐ時期ころの成立とされる『大毘婆沙論』、紀元後 5 世紀ころの成立とされる『倶舎論』、それ以後の成立とされる『アビダルマディーパ』等のテキストに記述されている、「同一語」どうしの《意味内容》の同一性が、どこまで担保可能なのか、という素朴な疑問が提示できるだろう。実際テキストの成立時期においては 500 年以上の開き[3] があるのである。こうした、同一分野の思想においてすら問題とされることが、他分野の思想体系とテキストを比較考察した場合などには、それ以上の充分な注意が必要であることはいうまでもない。

そこで本論稿では、この問題に対してひとつの指標の提示を試みる。これまで論じてきたとおり、アビダルマ研究においては、

（Ⅰ）　古層のテキストであればあるほど現存テキストが限られる

（Ⅱ）　他時代、他地域、他言語の翻訳テキストしか現存しない

という限界がある。

しかしながら一方で、説一切有部（skt. Sarvāstivādin）に属するとされる論書群においては、漢訳しか現存しないが、基本的に全訳の形で、かなりの分量を有し、時代ごとに揃っているテキストが存在している。これは、後に詳細に述べるテキストマイニング[4] にとっての格好の素材を提供するものである。これらの事実は見方を換えれば、

（1）　説一切有部という単一の部派の論書である

（2）　テキストが全体として揃っており、完結している

（3）　翻訳において時代と訳者（訳出システム）が同一である

い概念が生まれる度に新しい哲学用語をつくろうとしたことと対照的である。そのため、例えばヨーロッパ哲学において、プラトンやアリストテレスの古典思想と、カントやヘーゲルといった近代哲学、あるいは現代哲学に使用される用語が混在するということは基本的にはあり得ない。ところが仏教の場合、例えばインドの最古層のテキストで使用されている用語と、中国の唐代テキストで使用されている用語と、日本の鎌倉時代の諸師たちの使用する用語が、一見しただけではまるで同じものである。もちろん意味内容は、同じ場合も異なった場合も両方あり得るのだ。拙著講義録「仏教概論」,『仏教文化』第 177 号, 東京国際仏教塾, 2015,10, pp.3-4

[3] 西暦 2015 年においては、小学校の国語教材に使用される現代小説は 2000 年前後に発表されたものがほとんどで、夏目漱石、芥川龍之介等は古典とされている。ブログや LINE が主流の今日からみて、500 年前は日本では戦国時代の初めであり、世界では大航海時代の只中である。

[4] Chap. 1 - 1. 参照。

（4）　（3）より、おおむね訳出語の傾向と系列に信頼をおくことができる

（5）　分量としても申し分ない

（6）　信頼度の高いコーパス（電子化資料）が公開されている

といった特徴を持っている。

アビダルマ論書というのは、いうまでもなく教理の集成である。アーガマ（skt. āgama）と呼ばれる、釈尊の金言の経典を拠り所としている。アーガマは、周知のとおり釈尊により「対機説法」という形式で説かれ、相手の機根に即しての内容であるため、字義上においては複数のテキスト間において正反対の主張となる場合がしばしばみられる。しかしながら釈尊の真意は、けっして字義どおりではなく、その記述の底にある真理にあり、それは論理的に明らかにされるものであるというのが、部派教団の主張である。その中でも説一切有部は、これも後に詳細に述べるが[5]、全ての事象を言語化し、論理的に説明づけようと努力した部派教団であったといえる。したがって、ひとつのまとまりをもった論書テキストにおいては、その論理性に矛盾があってはならないと考えたはずである。なぜならば、アーガマ自体にはいかほど矛盾があろうとも、自己自身で主張する論理体系そのものに矛盾があったとしたら、それはそのまま論書として成立するものではない。まさにそれは論書としての本来の役割を欠くものだからである。換言すれば、論書をまとめるにあたって、可能な限り論理的であろうと努力しなければ、論書そのものが意味を失うということになる。これは、後の大乗経典に見られるような、論理を超えた論理という考え方とは一線を画するものである。その意味において、

（7）　まとまった論書テキストにおいては、可能な限り論理的であろうとしている

ということが、前出の特徴に追加されるだろう。

これらの視点から、以下に試みる説一切有部に属する漢訳アビダルマ論書群においては、その論理構造を抽出することが可能であり、論理構造のネットワークを図示することが可能であることを示すことが本論稿の目的である。そこではコンピュータと多変量の大量データを統計学的に取り扱うことによって、近年様々な成果をあげているデータマイニング、テキストマイニングなどの統計学的手法を利用して、

ⅰ）　論書のテキストをすべての語句（トークン）に分割する

ⅱ）　各トークンに重み付けを行い、テキストを特徴づける語を掘り起こす

---

[5] Chap. 4 - 3. 参照。

iii）　一方、論書データを新しくコンテキスト（文脈）データとして、論理構造分析可能なデータ

形式に再構築をおこなう

iv）　ネットワーク分析の手法をもとに、論理構造ネットワークを表現する

この一連の作業を初期アビダルマ論書にたいして試みるものである。

これまで、アビダルマ研究の限界と考えられていたことに、統計学手法にもとづいた方法論を導入することによって、既存資料の再整理、再構築を行う。そして新たな視点を試みることによって、研究者個人の目視・目読では、これまで見出されずにいた事象に光をあて、また、これまで研究されてきた事ごとの再確認をはかるものである。

この論理構造ネットワークの形態そのものは、その論書の持つ論理構造形式の「型」[6] を表現するものであり、その「型」の異同によって、他のテキストとの比較考察が可能となる《ものさし》を提供できるものと考えるのである。

[6] Chap. 2. 参照。

Intro. 2. 初期アビダルマ論書

はじめに、本研究に使用するテキストを明確にするため、従来の研究成果を踏まえてアビダルマ論書の成立をみる。

アビダルマ（skt. abidharma, pāli. abhidhamma）は、最古層において南伝アビダンマの七論、北伝アビダルマの七論〔六足発智〕が知られる[1]。

古くは、アビダルマの成立と発展過程について、四期が指摘される[2]。

1期. 契経の形をとったもの

2期. 経の解釈としての論

3期. アビダルマの独立

4期. アビダルマ論綱要書

木村[1922]の分類では、

2期のものとして

南伝、『無碍道論』（Paṭisambhidāmagga）

南伝、『摩訶尼泥沙』（Mahāniddesa）

北伝、『法蘊足論』

北伝、『集異門足論』など

3期のものとして

南伝、七論

北伝、『識身足論』、『界身足論』、『施設論』、『品類足論』、『発智論』

北伝、『舎利弗阿毘曇』、『三弥底部論』など

北伝、『大毘婆沙論』は3期か4期か不明

4期のものとして

南伝、『清浄道論』（Visuddhimagga）、『対法要論』（Abhidhammatthasaṅgaha）

---

[1] 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著『梵語仏典の研究Ⅲ論書編』, 平楽寺書店, 1990, pp.47-100, 以下はおよそのところ同書に従う。

[2] 木村泰賢著『阿毘達磨論の研究　木村泰賢全集4』, 大法輪閣, 1922, rp.1968, pp.44-60

北伝、『阿毘曇心論』、『雑阿毘曇心論』、『入阿毘達磨論』

北伝、『倶舎論』、『順正理論』、『顕宗論』など

をあげている。

新しく塚本等[1990]は、上記 1. と 2. をまとめて、およそ三段階を指摘する。

1. 阿含ニカーヤの原始経典に、法（skt. dharma, pāli. dhamma）に関する諸種問答議論が存在したこと、そしてブッダ自身弟子たちに法の研鑽を奨励し論究法の心得を伝授し重んじたことから、既に物や法の分類整理ないし関係性を明示する「アビダルマ的傾向」の態度と論証形態が存在したこと。

2. 仏弟子たちに転ぜられた説法の「アビダルマ的傾向」が、経（skt. sūtra, pāli. sutta）＝法・律（skt. vinaya, pāli. vinaya）・論（skt. abidharma, pāli. abhidhamma）の三蔵から独立してアビダルマ蔵として教学的進展をみせたこと。

3. 独自のアビダルマ観を基礎に新たな教義体系を組織立て、学説綱要書を作成したこと

をあげる[3]。塚本等[1990]も木村[1922]と分類において特に変わるものはなく、さらに

2. に

北伝、『尊婆須蜜菩薩所集論』、『阿毘曇甘露味論』

3. に

北伝、『成実論』、『灯明論釈』（Abhidharmadīpa Vibhāṣāprabhāvṛtti）

を加えている。

以上の論書群の成立の時期は、仏滅年代に諸説があるように特定は非常に難しいとされているが、およそ仏滅後百年くらいから、玄奘以前の5～6世紀頃[4] の広範囲にわたることは確かであろう。

---

[3] Op.cit. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], p.47,

[4] 三友健容著『アビダルマディーパの研究』, 平楽寺書店, 2007, p.3, pp.32-44

Intro. 2 - 1. 南伝パーリ語系論書群

南伝においては、塚本等[1990]によれば、「Abhidammaの接頭辞 Abhi- の「高度な」「勝れた」「特別な」という語義により、「特別な理論」「類別された教義」「純粋で簡潔な教義」と解釈し、「勝法」「増上法」「最勝法」の訳が与えられた。南伝上座部の見解は、もとよりアビダルマ論を仏説と仰ぐ信仰態度からくるものであり、ブッダゴーサの論書『アッタサーリニー』では、abhi を増長（vaḍḍhi）、有特相（salakkhaṇa）、尊敬（pūjita）、区別（paricchinna）、卓越（adhika）の意味に解する。経典はもっぱら諸法の究極的意味を与えるアビダルマを通して理解されるべきであるという。経とアビダルマとの間にどこか矛盾したところがある場合には、いつでも経典の説明は釈明的・密意的（ābhiprāyika）であり、また世間実用的（vyāvahārika）、仮設的（aupacārika）でさえあるのに対して、アビダルマは特相的（lākṣṇika）であるがゆえに真実にもとづくと理解された。」[5] という。この経典よりもアビダルマが仏説として重視されるという見方は、北伝が後に新たな大乗経典群を生みだしていった歴史に貴重な示唆を与えるように考える[6]。

現存するものに、七論とされる

1. Dhamma-saṅghaṇi『法集論』
2. Vibhaṅga『分別論』
3. Kathāvatthu『論事』
4. Puggalapaññatti『人施設論』
5. Dhātukathā『界説論』
6. Yamaka『双論』
7. Paṭṭhāna『発趣論』

その他に三蔵の注釈（aṭṭhakathā）が残されている。また、Netti-pakaraṇa『指導論』、Peṭakopadesa『蔵経釈論』、Milinda-pañhā『弥蘭陀問経』など。
アビダルマ文献の注釈としては、Visuddhimagga『清浄道論』、Aṭṭhasālinī『法集論註』、Kathāvatthuppakaraṇāṭṭhakathā『論事註』、Sammoha-vinodanī『除癡論』、Abhidhammāvatāra『入阿毘達磨論』、Rūpārūpavibhāga『色非色分別論』、Abhidhammatthasaṅgaha『アビダンマ教義綱要、対法要論』など重要な文献がある。これらの文献についてこれまでも詳細な研究がなさ

---

[5] Op.cit. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], pp.48-49,

[6] アビダルマ概念の「経」と「論」の相互関係の詳細な論究は、cf. Ibid. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], pp.49-54,

れてきたが、北伝アビダルマとの関係、大乗教理との関係など今後も多くの研究が期待されている[7]。

Intro. 2 - 2. 北伝漢訳系論書群、特に説一切有部系論書

北伝においては、7世紀半ば唐の玄奘によって組織的にアビダルマ論書が漢訳され、それが現存していることが大きな特徴である[8]。また、それとは別系統にチベットに伝来し、チベット語訳として現存するかなりの数にのぼるアビダルマ文献が存在している[9]。ここでは漢訳典籍を中心にサンスクリット語典籍の残欠を含めて整理する[10]。

Intro. 2 - 2 - 1. 第1期の論書

1.『阿毘達磨集異門足論』(Abhidharma-Saṅgīti-paryāya-pādā-śāstra)

漢訳　玄奘訳　20巻　T. 1536　尊者舎利子説。ヤショーミトラ、チベット伝ではマハーカウシュティラ(Mahākauṣṭhila, 摩訶倶絺羅)造とあり、玄奘訳と作者が異なる。

経より論への最初期の段階に属する論書とされ、『長阿含経』所収の『衆集経』(Saṅgītisuttanta)、施護訳『仏説大集法門経』2巻 T. 12 と相応し、南北両伝の論の同一原形の発祥が指摘されている。

中央アジアよりサンスクリット写本の断簡が発見された[11]。

---

[7] Op.cit.三友健容著[2007], pp.6-7

[8] Intro. 3 参照。

[9] Op.cit. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], pp.6-44, 特に、チベット訳文献目録、〔Ⅰ〕アビダルマ、参照。

[10] Ibid. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], pp.58-100, 以下の概観もおよそのところ同書に従う。

[11] 山田龍城:『諸文献』, pp.110-111.、

E. Waldschmidt:*Sanskrithandschriften aus der Turfanfunden*, Wiesbaden, Teil, I, 1965, Nr.599, 767,

2.『阿毘達磨法蘊足論』(Abhidharma-dharmaskandha-pādā-śāstra)

漢訳　玄奘訳　12巻　T. 1537　大目乾連(Mahā-Maudgalyāyana)造。ヤショーミトラ、チベット伝では聖舎利弗(Śāriputra)造とあり、玄奘訳と作者が異なる。

教説上、パーリ語『分別論』、漢訳『舎利弗阿毘曇論』に類似。サンスクリット写本の断簡が発見されている[12]。

Intro. 2 - 2 - 2. 第2期の論書

3.『阿毘達磨識身足論』(Abhidharma-jñānakāya-pādā-śāstra)

漢訳　玄奘訳　16巻　T. 1539　提婆設摩(Devaśarman)造。

4.『阿毘達磨界身足論』(Abhidharma-dhātukāya-pādā-śāstra)

漢訳　玄奘訳　5巻　T. 1540　世友(Vasumitra)造。ヤショーミトラ、チベット伝では富楼那(Pūrṇa)造とあり、玄奘訳と作者が異なる。

5.『施設足論』(Prajñapti-pādā-śāstra)

漢訳　法護等訳　7巻　T. 1538　大迦多衍那(Mahākātyāyana)造。ヤショーミトラ、チベット伝では聖目乾連(Ārya Maudgalyāna)造とあり、法護等訳と作者が異なる。

漢訳は『因施設』(Kāraṇaprajñapti)のみの部分訳である。チベットには「世間施設」(Locaprajnāpti, Ḥjig-rten gshag pa) Toh 4086, I, 1b[1]-93a[7] , Ota 5587, Vol. 115, pp.1-47、「因施設」(Kāraṇaprajñapti, Rgyu gdags pa) Toh 4087, I, 93a[7]-172b[4] , Ota 5588, Vol. 115, pp.47-85、「業施設」(Karmaprajñapti, Las gdags pa) Toh 4088, I, 172b[4]-222a[7] , Ota 5588, Vol. 115, pp.85-114、の完訳が現存する。サンスクリット写本の少量の断簡が存する[13]。

---

[12] Op.cit. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], pp.59-61, 福田　琢著「『法蘊足論』の十二縁起説」『仏教学セミナー』, 大谷大学仏教学会, 1993, p.21, 注 5 参照。

[13] Op.cit. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編著[1990], pp.63-64

6.『阿毘達磨品類足論』(Abhidharma-prakaraṇa-pādā-śāstra)

漢訳　玄奘訳　18巻　T. 1542　世友(Vasumitra)造。

『衆事分阿毘曇論』求那跋陀羅(Guṇabhadra)・菩提耶舎(Bodhiyaśa)共訳　T. 1541 は旧訳。『界身足論』を増広、『法蘊足論』を収める。

弁五事品相当の漢訳に、安世高訳『阿毘曇五法行経』T. 1557 、法成訳『薩婆多宗五事論』T. 1556 、法救造　玄奘訳『五事毘婆沙論』T. 1555 がある。

7.『阿毘達磨発智論』(Abhidharma-jñānaprasthāna-śāstra)

漢訳　玄奘訳　20巻　T. 1544　迦多衍尼子(Kātyāyanīputra)造。

異訳『阿毘曇八犍度論』(Abhidharmāṣṭagrantha)、僧伽提婆(Saṅghadeva)・竺仏念共訳　T. 1543 が存する。説一切有部の教理を集大成したことで前六足論に対し身論と称される[14]。

8.『阿毘達磨大毘婆沙論』(Abhidharma-mahāvibhāṣā-śāstra)

漢訳　玄奘訳　200巻　T. 1545　五百大阿羅漢等造。

異訳『阿毘曇婆沙論』、浮陀跋摩(Buddhavarman)・道泰等共訳　T. 1546 が存するが、両論は新旧訳というより、異本異訳ともみられる。結蘊十門納息の注釈に僧伽跋澄(Saṇghabūti)訳　尸陀槃尼撰『鞞婆沙論』(Abhidharma-vibhāṣā-śāstra) T. 1547 がある。

『発智論』の広釈書。

9.『尊婆須蜜菩薩所集論』(Ārya Vasumitra-saṅgīti-śāstra)

漢訳　僧伽跋澄(Saṇghabūti)等訳　10巻　T. 1549　婆須蜜(Vasumitra　世友)造。

本論は説一切有部系教学の外にあって、特にヴェーダンタ哲学の影響下にある仏教徒側の代表的論書とされる。

---

[14] しかしながら、「インドにおいて、「六足・発智身」という考え方が広く一般的であったとは言えないのである。(中略)この「六足・発智」という考え方は、特に、有部論書を成立史的に見ようとする場合、余り意味をもたぬものである。」とされる。桜部 建、加治洋一校註『発智論 I 』「阿毘達磨発智論解題」, 大蔵出版, 1996, pp.8-10

10.『阿毘曇甘露味論』(Abhidharmāmṛta-śāstra)

漢訳　失訳　2巻　T. 1553　大徳、瞿沙(Bhadanta Ghoṣaka)造。

本論は綱要的論書の形態を示し、説一切有部の法相をほとんど網羅し解説する。

Intro. 2 - 3. 本論で取り扱う初期アビダルマ論書

以上から、Intro. 1. 問題の所在と取扱い方法で指摘したテキストマイニングに適合しうるテキストを選び出すことを考える。

Intro. 1. において、

(1) 説一切有部という単一の部派の論書である

(2) テキストが全体として揃っており、完結している

(3) 翻訳において時代と訳者(訳出システム)が同一である

(4) (3)より、おおむね訳出語の傾向と系列に信頼をおくことができる

(5) 分量としても申し分ない

(6) 信頼度の高いコーパス(電子化資料)が公開されている

(7) まとまった論書テキストにおいては、可能な限り論理的であろうとしている

という7項目を想定した。

そして、この条件に該当する論書として、

1.『阿毘達磨集異門足論』(Abhidharma-Saṅgīti-paryāya-pādā-śāstra)

2.『阿毘達磨法蘊足論』(Abhidharma-dharmaskandha-pādā-śāstra)

3.『阿毘達磨識身足論』(Abhidharma-jñānakāya-pādā-śāstra)

4.『阿毘達磨界身足論』(Abhidharma-dhātukāya-pādā-śāstra)

6.『阿毘達磨品類足論』(Abhidharma-prakaraṇa-pādā-śāstra)

の論書が当てはまると考えられるであろう。

以上の 5 本の論書は、説一切有部の論書であり、全て玄奘による訳出[15]であり、分量としても適度である。そして、翻訳者が異なり、かつ、内容的にも他の 5 論書とは異なる

5.『施設足論』(Prajñapti-pādā-śāstra)

を、比較対象のひとつとして考察に加えてみることにした。

本論稿においては、以上の 6 本の論書を指して初期アビダルマ論書と呼ぶことにするものである。細かいテキストマイニングの手法については後に述べる[16]が、

ⅰ)『集異門足論』 121,796 文字(漢字)

ⅱ)『法蘊足論』 84,626 文字

ⅲ)『識身足論』 118,721 文字

ⅳ)『界身足論』 16,262 文字

ⅴ)『品類足論』 111,269 文字

ⅵ)『施設足論』 19,643 文字

を数え、総漢字文字数 472,317 文字という規模のデータベース[17]になる。

この膨大なデータを手作業で文節に区切るのは、まるで現実的ではない。だからといって n-gramのような機械的自動切り出し手法も、漢文であり、また、アビダルマ独自の術語体系をもつテキストの性質から、決してなじむものとも考えられなかった。そこで訳出語の同質性の傾向やテキストの完結性の点から、現実的選択として、はじめに『法蘊足論』を手作業で文節に分割し、『法蘊足論』の分割データを辞書として、他の論書をコンピュータで文節に分割するという手法をとった。実際には、『法蘊足論』のデータを他の論書に適用したとき、『法蘊足論』のデータに無い用語が見つかった場合、その用語を新たに辞書に追加するという作業を繰り返して、辞書の拡張をはかり、より精度を上げるために努力した。

本論稿では取り扱わないが、この辞書は、『発智論』、『大毘婆沙論』、『倶舎論』、『順正理論』等の、より大部の、同じく玄奘訳アビダルマ論書に対して、コンピュータによる文節分割を行うためのツールとして活用し得るものとして有効に考えるものである。

---

[15] Intro. 3. 参照。

[16] Chap. 1 - 1. 参照。

[17] ちなみに『妙法蓮華経』28 品の文字数が約 7 万文字であることから、単純計算して 6～7 倍の分量である。

Intro. 3. 玄奘の訳出に関する問題整理

Intro. 3 - 1. 玄奘による阿毘達磨関係訳出論書の翻訳年代

玄奘によるアビダルマ文献の翻訳は、彼自身の渡天竺の大きな目的だった瑜伽論をはじめとした法相唯識関係の典籍や大般若経の翻訳にくらべて、大乗思想を補完するための補助学的なものであったかもしれない。また、翻訳の方針においても「玄奘自身の阿毘達磨に対する考えは、法長に託した智光への報書にある如く、前期は倶舎・順正理論に中心があった。そして後半には婆沙・発智に中心があって、六足諸論の如き説一切有部教学初期の論書には興味が無かった様である。[1]」という指摘がある。実際、開元禄によると、七六部一三四七巻にのぼる膨大な数の翻訳を行った中において、アビダルマ関連においては説一切有部のものを中心に、かなり組織立ったものであったことが見て取れる。

以下、『開元釋教録』の分類に従って翻訳年代順に抽出、()は参考としてその他の主要訳出経典etc.を挙げる。

（『顕揚聖教論』　20巻 A.D.645-646[2]）
（『大乗阿毘達磨雑集論』　16巻 A.D.646）
（『瑜伽師地論』　100巻 A.D.646-648）
（『因明入正理論』　1巻 A.D.647）
（『唯識三十論頌』　1巻 A.D.648）
＊『阿毘達磨識身足論』　16巻 A.D.649.貞観23年1月15日～8月8日
北闕弘法院－大慈恩寺、大乗光筆受
（『般若波羅蜜多心経』　1巻 A.D.649）
＊『阿毘達磨〔蔵〕顕宗論』　40巻 A.D.651-652.永徽2年4月5日～
永徽3年10月20日　大慈恩寺翻経院、慧朗・嘉尚等筆受
＊『阿毘達磨倶舎論本頌』　1巻　A.D.651.永徽2年
大慈恩寺翻経院、元瑜等筆受
＊『阿毘達磨倶舎論』　30巻　A.D.651-654.永徽2年5月10日～
永徽5年7月27日　大慈恩寺翻経院、元瑜等筆受
（『大乗阿毘達磨集論』　7巻　A.D.652）
＊『阿毘達磨順正理論』　80巻　A.D.653-654.永徽4年1月1日～
永徽5年5月18日　大慈恩寺翻経院、元瑜等筆受

---

[1] 春日井真也著「玄奘三蔵のアビダルマ学の特相」,『印度学仏教学研究』通号2, 1953, p.223

[2] 西暦は、『標準世界史年表』(吉川弘文館. 1993)による。

＊『阿毘達磨大毘婆沙論』　200巻　A.D.656-659.顕慶元年7月27日～
顕慶4年7月3日　大慈恩寺翻経院、嘉尚・大乗光等筆受

＊『阿毘達磨発智論』　20巻　A.D.657-660.顕慶2年1月26日～
顕慶5年5月7日　西京大内順賢閣－玉華寺、玄則等筆受

＊『入阿毘達磨論』　2巻　A.D.658.顕慶3年10月8日～13日
大慈恩寺翻経院、大乗光筆受

＊『阿毘達磨法蘊足論』　12巻　A.D.659.顕慶4年7月27日～9月14日
大慈恩寺翻経院、大乗光等筆受

（『成唯識論』　10巻　A.D.659）

（『大般若波羅蜜多経』　600巻　A.D.660-663）

＊『阿毘達磨品類足論』　18巻　A.D.660.顕慶5年9月1日～10月23日
玉華寺雲光殿、大乗光等筆受

＊『阿毘達磨集異門足論』　20巻　A.D.660-663.顕慶5年11月26日～
龍朔3年12月29日（明本は訳了日を11月とする）　玉華寺明月殿、
弘彦・訳（釈？）詮筆受
（『弁中辺論』　3巻）

＊『異部宗輪論』　1巻　A.D.662.龍朔2年7月14日
玉華寺慶福殿、大乗基筆受

＊『阿毘達磨界身足論』　3巻　A.D.663.龍朔3年6月4日
玉華寺八桂亭、大乗基筆受

＊『五事毘婆沙論』　2巻　A.D.663.龍朔3年12月3日～8日
玉華寺玉華殿、釈詮等筆受

これらの記録から、アビダルマ文献において玄奘は、瑜伽唯識関係の論書を翻訳したのちに、はじめに『識身足論』を翻訳し、その後『倶舎論』『順正理論』等を翻訳する。そして成立時代を遡るように、『大毘婆沙論』『発智論』を翻訳し、『大毘婆沙論』を翻訳し終えた年に、『法蘊足論』を訳出しだす。そしてしばらくした後に、660 年から『品類足論』『集異門足論』『界身足論』と残りの六足論を翻訳した。

この事実においても、六足論はもはや主要アビダルマ論書を訳出した後に翻訳されたものであり、訳語の統一においても組織的であるだろうことがうかがえる。

Intro. 3 - 2.　訳出の諸傾向

玄奘の組織における訳出に、上記の理由で一定の基準が存在したであろうことは推測できるが、それとは逆に、玄奘の組織による概念の取捨選択、もしくは加筆がある可能性を無視できない。これは

玄奘の漢訳しか現存していないものについて、宿命的な問題である。そのため、明治以降の近代仏教学では、漢訳経典よりも、サンスクリットテキストの典籍、サンスクリットを想定しやすいチベットテキストの典籍が重宝されてきた所以である。春日井[1953][3] は、『法蘊足論』と『集異門足論』の成立について、玄奘訳『集異門足論』にある何度か『法蘊足論』を引用している記述について「恐らく梵本集異門足論の体裁においては、「広く説くこと法蘊論の如し」という引用文としては、決して存在しては居らなかったものであろう。これを斯へて玄奘の加筆と称する事ができるとすれば、かくの如き「凡語を以て聖言量の増加を行ふ」ことが玄奘訳場に於て行はれた例が他にある。それは大毘婆沙論に於ける非想見惑に対する十六字の加筆問題である。[4]」と指摘する。

このように、個々の問題は詳細に検討しなければならない。しかしながら繰り返しになるが前の Intro. 3‐1. で述べたよう、『倶舎論』『順正理論』『発智論』『大毘婆沙論』という説一切有部の主要アビダルマ論書の翻訳後に、『法蘊足論』『品類足論』『集異門足論』『界身足論』という初期アビダルマ論書の翻訳がなされたということからも、玄奘の大規模な訳経システムにおいて、それでもなお玄奘による訳語の統一性は大規模なデータを取り扱う場合、これら初期アビダルマ論書が非常に良質なテキストであるといっても差し支えないだろう。

---

[3] 春日井真也著「玄奘三蔵のアビダルマ学の特相」『印度学仏教学研究』通号 2, 1953, pp.220-224

[4] Ibid. 春日井[1953], pp. 223-224

Intro. 4.　多変量構造解析の手法とテキストマイニング

Intro. 4 - 1.　アビダルマテキスト論理構造分析への試み[1]

Intro. 4 - 1 - 1.　問題の所在

アビダルマ研究は、これまで江戸期からつづく伝統的倶舎学の系譜を基に西欧起源の近代仏教学をうけ、パーリ文献をはじめ『倶舎論』とその注釈書群を中心としたサンスクリット文献・チベット文献との比較研究を軸に発展してきたのは周知のとおりである。しかしながらアビダルマ文献の特徴である煩瑣な記述形式、及び、ともすれば意を説明しきらぬ抽象的な表現スタイルは、おそらく作者も意図しなかっただろう後世の解釈を多岐にわたらせ、研究においても困難さを深める結果となっている。特に、部派分派のひとつの契機とされる思想解釈の異なりに関しても、論書ごとに同一の基本タームをさまざまな解釈で論議の中心に据えたその記述様式は、とりもなおさず論書の比較検討研究に大きな影を投げかけている。一方、サンスクリットテキストがほとんど現存せず、漢訳テキストやチベット訳テキストといった二次的史料しか現存しない論書での研究の限界は、ここに指摘するまでもあるまい。そのようななかで、これまで多くの研究が重ねてきたような、A 論書に記述されているコンテキストと、おそらく時代も成立背景も作者も異なる B 論書に記述されているコンテキストと、テキストの比較考察における取り扱い方は、慎重に問いなおさなければならないだろう[2]。換言すれば、異なるテキスト間に記述された思想の異同を判断する《ものさし》について、いま一度吟味する必要があると考える。本論稿は、アビダルマ研究に対するひとつの試論を提示する。この試論は人文科学分野におけるデータマイニング(data mining)手法[3]、テ

---

[1] 拙論「六足発智再考――アビダルマテキスト論理構造分析への試論」,『印度学仏教学研究』Vol.120(58-2) , 日本印度学仏教学会, 2010, pp.941-947 をもとに若干書き加えた。ここでは総論を述べ、本論による具体的内容は Chap. 2. 参照。

[2] 例えば「三世実有」という古典的命題の記述に関して、『大毘婆沙論』にも、『倶舎論』『順正理論』にも、もっと後代の『アビダルマディーパ』にも言及がある。当然のことながら、『倶舎論』の注釈書群、ヤショミトラやステラマティなどにも言及がある。問題なのは、これらの「三世実有」の思想自体、はたして同一語句において同一の意味内容のものが反復して記述されているかどうかというところにある。その保証はいったいどこに求められるのであろうか。時代も、その論書が著された背景も必要性も異なる記述の同一語句、あるいは表現に、どこまで思想内容の同異の基準を見出し得るかということにある。

[3] 村上[2002]は、データマイニングについて貴重な示唆を指摘する。「近年データマイニングという言葉が、種々の領域のデータ分析において重要なキーワードとなっている。データマイニングとは、すでに生成されデータベース化された諸々の種類のデータのなかから、どのような種類のデータが分析において重要であるかを見出すことを意味しているようである。しかし、データマイニングの本質は、すでに掘り出された（生成された）データの山を掘り返し、そのなかから分析に役立ちそうなデータを見つけ出すことにあるのではなく、むしろどのような種類のデータを生成すれば現象解明に役立つかを探ることにあるのではないだろうか。」 村上征勝著,『文化を計る―文化計量学序説』, 朝倉書店, 2002, pp.12-13

キストマイニング(text mining)手法[4]に基づき、SAT[5] や CBETA[6] などで提供される大正新脩大蔵経データベースの成果を活用し、新たなコンテキストデータベース及び構造分析手法の構築を試みるものである。

Intro. 4 - 1 - 2.　準　備

素材として、「六足発智」[7] と称される説一切有部所伝の最初期の論書群をとりあげる。これらの論書群は周知のとおり、古来、説一切有部の最も基本的な典籍とされてきたものである。その中、身論と位置づけられた『阿毘達磨発智論』(20 巻)の注釈論書が『阿毘達磨大毘婆沙論』(200 巻)であり、『阿毘達磨大毘婆沙論』の綱要論書が『阿毘達磨倶舎論』(30 巻)であるとされた歴史からも、当然のごとくその論書類としての重要性がうかがえるものではあるが、昭和期くらいまでの研究を最後にまとまったものは数えるほどしかない。おそらくひとつの大きな理由は、「六足発智」の論書群は一部の断簡をのぞき漢訳テキストしか現存せず、江戸期の職人芸的な倶舎学研究を超える成果がなかなか見出せないところにあったかと推測されよう。しかしながら『施設論』を除き、玄奘等による同一訳経所においてほとんど同時期に翻訳された事実[8] は、訳語の安定性をはじめデータマイニング、テキストマイニングの視点からは良質の史料として扱うことが可能である。それはいいかえれば、訳出語句の統一もされていない不安定なテキストどうしのデ

---

[4] 最近データマイニングから派生したテキストマイニングの語がよく用いられるようになった。データベースの中に格納されている構造化されたデータから、特定のパターンや傾向を探り出すデータマイニング手法に対して、構造化されていないテキストから目的に応じて情報や知識を探り出す方法や手法をテキストマイニング手法と呼ぶ。石田基広、金明哲編著『コーパスとテキストマイニング』, 共立出版, 2012, pp.1-2 、詳細は、注1と同様に本論 Chap.2 - 2 参照。

[5] 大蔵経テキストデータベース研究会, http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/database.html

[6] 中華電子佛典協會, http://www.cbeta.org/result/search.htm#google

[7] 『阿毘達磨集異門足論』, 20 巻, 尊者舎利子説, 玄奘訳, T. no. 1536
『阿毘達磨法蘊足論』, 12 巻, 尊者大目乾連造, 玄奘訳, T. no. 1537
『施設論』, 7 巻, 法護・惟浄等訳, T. no. 1538
『阿毘達磨識身足論』, 16 巻, 提婆設摩造, 玄奘訳, T. no. 1539
『阿毘達磨界身足論』, 3 巻, 尊者世友造, 玄奘訳, T. no. 1540
『阿毘達磨品類足論』, 18 巻, 尊者世友造, 玄奘訳, T. no. 1542
『阿毘達磨発智論』, 20 巻,迦多衍尼子造, 玄奘訳, T. no. 1544

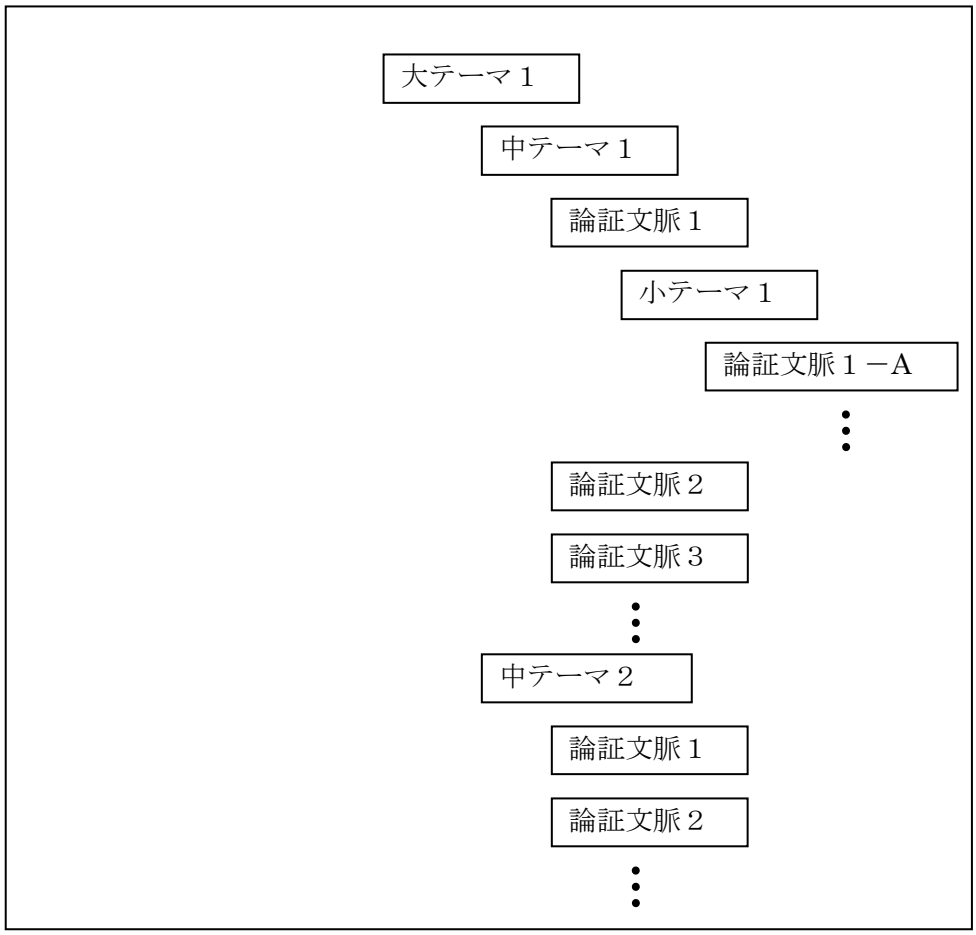
[8] 『阿毘達磨識身足論』A.D.649.貞観 23 年 1 月 15 日～8 月 8 日　北闕弘法院－大慈恩寺、大乗光筆受
『阿毘達磨発智論』A.D.657-660.顕慶2年1月26日～顕慶5年5月7日　西京大内順賢閣－玉華寺、玄則等筆受
『阿毘達磨法蘊足論』A.D.659.顕慶4年7月27日～9月14日　大慈恩寺翻経院、大乗光等筆受
『阿毘達磨品類足論』A.D.660.顕慶5年9月1日～10月23日　玉華寺雲光殿、大乗光等筆受
『阿毘達磨集異門足論』A.D.660-663.顕慶5年11月26日～龍朔3年12月29日（明本は訳了日を11月とする）　玉華寺明月殿、弘彦・訳（釈？）詮筆受
『阿毘達磨界身足論』A.D.663.龍朔3年6月4日　玉華寺八桂亭、大乗基筆受

ータを加工してしまう危険性が限りなく低いということを意味する。また、仏教学的視点からは、説一切有部の思想展開を跡付ける論拠として、「六足発智」の論書群間の思想内容の境界を明確にすることは、今後のアビダルマ研究においても、まずもって整理しなければならない基礎的作業と考えるものである。

Intro. 4 - 1 - 3.　概　要

「六足発智」の諸論書群を、新たにコンテキストデータベースとして構築しなおすことを目的とする。これまでのデータベースは個々のキーワード（術語）によって用語用例検索をなすものであるが、本論の目指すコンテキストデータベースは、図1のように論書に議論されているコンテキスト（文脈）をひと塊にみて、各々の論書の特徴となる思想的階層構造をデータに反映させたものを作成することを特徴とする。

図　1



換言すれば論書そのものを、論書の構造を保持したままデータ化を図ることを意味する。従来のデータベースは文字を単位としてデータとして扱い、コンピュータに検索させることによって活用されてきたが、このコンテキストデータベースでは文脈構造を基礎単位とし、文脈構造をフラグとして機能させる。そこから、各論書における議論の範囲及び境界を明らかにしうる手段を獲得することを意図している。

これらの作業を行うことによって、これまで単語の用例検索しか実現できなかったプレーンデータベースをコンテキスト（文脈）としての有機的パースペクティブに統合し、その思想的関連性を浮き立たせることが可能となる。それはそのまま、教理を成立させる思想的基盤と限界へのひとつのアプローチを提供するものであるだろう。

Intro. 4 - 1 - 4.　ケーススタディ

『阿毘達磨法蘊足論』を一例にとる。學處品第一の鄔波索迦(Upāsaka)[9]の成就する五學處として五戒が説かれ[10]、その一として殺生遠離が説かれる。その中、四十法を説く段[11] で、四十法を成就し地獄に生じるには、①自ら殺を離れず②他に勤めて殺をなさしめ③殺を離れざるを見て歡喜・慰喩し、④殺生者と事とを稱揚・讃歎すれば、すなわち地獄に生じる。また四十法を成就し天中に生じるには、①自ら殺を離れ②他に勤めて殺を離れしめ③餘の殺を離るるを見て歡喜・慰喩し、④殺を離るる者と事とを稱揚・讃歎すれば、すなわち天中に生じると説かれる。

この段は、五法成就から十法、十五法成就。八法成就から十六法、二十四法成就。十法成就から二十法、三十法、四十法成就と段階的に成就とその功徳を説くものであるが、鄔波索迦の

---

[9] 鄔波索迦の訳語は他の「六足発智」には見出せないし、學處品以外には預流支品第二に1例だけ見出すことができる。「如世尊告阿難陀言。我非但與苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦四衆爲師。然我亦與諸天魔梵沙門婆羅門等諸天人衆。」T.1537, vol. 26, p.461b

[10] T.1537, vol. 26, pp.453-458

[11] 成就四十法。身壞命終。墮險惡趣。生地獄中。何等四十。謂自不離殺。勸他令殺。見不離殺。歡喜慰喩。稱揚讃歎殺生者事。廣説乃至自起邪見。亦復勸他令起邪見。見起邪見。歡喜慰喩。稱揚讃歎邪見者事。若有成就此四十法。身壞命終。墮險惡趣。生地獄中。成就四十法。身壞命終。升安善趣。生於天中。何等四十。謂自離殺生。勸他離殺。見餘離殺。歡喜慰喩。稱揚讃歎離殺者事。廣説乃至自起正見亦復勸他令起正見。見起正見。歡喜慰喩。稱揚讃歎正見者事。若有成就此四十法。身壞命終。升安善趣。生於天中。T.1537, vol. 26, pp.455a

(1)唯自利不利他、(2)自他其利・不能廣利、(3)自他共利と廣利といった文脈で成就が語られるものである。[12]

この文脈の特徴のひとつとして③餘の殺を離るるを見て「歡喜・慰喻」し、に注目すると、[表1]にあるよう、

[表1] 上記個所の他に、一例として

1 検索語【歡喜】Or【慰喻】

法蘊足論　　玄奘訳　〔巻第二〕、〔預流支品第二〕、《4、如理の作意》、(国 p.47)

1537_,26,0459c07(00):如是名爲聽聞正法

1537_,26,0459c08(01):云何名爲如理作意。謂從善士。聞正法已。

1537_,26,0459c09(06):内自慶慰。【歡喜】踊躍。奇哉世尊。

1537_,26,0459c10(03):能説如是深妙正法。佛所説苦。實爲眞苦。佛所説集。

1537_,26,0459c11(03):實爲眞集。佛所説滅。實爲眞滅。佛所説道。

2 検索語【歡喜】Or【慰喻】

法蘊足論　　玄奘訳　〔巻第二〕、〔預流支品第二〕、《4、如理の作意》、(国 p.47)

1537_,26,0459c10(03):能説如是深妙正法。佛所説苦。實爲眞苦。佛所説集。

1537_,26,0459c11(03):實爲眞集。佛所説滅。實爲眞滅。佛所説道。

1537_,26,0459c12(00):實爲眞道。彼由如是内自慶慰【歡喜】踊躍。引攝其心。

1537_,26,0459c13(01):隨攝等攝。作意發意。審正觀察深妙句義。

1537_,26,0459c14(00):如是名爲如理作意

---

[12] この自利利他に関する議論は、後の大乗仏教に展開する菩薩の利他行を理解するうえで注目に値するものであるだろう。次の機会に詳しく論じるつもりである。

3 検索語【歡喜】Or【慰喻】

法蘊足論　　玄奘訳　〔巻第二〕、〔證淨品第三〕、《2、佛證淨》、《薄伽梵》、《第7説》、(国 p.58)

1537_,26,0461c27(00):<ver>如來設法會普哀愍無依

1537_,26,0461c28(00):<vc/>如是天人師稽首度有海</ver>

1537_,26,0461c29(01):又佛世尊。爲諸弟子。隨宜説法皆令【歡喜】。

1537_,26,0462a01(02):恭敬信受。如教脩行。名稱普聞。遍諸方域。

1537_,26,0462a02(07):無不讃禮。名薄伽梵。若聖弟子。

4 検索語【歡喜】Or【慰喻】

法蘊足論　　玄奘訳　〔巻第六〕、〔聖諦品第十〕、《1、四聖諦の経文》、(国 p.160)

1537_,26,0480a01(02):第二第三。亦復如是。以&M011201;陳那先解法故。

1537_,26,0480a02(02):世共號彼。爲阿若多。地神藥叉。聞是語已。

1537_,26,0480a03(11):【歡喜】踊躍。高聲唱言。

1537_,26,0480a04(04):佛今於此婆羅&M022129;斯仙人論處施鹿林中。憐愍世間諸衆生故。

1537_,26,0480a05(01):欲令獲得利樂事故。三轉法輪。其輪具足十二相行。

5 検索語【歡喜】Or【慰喻】

法蘊足論　　玄奘訳　〔巻第六〕、〔聖諦品第十〕、《1、四聖諦の経文》、(国 p.160)

1537_,26,0480a08(07):已見聖諦。從今天衆漸當增益。

1537_,26,0480a09(00):阿素洛衆漸當損減。因斯展轉諸天及人。皆獲殊勝利益安樂。

1537_,26,0480a10(01):空行藥叉。聞是聲已。【歡喜】傳告四大王天。

1537_,26,0480a11(02):彼復擧聲。展轉相告。經須臾頃。聲至梵天。

1537_,26,0480a12(11):時大梵王。聞已歡喜。

6 検索語【歡喜】Or【慰喻】

法蘊足論　　玄奘訳　〔巻第六〕、〔聖諦品第十〕、《1、四聖諦の経文》、(国 p.160)

1537_,26,0480a10(01):空行藥叉。聞是聲已。歡喜傳告四大王天。

1537_,26,0480a11(02):彼復擧聲。展轉相告。經須臾頃。聲至梵天。

1537_,26,0480a12(11):時大梵王。聞已【歡喜】。

1537_,26,0480a13(04):慶佛爲轉無上法輪利樂無邊諸有情故。此中宣説轉法輪事。

1537_,26,0480a14(01):是故名曰轉法輪經。時五&M030828;芻。八萬天子。聞經歡喜。

以下略[13]

のように抽出できる。

この検索例にある、「法蘊足論　玄奘訳 〔巻第二〕、〔預流支品第二〕、《4、如理の作意》、(国 p.47)」や「法蘊足論　玄奘訳 〔巻第二〕、〔證淨品第三〕、《2、佛證淨》、《薄伽梵》、《第7説》、(国 p.58)」などのコンテキストフラグが特徴であり、以下 KWIC 検索結果が続くものである。

法蘊足論において【歡喜】あるいは【慰喻】の用例は、【歡喜慰喻】の形で前出の學處品第一の五戒等の論証として8例、【歡喜慶慰】という形で同論説箇所に4例認められるのみである。【慰喻】の用例は他に無く、【歡喜】の用例において[表1]にあげた(1)巻第二預流支品第二《4、如理の作意》の段、(2)證淨品第三《2、佛證淨、薄伽梵》の段、(3)巻第六聖諦品第十《1、四聖諦の経文》の段、(4)巻第七静慮品第十一之餘《2、初静慮論釈の2、喜》の段、(5)同前《3、第二静慮論、定生の喜楽、喜》の段、(6)同前《4、第三静慮論、喜を離る、喜》の段、(7)巻第七無量品第十二《四無量、4、喜無量》の段、(8)巻第八覺支品第十五之一《喜覺支》の段、(9)巻第十根品第十七《二十二根の経文》の段、(10)巻第十處品第十八《十二處の経文》の段、(11)巻第十多界品第二十之一《多界の経文》の段、(12)巻第十一縁起品第二十一之一《縁起の経文》の段にそれぞれ抽出した。

これらのテキストから、殺生遠離において③の「殺を離れざるを見て歡喜・慰喻」・「餘の殺を離るるを見て歡喜・慰喻」の【歡喜】のコンテキスト(文脈)は、(3)における地神・藥叉、大梵王や(9)

---

[13] 『集異門足論』14、『法蘊足論』29、『施設論』6、『品類足論』1、『発智論』2 の総数 56 が抽出された。そのうち【慰喻】は 0 であった。

（10）の梵志、（11）の阿難陀、（12）の苾芻が佛の教説を聴き歡喜する情景描写と、（1）に説かれる如理の作意、（4）（5）（6）（7）（8）に種々説かれる《喜》の概念、そしてそれは（2）に説かれる佛の徳目として結実していることが読み取れるのである。

この結果は、法蘊足論における【歡喜】用例の第一次元のパースペクティブを示すものである。今後さらに、これをもとに（1）～（11）の各々に展開される第二次元、第三次元のパースペクティブを明らかにし、最終的に全体の論理構造を分析しようと試みるものである。

Intro. 4 - 1 - 5.　小　結

煩瑣哲学と揶揄されがちなアビダルマ思想であるが、どうしても膨大なテキストの中に木を見て森を見ぬが如き誤謬に惑わされてしまうことが多い。しかしながらアビダルマの緻密な論理体系はテキストの有機的考察抜きには決して語れるものではないであろう。ひとつの個所での論証は、他の個所の論証を前提にしており、それは自明のこととして、それがために論議が省略されている場合が数多く見受けられる。その理解には、テキストをひとつの完結された体系と捉え、そこに記述される文脈を明らかにする作業がなにより必要だと考えるものである。本試論は、テキストをすなおにコンテキストとして捉えなおすことにより、思想の論理構造を明らかにし、その連関をたどるツールの開発に向けての一助たることを目指すものである。

Chapter 1.　アビダルマ論書における多変量構造解析の実際

Chapter 1. アビダルマ論書における多変量構造解析の実際

Chap. 1 - 1. アビダルマ論理構造導出のためのデータとテキストマイニング

Chap. 1 - 1 - 1. テキストマイニングの概念と手法

金[2012][1] によれば、電子化した言語資料をコーパス（corpas）と呼び、コーパスは話し言葉の音声を録音したもの、書き言葉を文字列で記述したもの等多肢にわたる。また、テキストとは、「文字列で記述された文書・文章、文字列で記述された遺伝情報、情報処理分野のアクセス情報を記号列で記述したログ情報、音楽の音符を記号列で記述したものを指す。[2]」が、特に文字列で記述したコンピュータ処理可能な自然言語による文書・文章に限定することによって、ここにいうテキストはコーパスを含むものである。

1990 年代中頃から、テキストマイニング（text mining）の用語がつかわれるようになった。「テキストマイニングは、構造化されていないテキストから目的に応じて情報や知識を掘り出す方法と技術の総称である。テキストマイニングは、テキストを単語や文節などに分割する自然言語処理方法を介し、語句やモデリングしたパターンを集計し、データマイニングの手法[3] で情報を掘り起こす。テキストから収集した語句やモデリングしたパターンのベクトルをテキストの特徴ベクトルと呼ぶ。テキストマイニングは、まず一つのテキストについて特徴ベクトルを作成することからはじまる。テキストの特徴ベクトルを作成することがテキストの構造化である。」、また、「テキストマイニングでは、テキストからの情報の検索、テキストの自動要約、テキストの重要語抽出、テキストの特徴分析、テキストのグループ分け、テキストの分類、テキストの時系列分析などの内容が主なウエイトを占めている。」[4] としている。

さらに、具体的手法として、はじめに準備として一般に、

（1）テキストの収集とクリーニング

---

[1] 金 明哲著「コーパスとテキストマイニング」，石田基広、金 明哲編著『コーパスとテキストマイニング』，共立出版，2012, pp.1-14

[2] Ibid. 金[2012], p.1

[3] Intro. 4 - 1 - 1 参照。

[4] Ibid. 金[2012], p.2

テキストの収集は目的に応じて、必要となる量をバランスよく収集することに十分な注意が必要であることと、収集したテキストにはノイズになるものを同一の基準でテキストから除去したり、表記の形式を統一したりするクリーニングの必要性をあげる。

（2）形態素解析や構文解析などによるテキストの処理と加工を行う

（3）n-gram や共起データなどによるテキストの構造化を行う。

共起は、「任意のいくつかの単語、文節、語句が文、段落、文章の中に用いられている頻度を集計して分析する[5]」手法である。また昔から用いられてきた構造化の方法に、単語、文、段落などのテキストの長さをテキストの特徴として計量する場合もある。

そしてテキストマイニングの主な方法として、

（4）ネットワークグラフ[6] や各種グラフによって視覚化を行う

（5）重要語句の抽出を行う。

そのための指標として、

ｉ） TF-IDF[7]
ii） カイ二乗計量
iii） 共起の重要度計算

などがある。また、

（6）テキストの特徴分析

として、

ｉ） 主成分分析
ii） 対応分析
iii） 自己組織化マップ法

などがある。

（7）テキストのグループ分け（text cluster analysis）

---

[5] Ibid. 金[2012], p.5

[6] Chap. 2. 参照。

[7] Chap. 1 - 1 - 2 - 3. 参照。

の手法として、

階層的方法

ｉ） ウォード法（Ward's method）

ⅱ） 最短距離法（nearest neighbor method）

ⅲ） 最長距離法（furthest neighbor method）

ⅳ） 群平均法（group average method）

非階層的方法

ｉ） 多次元尺度法

ⅱ） K-means 法

などがある。

（8）テキストの自動分類

の手法として、

ｉ） 線形判別法、非線形判別法、ベイズ判別分析法

ⅱ） 決定木（Decision Tree）、K 近傍（K-Nearest Neighbor）法、人工ニューラルネットワーク（Artificial Neural Networks）法、サポートベクターマシン（SVM, Support Vector Machines）法、アンサンブル学習（あるいは集団学習法, Ensemble Learning）法

などがある。さらに、

（9）テキストの時系列分析

をテキストマイニングの主な方法として紹介[8] した。

これらの様々な手法は、テキストやデータ構造の取りかた、データクリーニングの仕方によって、最も適したものを選択する必要がある。やみくもにデータ解析を行っても意味のないデータが出力されるだけであるので、実際その結果以上に分析の手順が重要になることはいうまでもないだろう。

---

[8] Ibid. 金[2012], pp.1-14, その他参考書として、村上征勝編『文化情報学入門』, 文化情報ライブラリ, 勉誠出版, 2006, 村上征勝著『文化を計る　文化計量学序説―』, シリーズ〈データの科学〉5, 朝倉書店, 2002, 村上征勝著『真贋の科学　計量文献学入門―』, 朝倉書店, 1994, 村上征勝著『シェークスピアは誰ですか？　計量文献学の世界』, 文春新書 406, 2004, 金 明哲著『R によるデータサイエンス』, 森北出版, 2007, 金 明哲著『テキストデータの統計学入門』, 岩波書店, 2009, 豊田秀樹著『データマイニング入門』, 東京図書, 2008, 石田基広著『R によるテキストマイニング入門』, 森北出版, 2008, Sarah Boslaugh 著, 黒川利明等共訳『統計クイックリファレンス　第2版』, オライリー・ジャパン, オーム社, 2015, など。

Chap. 1 - 1 - 2. 利用基礎データの構造とテキストマイニングの実際

はじめに『法蘊足論』のコーパスデータとして SAT（大正蔵テキストデータベース研究会）公開の大正新脩大蔵経、毘曇部、Vol.26、『阿毘達磨法蘊足論』、T. 1537 を基準データとして取り扱う。

現行 Web[9] で公開されている（SAT2015）データは、資料[1]にあるとおり、注記のタグデータが付加されており、また見た目も大正新脩大蔵経のイメージにあわせてある。さらには「嗢拕南」のように JIS 漢字コードに含まれない特殊漢字もきれいに表現されている。もちろん SAT システムにおける検索等には問題なく適応しているものであるが、一般の自作システムにおいては文字エンコードの問題はとても煩瑣なプログラムが必要であり、R 言語などの統計解析プログラムでは、そのままでは動かなくなり、はじかれてしまうので、事実上このままで使用するにはあまり現実的ではない[10]。

そこで以前 SAT で公開されていた、資料[2]にあげた旧バージョンのテキストデータを利用する。このデータの構造は、注記のタグは無く、偈頌部分などは空白文字であけるのではなく<ver><vc/></ver>というフラグを設けている。「嗢拕南」の文字は「&M-041070;&M-119600;南」のように JIS X 0208 のキャラクターコードを使い諸橋大漢和辞典の文字コードで表記しているものである。このため見た目はまるでよくないが、コンピュータシステムにはとてもよくなじむデータである。

資料[1]

T1537_. 26. 0453b24： 阿毘達磨法蘊足論卷第一

T1537_. 26. 0453b25：　　尊者大目乾連造

T1537_. 26. 0453b26：　　4 三藏法師玄奘奉　　詔譯

T1537_. 26. 0453b27： 5 學處品第一

T1537_. 26. 0453b28：　　稽首佛法僧　眞淨無價寶

T1537_. 26. 0453b29：　　今集 6 諸法蘊　普施諸群生

T1537_. 26. 0453c01：　　阿毘達磨如大海　大山大地 7 大虛空

---

[9] http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html

[10] コンピュータシステムの大部分が、もともと欧米の文字体系をもとに作成されているので、漢字においても現代語にはかなり適合しているものの、仏教典籍に使用されているようなヴァリエーションのとてつもなく多い特殊漢字について、システムが未対応な点は、ある意味当りまえのことかもしれない。実際文字コードのためにシステムがとても不安定になる。つまり膨大な大量データを扱った場合、カウント結果の信頼度がかなり低くなってしまうのである。

T1537_.26.0453c02:　　具攝無邊聖法財　今我正勤略顯示

T1537_.26.0453c03: 嗢拕南曰

T1537_.26.0453c04:　　學支淨果行聖種　正勝足念諦靜慮

資料[2]

1537_,26,0453b23(00):阿毘達磨法蘊足論卷第一

1537_,26,0453b24(00):

1537_,26,0453b25(00):尊者大目乾連造

1537_,26,0453b26(00):三藏法師玄奘奉詔譯

1537_,26,0453b27(00):學處品第一

1537_,26,0453b28(00):<ver>稽首佛法僧眞淨無價寶

1537_,26,0453b29(00):<vc/>今集諸法蘊普施諸群生

1537_,26,0453c01(00):<vc/>阿毘達磨如大海大山大地大虛空

1537_,26,0453c02(00):<vc/>具攝無邊聖法財今我正勤略顯示</ver>

1537_,26,0453c03(00):&M-041070;&M-119600;南曰

1537_,26,0453c04(00):<ver>學支淨果行聖種正勝足念諦靜慮

Chap. 1‐1‐2‐1. テキストマイニング〔I〕 単純文字数と文字種類数

『法蘊足論』の資料[2]データから本文文字以外のデータを取り除き、資料[3]のデータを作る。

資料[3]

阿毘達磨法蘊足論卷第一

尊者大目乾連造

三藏法師玄奘奉詔譯

學處品第一

稽首佛法僧眞淨無價寶

今集諸法蘊普施諸群生

阿毘達磨如大海大山大地大虛空

具攝無邊聖法財今我正勤略顯示

&M041070;&M119600;南曰

學支淨果行聖種正勝足念諦靜慮

次に、プログラムを作成し資料[4]のように加工して、総文字数 84,646 文字を得る。

資料[4]

1, 阿	13, 者	25, 奉	37, 僧	49, 施	61, 山	73, 財	85, 學
2, 毘	14, 大	26, 詔	38, 眞	50, 諸	62, 大	74, 今	86, 支
3, 達	15, 目	27, 譯	39, 淨	51, 群	63, 地	75, 我	87, 淨
4, 磨	16, 乾	28, 學	40, 無	52, 生	64, 大	76, 正	88, 果
5, 法	17, 連	29, 處	41, 價	53, 阿	65, 虚	77, 勤	89, 行
6, 蘊	18, 造	30, 品	42, 寶	54, 毘	66, 空	78, 略	90, 聖
7, 足	19, 三	31, 第	43, 今	55, 達	67, 具	79, 顯	91, 種
8, 論	20, 藏	32, 一	44, 集	56, 磨	68, 攝	80, 示	92, 正
9, 卷	21, 法	33, 稽	45, 諸	57, 如	69, 無	81, &M041070;	93, 勝
10, 第	22, 師	34, 首	46, 法	58, 大	70, 邊	82, &M119600;	94, 足
11, 一	23, 玄	35, 佛	47, 蘊	59, 海	71, 聖	83, 南	95, 念
12, 尊	24, 奘	36, 法	48, 普	60, 大	72, 法	84, 曰	96, 諦

さらに、同一の重複文字数をカウントして資料[5]、総文字種類数 1,449 文字種を得る。

資料[5]

No.	token	count
1	阿	88
2	毘	55
3	達	44
4	磨	22
5	法	1081
6	蘊	175
7	足	224
8	論	37
9	卷	25
10	第	235
11	一	623
12	尊	198
13	者	714
14	大	145
15	目	12
16	乾	13
17	連	12
18	造	107

これと同様の作業を、『識身足論』、『品類足論』、『界身足論』、『集異門足論』、『施設足論』の5論書についても執り行う。

『識身足論』のコーパスデータとして SAT（大正蔵テキストデータベース研究会）公開の大正新脩大蔵経、毘曇部、Vol.26、『阿毘達磨識身足論』、T. 1539 を基準データとして、

『品類足論』のコーパスデータとして SAT（大正蔵テキストデータベース研究会）公開の大正新脩大蔵経、毘曇部、Vol.26、『阿毘達磨品類足論』、T. 1542 を基準データとして、

『界身足論』のコーパスデータとして SAT（大正蔵テキストデータベース研究会）公開の大正新脩大蔵経、毘曇部、Vol.26、『阿毘達磨界身足論』、T. 1540 を基準データとして、

『集異門足論』のコーパスデータとして SAT（大正蔵テキストデータベース研究会）公開の大正新脩大蔵経、毘曇部、Vol.26、『阿毘達磨集異門足論』、T. 1536 を基準データとして、

『施設足論』のコーパスデータとして SAT（大正蔵テキストデータベース研究会）公開の大正新脩大蔵経、毘曇部、Vol.26、『施設論』、T. 1538 を基準データとして、各々取り扱う。

以上、『法蘊足論』と同様、各論書データから本文文字以外のデータを取り除き、一字データを作成し、同一語を整理して重複をカウントした。

これらから、表[1]にみられるような結果が得られた。

表[1]

	法蘊足論	識身足論	品類足論	界身足論	集異門足論	施設足論	合計
総文字数	84,626	118,721	111,269	16,262	121,796	19,643	472,317
総文字種数	1,449	695	581	484	1,562	1,007	

Chap. 1 - 1 - 2 - 2. テキストマイニング〔II〕

語句の切り出しとコンテキストデータベースの構築

『法蘊足論』の資料[2]データを各語句に切り出す。この語句の切り出し作業は、アビダルマ用語辞書作成のため目視の手作業で行った。術語の切り出し方については文脈の中で判断した。そのため厳密には若干のゆらぎがあるが、辞書作成のためにはヴァリエーションの多い方が有利にはたらく。表[2]参照。

表[2]　資料編 1 Word Count Data『阿毘達磨法蘊足論』 参照

1	阿毘達磨法蘊足論卷第一	31	正勤
2	尊者大目乾連造	32	略
3	三藏法師玄奘奉詔譯	33	顯示
4	學處品第一	34	&M-041070;&M-119600;南
5	稽首	35	曰
6	佛	36	學
7	法	37	支
8	僧	38	淨
9	眞淨	39	果
10	無價寶	40	行
11	今	41	聖種
12	集	42	正勝
13	諸法	43	足
14	蘊	44	念
15	普	45	諦
16	施	46	靜慮
17	諸	47	無量
18	群生	48	無色
19	阿毘達磨	49	定
20	如	50	覺支
21	大海	51	雜
22	大山	52	根
23	大地	53	處
24	大虛空	54	蘊
25	具	55	界
26	攝	56	緣起
27	無邊	57	一時
28	聖法財	58	薄伽梵
29	今	59	在
30	我	60	室羅筏

また、仏教文献特有の省略スタイルや、漢文特有の否定辞の掛かり方など形式的には済まされない問題点[11] が数多くみられたが、取りあえず可能な限り分割した。そして問題点についてはコンテキストデータベースの作成時に可能な限り考慮した。実際のテキストマイニングに際して、用語の切り方は渡辺楳雄[1930][12] の書き下しを参考にし、また、もとのデータベースの誤入力の訂正、あるいは、写本による差異の選択は、同じく自己の責任において行った。したがって読者においてお気づきの点は是非ご教示戴きたい。

『法蘊足論』84,626 文字に手作業で以上の作業を行い、その結果を抽出し、重複をまとめてカウントして頻度順に並べたものが表[3]である。

表[3]　資料編 Keyword Data『阿毘達磨法蘊足論』参照

No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count
82	名	1623	1629	由	254	2436	便	142
105	是	1428	30	我	225	5097	斷	141
69	於	967	1699	或	217	9621	次	140
98	謂	948	2183	得	211	6	佛	138
374	此	849	3393	總	209	9261	不善法	133
76	爲	826	88	生	204	64	世尊	131
101	故	769	61	住	194	2867	應	131
20	如	764	1439	言	191	2117	所有	126
70	彼	610	293	而	186	1318	又	123
17	諸	609	704	廣説	178	5824	善法	118
510	乃至	576	5150	受	176	9299	惡	117
839	若	531	2762	時	163	3022	一類	116
178	者	460	8633	心	163	1133	有情	116
68	有	451	2685	知	163	40	行	113
405	復	444	391	已	162	3168	作	113
3469	云何	431	4637	已生	160	2916	想	108
176	能	355	1250	以	157	5019	如實	108
541	亦	332	355	起	151	2312	當	108
583	及	317	1512	即	150	1322	貪	107
1226	令	311	731	等	149	80	所	106
294	説	261	3547	&M-308280;芻	144	4514	精進	105
1618	思惟	256	1140	皆	143	2053	欲	100

[11] 例えばテキストにおいて「非・・・善不善」とあった場合、機械的には「非善、非不善」「非善、不善」「非善不善」「非、善不善」「非、善、不善」の各場合等が考え得る。この場合、辞書作成時の切り出しにおいては前後の文脈に従って、取りあえずの分割を行い、コンテキストデータベース作成においては可能な限り考慮した。

[12] 渡辺楳雄訳『国訳一切経　毘曇部三　阿毘達磨法蘊足論』, 大東出版, 1930, pp.13-330

つづいて、論理構造を浮き立たせるために、議論を塊に分類し、渡辺楳雄[1930]を参考に独自のコンテキストデータベース[13] を構築した。

資料[6] コンテキストデーターベース 例

0454a15(00): 鄔波索迦と諸法成就者の功德

定義

鄔波索迦 ： 在家 ： 白衣 ： 男子 ： 男根成就 ： 歸佛法僧 ： 起殷淨心 ：

發誠諦語 ： 自稱我是鄔波索迦 ： 願尊憶持 ： 願尊慈悲 ： 願尊護念

0454a18(03): 鄔波索迦と諸法成就者の功德

諸鄔波索迦 一分一所學鄔波索迦

學一分 ： 歸佛法僧 ： 發誠言已 ： 離殺 ： 不離餘四 ： 不離盜 ： 不離婬 ：

不離虛誑 ： 不離飲酒諸放逸處

0454a21(05): 鄔波索迦と諸法成就者の功德

諸鄔波索迦 少分所學鄔波索迦

學少分 ： 歸佛法僧 ： 發誠言已 ： 離殺 ： 離盜 ： 不離餘三 ： 不離婬 ：

不離虛誑 ： 不離飲酒諸放逸處

0454a23(07): 鄔波索迦と諸法成就者の功德

諸鄔波索迦 多分所學鄔波索迦

學多分 ： 歸佛法僧 ： 發誠言已 ： 離殺 ： 離盜 ： 離婬 ： 不離餘二 ：

不離虛誑 ： 不離飲酒諸放逸處

0454a25(01): 鄔波索迦と諸法成就者の功德

諸鄔波索迦 滿分所學鄔波索迦

學滿分 ： 歸佛法僧 ： 發誠言已 ： 具能離五 ： 離殺 ： 離盜 ： 離婬 ：

離虛誑 ： 離飲酒諸放逸處

---

[13] Intro. 4 - 1 - 3. 参照。

0454a28(00):　　鄔波索迦と諸法成就者の功徳

五法成就鄔波索迦とその功徳　　五法成就鄔波索迦の唯自利不利他

成就五法鄔波索迦 ： 唯能自利 ： 不能利他 ： 自離殺生 ： 自離飲酒諸放逸處 ：

自離盗 ： 自離婬 ： 自離虚誑 ： 不能勸他令離殺生 ：

不能勸他令離飲酒諸放逸處 ： 不能勸他令離盗 ： 不能勸他令離婬

不能勸他令離虚誑

0454b04(00):　　鄔波索迦と諸法成就者の功徳

五法成就鄔波索迦とその功徳　　十法成就鄔波索迦の能利自他不能廣利

成就十法鄔波索迦 ： 能利自他 ： 不能廣利 ： 自離殺生 ： 自離飲酒諸放逸處 ：

自離盗 ： 自離婬 ： 自離虚誑 ： 他令離殺生 ： 他令離飲酒諸放逸處 ：

他令離盗 ： 他令離婬 ： 他令離虚誑 ： 不歡喜 ： 不慶慰

以上が、コンテキストデータベースの一部の例である。水色のマーカー部分の用語は省略を補足した部分である。

Chap. 1 - 1 - 2 - 3. テキストマイニング〔III〕

同一語のチェックと TF-IDF（重み付け）

上記の作業を他の5種類の論書に対しても行う[14]。

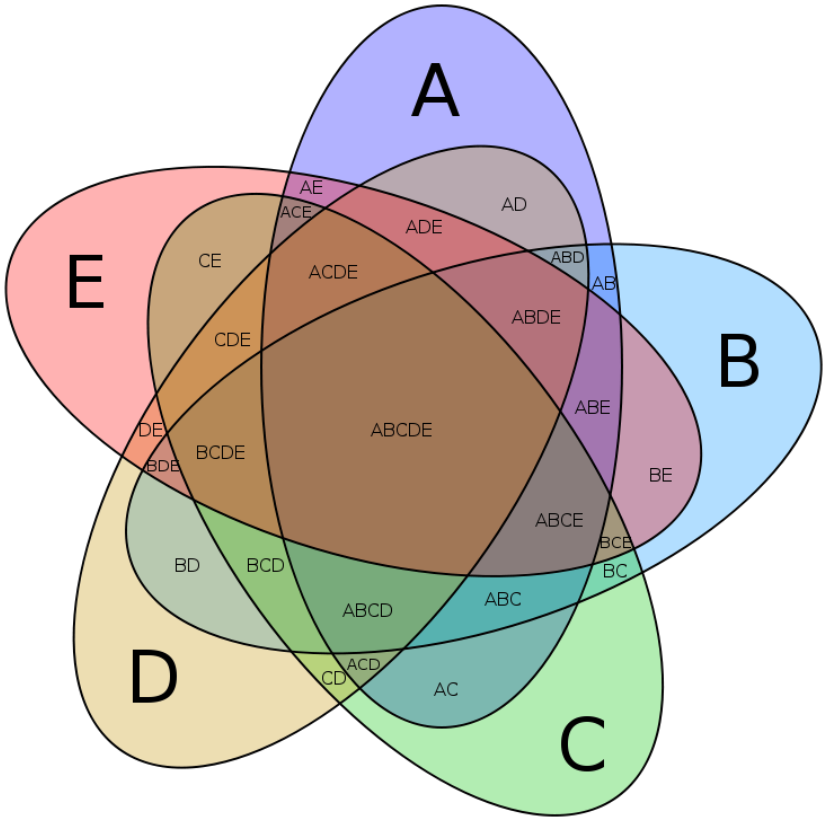
その結果から、各々の論書ごとの同一語を抽出し、各組合せでの重み付けを考える。A:『法蘊足論』、B:『識身足論』、C:『品類足論』、D:『界身足論』、E:『集異門足論』、F:『施設足論』の6論書のうち、『施設足論』は内容的にも、おそらく全体の一部分であることからも、また、玄奘の翻訳

[14] 残りの他の5論書、約 30 万文字に対して、『法蘊足論』と同様に手作業で切り出しを行うことは、あまりにも非現実的である。ここでは『法蘊足論』で作成した Keyword Data を辞書として他の論書をプログラミングによってコンピュータにより機械的に切り出すことを試みる。詳細は Chap. 3. 参照。

ではないことからも、他の論書と詳細に同一語の組み合わせ考える必要が無いよう思える。しかしながら、指標としての6論書での考察は必要であるだろう。したがって詳細な同一語の組合せは『法蘊足論』『識身足論』、『品類足論』、『界身足論』、『集異門足論』の5論書で考える。

5種類の組合せを考えた場合、Branko Grünbaum のベン図[15]は便利である。

図[1]



図[1]のベン図に従って、同一語を調べた結果、資料[7]の結果のファイルを得た。

資料[7]

同一語判定ファイル （内はトークン数）

ABCDEF;(217):施設論 01 同一語判定 01 一致 法蘊 一致 識身 一致 品類 一致 界身 一致 集異門.txt

---

[15] https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%99%E3%83%B3%E5%9B%B3#/media/File:Symmetrical_5-set_Venn_diagram.svg

ABCDE;(281):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 品類 一致 界身.txt

ABCD;(285):界身論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 品類.txt

ABCE;(608):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 品類.txt

ABDE;(311):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 界身.txt

ACDE;(389):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 品類 一致 界身.txt

BCDE;(288):集異門論 01 同一語判定 01　一致 識身 一致 品類 一致 界身.txt

ABC;(636):品類論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身.txt

ABD;(318):界身論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身.txt

ABE;(930):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身.txt

ACD;(413):界身論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 品類.txt

ACE;(1044):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 品類.txt

ADE;(474):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 界身.txt

BCD;(293):界身論 01 同一語判定 01　一致 識身 一致 品類.txt

BCE:(625):集異門論 01 同一語判定 01　一致 識身 一致 品類.txt

BDE;(318):集異門論 01 同一語判定 01　一致 識身 一致 界身.txt

CDE;(398):集異門論 01 同一語判定 01　一致 品類 一致 界身.txt

AB;(1054):識身論 01 同一語判定 01　一致 法蘊.txt

AC;(1221):品類論 01 同一語判定 01　一致 法蘊.txt

AD;(516):界身論 01 同一語判定 01　一致 法蘊.txt

AE;(2704):集異門論 01 同一語判定 01　一致 法蘊.txt

BC;(656):品類論 01 同一語判定 01　一致 識身.txt

BD;(326):界身論 01 同一語判定 01　一致 識身.txt

BE;(954):集異門論 01 同一語判定 01　一致 識身.txt

CD;(424):界身論 01 同一語判定 01　一致 品類.txt

CE;(1075):集異門論 01 同一語判定 01　一致 品類.txt

DE;(483):集異門論 01 同一語判定 01　一致 界身.txt

A;(6488):法蘊論 01 同一語判定 01 .txt

B;(1096):識身論 01 同一語判定 01 .txt

C;(1265):品類論 01 同一語判定 01 .txt

D;(527):界身論 01 同一語判定 01 .txt

E;(2742):集異門論 01 同一語判定 01 .txt

F;(978):施設論 01 同一語判定 01 .txt

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

参考

ABCDF;(218):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 品類 一致 界身.txt

ABCEF;(348):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 品類 一致 集異門.txt

ABCF;(352):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 品類.txt

ABDF;(241):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 界身.txt

ABEF;(495):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身 一致 集異門.txt

ABF;(512):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 識身.txt

ACF;(451):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 品類.txt

ADF;(283):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 界身.txt

AEF;(819):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊 一致 集異門.txt

AF;(963):施設論 01 同一語判定 01　一致 法蘊.txt

BF;(523):施設論 01 同一語判定 01　一致 識身.txt

CF;(463):施設論 01 同一語判定 01　一致 品類.txt

DF;(289):施設論 01 同一語判定 01　一致 界身.txt

EF;(834):施設論 01 同一語判定 01　一致 集異門.txt

これらから、表[4]のように、6論書同一語のデータと頻度が得られた。詳細は資料編同一語チェック参照。

表[4] 資料編 同一語チェック Data 6論書 参照

No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count
6847	愛	4	1119	我所	4	2181	現	27	257	事	39
242	愛樂	9	6232	解脱	2	496	現前	14	200	時	116
584	或	69	1812	界	15	596	言	28	11514	次第	5
89	以	133	166	皆	25	1637	故	149	5066	爾	2
1665	依	5	6643	害	14	3238	五	4	248	而	152
562	意	10	5642	各	14	476	後	28	162	自	33
551	異	4	10553	各別	1	148	行	65	232	識	13
167	謂	118	657	眼	2	33	此	123	2604	七	12
2305	一	32	2119	喜	2	5560	此中	4	2618	捨	2
1211	一切	20	165	起	26	4920	根	14	76	者	216
12913	一處	1	640	義	10	5943	差別	1	212	若	107
40	因	231	99	及	74	3	沙門	20	2014	寂靜	1
6979	因縁	1	1174	業	16	2635	最	24	10394	種	8
12271	引	3	1011	近	49	769	作	117	797	趣	28
3918	云何	21	9050	九	1	18	三	24	1129	受	9
1903	怨	5	3537	俱	25	2396	三十	1	75	修	68
2184	縁	28	755	苦	7	17	散	25	2299	住	32
180	於	216	88	具	51	11676	伺	3	3750	十	12
52	何	172	1949	空	31	1115	四	29	11706	十五	1
4811	可	3	1601	慧	20	4362	思	5	2374	十二	3
781	果	29	2268	結	4	1172	斯	12	9841	十二處	1
1074	我	59	65	見	33	1468	至	20	3486	出離	11

この各論書同一語のデータから、データの重み付け指標として TF-IDF を計算する。TF-IDF の計算式は以下のものを採用する。

TF(Term Frequency)は、文書 d における語句 t の頻度(tf)であり、*IDF*(Inverted Document Frequency)は、語句 t がテキスト群のなかのいくつかのテキストに現れているかに関する相対的の重みである。*IDF* は

$$IDF = \log\left(\frac{N}{df}\right)$$

で定義される。式の中の df は、語句 t を含むテキストの数、N はテキストの総数である。

*TF-IDF*は

$$TF\text{-}IDF = tf \times log(\frac{N}{df})$$

で定義される。(1)

また、他に、次のように定義されているものもある。式の中の tf_{ij} は、テキスト d_i における語句 t_j が現れた度数。df_j は語句 t_j を含んだテキストの数である。

$$W_{ij} = \begin{cases} [1 + log(tf_{ij})]\ log\left(\frac{N}{df_i}\right) & tf_{ij} > 0 \\ & tf_{ij} = 0 \end{cases}$$

で定義される。(2)[16]

(1)を TF-IDF1、(2)を TF-IDF2、として論書別に計算したのが表[5-1～3]であり、資料編に同一語チェック 論書別として頻度順、TF-IDF1 順、TF-IDF2 順のデータを載せる。対数の底は自然対数の e = 2.7182818 をとった。

表[5-1] 資料編 同一語チェック 論書別 Data『阿毘達磨法蘊足論』頻度順 参照

No.	トークン	頻度	論書数	TF-IDF1	TF-IDF2
82	名	1623	5	0	0
105	是	1428	5	0	0
69	於	967	5	0	0
98	謂	948	5	0	0
374	此	849	5	0	0
76	爲	826	5	0	0
101	故	769	5	0	0
20	如	764	5	0	0
70	彼	610	5	0	0
17	諸	609	5	0	0
510	乃至	576	5	0	0
839	若	531	5	0	0
178	者	460	5	0	0
68	有	451	5	0	0
405	復	444	4	99.07573782	1.583387523
3469	云何	431	5	0	0
176	能	355	5	0	0
541	亦	332	5	0	0
583	及	317	5	0	0
1226	令	311	5	0	0

[16] Op. cit. 金[2012], p.8,

表[5-2] 資料編 同一語チェック 論書別 Data『阿毘達磨法蘊足論』TF-IDF1 順 参照

No.	トークン	頻度	論書数	TF-IDF1	TF-IDF2
2537	脩	100	1	160.9437929	9.021173575
10247	發勤	88	1	141.6305378	8.815433696
3488	脩習	85	1	136.802224	8.759609443
405	復	444	4	99.07573782	1.583387523
10250	持心	96	2	87.96391118	5.098560774
10444	勵意	47	1	75.64358268	7.806011578
3547	&M-308280;芻	144	3	73.55889059	3.049533661
13595	勝行	80	2	73.30325932	4.931501218
64	世尊	131	3	66.91815741	3.001201395
343	&M-395700;波索迦	41	1	65.9869551	7.586201729
4676	多脩習	39	1	62.76807924	7.505713061
3022	一類	116	3	59.25577298	2.939081354
1618	思惟	256	4	57.12474973	1.460514167
4486	觀察	62	2	56.81002597	4.697945807
5019	如實	108	3	55.16916794	2.902578284
31	正勤	59	2	54.06115375	4.652500588
91	身壞命終	55	2	50.39599078	4.588173076
2183	得	211	4	47.08328982	1.417376209
3393	總	209	4	46.63700271	1.415251016
63	爾時	88	3	44.95265536	2.797964048

表[5-3] 資料編 同一語チェック 論書別 Data『阿毘達磨法蘊足論』TF-IDF2 順 参照

No.	トークン	頻度	論書数	TF-IDF1	TF-IDF2
2537	脩	100	1	160.9437929	9.021173575
10247	發勤	88	1	141.6305378	8.815433696
3488	脩習	85	1	136.802224	8.759609443
10444	勵意	47	1	75.64358268	7.806011578
343	&M-395700;波索迦	41	1	65.9869551	7.586201729
4676	多脩習	39	1	62.76807924	7.505713061
41788	不也	22	1	35.40763444	6.584278947
60	室羅筏	20	1	32.18875859	6.430883127
62	逝多林給孤獨園	20	1	32.18875859	6.430883127
25597	馳流餘境	20	1	32.18875859	6.430883127
7612	勝樂	18	1	28.96988273	6.261311915
17163	自身	17	1	27.3604448	6.169318995
17166	現相續中	16	1	25.75100687	6.071747428
11336	不復生	16	1	25.75100687	6.071747428
37969	名色緣六處	16	1	25.75100687	6.071747428
6174	脩所斷	16	1	25.75100687	6.071747428
37972	受緣愛	15	1	24.14156894	5.967876683
9500	&M-106610;望	14	1	22.53213101	5.856836938
37973	愛緣取	14	1	22.53213101	5.856836938
44623	所起纏	14	1	22.53213101	5.856836938
1299	勝類	14	1	22.53213101	5.856836938

Chap. 1 - 1 - 3. ネットワーク分析

Chap. 1 - 1 - 3 - 1. ネットワーク分析の概念と手法

鈴木[2009][17] によれば、ネットワーク分析とは、様々な対象における構成要素間の関係構造を探る研究方法である。数多くの事象がネットワークで結ばれ、インターネットをはじめとするコンピュータや通信技術だけでなく、社会や人の繋がり、脳や神経細胞でさえ情報のネットワークとされている。食物連鎖やエコロジーをはじめ、私たちのまわりにも様々な現象を数えることができるだろう。そのような構成要素や関係の種類の違いにもかかわらず、これらのネットワークは複数の点が何らかの関係でつながったものという点で共通している。ネットワーク分析は様々なネットワークがそれぞれに持っている固有の事情や特性よりも、それらに共通してみられる関係構造に注目し、それを主要な研究対象とするのである。[18]

ネットワーク分析は、点と線との関係構造を扱う数学のグラフ理論をもとにする。双方向の関係性を持つものは無向グラフ（undirected graph）で表され、関係に向きがあるものは有向グラフ（directed graph, digraph）で表される。

ネットワーク構造の諸指標として、〔1〕密度（density）、〔2〕相互性（reciprocity, mutulity）、〔3〕中心性（centrality）が有名である。また、構造分析、関係構造の類似性、指標の有意義検定、モチーフ、複雑ネットワーク、ベイジアン・アプローチ等々[19]、さまざまな手法が提案されている。

本論稿において、Chapter 2. 以降、ネットワーク分析の手法による部分が大きい。アビダルマ論書に記述された教理概念をネットワーク図に表現することによって、その概念内容を浮き立たせることが可能になるからである。作図には R 言語[20] を使用し、パッケージ igraph[21] を利用した。仏教用語特有の特殊文字の大量データは、そのままでは R 言語のシステムにはなかなかなじまず、ハングアップすることがしばしばであった。それもありネットワーク図の作成に当たっては最も単純で、基礎的な作業で表現することを心がけた。

---

[17] 鈴木 務著『ネットワーク分析』 R で学ぶデータサイエンス8, 金 明哲編, 共立出版, 2009,

[18] 鈴木 務著[2009], pp.1-2

[19] 詳細は、ibid. 鈴木 務著[2009]参照。

[20] R version x64 3.2.2 (2015-08-14) -- "Fire Safety"Copyright (C) 2015 The R Foundation for Statistical Computing, Platform: x86_64-w64-mingw32/x64 (64-bit)

[21] package ‘igraph’ version 1.0.1

Chapter 2.『阿毘達磨法蘊足論』におけるネットワーク分析

Chapter 2.　『阿毘達磨法蘊足論』におけるネットワーク分析

Chap. 2 - 1.『阿毘達磨法蘊足論』の論理構造

Chap. 2 - 1 - 1. 論理構造導出の実際

アビダルマ論書において、その論理構造を導き出すために、法をはじめとして論理概念相互がどのように関係づけられているかを見なければならない。そこで論理構造を具体的に視覚化するためには、ネットワーク分析が有効であることが示唆される。具体的には Chap. 1 - 1 - 2 - 3. で各種の重み付けを行って導出された概念に対して、ネットワーク分析を試みるものである。

資料編　同一語チェック　論書別　Data において、『法蘊足論』の頻度順、TF-IDF1 順、TF-IDF2 順のデータからテストケースとして概念を選び出す。その際、語句において出現回数のみ多い接続詞とか助詞は重み付けにおいて除外されているのが見て取れる。

特に、各重み付けデータをもとに、ケーススタディの例として、図示し易く、特徴のわかりやすいものを基準にして、

(1) 愛染

『法蘊足論』、『集異門足論』の2論書に出現する。

頻度：21、 TF-IDF1：19.24211、 TF-IDF2：3.705958

愛染概念は頻度でこそ少ないが、TF-IDF1 において 6489 例中 94 番であり、TF-IDF2 においても 6489 例中 351 番であるので有意であると考える。

(2) 初靜慮

『法蘊足論』、『品類足論』、『集異門足論』の3論書に出現する。

頻度：41、 TF-IDF1：20.94385、 TF-IDF2：2.407813

初靜慮概念も頻度でこそ少ないが、TF-IDF1 において 6489 例中 73 番であり、TF-IDF2 においても 6489 例中 1278 番であるので有意であると考える。

のそれぞれの概念を選びだした。

Chap. 2 - 1 - 1 - 1. ケーススタディ〔I〕 愛染 単概念

「愛染」をはじめのケーススタディに使用した理由は、概念がコンパクトであること、また、縁起品において「受に縁りて愛あり」の論証に、『取蘊経』『六處経』『満月経』などの諸説を挙げ、第二釈～第十釈までの解釈を載せる。それぞれにおいて論証の構造に明らかな差異が認められるため、ネットワーク分析におけるアビダルマ概念の抽出に都合がいいように考えた。『法蘊足論』コンテキストデータベースからのデータは［表1］のとおりである。

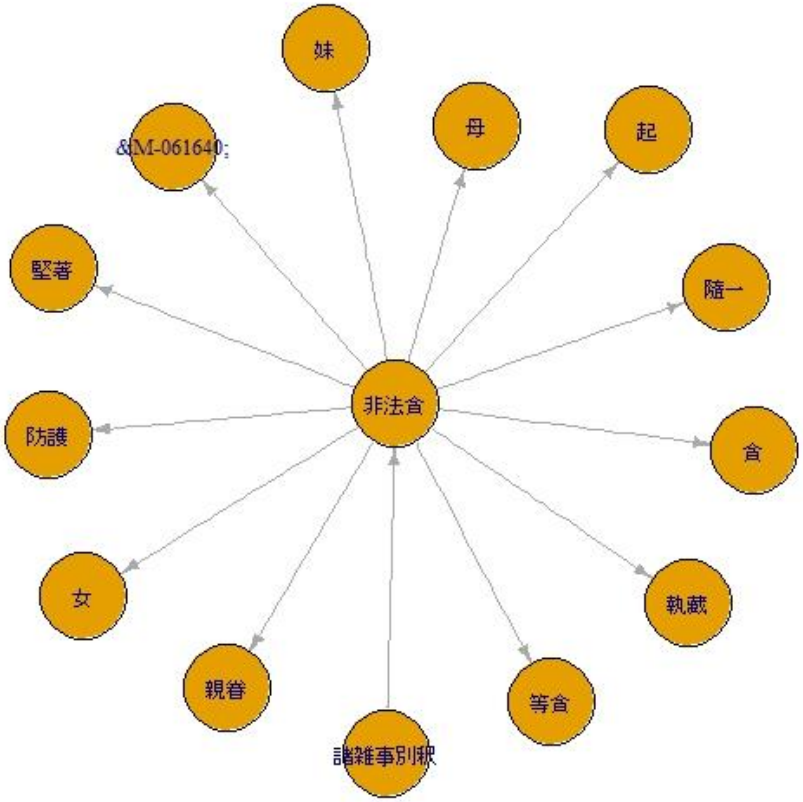
［表1］ 愛染コンテキストデータ

1	34036	愛染	497a11	巻第九	雑事品第十六	諸雑事別釈	非法貪
2	34052	愛染	497a13	巻第九	雑事品第十六	諸雑事別釈	著貪
3	34070	愛染	497a15	巻第九	雑事品第十六	諸雑事別釈	惡貪
4	43406	愛染	510a18	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第二釈
5	43485	愛染	510a25	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第三釈
6	43581	愛染	510b06	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第四釈
7	43673	愛染	510b14	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第五釈
8	43770	愛染	510b23	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第六釈
9	43863	愛染	510c03	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第七釈
10	43957	愛染	510c13	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第八釈
11	44074	愛染	510c25	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第九釈
12	44181	愛染	511a07	巻第十二	縁起品第二十一	受縁愛	第十釈
1	母	女	姉	妹	隨一	親眷	起
2	自財物	攝受	起	貪	等貪	執藏	防護
3	他財物	攝受	起	貪	等貪	執藏	防護
4	眼味受爲縁	眼	隨順	住	起	貪	等貪
5	取蘊經中	佛	苾芻	知	色味	已審尋思	色
6	取蘊經中	世尊	苾芻	知	色	無味	有情
7	六處經中	佛	苾芻	知	眼味	已審尋思	眼
8	六處經中	世尊	苾芻	知	眼	無味	有情
9	六處經中	世尊	苾芻	知	色味	已審尋思	色
10	六處經中	世尊	苾芻	知	色	無味	有情
11	佛	大名離呫毘	大名	知	色一向是苦非樂	非樂所隨	非樂喜受之所纏執
12	滿月經中	佛	苾芻	知	色爲縁	起樂生喜	色味
1	貪	等貪	執藏	防護	堅著		
2	堅著						
3	堅著						
4	執藏	防護	堅著	乃至	意味受爲縁	意	
5	已起味	今起味	正慧	審見	審知	色味受爲縁	隨順
6	色起染	色味受爲縁故	隨順	住	起	貪	等貪
7	已起味	今起味	正慧	審見	審知	眼味受爲縁	隨順
8	眼起染	眼味受爲縁	隨順	住	起	貪	等貪
9	已起味	今起味	正慧	審見	審知	色味受爲縁	隨順
10	色起染	色味受爲縁	隨順	住	起	貪	等貪
11	無有情爲求樂	色	起貪	起染	煩惱	纏縛	非一向苦
12	色味受爲縁	色	隨順	住	起	貪	等貪
1							
2							
3							
4							
5	起	住	貪	等貪	執藏	防護	堅著
6	執藏	防護	堅著	乃至	識	識起染	識味受爲縁

7	住	起	貪	等貪	執藏	防護	堅著
8	執藏	防護	堅著	乃至	意	意起染	意味受爲縁
9	住	起	貪	等貪	執藏	防護	堅著
10	執藏	防護	堅著	乃至	法	法起染	法味受爲縁
11	樂所隨	樂喜受之所纏執	有情	求樂	色味受爲縁	隨順	住
12	執藏	防護	堅著	識爲縁	識味	識味受爲縁	識
1							
2							
3							
4							
5	乃至	識味	審尋思	識	識味受爲縁		
6							
7	乃至	意味	意	意味受爲縁			
8							
9	乃至	法味	法	法味受爲縁			
10							
11	乃至	識一向是苦非樂	非樂所隨	識	樂	識味受爲縁	
12							

この［表1］データをもとに、ネットワーク図を描いたのが次ページからの図【1】～図【12】までの12 枚である。

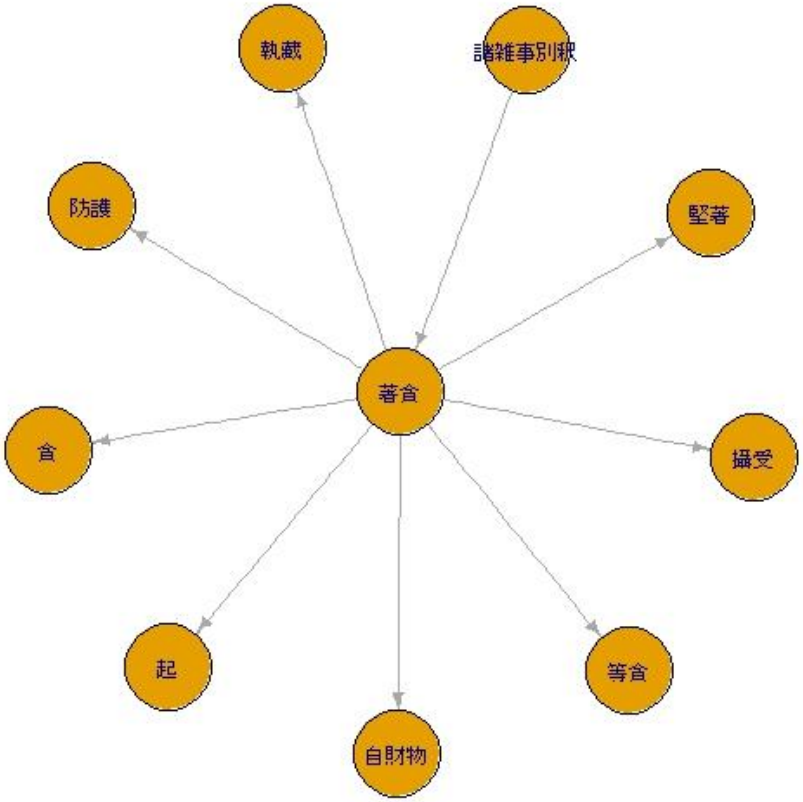
図【1】非法貪



使用カテゴリー

【諸雑事別釈】【非法貪】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【妹】【母】【隨一】【女】【親眷】【&M-061640;（姉）】

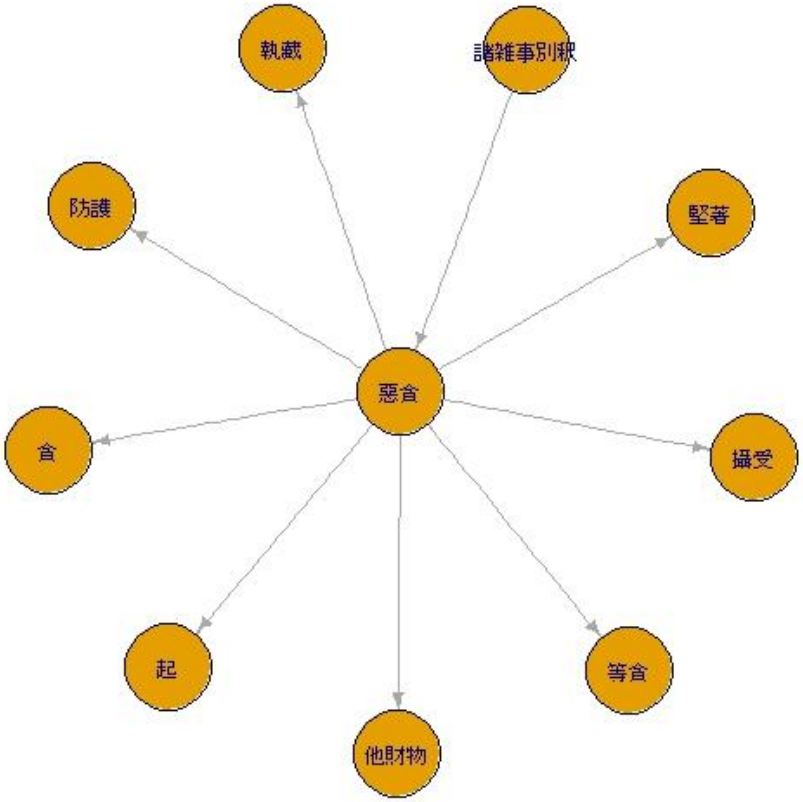
図【2】著貪



使用カテゴリー

【諸雑事別釈】【著貪】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【攝受】【自財物】

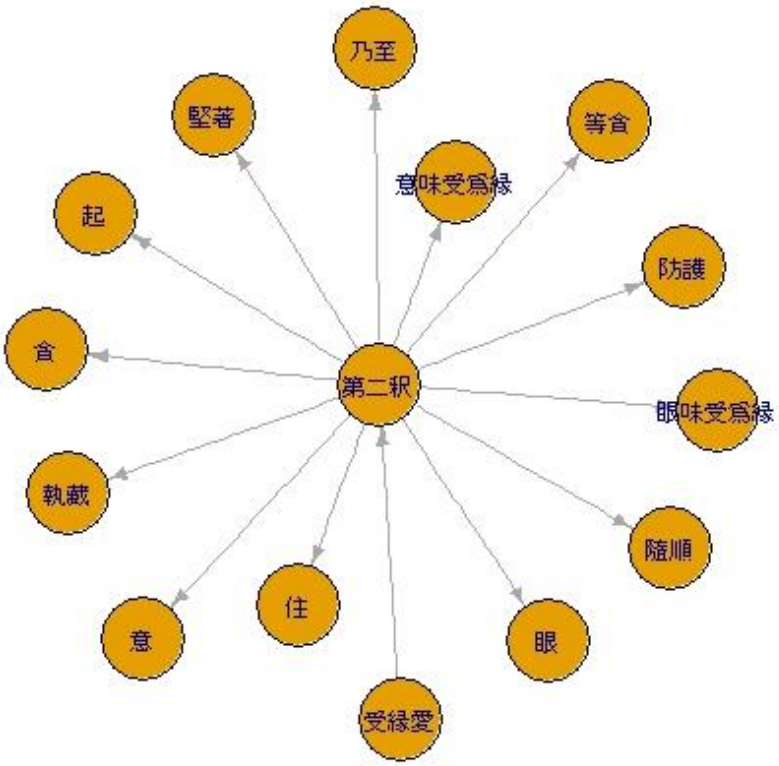
図【3】悪貪



使用カテゴリー

【諸雑事別釈】【悪貪】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【摂受】【他財物】

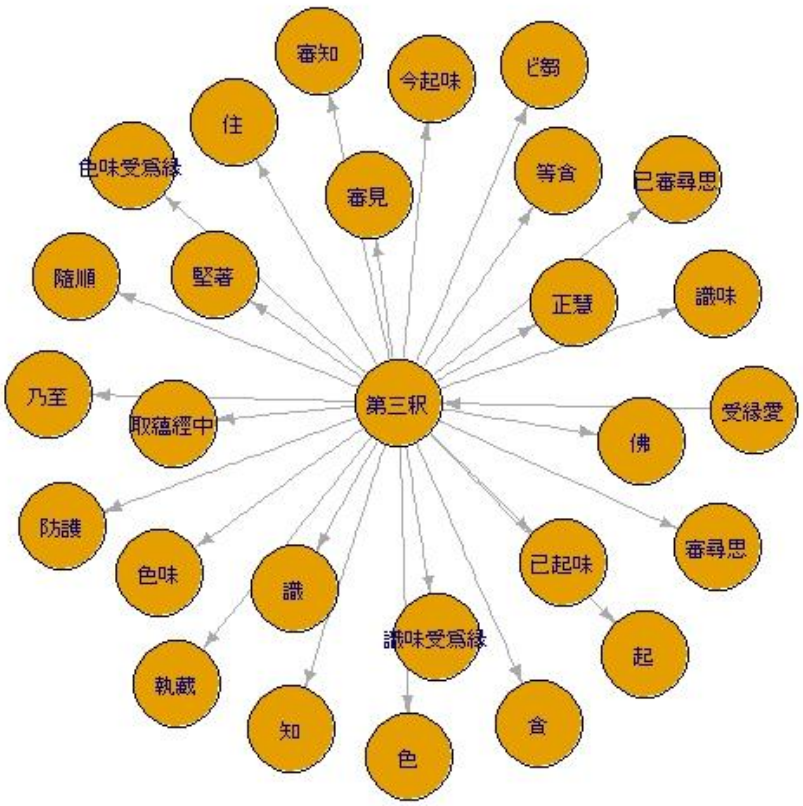
図【4】第二釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第二釈】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【隨順】【意味受爲縁】【眼】【意】【眼味受爲縁】

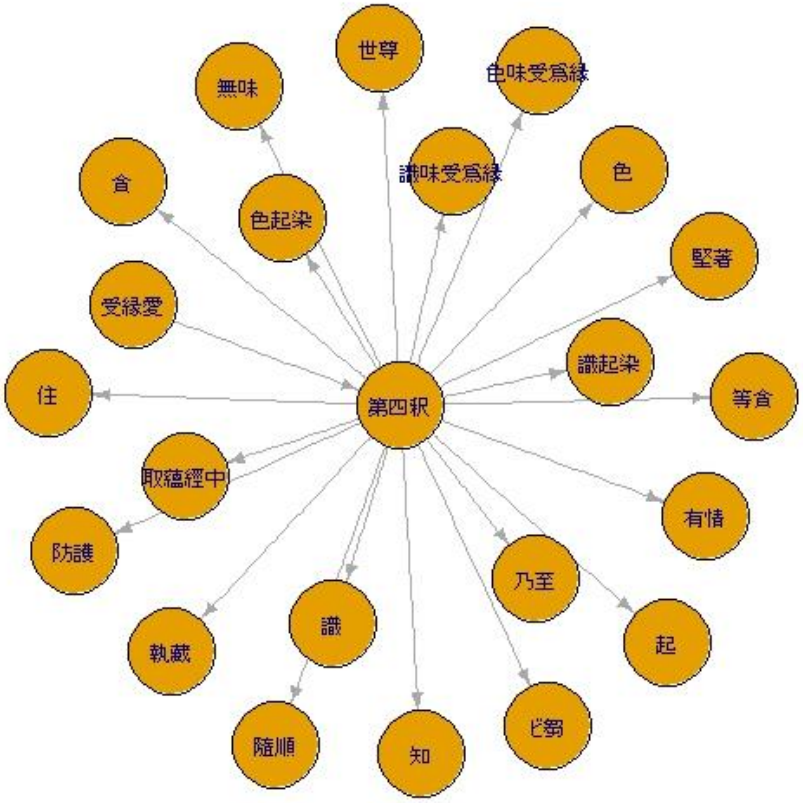
図【5】第三釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第三釈】【取蘊經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【識味受爲縁】【審見】【識】【色味】【今起味】【正慧】【識味】【審尋思】

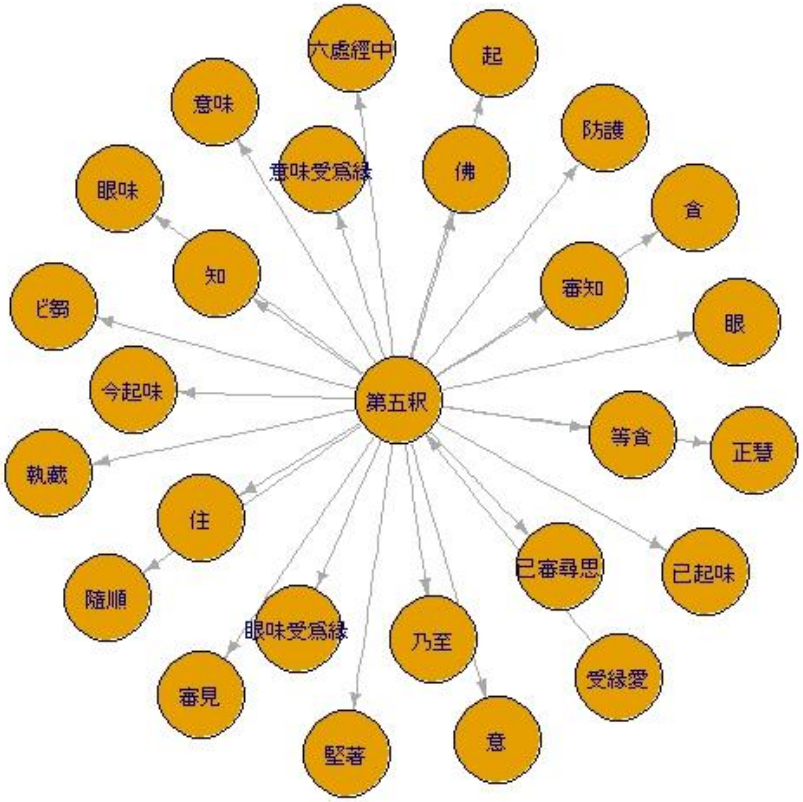
図【6】第四釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第四釈】【取蘊經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【識味受爲縁】【識】【色起染】【識起染】

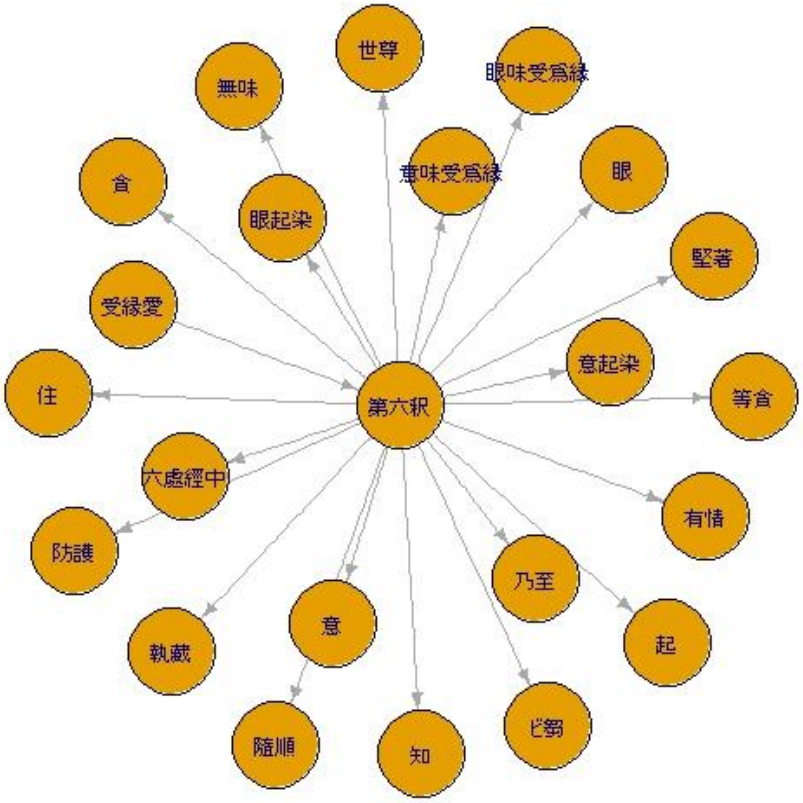
図【7】第五釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第五釈】【六處經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【審見】【意味受爲縁】【眼】【意】【眼味受爲縁】【今起味】【眼味】【正慧】【意味】

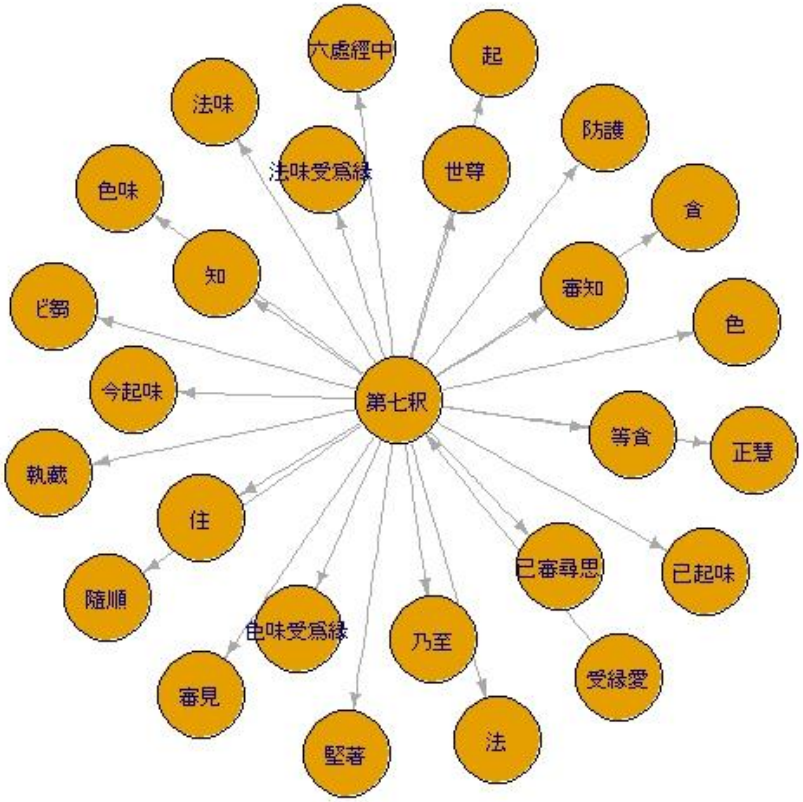
図【8】第六釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第六釈】【六處經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【世尊】【無味】【有情】【意味受爲縁】【眼】【意】【眼味受爲縁】【意起染】【眼起染】

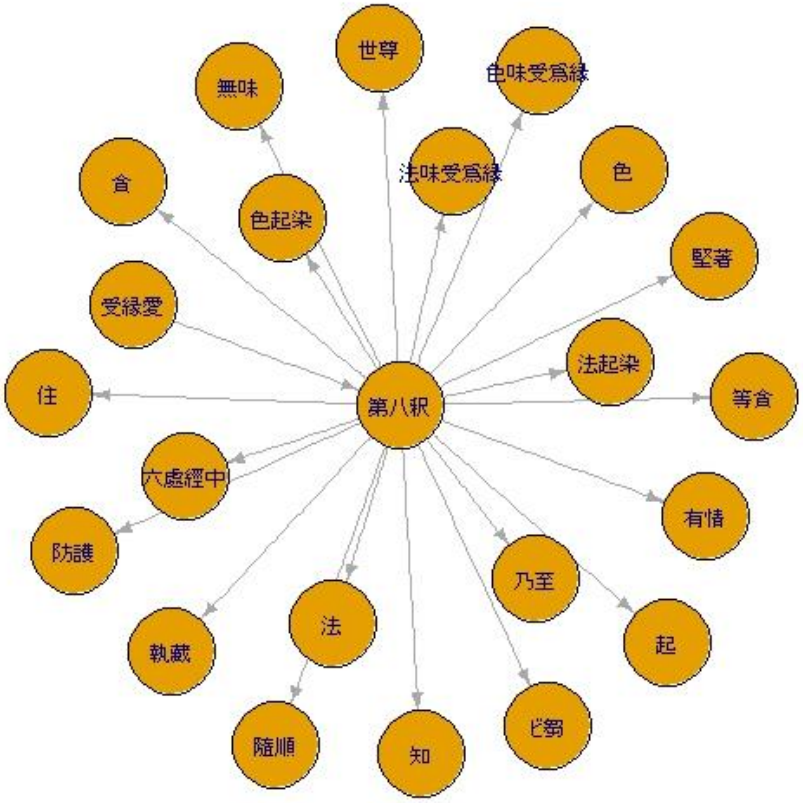
図【9】第七釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第七釈】【六處經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【審知】【已起味】【已審尋思】【審見】【色味】【法】【今起味】【法味受爲縁】【正慧】【法味】

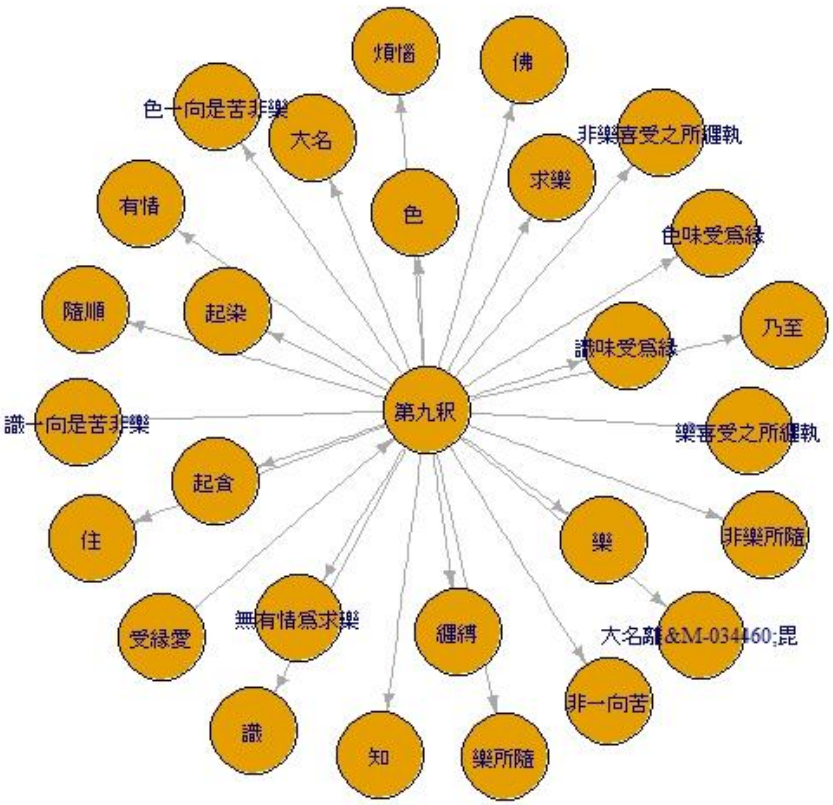
図【10】第八釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第八釈】【六處經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【法】【法味受爲縁】【色起染】【法起染】

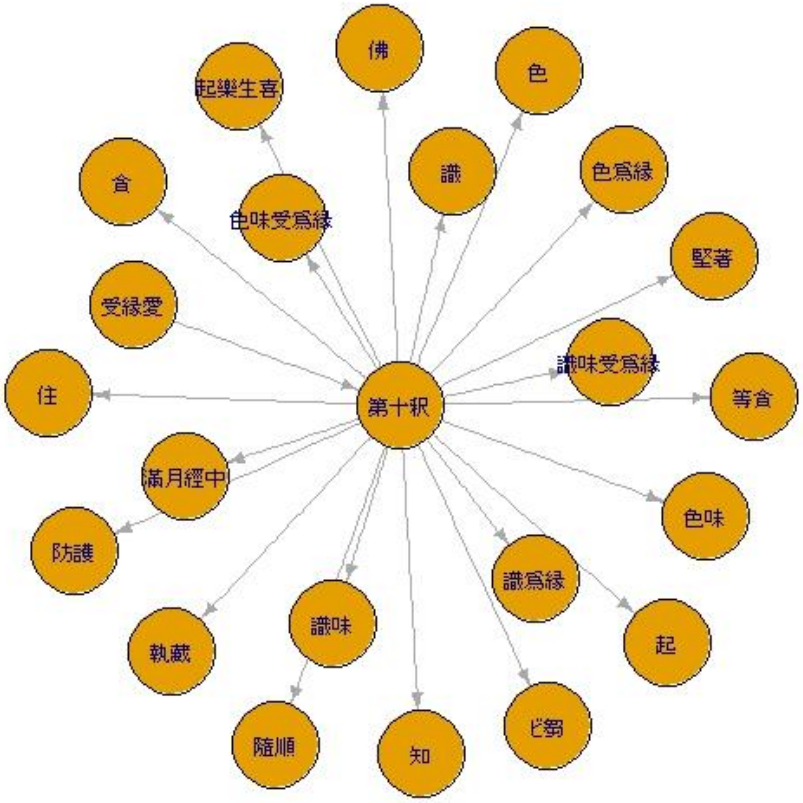
図【11】 第九釈



使用カテゴリー

【受縁愛】【第九釈】【起】【貪】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【有情】【識味受爲縁】【識】【無有情爲求樂】【非樂所隨】【非一向苦】【樂】【樂喜受之所纏執】【樂所隨】【纏縛】【煩悩】【非樂喜受之所纏執】【求樂】【識一向是苦非樂】【色一向是苦非樂】【大名】【大名離&M-034460;(呫)毘】【起染】

図【12】第十釈



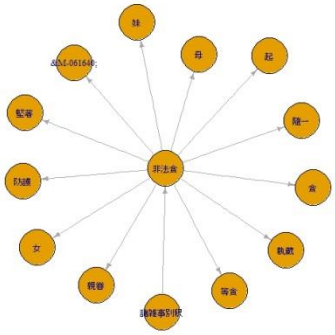
使用カテゴリー

【受縁愛】【第十釈】【滿月經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【識味受爲縁】【識】【色味】【識味】【起樂生喜】【識爲縁】【色爲縁】

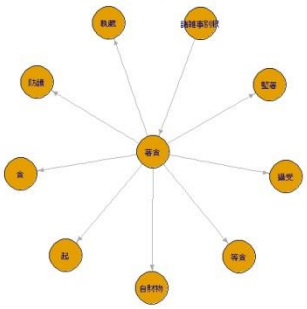
これらの 12 枚の図は、各々のカテゴリー概念を単純に中心カテゴリーのもとに結んだものである。この表現方法は単純であるが故に、各概念の構成形態を端的に表現する。

例えば、図【1】～図【3】をみると、

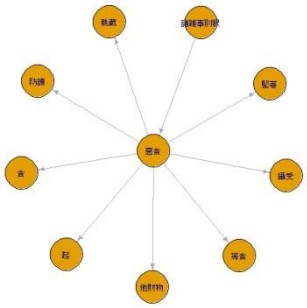
図【1】 非法貪



図【2】 著貪



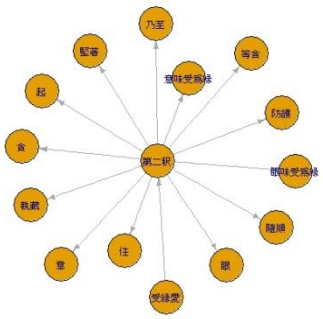
図【3】 悪貪



これは雑事品第十六の諸雑事別釈における、「愛染」が言及されるコンテキストにおいて、「非法貪」「著貪」「悪貪」の三法が論究される場面である。図【2】の「著貪」と図【3】の「悪貪」のグラフの形態はほとんど変わらずに、唯一、「著貪」は《自在物》、「悪貪」は《他在物》の一点のみが異なるものである。これに対して図【1】の「非法貪」は、「母、女、姉、妹、及び、餘の隨一の親眷に於いて、起こす貪、等貪、執蔵、防護、堅著、愛染を非法貪と名づく[1]」とあるよう、後半のカテゴリーは「著貪」「悪貪」の二法と同じであるので基本的形態は似ているが、前半カテゴリーの違いから、構造として図【2】、図【3】と比べて異なるものであることが見て取れるだろう。

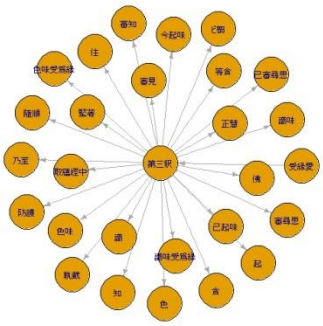
同様にして、縁起品二十一にある「受に縁りて愛あり」の論証における第二釈～第十釈までの解釈を見ながら、あらためて図【4】～図【12】を較べてみる。

図【4】 第二釈

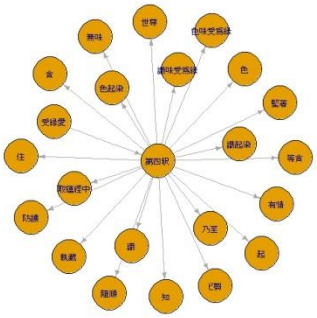


[1] T. 1537, 497a10-12

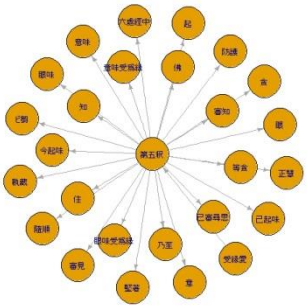
図【5】 第三釈　取蘊経



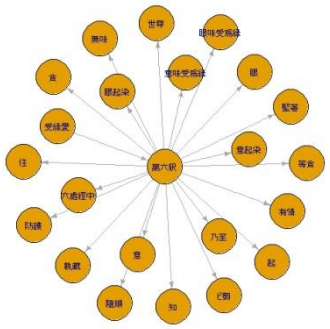
図【6】 第四釈　取蘊経



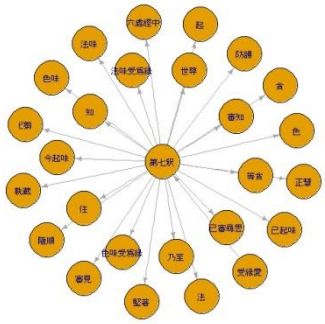
図【7】 第五釈　六處経



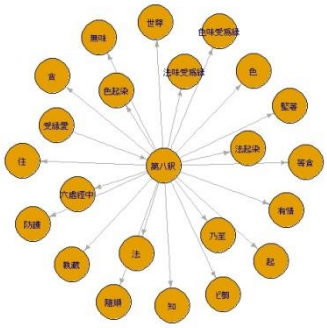
図【8】 第六釈　六處経



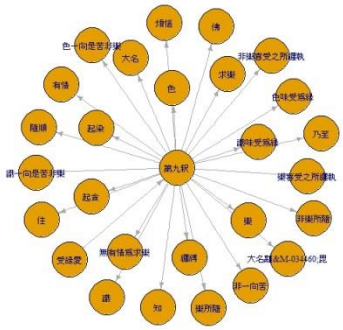
図【9】 第七釈　六處経



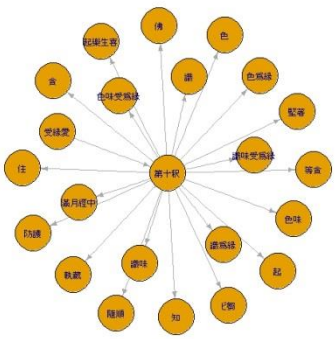
図【10】 第八釈　六處経



図【11】 第九釈



図【12】 第十釈　満月経



これらの解釈のうち、図【5】第三釈と図【6】第四釈が共に取蘊経を出典とし、図【7】第五釈、図【8】第六釈、図【9】第七釈、図【10】第八釈が六處経、図【12】第十釈が満月経を出典としている。

この単概念図は、最も基本なもので、個々のカテゴリーを精査することによって導出される論理構造を確認する事ができる。カテゴリー数だけで較べても、第二釈　15、第三釈　28、第四釈 23、第五釈　27、第六釈　23、第七釈　27、第八釈　23、第九釈　29、第十釈　23 となる。

しかしながら、ネットワーク図をもう少し工夫することによって、よりいっそう明確に把握することが可能となる。つまり複数概念におけるネットワーク図を図示することを試みる。

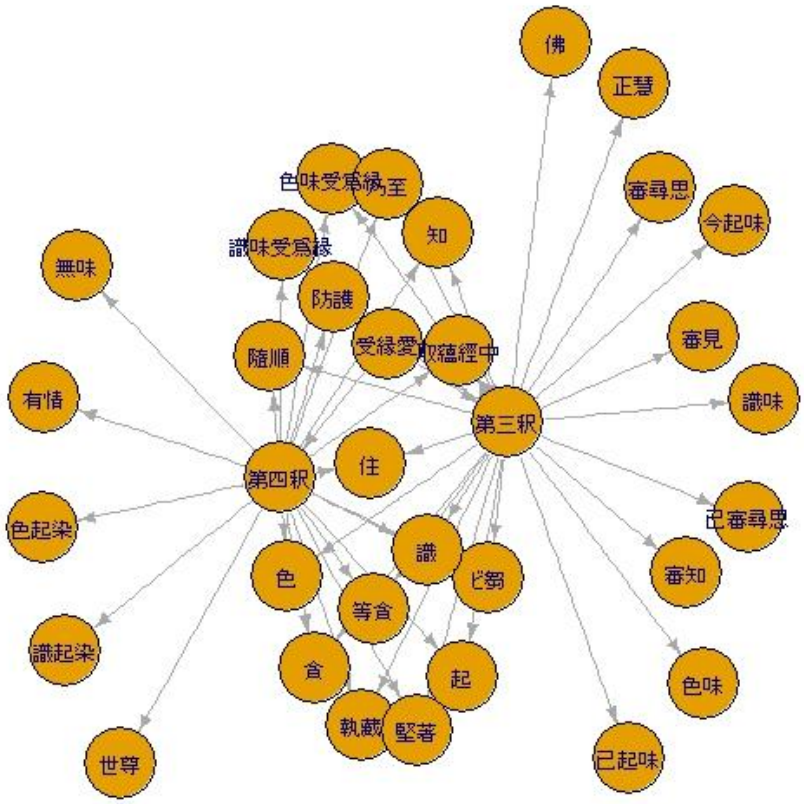
Chap. 2 - 1 - 1 - 2. ケーススタディ〔II〕 愛染　複数概念

Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 1. 第三釈　vs　第四釈

図【13】は、図【5】第三釈と図【6】第四釈の取蘊経を出典としたものを、複合的に図示したものである。第三釈と第四釈の共通のカテゴリー、【受縁愛】【取蘊經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【識味受爲縁】【識】の17カテゴリーは中央部に重なり、第三釈独自のカテゴリー、【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【審見】【色味】【今起味】【正慧】【識味】【審尋思】の10カテゴリーが右側に並ぶ。そして第四釈独自のカテゴリー、【世尊】【無味】【有情】【色起染】【識起染】の5カテゴリーが左側に並んでいる。このような論理構造の形態が第三釈と第四釈を特徴づけるものである。

この図表を別の形式で表現すると、図【14】のような circle 図になる。表わしている内容は図【13】とまったく同じものである。右端の【受縁愛】がスタートで、それ以降上方左回りに【第三釈】【第四釈】が並び、第三釈と第四釈の共通のカテゴリー、【取蘊經中】【苾芻】【知】【色】【色味受爲縁】【起】【住】【貪】【等貪】【執藏】【防護】【堅著】【乃至】【識】【識味受爲縁】【隨順】の16カテゴリーが並ぶ。さらに第三釈独自のカテゴリー、【佛】【已審尋思】【色味】【已起味】【今起味】【正慧】【審見】【審知】【識味】【審尋思】の10カテゴリーが続いて並び、そして第四釈独自のカテゴリー、【世尊】【無味】【有情】【色起染】【識起染】の5カテゴリーが続いて並ぶといった構造を持つ。

図【13】第三釈 vs 第四釈

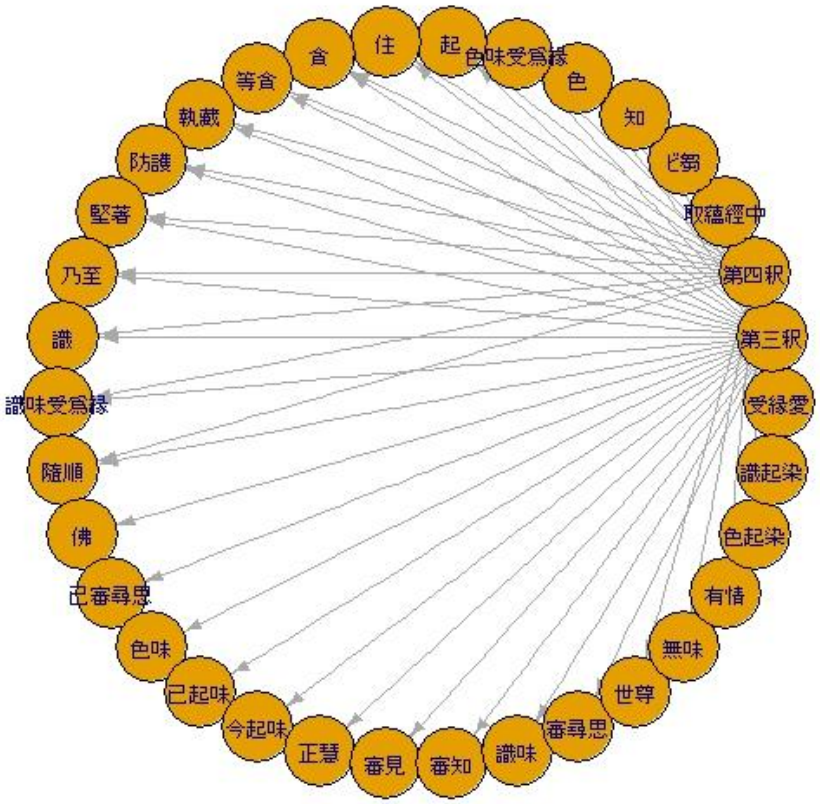


使用カテゴリー

【受縁愛】【第三釈】【取蘊經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【識味受爲縁】【審見】【識】【色味】【今起味】【正慧】【識味】【審尋思】

【受縁愛】【第四釈】【取蘊經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【識味受爲縁】【識】【色起染】【識起染】

図【14】第三釈 vs 第四釈 circle 図



使用カテゴリー

【受縁愛】【第三釈】【取蘊經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【識味受爲縁】【審見】【識】【色味】【今起味】【正慧】【識味】【審尋思】

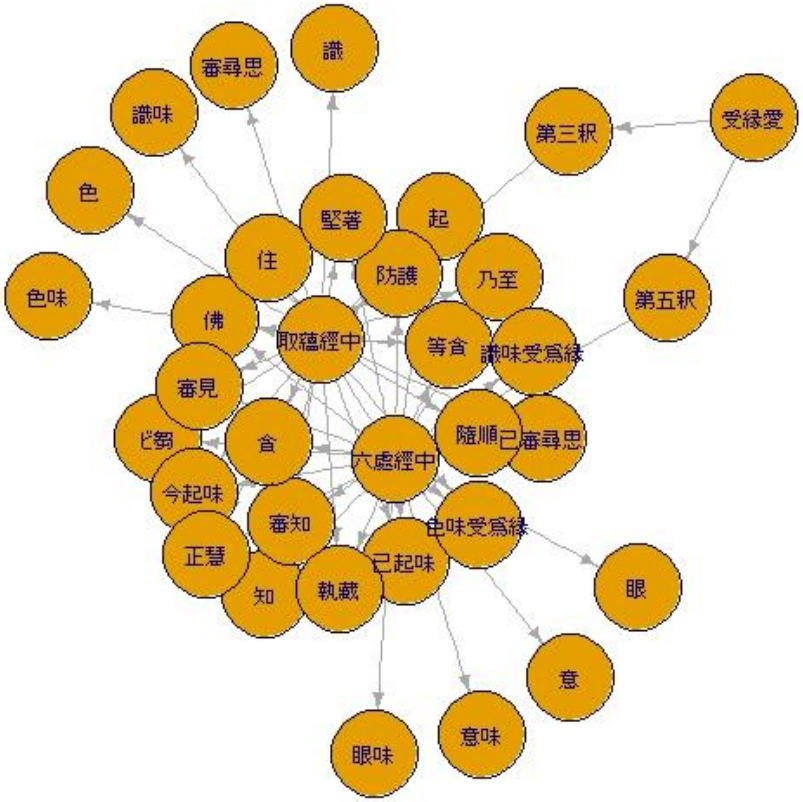
【受縁愛】【第四釈】【取蘊經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【識味受爲縁】【識】【色起染】【識起染】

Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 2. 第三釈 vs 第五釈

つぎに図【15】は、図【5】第三釈の取蘊経を出典としたものと図【7】第五釈の六處経を出典としたものを、複合的に図示したものである。右上の【受縁愛】からスタートして第三釈と第五釈の共通のカテゴリー、【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色味受爲縁】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【識味受爲縁】【審見】【今起味】【正慧】の20カテゴリーは中央部に重なり、第三釈独自のカテゴリー、【識】【審尋思】【識味】【色】【色味】の5カテゴリーが左上方に並ぶ。そして第五釈独自のカテゴリー、【眼】【意】【意味】【眼味】の4カテゴリーが右下方に並んでいる。このような論理構造の形態が第三釈と第五釈を特徴づけるものである。

この図表を別の形式で表現すると、図【16】のような circle 図になる。表わしている内容は図【15】とまったく同じものである。右端の【受縁愛】がスタートで、それ以降上方左回りに【第三釈】【取蘊經中】と【第五釈】【六處經中】が並び、第三釈と第五釈の共通のカテゴリー、【佛】【苾芻】【知】【已審尋思】【已起味】【今起味】【正慧】【審見】【審知】【色味受爲縁】【隨順】【住】【起】【貪】【等貪】【執藏】【防護】【堅著】【乃至】【識味受爲縁】の20カテゴリーが並ぶ。さらに第三釈独自のカテゴリー、【色】【色味】【識】【識味】【審尋思】の5カテゴリーが続いて並び、そして第五釈独自のカテゴリー、【眼】【眼味】【意】【意味】の4カテゴリーが続いて並ぶといった構造を持つ。

図【15】第三釈 vs 第五釈

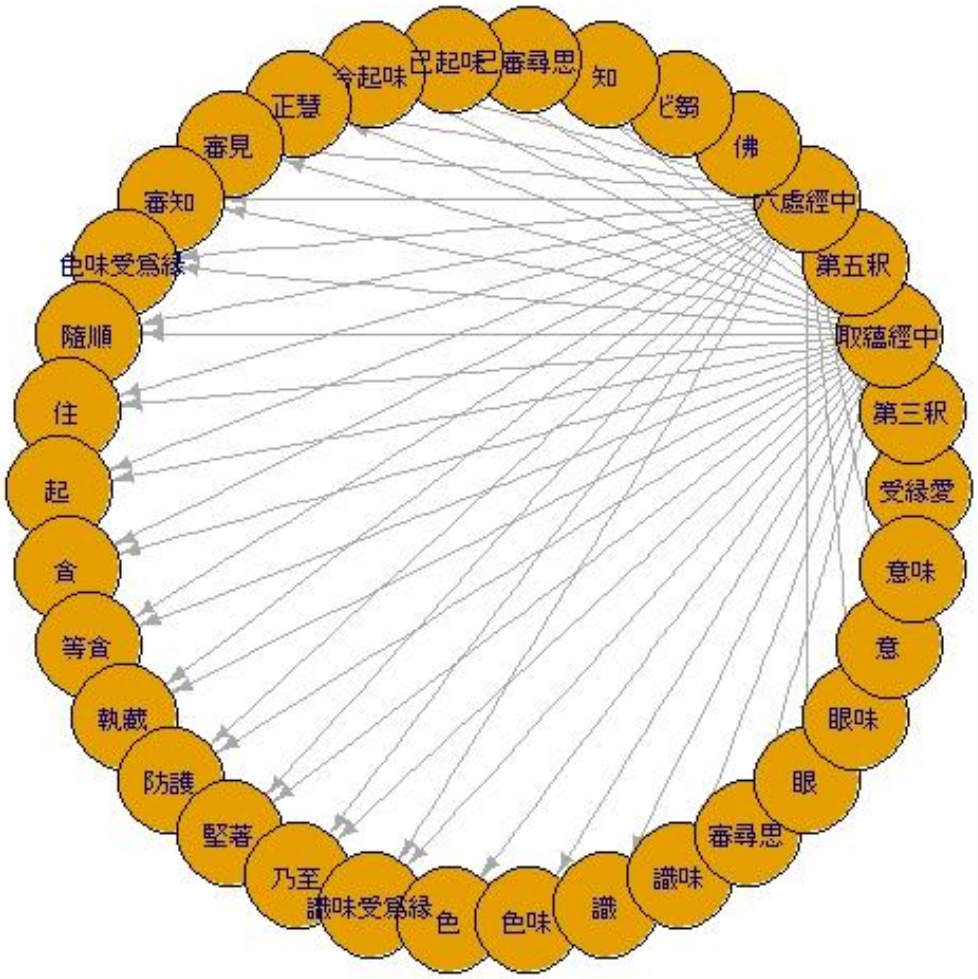


使用カテゴリー

【受縁愛】【第三釈】【取蘊經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【識味受爲縁】【審見】【識】【色味】【今起味】【正慧】【識味】【審尋思】

【受縁愛】【第五釈】【六處經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【審見】【意味受爲縁】【眼】【意】【眼味受爲縁】【今起味】【眼味】【正慧】【意味】

図【16】第三釈 vs 第五釈 circle 図



使用カテゴリー

【受縁愛】【第三釈】【取蘊經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【識味受爲縁】【審見】【識】【色味】【今起味】【正慧】【識味】【審尋思】

【受縁愛】【第五釈】【六處經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【佛】【審知】【已起味】【已審尋思】【審見】【意味受爲縁】【眼】【意】【眼味受爲縁】【今起味】【眼味】【正慧】【意味】

Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 3. 第四釈 vs 第八釈 vs 第十釈

つぎに図【17】は、図【6】第四釈の取蘊経を出典としたものと、図【10】第八釈の六處経を出典としたものと、図【12】第十釈の満月経を出典としたものを、複合的に図示したものである。右上の【受縁愛】からスタートして第四釈と第八釈と第十釈の共通のカテゴリー、【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】の12カテゴリーは中央部に重なり、第四釈と第八釈のみの共通カテゴリー【世尊】【有情】【色起染】【乃至】【無味】の5、第四釈と第十釈のみの共通カテゴリー【識味受爲縁】【識】の2がその周りを囲む。、第八釈と第十釈のみの共通カテゴリーはない。

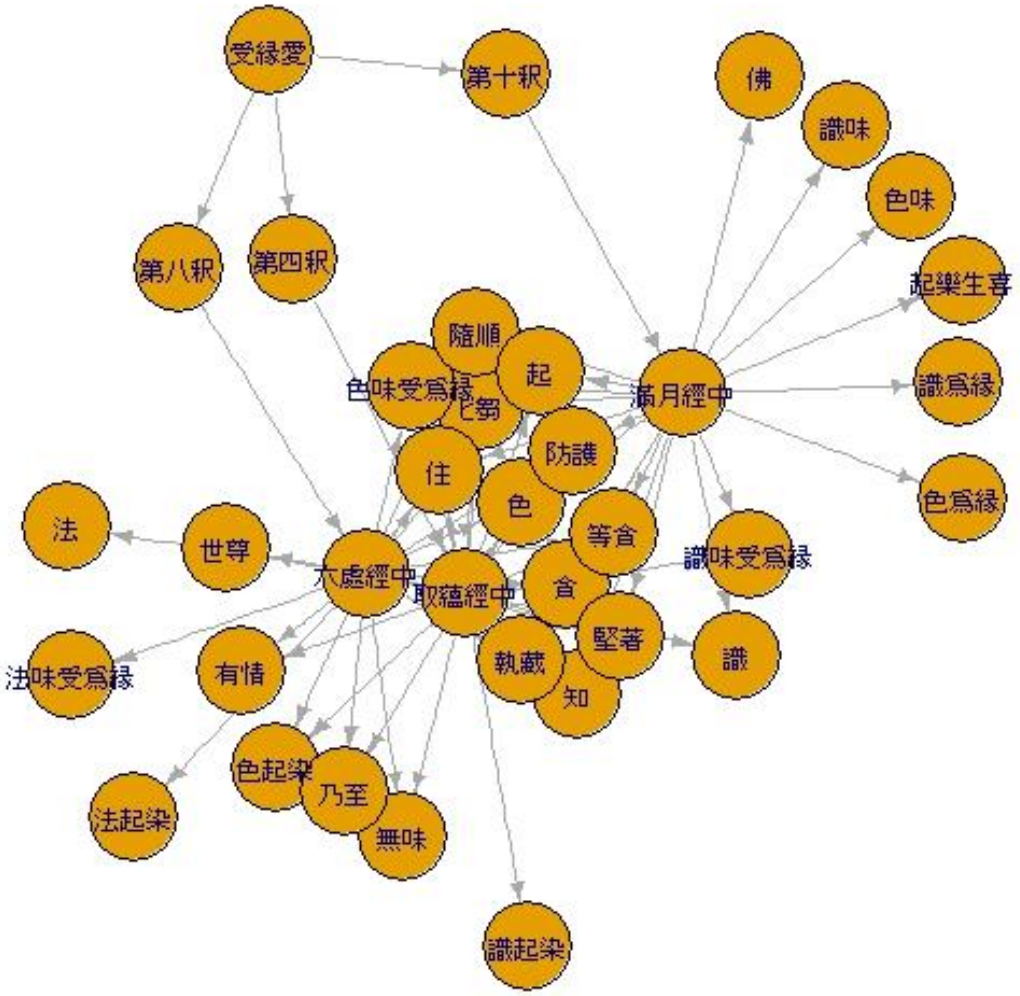
第四釈独自のカテゴリー、【識起染】の1カテゴリーが下方中央に。また第八釈独自のカテゴリー、【法】【法味受爲縁】【法起染】の3カテゴリーが左下方に、そして第十釈独自のカテゴリー、【佛】【識味】【色味】【起樂生喜】【識爲縁】【色爲縁】の6カテゴリーが右上方に並んでいる。このような論理構造の形態が第四釈と第八釈と第十釈を特徴づけるものである。

この図表を別の形式で表現すると、図【18】のような circle 図になる。表わしている内容は図【17】とまったく同じものである。右端の【受縁愛】がスタートで、それ以降上方左回りに【第四釈】【取蘊經中】と【第八釈】【六處經中】と【第十釈】【満月經中】が並び、第四釈と第八釈と第十釈の共通のカテゴリー、【苾芻】【知】【色】【色味受爲縁】【隨順】【住】【起】【貪】【等貪】【執藏】【防護】【堅著】の12カテゴリーが並ぶ。さらに第四釈と第八釈のみの共通カテゴリー【世尊】【無味】【有情】【色起染】【乃至】の5、第四釈と第十釈のみの共通カテゴリー【識】【識味受爲縁】の2が続く。第四釈独自のカテゴリー【識起染】、第八釈独自のカテゴリー、【法】【法起染】【法味受爲縁】の3カテゴリーが、第十釈独自のカテゴリー、【佛】【起樂生喜】【色味】【色爲縁】【識味】【識爲縁】の6カテゴリーが続いて並ぶといった構造を持つ。

Chap. 2 - 1 - 1 - 3. ケーススタディ〔III〕 愛染 全概念

以上のことから、『法蘊足論』 愛染 概念に関する全概念図を図【19】、図【20】に載せる。この2枚の図表が、『法蘊足論』 愛染 概念に関する論理構造を、テキストに基づいたテキストに記述されたままの過不足の無い形態として表現するものである。

【17】第四釈 vs 第八釈 vs 第十釈



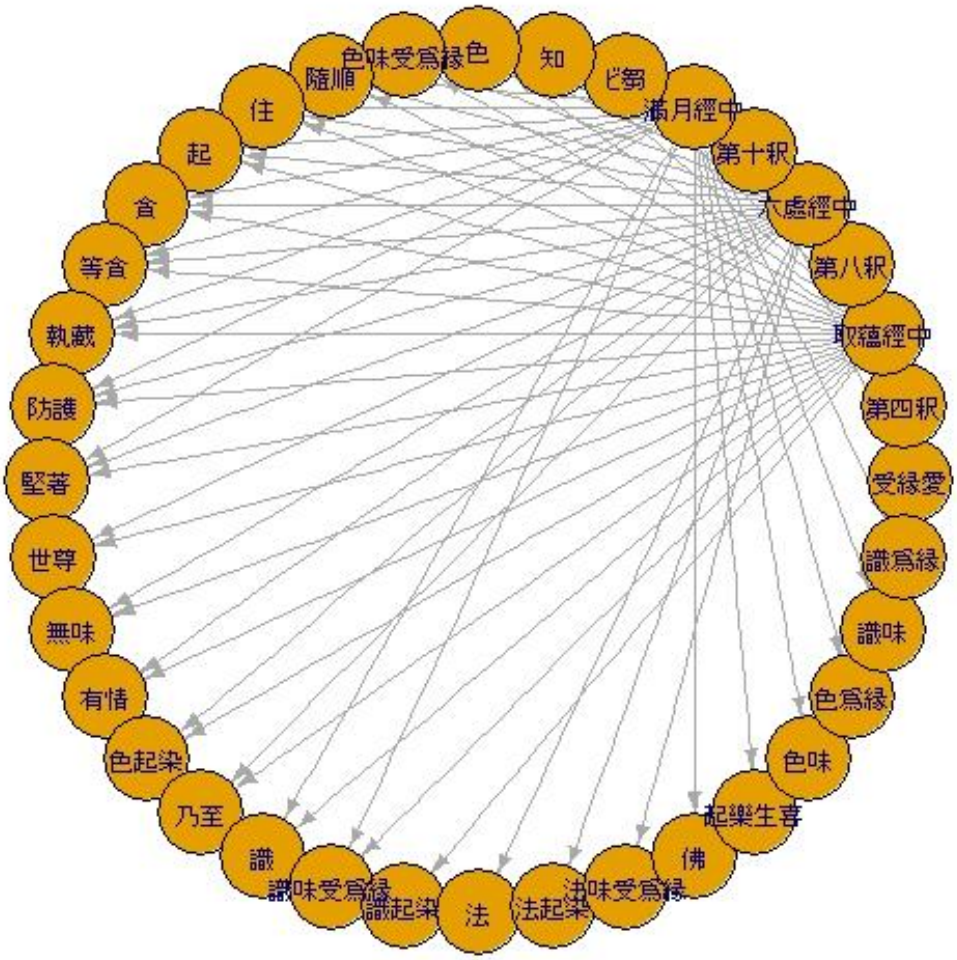
使用カテゴリー

【受縁愛】【第四釈】【取蘊經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【識味受爲縁】【識】【色起染】【識起染】

【受縁愛】【第八釈】【六處經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【法】【法味受爲縁】【色起染】【法起染】

【受縁愛】【第十釈】【滿月經中】【芯芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【識味受爲縁】【識】【色味】【識味】【起樂生喜】【識爲縁】【色爲縁】

図【18】第四釈 vs 第八釈 vs 第十釈 circle 図



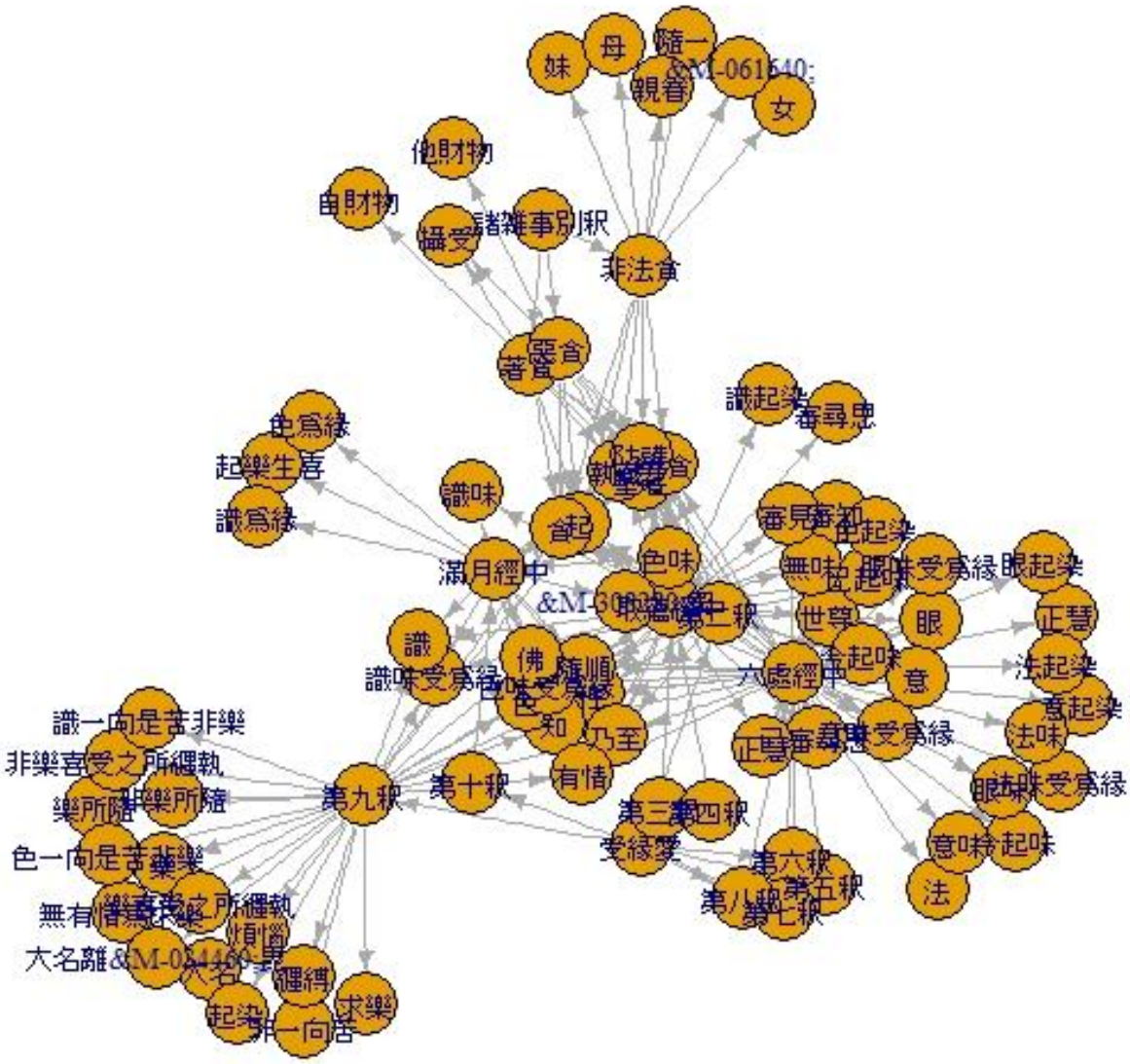
使用カテゴリー

【受縁愛】【第四釈】【取蘊經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【識味受爲縁】【識】【色起染】【識起染】

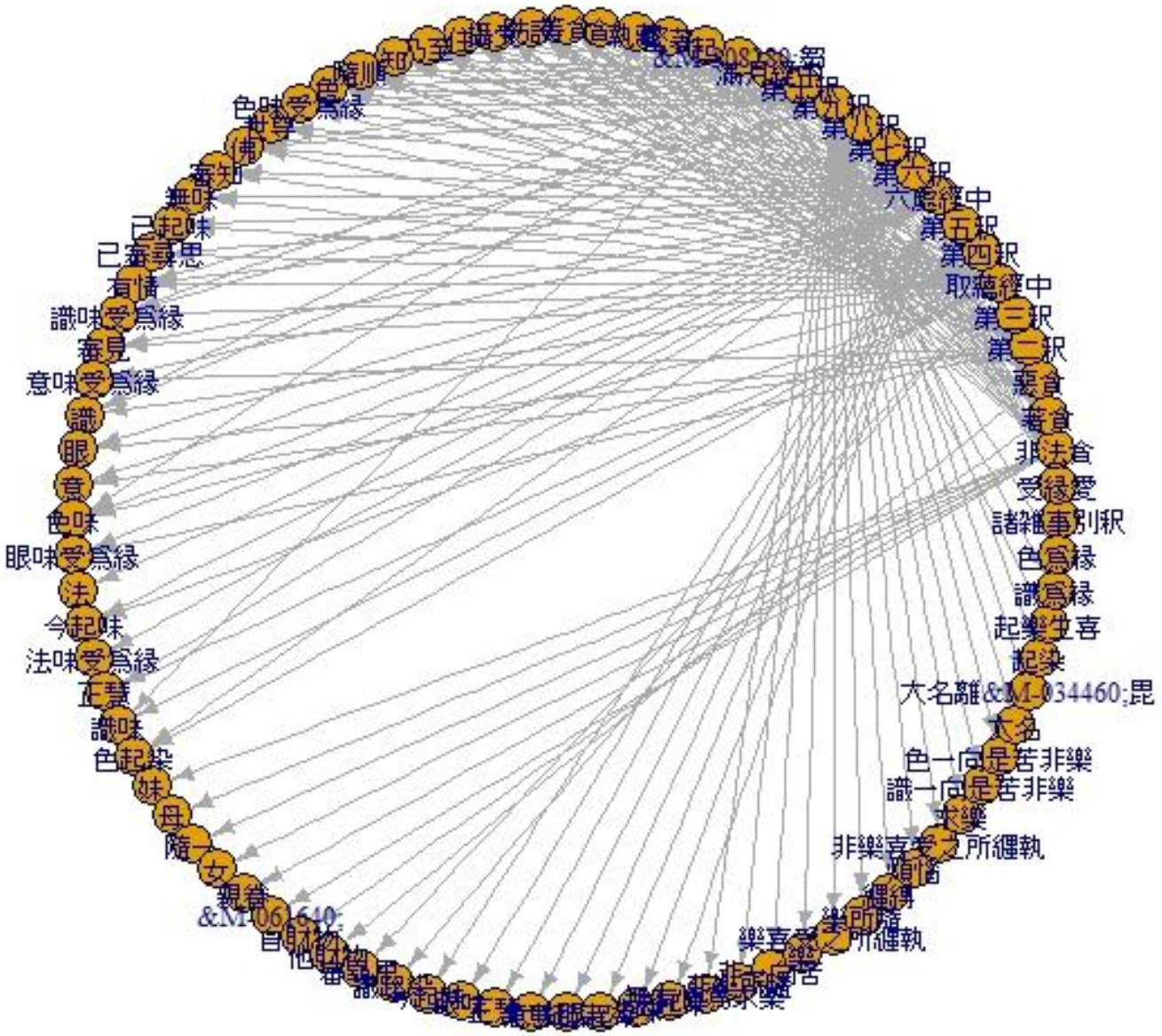
【受縁愛】【第八釈】【六處經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【乃至】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【世尊】【無味】【有情】【法】【法味受爲縁】【色起染】【法起染】

【受縁愛】【第十釈】【滿月經中】【苾芻】【起】【堅著】【執藏】【貪】【等貪】【防護】【住】【知】【隨順】【色】【色味受爲縁】【佛】【識味受爲縁】【識】【色味】【識味】【起樂生喜】【識爲縁】【色爲縁】

図【19】愛染　全概念図


妹
母
隨一
親音
女
他財物
自財物
諸雜事別釈
非法貪
識起染
審尋思
色爲縁
起樂生居
識爲縁
識味
滿月經中
色味
眼起染
眼
正慧
法起染
意起染
法味
意
識一向是苦非樂
非樂喜受之所纏執
樂所隨
第九釈
第十釈
有情
第三釈
第四釈
愛縁愛
第六釈
第五釈
第七釈
第八釈
色一向是苦非樂
無有情
煩惱
大名離
大名
纏縛
求樂
起染
非一向居
法

図【20】愛染　全概念　circle 図



Chap. 2 - 1 - 1 - 4. ケーススタディ〔IV〕 初静慮 論理概念

つぎに「初静慮」について取り上げる。「愛染」についで概念がコンパクトで、取り扱いやすいばかりでなく、説一切有部が限りなく主観的な禅定体験を客観的に表出しようと努力した概念[2] であるからである。今回は「愛染」に表わした単概念表だけではなく、ネットワーク分析のより特徴的表現である論理概念の図示を試みる。「初静慮」における『法蘊足論』コンテキストデータベースからのデータは[表 2]のとおりである。

[表 2] 初静慮コンテキストデータ

1	8452	初静慮	465c13	巻第三	通行品第四	四通行	樂遲通行
2	12151	初静慮	470a19	巻第四	正勝品第七	第三正勝	善法
3	12725	初静慮	470c17	巻第四	正勝品第七	第四正勝	善法
4	22483	初静慮	482b01	巻第六	静慮品第十一	四静慮論	
5	23419	初静慮	483b26	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	離生喜樂
6	23550	初静慮	483c13	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	
7	23648	初静慮俱有之心	483c28	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	
8	23657	初静慮俱有意業	483c29	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	
9	23663	初静慮俱有勝解	484a02	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	
10	23684	初静慮俱有諸法	484a03	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	
11	23691	初静慮	484a04	巻第七	静慮品第十一	四静慮論	
12	24467	初静慮	484c29	巻第七	静慮品第十一	第四静慮	
13	28102	初静慮	489c07	巻第八	修定品第十四	第一修定	離生喜樂
14	28364	初静慮	490a06	巻第八	修定品第十四	第一修定	離生喜樂
15	31315	初静慮	493c07	巻第九	覺支品第十五	七覺支	輕安覺支
16	31516	初静慮	493c28	巻第九	覺支品第十五	七覺支	定覺支
17	40839	初静慮具足住	506b14	巻第十一	縁起品第二十一	無明縁行	梵衆天
1	世尊	苾芻	離	欲	惡	不善法	有尋
2	正勝	未生	苾芻	思惟	諸行	相状	發勤
3	正勝	已生	堅住	不忘	修	滿	倍増
4	四天道	有情	未淨者	淨	淨者	鮮白	一類
5	離生	喜樂	離	離欲	離惡不善法	出家	色界
6	定	尋	伺	喜	樂	心一境性	
7	定	心	意	識	初静慮俱有之心		
8	思	等思	現前等思	已思	當思	造心意業	初静慮俱有意業
9	心勝解	已勝解	當勝解	初静慮俱有勝解			
10	受	想	欲	作意	念	定	慧
11	寂静	惡	不善法	雑染	後有	熾然	當苦異熟
12	憂	得	斷	遍知			
13	所有	喜	樂	平等受	受	所攝	身輕安
14	所攝	俱行	心一境性	定	修	習	恒作
15	慶喜	語言	静息	縁	第一順輕安相		
16	盡	漏	苾芻	相状	離欲	惡	不善法
17	一類	繫心	悕求	念	生梵衆天衆同分中	因	勤修
1	有伺	離生	喜	樂	初静慮	具足	安住
2	精進	勇健	勢猛	熾盛	難制	勵意	不息
3	廣大	智	作證	苾芻	思惟	諸行	相状
4	離	欲	惡	不善法	有尋	有伺	離生

[2] Chap. 4 – 3. 参照。

5	善根	意					
6							
7							
8							
9							
10	初靜慮俱有諸法						
11	生	老	死	有漏法	起	等起	等生
12							
13	心輕安	離欲	惡	不善法	起	等起	生
14	常作	加行	不捨	所作	自在	證得	現法樂住
15							
16	有尋	有伺	離生喜樂	初靜慮具足住	不思惟	思惟	所得
17	加行	離欲	惡不善法	有尋	有伺	離生喜樂	定
1							
2	脩習	多脩習	起	等起	生	等生	聚集
3	發勤	精進	勇健	勢猛	熾盛	難制	勵意
4	喜樂	具足	住				
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11	趣入	出現	明盛	遍照	具足	出家	遠離
12							
13	等生	聚集	出現				
14							
15							
16	所趣	色	受	想	行	識	病
17	身律儀	語律儀	命清淨	福行	因緣	身壞命終	無明爲緣造福行
1							
2	出現	欲樂	欣喜	求趣	悕望	生起	策心
3	不息	脩習	多脩習	起	等起	生	等生
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11	所生	善法	精勤	修習	無間	無斷	方得圓滿
12							
13							
14							
15							
16	癰	箭惱害	無常	苦	空	非我	法
17	無明蔽動心	行緣識	起	識	造福行已有隨福識	希求	色
1							
2	喜俱行心	欣俱行心	策勵俱行心	不下劣俱行心	不闇昧俱行心	捨俱行心	定俱行心
3	聚集	出現	欲樂	欣喜	求趣	悕望	生起
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11	住	成就	現行	隨行	遍行	遍隨行	動轉
12							
13							
14							

15							
16	深心厭患	怖畏	遮止	然後攝心	置	甘露界	此界
17	所生	受	想	行	識	緣	生梵衆天衆同分中
2	持心	八支聖道					
3	策勵俱行心	不下劣俱行心	不闇昧俱行心	捨俱行心	定俱行心	心	持心
16	微妙	捨	一切依	愛盡	離染	永滅	涅槃
17	六根生起	名色緣六處	觸生起	名色緣觸	業有	生	等生
16	彼弟子	學	近射	泥團	草人	遠射	大堅固物
17	生緣有故起						
16	破壞	知見	欲漏	心	解脱	有漏	無明漏
16	生已	梵行	不受	後有			

この[表 2]のコンテキストデータは、項目数が多すぎて平面に図示した場合、現実的に視認できない。したがって、本論稿においては便宜的に、重複項目および重要と思われる項目を恣意的に抽出し[表 3]の如く、118 項目に限定し図示した。もちろん、コンピュータのベクトル空間内においては全項目で比較する必要があるし、数理上は何ら問題ないものである。ただし論理概念の図示の場合は全てのデータを使用した。

[表 3] 初靜慮 抽出項目

1	2	3	4	5	6	7	8
四通行	樂遲通行	第三正勝	善法	第四正勝	四靜慮論	離生喜樂	第四靜慮
9	10	11	12	13	14	15	16
第一修定	七覺支	輕安覺支	定覺支	無明緣行	梵衆天	苾芻	悕望
17	18	19	20	21	22	23	24
意	喜	策心	策勵俱行心	思惟	持心	捨俱行心	心
25	26	27	28	29	30	31	32
勢猛	正勝	生	生起	精進	相状	多脩習	定俱行心
33	34	35	36	37	38	39	40
等起	等生	難制	八支聖道	不息	勇健	欲樂	勵意
41	42	43	44	45	46	47	48
熾盛	發勤	聚集	脩習	起	欣喜	離生	欲
49	50	51	52	53	54	55	56
定	受	識	行	修	不善法	色	離欲
57	58	59	60	61	62	63	64
因	緣	加行	苦	具足	寂靜	住	出家
65	66	67	68	69	70	71	72
出現	所生	所攝	心一境性	想	念	喜樂	有伺
73	74	75	76	77	78	79	80
有尋	離生喜樂	惡	樂	安住	世尊	堅住	作證
81	82	83	84	85	86	87	88
鮮白	有情	善根	伺	尋	現前等思	等思	現行

89	90	91	92	93	94	95	96
趣入	精勤	遍行	遍隨行	無斷	有漏法	老	熾然
97	98	99	100	101	102	103	104
遍知	平等受	現法樂住	捨	深心厭患	箭惱害	知見	病
105	106	107	108	109	110	111	112
法	無明漏	悕求	希求	業有	勤修	繫心	語律儀
113	114	115	116	117	118		
行縁識	身律儀	身壞命終	生梵衆天衆同分中	福行	六根生起		

この[表3]データをもとに、ネットワーク図を描いたのが次ページからの図【21】～図【30】までの10枚である。

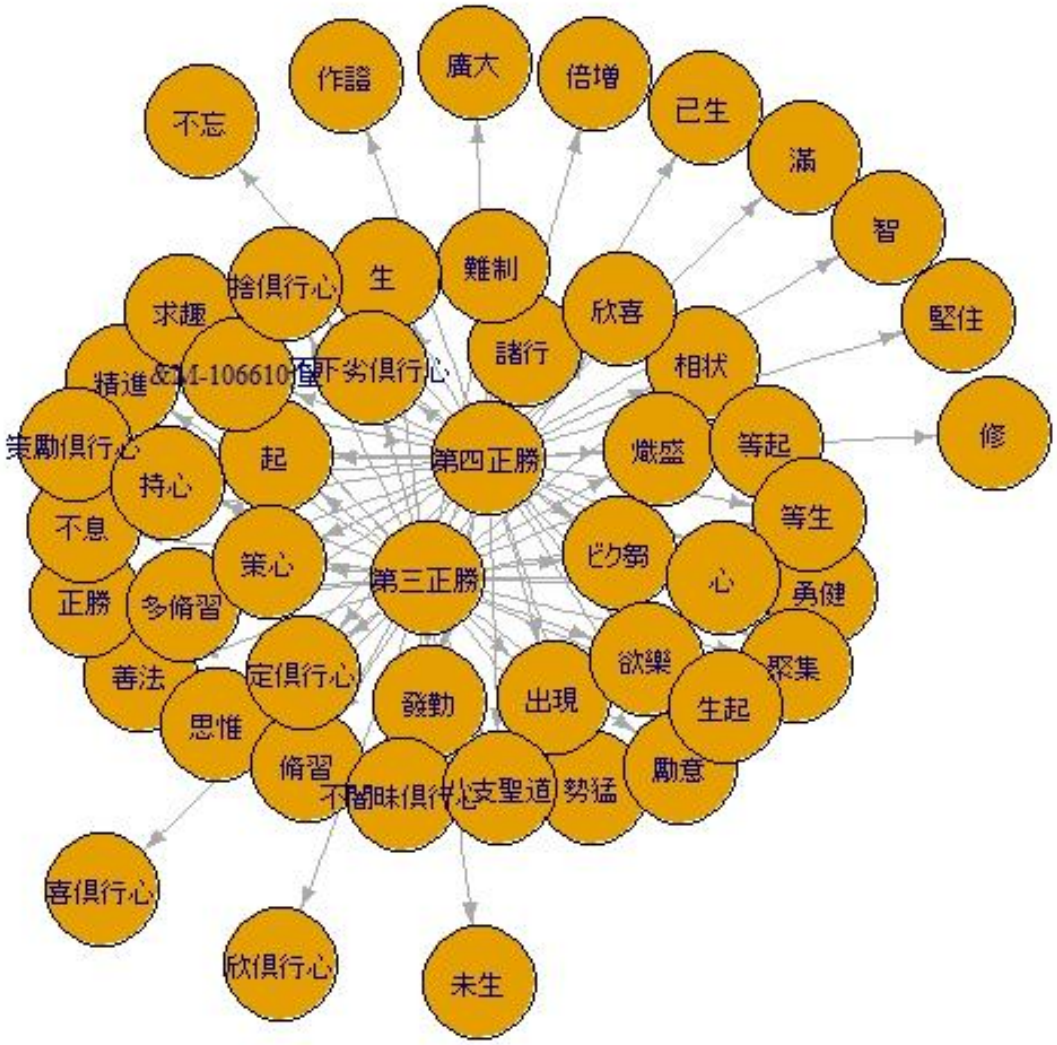
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 1. 正勝品

図【21】は、前出の複数概念のネットワーク図と同様のものである。正勝品第七において、未生の善法をして初静慮を生ずる第三正勝と已生の善法をして初静慮を堅住せしめる第四正勝を論じた段である。図【21】にあるとおり、第三正勝独自のカテゴリーとして【未生】【喜俱行心】【欣俱行心】の3カテゴリーが下方に並び、第四正勝独自のカテゴリーとして【修】【堅住】【智】【滿】【已生】【廣大】【倍増】【作證】【不忘】の9カテゴリーが上方に並ぶ。中央にその他の【善法】【正勝】【ビク芻】【思惟】【諸行】【相状】【發勤】【精進】【勇健】【勢猛】【熾盛】【難制】【勵意】【不息】【脩習】【多脩習】【起】【等起】【生】【等生】【聚集】【出現】【欲樂】【欣喜】【求趣】【悕望】【生起】【策心】【策勵俱行心】【不下劣俱行心】【不闇昧俱行心】【捨俱行心】【定俱行心】【心】【持心】【八支聖道】などの36カテゴリーが第三正勝、第四正勝共通のものとして位置付けられている。

Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 2. 静慮品

同様に、図【22】においては、静慮品第十一において初静慮の言及が9つのパラグラフに分かれており、そのうち8つは四静慮論においてなされるが、ひとつは第四静慮を論じる段でみられる。また四静慮論においても、初静慮を論じるだけでなく、【初静慮俱有之心】【初静慮俱有意業】【初静慮俱有勝解】【初静慮俱有諸法】という4つのカテゴリーによって詳細に論じられる。各々については【初静慮俱有之心】においては【心】【意】【識】の3カテゴリーが、【初静慮俱有意業】においては【思】【等思】【現前等思】【已思】【當思】【造心意業】の6カテゴリーが、【初静慮俱有勝解】においては【心勝解】【已勝解】【當勝解】の3カテゴリーが、【初静慮俱有諸法】においては【受】【想】【欲】【作意】【念】【慧】の6カテゴリーが特徴となる。第四静慮の論には【得】【斷】【憂】【遍知】の4カテゴリーがあり、四静慮論には他の多数のカテゴリーが言及される。

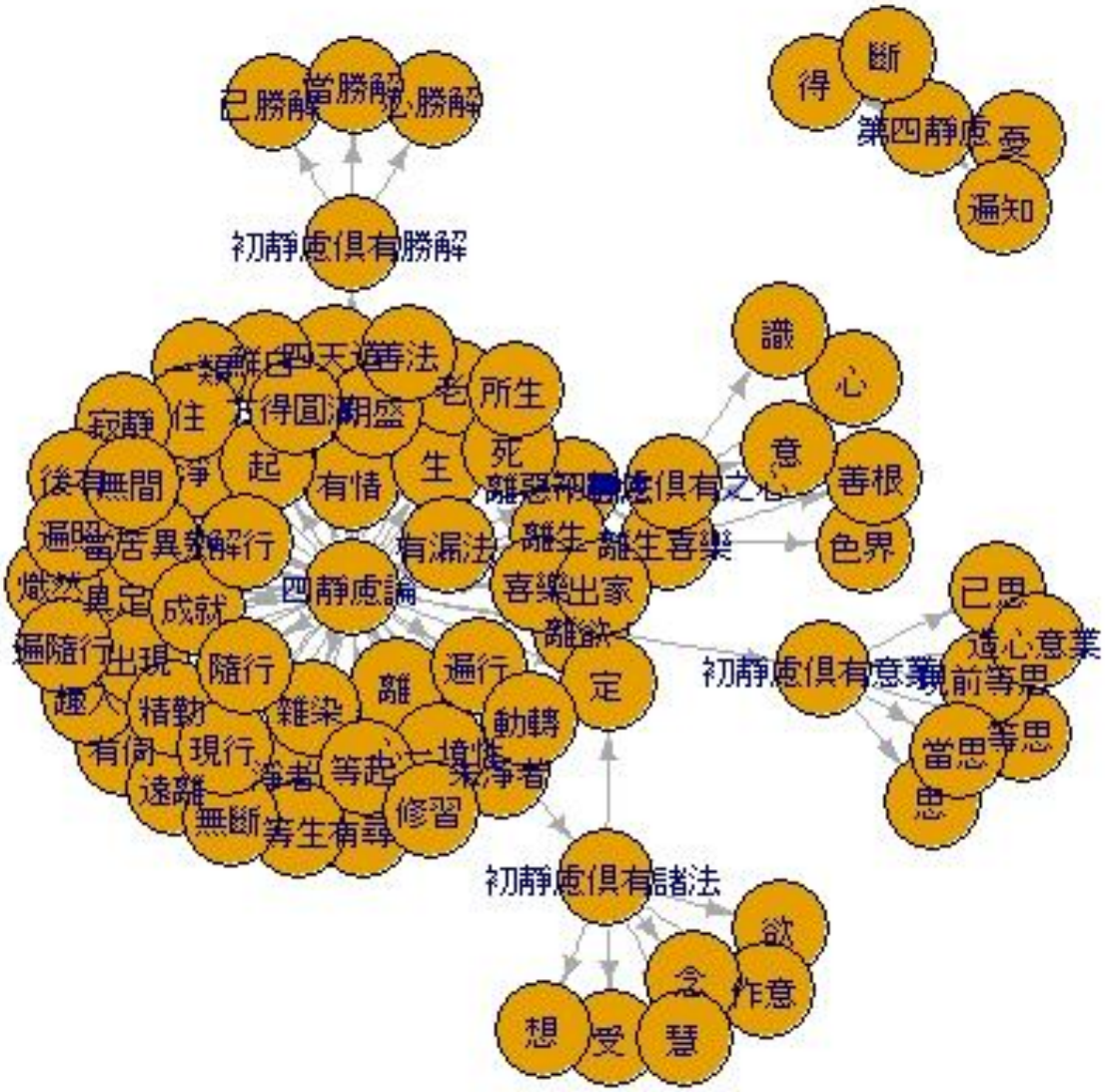
図【21】 初静慮　正勝品



使用カテゴリー

【第三正勝】【第四正勝】【善法】【正勝】【ビク芻】【思惟】【諸行】【相状】【發勤】【精進】【勇健】【勢猛】【熾盛】【難制】【勵意】【不息】【脩習】【多脩習】【起】【等起】【生】【等生】【聚集】【出現】【欲樂】【欣喜】【求趣】【&M-106610;(悕)望】【生起】【策心】【策勵俱行心】【不下劣俱行心】【不闇昧俱行心】【捨俱行心】【定俱行心】【心】【持心】【八支聖道】【未生】【喜俱行心】【欣俱行心】【已生】【堅住】【不忘】【修】【滿】【倍增】【廣大】【智】【作證】

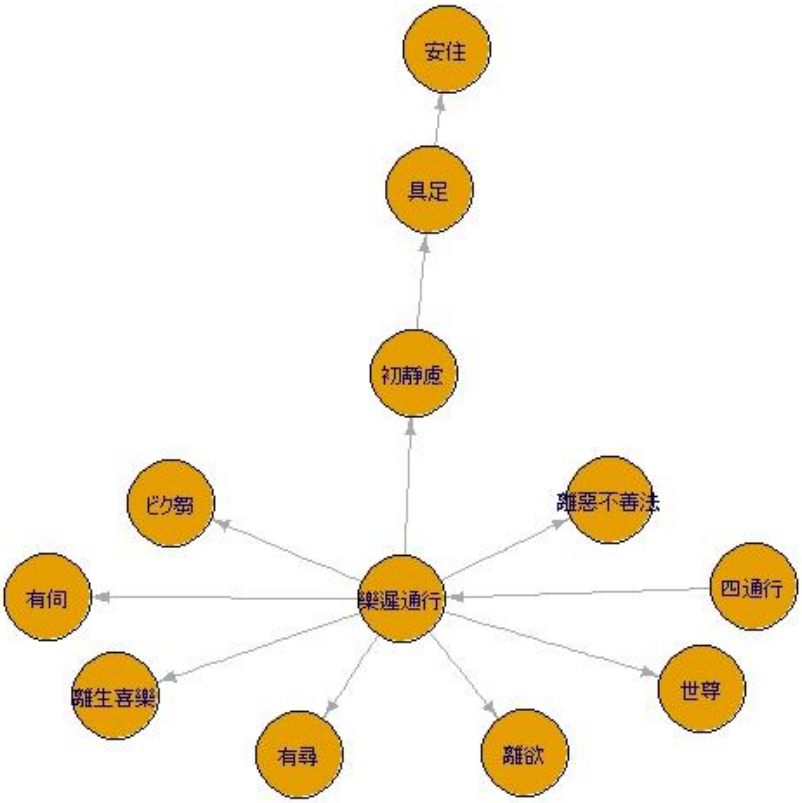
図【22】 初静慮　静慮品



使用カテゴリー

【四静慮論】【離生喜樂】【初静慮俱有之心】【初静慮俱有意業】【初静慮俱有勝解】【初静慮俱有諸法】【第四静慮】【四天道】【有情】【未淨者】【淨】【淨者】【鮮白】【一類】【離】【離欲】【離惡不善法】【離生】【喜樂】【具足】【住】【有尋】【有伺】【出家】【色界】【善根】【意】【定】【心一境性】【心】【識】【思】【等思】【現前等思】【已思】【當思】【造心意業】【心勝解】【已勝解】【當勝解】【受】【想】【欲】【作意】【念】【慧】【寂静】【雜染】【後有】【熾然】【當苦異熟】【生】【老】【死】【有漏法】【起】【等起】【等生】【趣入】【出現】【明盛】【遍照】【遠離】【所生】【善法】【精勤】【修習】【無間】【無斷】【方得圓滿】【成就】【現行】【隨行】【遍行】【遍隨行】【動轉】【解行】【憂】【得】【斷】【遍知】

図【23】 初静慮　通行品　論理概念



使用カテゴリー

【四通行】【樂遲通行】【世尊】【苾芻】【離欲】【離惡不善法】【有尋】【有伺】【離生喜樂】【初静慮】【具足】【安住】

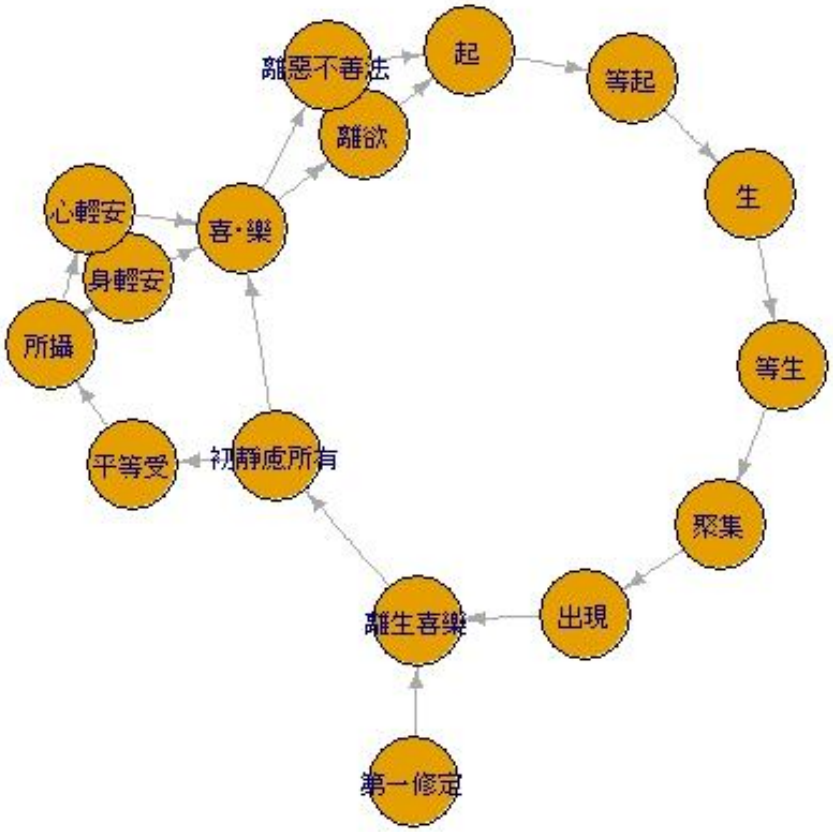
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 3. 通行品

図【23】のネットワーク図は、これまでのものとは大きく異なるものである。これは「云何名爲樂遲通行。如世尊説。諸有苾芻。離欲惡不善法。有尋有伺。離生喜樂。於初静慮。具足安住。[3]」という四通行の樂遲通行を論ずる段で、【四通行】→【樂遲通行】に矢印が向かい、【樂遲通行】から【世尊】【苾芻】【離欲】【離惡不善法】【有尋】【有伺】【離生喜樂】の各カテゴリーが論じられ、その後に【初静慮】→【具足】→【安住】と結ばれる。つまりこのネットワーク図は通行品における論理概念そのものを表現しているものだからである。これまでのカテゴリーを表現するだけでなく、矢印のベクトルそのものに意味が付加されているのである。

---

[3] T. 1537, 465c12-14

図【24】 初静慮　修定品（1） 論理概念



使用カテゴリー

【第一修定】【離生喜樂】【初靜慮所有】【喜・樂】【平等受】【所攝】【身輕安】【心輕安】【離欲】【離惡不善法】【起】【等起】【生】【等生】【聚集】【出現】

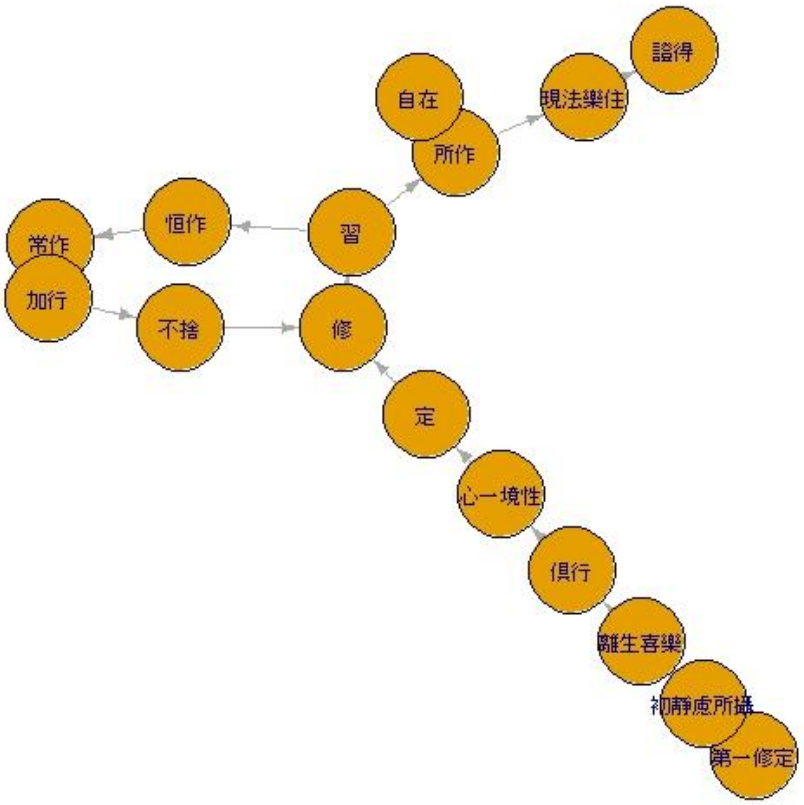
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 4. 修定品

図【24】、図【25】は修定品第十四に説かれる初静慮が言及される段で、共に第一修定の論釈の別釈である。どちらも通行品の場合と同じく、論理概念を表わすネットワーク図である。図【24】は、「離生喜樂者。謂初靜慮所有喜樂平等受。受所攝身輕安心輕安。是名喜樂。如是喜樂。從離欲惡不善法。起等起。生等生。聚集出現。故名離生喜樂。[4]」というよう【離生喜樂】を説明において円環構造をなしている。それに対して図【25】は、「復次初靜慮所攝離生喜樂俱行心一境性。説名爲定。即於此定若修若習。恒作常作。加行

[4] T. 1537, 489c7-10

不捨。説名爲修。若習若修。若多所作。顯彼自在。能令證得現法樂住義如前説。[5]」という定の別釈であるが、論理概念としては直線的な構造を持つ。ネットワーク図にすると、その構造がよく理解できるだろう。次ページの図【26】は、図【24】と図【25】の論理構造を合体させたものである。この図【26】が修定品における初静慮言及の論理構造を表わすものであることが見て取れるだろう。

図【25】 初静慮　修定品（2）　論理概念

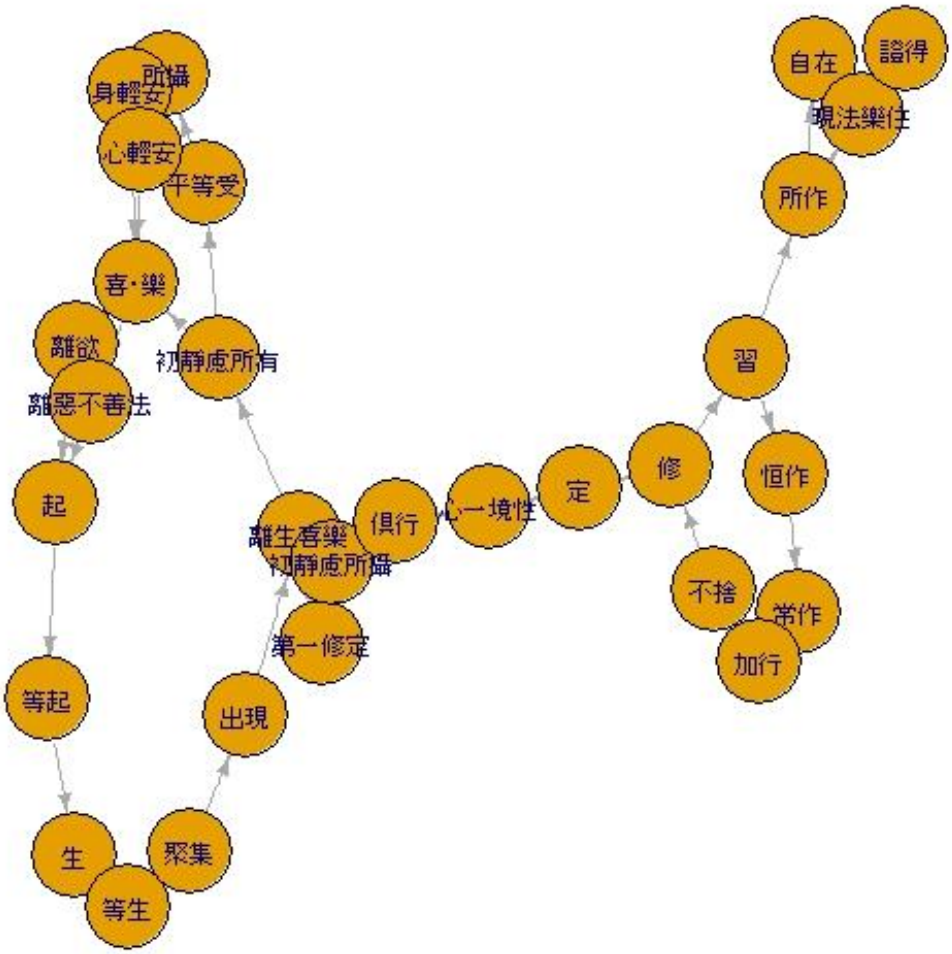


使用カテゴリー

【第一修定】【初静慮所攝】【離生喜樂】【俱行】【心一境性】【定】【修】【習】【恒作】【常作】【加行】【不捨】【所作】【自在】【現法樂住】【證得】

[5] T. 1537, 490a7-10

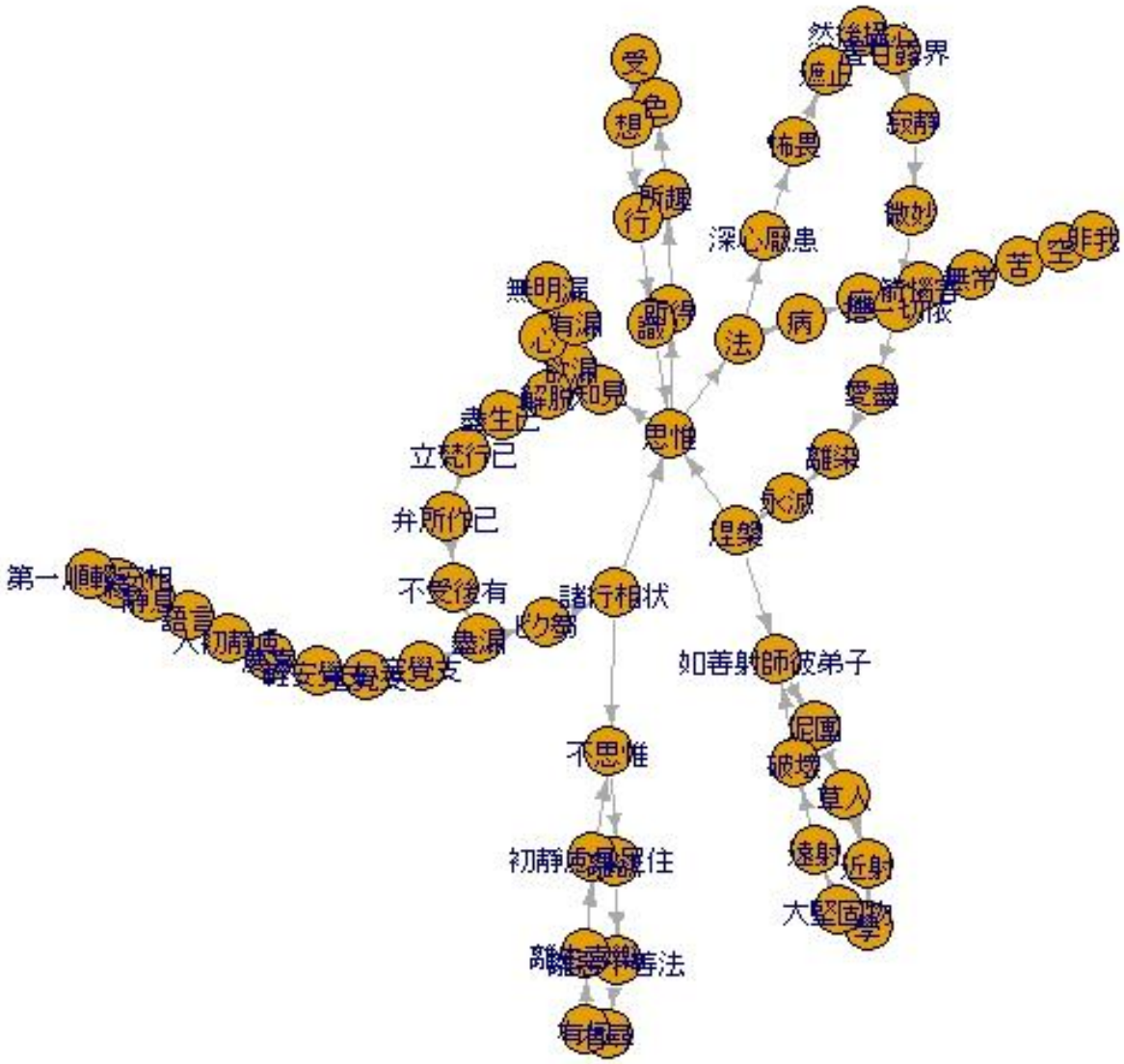
図【26】 初静慮　修定品（1+2） 論理概念



使用カテゴリー

【第一修定】【離生喜樂】【初靜慮所有】【喜・樂】【平等受】【所攝】【身輕安】【心輕安】【離欲】【離惡不善法】【起】【等起】【生】【等生】【聚集】【出現】【初靜慮所攝】【俱行】【心一境性】【定】【修】【習】【恒作】【常作】【加行】【不捨】【所作】【自在】【現法樂住】【證得】

図【27】 初静慮　覺支品　論理概念



使用カテゴリー

【七覺支】【輕安覺支】【慶喜】【入初静慮】【語言】【静息】【縁】【第一順輕安相】【定覺支】【盡漏】【苾芻】【諸行相状】【不思惟】【離欲】【離惡不善法】【有尋】【有伺】【離生喜樂】【初静慮具足住】【思惟】【所得】【所趣】【色】【受】【想】【行】【識】【法】【病】【癰】【箭惱害】【無常】【苦】【空】【非我】【深心厭患】【怖畏】【遮止】【然後攝心】【置甘露界】【寂静】【微妙】【捨一切依】【愛盡】【離染】【永滅】【涅槃】【如善射師彼弟子】【泥團】【草人】【近射】【學】【大堅固物】【遠射】【破壊】【知見】【欲漏】【心】【解脱】【有漏】【無明漏】【盡生已】【立梵行已】【弁所作已】【不受後有】

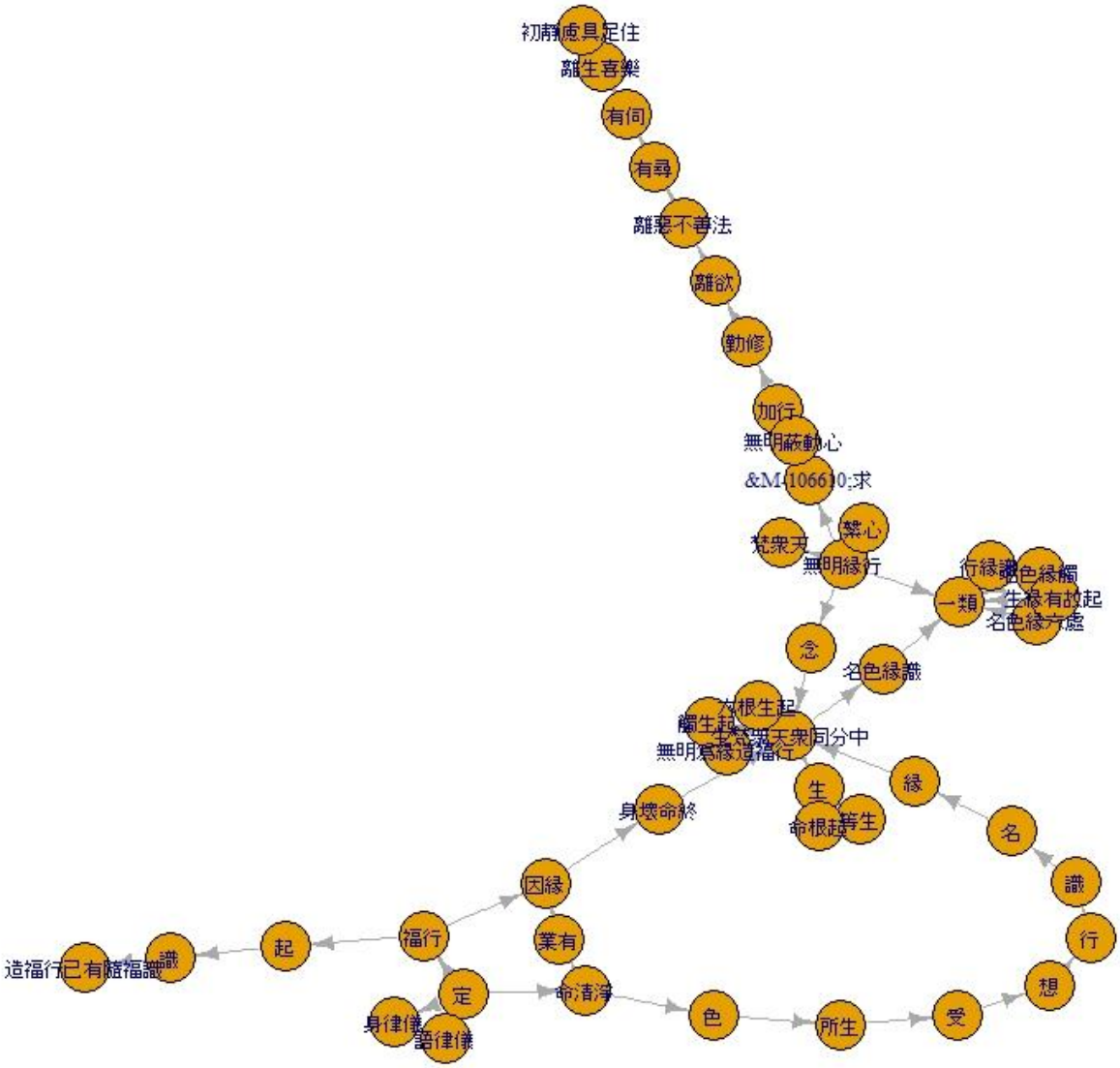
Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 5. 覺支品

図【27】は、覺支品第十五における初静慮言及の段の論理概念を表わすネットワーク図である。覺支品では、軽安覺支の論証と定覺支の論証において初静慮が言及される。図が込み入って解りづらいが、軽安覺支の論証の最初の段が左に伸びる腕に【七覺支】【輕安覺支】【慶喜】【入初静慮】【語言】【静息】【縁】【第一順輕安相】のカテゴリーが並ぶ。そして定覺支を起点として、【盡漏】【苾芻】【諸行相状】【不思惟】【離欲】【離惡不善法】【有尋】【有伺】【離生喜樂】【初静慮具足住】のカテゴリーが下方に伸び円環を結ぶ。さらに中央【思惟】を起点として【所得】【所趣】【色】【受】【想】【行】【識】のカテゴリーが上方に円環を結び、【思惟】から【法】に【病】【癰】【箭惱害】【無常】【苦】【空】【非我】と腕を右方向に伸ばす。また【法】からは、【深心厭患】【怖畏】【遮止】【然後攝心】【置甘露界】【寂静】【微妙】【捨一切依】【愛盡】【離染】【永滅】【涅槃】と【思惟】まで円環をなし、【涅槃】から【如善射師彼弟子】【泥團】【草人】【近射】【學】【大堅固物】【遠射】【破壞】までも円環をなす。一方、中央【思惟】からは【知見】【欲漏】【心】【解脱】【有漏】【無明漏】【盡生已】【立梵行已】【弁所作已】【不受後有】のカテゴリーが複雑に絡まり【盡漏】にいたる円環をなす。以上の論理構造が、覺支品における初静慮言及についての論理を示しているのである。

Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 6. 縁起品

図【28】は、縁起品第二十一における初静慮言及の段の論理概念を表わすネットワーク図である。縁起品において初静慮の言及は、「無明縁行」「行縁識」「名色縁識」「名色縁六處」「名色縁觸」「有縁生」の縁起論証においてなされる。論書特有の同じ言い回しによって微妙に内容を変える手法をとるため、同文は整理した。【無明縁行】を起点として、【悕求】、【無明蔽動心】をはさみ【加行】【勤修】【離欲】【離惡不善法】【有尋】【有伺】【離生喜樂】【初静慮具足住】と上方に腕を伸ばす。また【無明縁行】からは【一類】、【梵衆天】、【繫心】、【念】が各々伸びる。一方下方中央左の【定】からは、【身律儀】【語律儀】【命清淨】【福行】が、【福行】からは【起】【識】【造福行已有隨福識】が左方に伸び、【因縁】【身壞命終】が右方に伸びる。【命清淨】からは【業有】、【色】【所生】【受】【想】【行】【識】【名】【縁】【生梵衆天衆同分中】と円環をなし、【生】【等生】【命根起】【無明爲縁造福行】【六根生起】【觸生起】が複雑に絡まる。【生梵衆天衆同分中】から【名色縁識】【一類】【行縁識】【名色縁觸】【生縁有故起】【名色縁六處】と並ぶ。以上の論理構造が、縁起品における初静慮言及についての論理を示しているのである。

図【28】初静慮　縁起品　論理概念



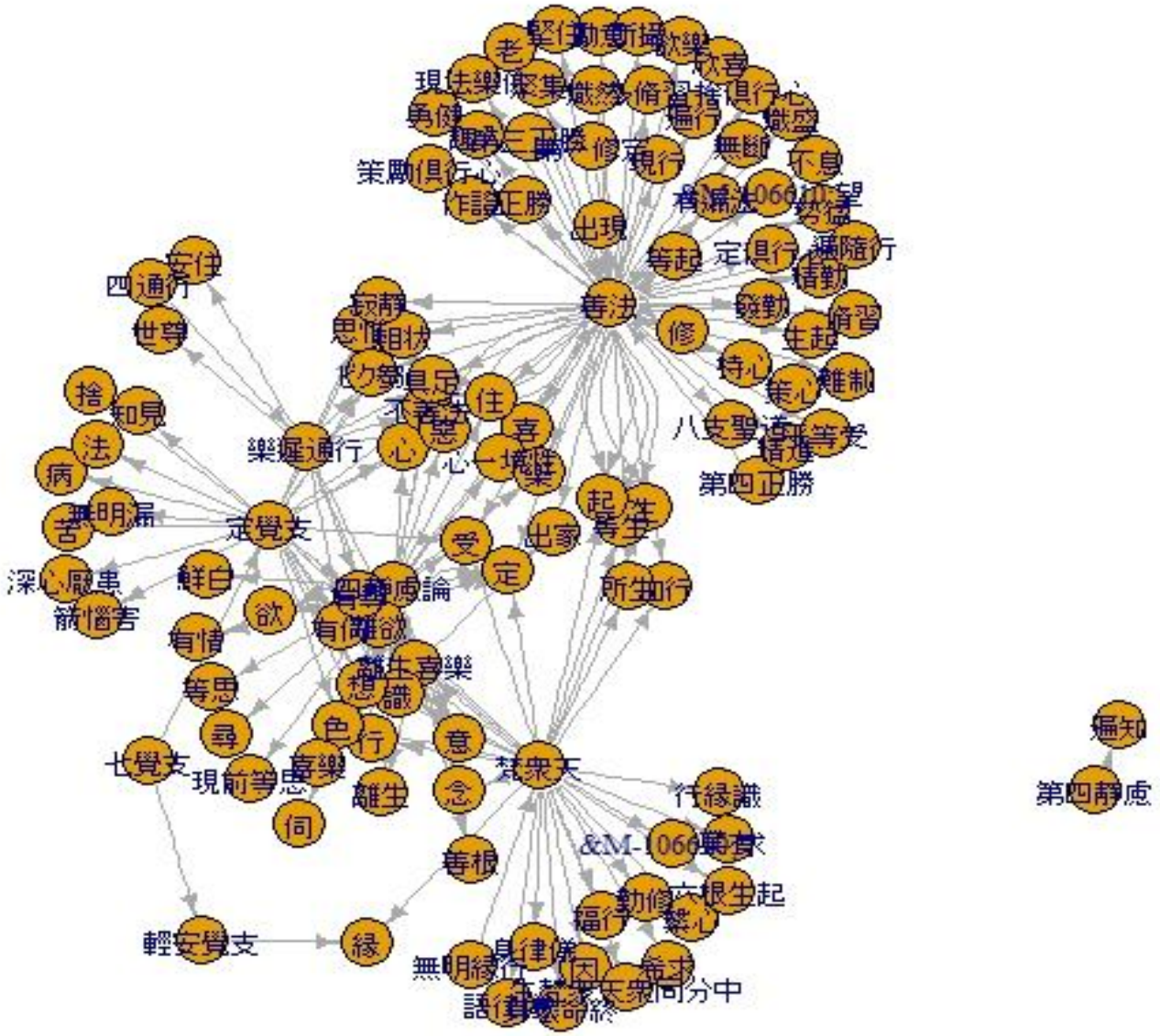
使用カテゴリー

【無明緣行】【一類】【梵衆天】【繫心】【&M-106610;求】【念】【生梵衆天衆同分中】【加行】【勤修】【離欲】【離惡不善法】【有尋】【有伺】【離生喜樂】【初静慮具足住】【定】【身律儀】【語律儀】【命清淨】【福行】【因緣】【身壞命終】【無明爲緣造福行】【無明蔽動心】【行緣識】【起】【識】【造福行已有隨福識】【名色緣識】【色】【所生】【受】【想】【行】【識】【名】【緣】【六根生起】【名色緣六處】【觸生起】【名色緣觸】【業有】【生】【等生】【命根起】【生緣有故起】

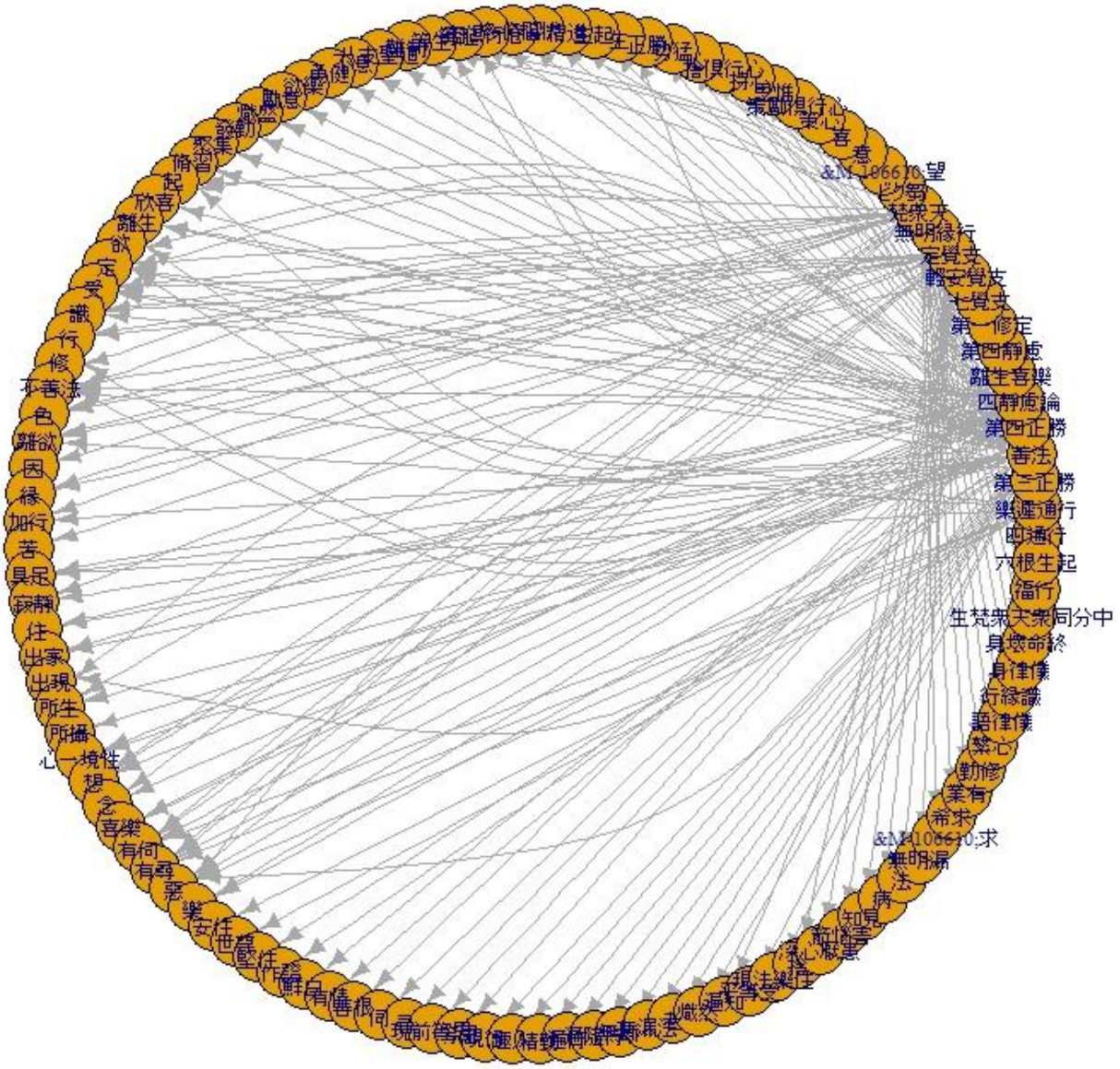
Chap. 2 - 1 - 1 - 5. ケーススタディ〔V〕 初静慮　全概念

以上のことから、『法蘊足論』 初静慮　概念に関する全概念図を図【29】、図【30】に載せる。この2枚の図表が、『法蘊足論』 初静慮　概念に関する論理構造を、テキストに基づいたテキストに記述されたままの過不足の無い形態として表現するものである。

図【29】 初静慮　全概念図



図【30】 初静慮　全概念図　circle 図


望
無明緣行
定覺支
輕安覺支
七覺支
第一修定
第四靜慮
離生喜樂
四靜慮論
第四正勝
善法
第三正勝
樂遲通行
四通行
六根生起
福行
生梵衆天衆同分中
身壞命終
身律儀
行緣識
語律儀
禁心
勤修
業有
希求
&M#10661;求
無明漏
法
病
知見
前世
慧
我心
現法樂住
遍知
現前
現
現在
精勤
遍
無漏
無
漏
法
善
根
同
現前
曾
現
慧

Chap. 2 - 1 - 2. 小　結

以上、上記のケーススタディ〔I〕～〔V〕で示したネットワーク図そのものが、『法蘊足論』の論理構造を表わしている図表となる。ケーススタディ〔I〕の 12 枚のネットワーク図が表わすように、同一の概念に対する解釈の違いが手に取るように理解できるだろう。また、その解釈の違いを際立たせるためにケーススタディ〔II〕で作成した複数概念のネットワーク図は、ケーススタディ〔III〕の全概念ネットワーク図とともに、『法蘊足論』における「愛染」概念のおおよその形が理解できる。

一方ケーススタディ〔IV〕で試みた論理概念ネットワーク図は、『法蘊足論』の「初静慮」概念における論理展開の構造様式を浮き立たせるものである。ケーススタディ〔V〕の全概念ネットワーク図とともに、『法蘊足論』における「初静慮」概念の全貌をみることができるであろう。

これらの図式は、『法蘊足論』というテキストに記述されている語句のすべての関連カテゴリーを網羅することを意図したものであり、『法蘊足論』記述の概念の範囲とその限界を明らかにするためにコンピュータによる解析を試みたものである。したがって、概念選択とカテゴリー選択には、大きな複数概念を想定した場合、選択者のゆらぎが若干みられる可能性がなしとは言い切れないが、ひとつの「ものさし」としての機能を果たすであろうことはいうまでもない。

Chapter 3.　『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』における多変量構造解析

Chapter 3. 『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』における多変量構造解析

Chap. 3 - 1. データの構造とテキストマイニング

Chap. 3 - 1 - 1. 語句の切り出しとコンテキストデータベースの構築

Chap. 3 - 1 - 1 - 1. 『阿毘達磨識身足論』

Chap. 1 - 1 - 2 - 2. において、『法蘊足論』の語句の切り出しについては、アビダルマ用辞書作成のため目視の手作業で行った。『法蘊足論』のテキストマイニングの結果、6,488 項目の語句が切り出された[1]。『識身足論』総文字数 118,721 文字のテキストデータに対して、この『法蘊足論』から作成された 6,488 項目の語句を辞書として、コンピュータで語句の切り出しを行った。切り出しのできなかった語句、つまり『識身足論』オリジナルの語句は、プログラムにおいて別に抽出できるようにして、その語句をあらためて辞書に追加する作業を繰り返しながら語句の切り出しを行った。その結果を表[1]に載せる。

表[1] 1 Word Count Data『阿毘達磨識身足論』

1	阿毘達磨識身足論卷第一	31	飲
2	提婆設摩阿羅漢造	32	於
3	三藏法師玄奘奉詔譯	33	境
4	初歸禮讃頌	34	巨溟
5	稽首	35	能
6	大覺	36	善
7	覺中	37	決
8	王	38	故
9	覺王	39	我
10	所供	40	至誠
11	三界	41	今
12	日	42	頂禮
13	解脱	43	朗
14	妙法	44	日
15	智	45	不
16	所歸	46	擧

[1] 詳細は、本論 資料編 Keyword Data『阿毘達磨法蘊足論』pp.305-370 参照。

17	智者	47	照
18	所依	48	人間
19	諸	49	稠林
20	聖衆	50	昏翳
21	阿毘達磨	51	孰
22	海	52	能
23	難	53	遣
24	渡	54	若
25	佛	55	無
26	口	56	阿毘達磨
27	池	57	論
28	流	58	智
29	千	59	所知
30	聖	60	冥

この表[1]の結果から重複をまとめて頻度順に並べたものが、表[2]である。

表[2]『識身足論』切り出しデータ　頻度順

資料編　同一語チェック 論書別『阿毘達磨識身足論』頻度順　参照

No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count
62	若	2650	390	所斷	874	390	所斷	874
275	心	2616	392	亦	867	392	亦	867
136	縁	1863	7696	成就	856	7696	成就	856
191	謂	1641	16147	已斷	850	16147	已斷	850
4036	或	1451	97	是	845	97	是	845
611	非	1410	15825	未斷	825	15825	未斷	825
3896	了別	1388	43	能	763	43	能	763
171	有	1356	186	貪	747	186	貪	747
22	所	1127	17345	無覆無記	729	17345	無覆無記	729
32	諸	1090	131	爲	717	131	爲	717
19764	色界繫	1079	174	彼	712	174	彼	712
19753	欲界繫	1048	815	及	691	815	及	691
19755	善心	995	225	耶	677	225	耶	677
19771	無色界繫	955	386	隨眠	676	386	隨眠	676
4019	者	929	31	智	673	31	智	673
137	因	927	212	當	660	212	當	660
178	言	916	213	已	596	213	已	596
17344	有覆無記	902	49	於	590	49	於	590
51	不	901	20829	色界	483	20829	色界	483
7694	不成就	893	4555	得	481	4555	得	481
119	此	877	9126	未	450	9126	未	450
62	若	2650	132	類	441	132	類	441

Chap. 3 - 1 - 1 - 2.

『阿毘達磨品類足論』『阿毘達磨界身足論』『阿毘達磨集異門足論』

同様に、『品類足論』総文字数 111,269 文字、『界身足論』総文字数 16,262 文字、『集異門足論』総文字数 121,796 文字のテキストデータに対して、1 Word Count Data を作成し、その結果から重複をまとめて頻度順に並べたものが、表[3] 表[4] 表[5]である。

表[3] 『品類足論』 切り出しデータ 頻度順

資料編 同一語チェック 論書別『阿毘達磨品類足論』 頻度順 参照

No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count
1525	非	3169	284	因	762	1377	有漏	457
29	謂	2808	279	爲	726	3708	分別	452
104	智	1517	33	一切	708	84	若	451
81	法	1411	4588	業	703	9633	遍行	431
715	或	1339	1445	知	676	1235	餘	422
24	云何	1307	245	處	674	5667	蘊	410
35	者	1305	1238	除	670	1537	八	381
79	相應	1288	17	心	664	5768	一處	363
418	攝	1269	15	有	649	512	無記	357
1291	緣	1256	265	隨	615	4453	所攝	348
252	識	1246	3709	應	541	4901	彼	348
2119	幾	1204	7227	轉	530	390	身	343
194	等	1164	518	善	516	108	受	333
92	隨眠	1087	136	不	508	1091	爾	328
9193	隨增	1067	1061	修	501	19	三	318
20	一	1040	18	色	499	18081	無間	311
1877	故	1034	1072	十	485	1563	六	311
36	及	1024	4129	界	481	10647	一切隨眠	309
519	是	1023	1281	無漏	481	5294	見滅	306
43	所	977	297	諸	476	67	此	303
1056	所斷	976	513	不善	471	430	於	292
1011	亦	881	118	見	461	4307	異熟	291

表[4] 『界身足論』 切り出しデータ 頻度順

資料編 同一語チェック 論書別『阿毘達磨界身足論』 頻度順 参照

No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count
22	相應	849	1748	餘	111	2949	即	64
89	不	538	782	如	109	2871	二處	64
363	謂	357	1757	蘊	109	116	忿	59

2880	何	277	68	想	108	1064	者	58
24	觸	238	75	一	103	3	身	57
2874	五蘊	211	824	爲	98	202	識	56
2870	十二處	210	356	當	89	25	六	56
15	十	182	411	隨	86	211	眼識	55
2869	十八界	181	94	信	85	33	有	55
177	對	174	71	思	84	372	是	53
432	性	173	4450	廣説	83	78	八	52
1867	除	154	2408	所應	82	240	眼觸所生受	51
810	此	150	62	云何	81	79	念	49
5	界	147	1826	爾	80	67	二	48
1250	色	144	793	所	80	336	愛	46
27	法	143	1820	亦	79	418	於	46
388	所攝	141	1241	及	78	182	樂根	46
2889	自	138	3050	以	77	82	慧	45
2883	無爲	138	2895	一處	73	142	色貪	45
2882	心不相應行	137	2919	問	69	1195	無	45
70	受	122	2934	一切法	65	369	名	44
17	三	111	2868	心心所法	64	65	欲	44

表[5]『集異門足論』切り出しデータ　頻度順

資料編　同一語チェック 論書別『阿毘達磨集異門足論』頻度順　参照

No.	token	count	No.	token	count	No.	token	count
826	名	1664	581	行	539	424	見	321
165	是	1485	460	能	531	1370	亦	317
414	者	1405	317	如	507	830	色	314
34	於	1285	110	由	504	463	善	314
661	若	1165	41	所	494	4187	思惟	307
49	有	1159	152	復	451	2451	一	305
582	謂	1118	77	言	443	50	未	305
190	此	1089	350	非	442	82	應	305
258	答	1034	348	法	435	3536	補特伽羅	295
567	云何	997	303	身	402	3109	類	292
242	爲	941	311	想	393	9224	損害	289
238	故	867	51	等	390	136	三	282
28	諸	788	2573	定	389	2571	入	274
443	不	784	4627	語	382	3384	遍	267
381	或	762	79	我	352	225	令	265
24	彼	761	15	處	352	291	便	260
398	無	698	29	住	343	169	事	259
9	説	687	168	而	338	4648	得	254
18	生	666	579	食	336	2717	智	253
888	心	636	72	相	327	75	修	251
745	如是	631	294	受	325	505	有情	250
118	已	622	31	時	324	2857	苦	248

という結果が得られた。

この結果の精度がもちろん問題になるものであるが、

『法蘊足論』総文字数	84,626 文字	6,488 語句
『識身足論』総文字数	118,721 文字	1,096 語句
『品類足論』総文字数	111,269 文字	1,265 語句
『界身足論』総文字数	16,262 文字	527 語句
『集異門足論』総文字数	121,796 文字	2,742 語句

ということからは、『法蘊足論』の手作業による語句抽出のゆらぎ、つまり、漢文や論書特有の省略形の語句に対して複数のヴァリエーションを考慮したことによって、『法蘊足論』の語句数が特出して多いのであるが、他論書にそれを辞書として適用した場合、かなり整理されていることが見て取れる。したがって、取りあえずのところ有意であると考えていいと思われる。特に『集異門足論』においては、『識身足論』『品類足論』『界身足論』がかなりの程度であるおよそ9割以上が切出せたのに対して、『法蘊足論』の語句では切り出せない語句がずいぶん残ってしまった。『集異門足論』における切り出しを、もう一度手作業で行い、その結果を比較する作業が必要であるかもしれない。それは今後の課題でもある。

Chap. 3 - 1 - 2. 同一語のチェックと TF-IDF（重み付け）

以上のデータから、各項目のコンテキストデーターベースを構築し、Chap. 1 - 1 - 2 - 3. にあるように、各論書の同一語を抽出してチェックし、各組合せでの重み付けを考える。資料編　同一語チェック Data 6論書～1論書　参照。また、2種類の TF-IDF を各々の語句について計算し、整理する。資料編　同一語チェック　論書別 Data 『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』 参照。

Chap. 3 - 2. ネットワーク分析と初期アビダルマ論書の論理構造

Chap. 3 - 2 - 1. ネットワーク分析結果

Chap. 3 - 2 - 1 - 1. 論理構造導出の実際

Chapter 2. で『法蘊足論』を取り扱ったように、論理構造を具体的に視覚化するために、同様にネットワーク分析を試みる。具体的には Chap. 3 - 1 - 2. で重み付けを行った概念のコンテキストデータベースをもとに、ネットワーク図を図示して概念の比較を行うものである。

Chap. 3 - 2 - 1 - 2. ケーススタディ〔I〕『品類足論』初静慮

初静慮概念を『品類足論』にみてみると

頻度： 11、 TF-IDF1: 5.61908192、 TF-IDF2: 1.735732003

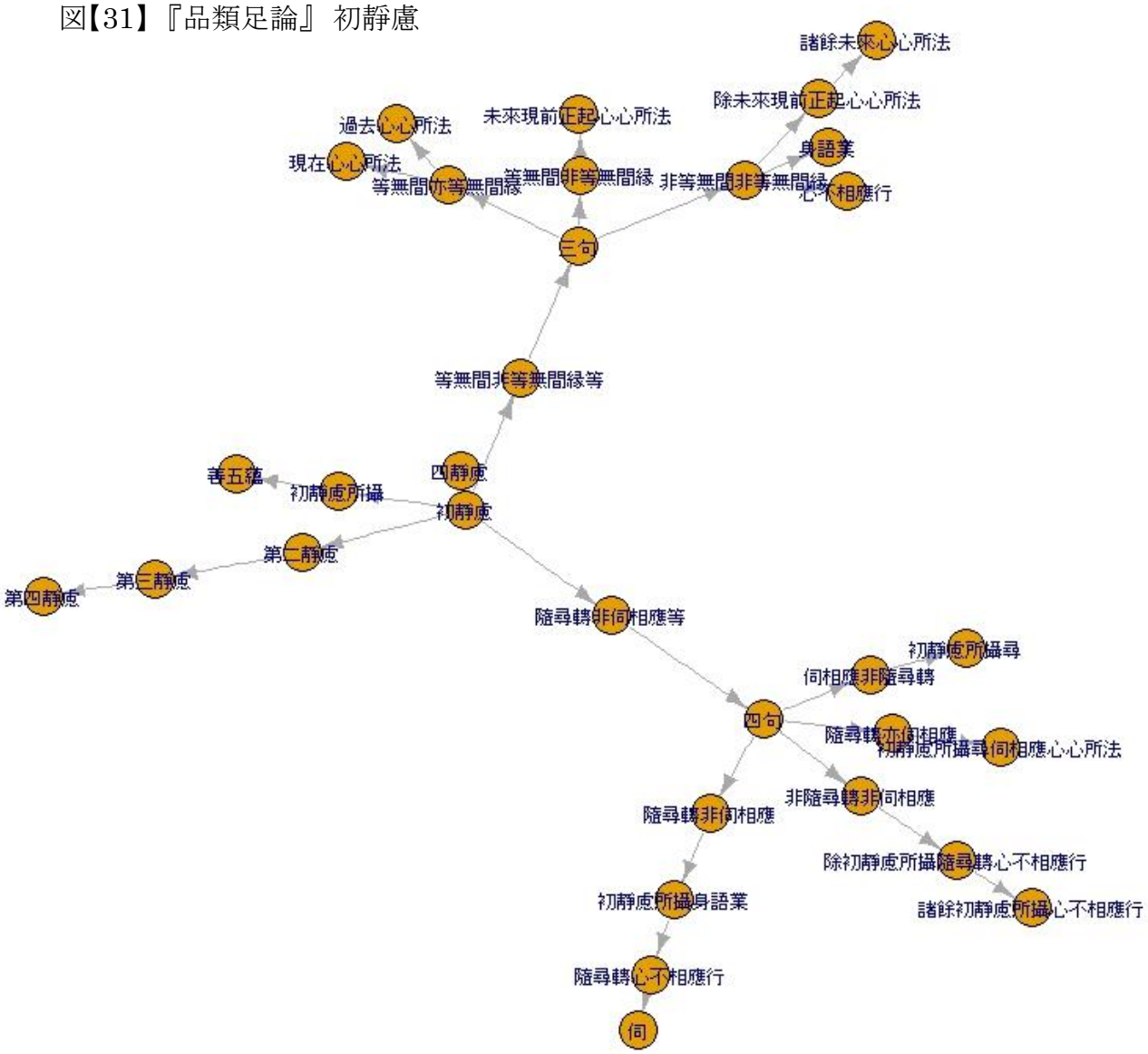
1,265 例中、頻度において 474 番、TF-IDF1 において 226 番、TF-IDF2 において 165 番目にあたる。初静慮コンテキストデータベースからのデータは[表 6]のとおりである。

[表 6] 初静慮コンテキストデータ

1	19002	初静慮	712b02	巻第五	辯攝等品第六之一	四法八十四種	四静慮
2	24893	初静慮	718b18	巻第七	辯攝等品第六之三	諸四法の解説	初静慮
3	24894	初静慮	718b18	巻第七	辯攝等品第六之三	諸四法の解説	
4	51980	初静慮	746a27	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	
5	52667	初静慮	747a02	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	初静慮
6	52683	初静慮	747a03	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	
7	52709	初静慮	747a05	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	
8	52721	初静慮	747a05	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	
9	52737	初静慮	747a07	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	
10	52738	初静慮	747a08	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	
11	53089	初静慮	747b06	巻第十三	辯千問品第七之四	四静慮の五十問	初静慮
1	初静慮	第二静慮	第三静慮	第四静慮			
2	初静慮所攝	善五蘊					
3							
4							
5	隨尋轉非伺相應等	四句	隨尋轉非伺相應	初静慮所攝身語業	隨尋轉心不相應行	伺	伺相應非隨尋轉
6							
7							
8							
9							
10							
11	等無間非等無間縁等	三句	等無間非等無間縁	未來現前正起心心所法	等無間亦等無間縁	過去心心所法	現在心心所法
5	初静慮所攝尋	隨尋轉亦伺相應	初静慮所攝尋伺相應心心所法	非隨尋轉非伺相應	除初静慮所攝隨尋轉心不相應行	諸餘初静慮所攝心不相應行	初静慮所攝尋
11	非等無間非等無間縁	除未來現前正起心心所法	諸餘未來心心所法	身語業	心不相應行		

この[表 6]データをもとに、ネットワーク図を描いたのが図【31】である。

図【31】『品類足論』 初靜慮



使用カテゴリー

【四靜慮】【初靜慮】【第二靜慮】【第三靜慮】【第四靜慮】【初靜慮所攝】【善五蘊】【隨尋轉非伺相應等】【四句】【隨尋轉非伺相應】【初靜慮所攝身語業】【隨尋轉心不相應行】【伺】【伺相應非隨尋轉】【初靜慮所攝尋】【隨尋轉亦伺相應】【初靜慮所攝尋伺相應心心所法】【非隨尋轉非伺相應】【除初靜慮所攝隨尋轉心不相應行】【諸餘初靜慮所攝心不相應行】【等無間非等無間緣等】【三句】【等無間非等無間緣】【未來現前正起心心所法】【等無間亦等無間緣】【過去心心所法】【現在心心所法】【非等無間非等無間緣】【除未來現前正起心心所法】【諸餘未來心心所法】【身語業】【心不相應行】

『品類足論』の場合、初静慮の語句が言及されているテキストは以上の 11 か所のみである。巻第五、巻第七の辯攝等品第六においては、初静慮は、ただ四静慮のひとつであり、初静慮所攝の善の五蘊であることが説かれるだけである。図【31】では、中央左側にそれが表わされている。そして巻十三辯千問品において、「隨尋轉非伺相應」が初静慮について説かれる段において、四句分別がなされ、「第一句」に【隨尋轉非伺相應】【初静慮所攝身語業】【隨尋轉心不相應行】【伺】が、「第二句」に【伺相應非隨尋轉】【初静慮所攝尋】が、「第三句」に【隨尋轉亦伺相應】【初静慮所攝尋伺相應心心所法】が、「第四句」に【非隨尋轉非伺相應】【除初静慮所攝隨尋轉心不相應行】【諸餘初静慮所攝心不相應行】が説かれる。図【31】では、右下方がそれである。一方、「等無間非等無間縁」の論説に対して三句がなされ、「第一句」に【等無間非等無間縁】【未來現前正起心心所法】が、「第二句」に【等無間亦等無間縁】【過去心心所法】【現在心心所法】が、「第三句」に【非等無間非等無間縁】【除未來現前正起心心所法】【諸餘未來心心所法】【身語業】【心不相應行】がそれぞれ説かれる。図【31】では、上方がそれである。

この辯千問品には、初静慮の語句に関しては以上のものしか記述されていないが、四静慮論において五十項目の諸門分別を行っている。したがって、初静慮の語句は見出されないが、論旨内容は、初静慮についても説かれているものである。内容を表【7】に載せる。

表[7]　四静慮の五十問

1	有色等	静慮所攝身語業有色	餘皆無色				
2	有見等	一切無見					
3	有對等	一切無對					
4	有漏等者	有漏	静慮所攝有漏五蘊	無漏	静慮所攝無漏五蘊		
5	有爲等	一切有爲					
6	有異熟等	有漏	有異熟	無漏	無異熟		
7	縁生等者	一切縁生	因生	世攝			
8	幾色攝等者	静慮所攝身語業	色攝	餘皆名攝			
9	内處攝等	諸静慮所攝心意識	内處攝	餘皆外處攝			
10	智遍知所遍知等	一切智遍知所遍知					
11	斷遍知所遍知等	諸静慮	有漏	斷遍知所遍知	無漏	非斷遍知所遍知	
12	應斷等	諸静慮	有漏	應斷	無漏	不應斷	
13	應修等	一切應修					
14	染汚等	一切不染汚					
15	果非有果等	一切果亦有果					
16	有執受等	一切無執受					
17	大種所造等	諸静慮所攝身語業	大種所造	餘皆非大種所造			
18	有上等	一切有上					
19	是有等	諸静慮	有漏	是有	無漏	非有	
20	因相應等	諸静慮所攝身語業	心不相應行	因不相應	餘皆因相應		

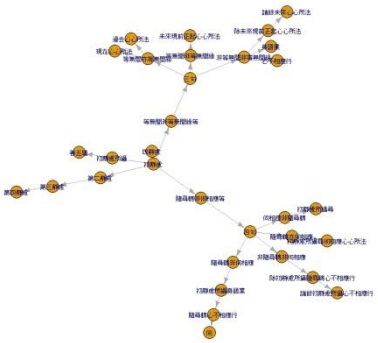
21	六善處相攝	五善處少分攝四靜慮	四靜慮亦攝五善處少分				
22	五不善處相攝	互不相攝					
23	七無記處相攝	互不相攝					
24	三漏處相攝	互不相攝					
25	五有漏處相攝	四句	有漏處非靜慮	靜慮所不攝有漏五蘊	靜慮非有漏處	無漏四靜慮	有漏處亦靜慮
26	八無漏處相攝	四句	無漏處非靜慮	靜慮所不攝無漏五蘊	無爲法	靜慮非無漏處	有漏四靜慮
27	過去等	一切	過去	未來	現在		
28	善等	一切善					
29	欲界繫等	諸靜慮	有漏	色界繫	無漏	不繫	
30	學等	諸靜慮	學	無學	非學非無學	云何學	靜慮所攝學五蘊
31	見所斷等	諸靜慮	有漏	修所斷	無漏	非所斷	
32	非心等	靜慮所攝身語業	心不相應行	非心	非心所	非心相應	受蘊
33	隨心轉非受相應等	四句	隨心轉非受相應	靜慮所攝身語業	隨心轉心不相應行并受	受相應非隨心轉	靜慮所攝心意識
34	隨心轉非想行相應等	除其自性	如受應知				
35	隨尋轉非伺相應等	三非隨尋轉非伺相應	一應分別	初靜慮	四句	隨尋轉非伺相應	初靜慮所攝身語業
36	見非見處等	四句	見非見處	靜慮所攝盡無生智所不攝無漏慧	見處非見	見所不攝有漏四靜慮	見亦見處
37	有身見爲因非有身見因等	一切非有身見爲因非有身見因					
38	業非業異熟等	諸靜慮所攝身語業及思	業非業異熟	餘皆非業非業異熟			
39	業非隨業轉等	四句	業非隨業轉	靜慮所攝思	隨業轉非業	靜慮所攝受想識蘊	思所不攝隨業轉行蘊
40	所造色非有見色等	諸靜慮所攝身語業	所造色非有見色	餘皆非所造色非有見色			
41	所造色非有對色等	諸靜慮所攝身語業	所造色非有對色	餘皆非所造色非有對色			
42	難見故甚深等	一切難見故甚深甚深故難見					
43	善非善爲因等	一切善亦善爲因					
44	不善非不善爲因等	一切非不善非不善爲因					
45	無記非無記爲因等	一切非無記非無記爲因					
46	幾因緣非有因等	一切是因緣亦有因					
47	等無間非等無間緣等	初靜慮	三句	等無間非等無間緣	未來現前正起心心所法	等無間亦等無間緣	過去現在心心所法
48	所緣緣非有所緣等	諸靜慮所攝身語業心不相應行	所緣緣非有所緣	餘皆所緣緣亦有所緣			
49	增上緣非有增上等	一切是增上緣亦有增上					
50	暴流非順暴流等	諸靜慮	有漏	順暴流非暴流	無漏	非暴流非順暴流	
26	有漏四靜慮	非有漏處非靜慮	靜慮所不攝無漏五蘊	無爲法			
27	無漏處亦靜慮	無漏四靜慮	非無漏處非靜慮	靜慮所不攝有漏五蘊			
31	云何無學	靜慮所攝無學五蘊	云何非學非無學	靜慮所攝有漏五蘊			
32							
33	想蘊	相應行蘊	心所與心相應	心意識唯是心			

34	隨心轉亦受相應	靜慮所攝想蘊	相應行蘊	非隨心轉非受相應	除靜慮所攝隨心轉心不相應行	諸餘靜慮所攝心不相應行	
36	及隨尋轉心不相應行并伺	伺相應非隨尋轉	初靜慮所攝尋	隨尋轉亦伺相應	初靜慮所攝尋伺相應心心所法	非隨尋轉非伺相應	除初靜慮所攝隨尋轉心不相應行
37	靜慮所攝有漏慧	非見非見處	見所不攝無漏四靜慮				
40	業亦隨業轉	靜慮所攝身語業	非業非隨業轉	謂除靜慮所攝隨業轉心不相應行	諸餘靜慮所攝心不相應行		
48	非等無間非等無間緣	除未來現前正起心心所法	諸餘未來心心所法	及身語業心不相應行	第二第三靜慮亦爾	第四靜慮	三句
36	諸餘初靜慮所攝心不相應行						
48	等無間非等無間緣	未來現前正起心心所法	及已生正起無想定	等無間亦等無間緣	過去現在心心所法	非等無間非等無間緣	除未來現前正起心心所法
48	諸餘未來心心所法	及除等無間心不相應行	諸餘心不相應行	身語業			

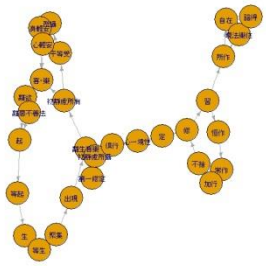
図【31】にある「隨尋轉非伺相應」と「等無間非等無間緣」の論説は、表[7]に含まれる。したがって、これら図【31】のネットワーク図と表[7]が、『品類足論』の初靜慮の論理構造を表わしていることになるといえよう。

『法蘊足論』における論理概念、Chap. 2 - 1 - 1 - 4. の結果と比較してみると、『品類足論』の論証形態とかなり異なっているのが見て取れる。以下図を再掲する。

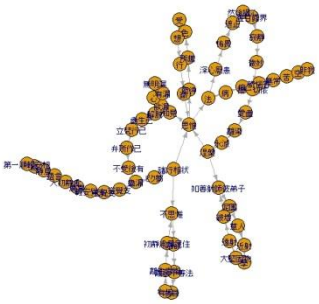
図【31】『品類足論』 初靜慮



図【26】『法蘊論』 初靜慮 修定品



図【27】『法蘊論』 初靜慮 覺支品

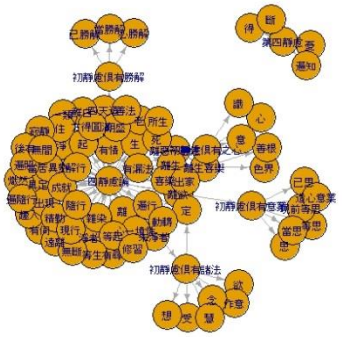


図【28】『法蘊論』 初靜慮 縁起品

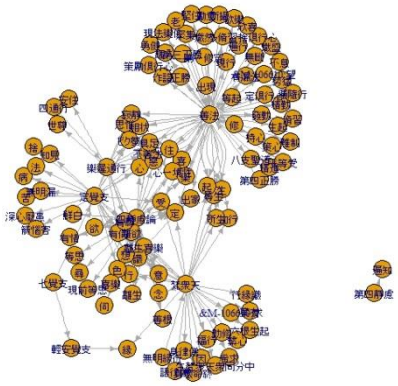
『品類足論』図【31】は、『法蘊足論』図【26】、図【27】、図【28】の論理概念図と論理形態、個別のカテゴリー内容のそれぞれが大きく異なる。これは『品類足論』の論証形式が表【7】の四静慮全体に対する「五十問」の諸門分別として、大きく整理されたためであると考えられるが、結果として異質のものであることは変わりがない。

同様に、

図【22】『法蘊論』 初静慮　静慮品



図【29】『法蘊論』 初静慮　全概念図



図【22】の静慮品における四静慮論の構成カテゴリーや、図【29】の初静慮全概念図における構成カテゴリーと『品類足論』図【31】、表【7】の構成カテゴリーをみても、この『品類足論』『法蘊足論』という二つの論書間における論理構造の違いが見て取れるであろう。

Chap. 3 - 2 - 1 - 3. ケーススタディ〔II〕『集異門足論』 愛染

本来、『法蘊足論』の分析に従って「初静慮」概念より先に考察するべきであろうが、『集異門足論』のデータ切り出しにおける若干の作業不足[2] があるため順番を入れ替えた。

愛染概念を『集異門足論』にみてみると

頻度： 14、 TF-IDF1: 12.828070138、 TF-IDF2: 3.34434564

---

[2] Chap. 3 - 1 - 1 - 2. 参照。おそらく今回の考察に対しての影響は、確率的にはかなり低いものであると考えられるので問題はないと思うが、手作業での確認がされていないので参考にとどめておく。

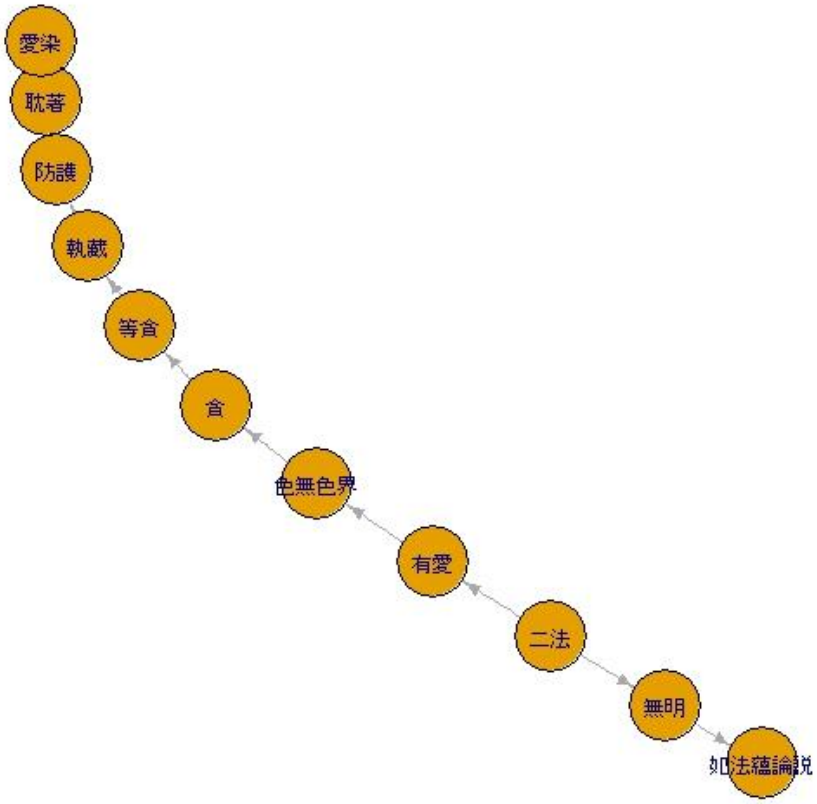
2,742 例中、頻度において 814 番、TF-IDF1 において 352 番、TF-IDF2 において 161 番目にあたる。初静慮コンテキストデータベースからのデータは[表 8]のとおりである。

[表 8] 愛染コンテキストデータ

1	愛染	369c11	巻第一	縁起品第一	二法之二	無明と有愛	
2	愛染	382b22	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	欲愛
3	愛染	382b24	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	欲愛
4	愛染	382b27	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	欲愛
5	愛染	382b28	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	色愛
6	愛染	382c01	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	色愛
7	愛染	382c04	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	色愛
8	愛染	382c05	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	無色愛
9	愛染	382c07	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	無色愛
10	愛染	382c12	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第一)	無色愛
11	愛染	382c19	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第二)	欲愛
12	愛染	382c21	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第二)	有愛
13	愛染	382c23	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第二)	無有愛
14	愛染	382c27	巻第四	三法品	三法之三之一	三愛(第二)	無有愛
1		二法	無明	有愛	如法蘊論説	色無色界	貪
2	第一説	諸欲中	貪	等貪	執藏	防護	耽著
3	第二説	欲界繫	十八界	十二處	五蘊	諸法中	貪
4	第三説	下從無間大地獄	上至他化自在天	所攝	色	受	想
5	第一説	諸色中	貪	等貪	執藏	防護	耽著
6	第二説	色界繫	十四界	十處	五蘊	諸法中	貪
7	第三説	下從梵衆天	上至色究竟天	所攝	色	受	想
8	第一説	無色中	貪	等貪	執藏	防護	耽著
9	第二説	無色界繫	三界	二處	四蘊	諸法中	貪
10	第三説	欲色界	決定	處所上下差別不相雜亂	無色界中無如是事	可依定依生勝劣説有下上	下從空無邊處天
11		諸欲中	貪	等貪	執藏	防護	耽著
12		色無色界	貪	等貪	執藏	防護	耽著
13		欣無有者	無有中	貪	等貪	執藏	防護
14		一類	怖畏所逼	怖畏所惱	憂苦所逼	憂苦所惱	苦受觸
1	等貪	執藏	防護	耽著	愛染		
2	愛染						
3	等貪	執藏	防護	耽著	愛染		
4	行	識	諸法中	貪	等貪	執藏	防護
5	愛染						
6	等貪	執藏	防護	耽著	愛染		
7	行	識	諸法中	貪	等貪	執藏	防護
8	愛染						
9	等貪	執藏	防護	耽著	愛染		
10	上至非想非非想處天	所攝	受	想	行	識	諸法中
11	愛染						
12	愛染						
13	耽著	愛染					
14	我身死後斷壞無有	永絶衆病豈不樂哉	欣無有	無有中	貪	等貪	執藏
4	耽著	愛染					
7	耽著	愛染					
10	貪	等貪	執藏	防護	耽著	愛染	
14	防護	耽著	愛染				

この[表 8]データをもとに、ネットワーク図を描いたのが図【32】、図【33】である。

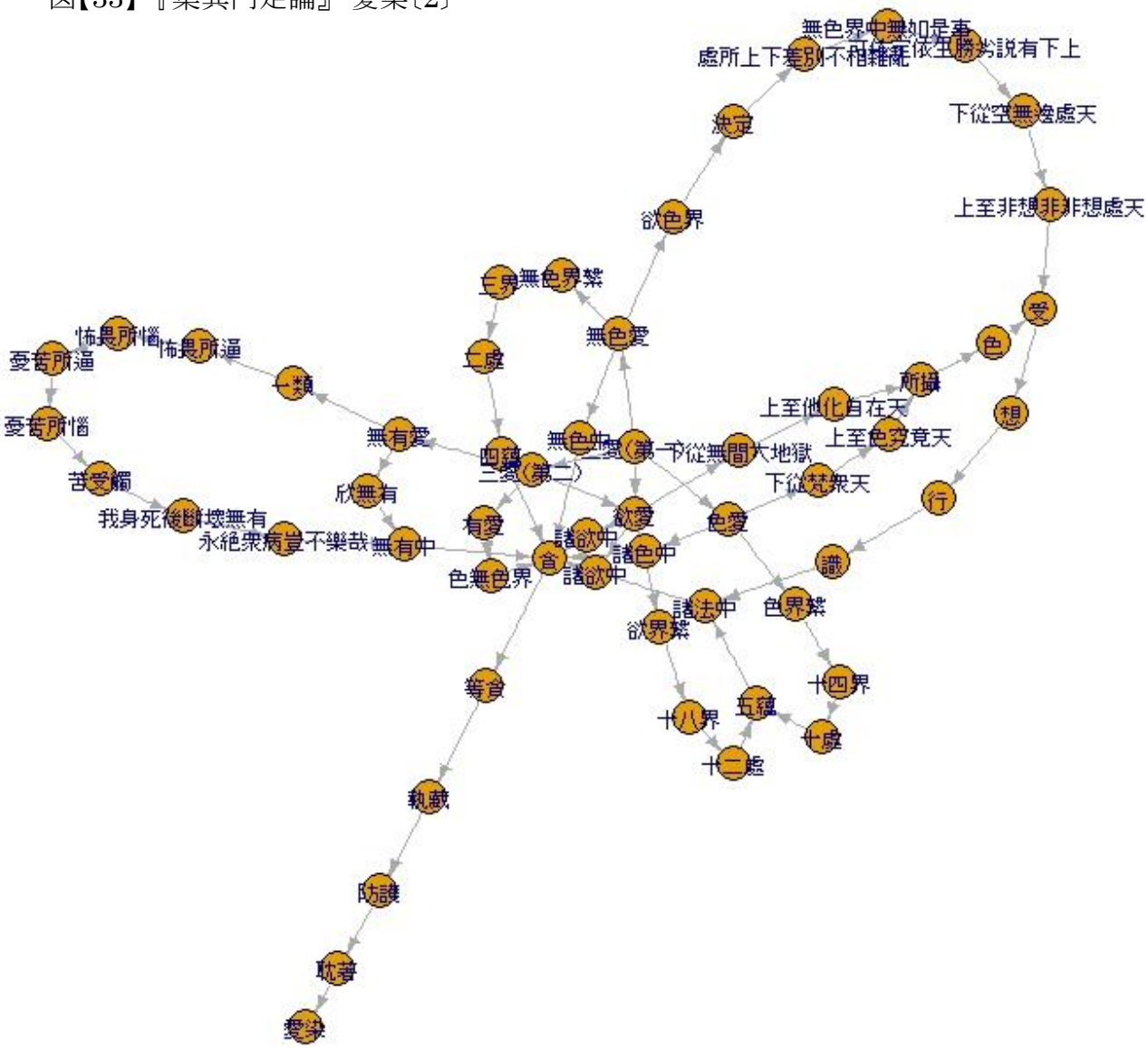
図【32】『集異門足論』 愛染〔1〕



使用カテゴリー

【二法】【無明】【有愛】【如法蘊論説】【色無色界】【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】

図【33】『集異門足論』愛染〔2〕



使用カテゴリー

【三愛（第一）】【三愛（第二）】【欲愛】【色愛】【無色愛】【有愛】【無有愛】【諸欲中】【欲界繫】【十八界】【十二處】【色界繫】【十四界】【十處】【下從梵衆天】【上至色究竟天】【無色界繫】【三界】【二處】【四蘊】【欲色界】【決定】【處所上下差別不相雜亂】【無色界中無如是事】【可依定依生勝劣説有下上】【下從空無邊處天】【上至非想非非想處天】【諸欲中】【色無色界】【一類】【怖畏所逼】【怖畏所惱】【憂苦所逼】【憂苦所惱】【苦受觸】【我身死後斷壞無有】【永絶衆病豈不樂哉】【欣無有】【五蘊】【下從無間大地獄】【上至他化自在天】【所攝】【無色中】【無有中】【諸色中】【色】【受】【想】【行】【識】【諸法中】【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】

『集異門足論』の場合、愛染の語句が言及されているテキストは以上の 14 か所のみである。

巻第一縁起品において、無明と有愛について一行のみ説かれる。他は巻第四三法品で、三愛について二説をあげ、第一説では「欲愛」「色愛」「無色愛」の三愛、第二説では「欲愛」「有愛」「無有愛」の三愛をそれぞれ説く。

図【32】は、「無明」と「有愛」の【二法】を起点として、「無明」は「法蘊論に説くが如し」と説明される。この「法蘊論に説くが如し」の語句は、『集異門足論』の中に何度かでる語句で、これがために、古くから『集異門足論』と『法蘊足論』の新旧の是非が論ぜられてきたところである[3]。一方【有愛】概念は、【色無色界】【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】といったカテゴリーがつながる。特に、【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】の6カテゴリーは、以下の三法品でも、『法蘊足論』の愛染概念でも同様に基底概念として扱われているのがわかる。

図【33】は巻第四三法品のものである。総ての議論が【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】の6カテゴリーに収束していることが見て取れるであろう。【三愛（第一）】【三愛（第二）】の2カテゴリーが起点となる。【三愛（第一）】からは、（1）【欲愛】（2）【色愛】（3）【無色愛】に分離する。（1）【欲愛】からは（ⅰ）【諸欲中】を経て先の【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】の6カテゴリーにつながり、（ⅱ）【欲界繫】【十八界】【十二處】【諸法中】から6カテゴリーに、（ⅲ）【下從梵衆天】【上至色究竟天】【所攝】【色】【受】【想】【行】【識】【諸法中】から6カテゴリーにつながる。（2）【色愛】は、（ⅰ）【諸色中】を経て6カテゴリーにつながり、（ⅱ）【十四界】【十處】【五蘊】【諸法中】から6カテゴリーに、（ⅲ）【下從無間大地獄】【上至他化自在天】【所攝】【色】【受】【想】【行】【識】【諸法中】から6カテゴリーにつながる。（3）【無色愛】は、（ⅰ）【無色中】を経て6カテゴリーにつながり、（ⅱ）【無色界繫】【三界】【二處】【四蘊】【諸法中】から6カテゴリーに、（ⅲ）【欲色界】【決定】【處所上下差別不相雜亂】【無色界中無如是事】【可依定依生勝劣説有下上】【下從空無邊處天】【上至非想非非想處天】【所攝】【色】【受】【想】【行】【識】【諸法中】から6カテゴリーにつながる。

【三愛（第二）】からは、（A）【欲愛】（B）【有愛】（C）【無有愛】に分離する。（A）【欲愛】からは【諸欲中】を経て6カテゴリーにつながり、（B）【有愛】からは【色無色界】を経て6カテゴリーにつながる。（C）【無有愛】においては二説あり、（1）【欣無有】【無有中】から6カテゴリーにつながり、（2）【一類】【怖畏所逼】【怖畏所惱】【憂苦所逼】【憂苦所惱】【苦受觸】【我身死後斷壞無有】【永絶衆病豈不樂哉】を経て【欣無有】【無有中】から6カテゴリーにつながる。

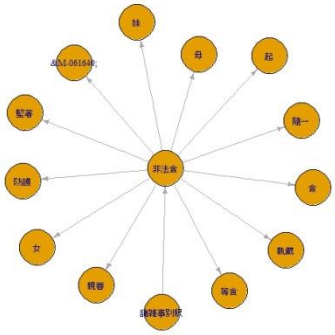
---

[3] 渡辺楳雄著「阿毘達磨法蘊足論解題」『国訳一切経　毘曇部三　阿毘達磨法蘊足論』, 大東出版, 1930, rep. 1994, pp.5-7、春日井真也著「玄奘三蔵のアビダルマ学の特相」『印度学仏教学研究』通号 2, 1953, pp.223-224、本稿 Intro. 3 参照

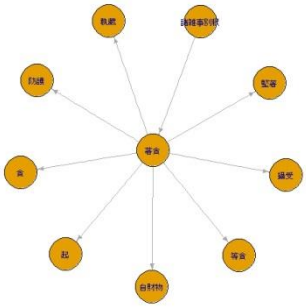
これをネットワーク図にしたのが図【33】である。

『集異門足論』に言及された「愛染」の概念は以上のものであるが、『法蘊足論』の愛染概念と比較してみると、(『法蘊足論』の図再掲)

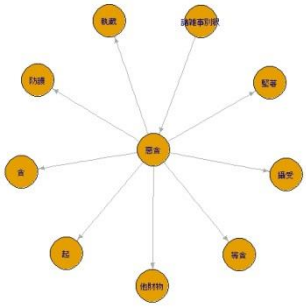
図【1】 非法貪



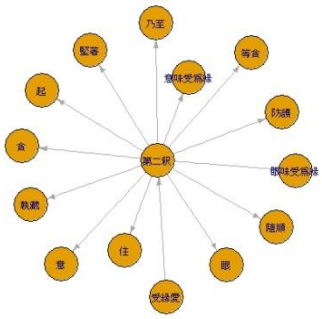
図【2】 著貪



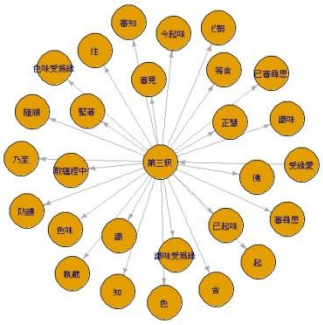
図【3】 悪貪



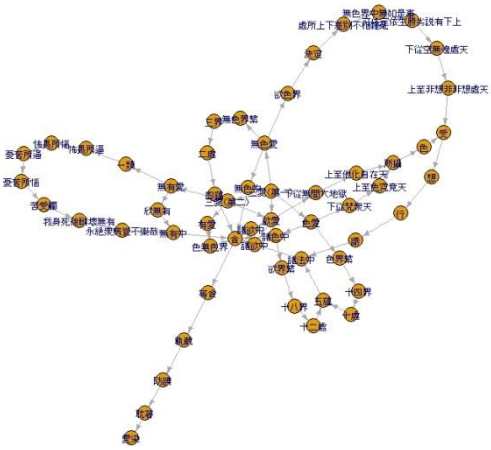
図【4】 第二釈



図【5】 第三釈 取蘊経 以下略 Chap.2 参照



図【33】『集異門足論』 愛染〔2〕 (再掲)



とあるよう、『法蘊足論』では【貪】【等貪】【執藏】【防護】【耽著】【愛染】の6カテゴリーが、図【11】の第九釈を除く図【1】～【10】、【12】のすべてにおいて基底をなしている。これは『集異門足論』の図【32】、【33】における6カテゴリーの腕の概念図と同じ論理構造を表わしているものである。

『識身足論』『品類足論』『界身足論』に「愛染」の語句はない。

Chap. 3‐2‐1‐4. ケーススタディ〔III〕『阿毘達磨倶舎論』

比較の参考として、中期アビダルマ論書でもっとも重要な『阿毘達磨倶舎論』をみてみる。

Chap. 3‐2‐1‐4‐1. 愛染

玄奘訳 『阿毘達磨倶舎論』において、「愛染」の語句は、以下の 1 か所、3 例しかみられない。

［資料 1］

謂遠嗅知生處香氣便生**愛染**往彼受生。隨業所應香有淨穢。若化生者染處故生。謂遠觀知當所生處。便生**愛染**往彼受生。隨業所應處有淨穢。豈於地獄亦生**愛染**。由心倒故起染無失。謂彼中有。或見自身冷雨寒風之所逼切。見熱地獄火焰熾然。情欣煖觸投身於彼。或見自身熱風盛火之所逼害。見寒地獄心欲清涼投身於彼。

『阿毘達磨倶舎論』 T. 1558, vol.29, pp.47a04-a12

［資料 1］にあるよう「愛染」の語句は、巻第九分別世品第三にある「中有」の議論の中で、「湿生、化生の有情が生を受けるために愛染を生じる、また地獄の化生にも愛染が生じるか」の論に出てくるだけである。この「愛染」の意味は、おそらく現代語に言う「エロス」「愛欲」に近いものであろうが、周知のとおり煩悩論や隨眠論は『倶舎論』では高度に整理され、『法蘊論』や『集異門論』にある「愛染」の概念は、もはや別概念に置き換えられていることが理解できる。

Chap. 3 - 2 - 1 - 4 - 2. 初靜慮

玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』において、「初靜慮」の語句は、以下の 32 例がみられる。初靜慮コンテキストデータベースからのデータは[表 9]のとおりである。

[表 9] 初靜慮コンテキストデータ『倶舎論』

1	8a16	巻第二	分別界品第一之二	有尋有伺門	意根法界意識界	意界	意識界
2	8a20	巻第二	分別界品第一之二	有尋有伺門	伺	伺	欲界
3	12c05	巻第二	分別界品第一之二	認識問題に関連しての根境識身四の地的規定	欲界に生じた時	初靜慮	眼見欲界色
4	12c12	巻第二	分別界品第一之二	認識問題に関連しての根境識身四の地的規定	初靜慮に生じた時	生初靜慮	以自地眼見自地色
5	20c19	巻第四	分別根品第二之二	色無色界の諸心所の俱生	初靜慮存在の心所	初靜慮中	心所法
6	21c08	巻第四	分別根品第二之二	尋伺		契經中説	於初靜慮
7	31b13	巻第六	分別根品第二之四	同類因	地の規定	於中一一	欲界地還與欲界爲同類因
8	33b04	巻第六	分別根品第二之四	異塾因、同一果	色界におけるもの	二蘊爲異熟因	共感一果
9	42a11	巻第八	分別世品第三之一	三界の往相	諸世界と神通	初靜慮	起通慧時
10	42c06	巻第八	分別世品第三之一	七識住	第一識住	契經中説	有色有情
11	43a20	巻第八	分別世品第三之一	七識住	第四識住	初靜慮中	由染汚想故
12	54a28	巻第十	分別世品第三之三	十八意近行	意近行の成就不成就	已獲得色界善心未離欲貪	成欲一切
13	54a28	巻第十	分別世品第三之三	十八意近行	意近行の成就不成就		
14	60c29	巻第十一	分別世品第三之四	天宮の量	第三説	有餘師言	初靜慮地宮殿
15	62c16	巻第十二	分別世品第三之五	壞劫	人趣の壞	人趣此洲一人	無師
16	62c22	巻第十二	分別世品第三之五	壞劫	六欲天の壞	天趣四大王天隨一	法然得初靜慮
17	66c29	巻第十二	分別世品第三之五	大の三災	初定の内災	何緣下三定遭火水風災	初二三定中
18	71a01	巻第十三	分別業品第四之一	表無表の界地分別	表色の界地	表色	唯在二有伺地
19	124c10	巻第二十四	分別賢聖品第六之三	七種不還	全超	言全超者	在欲界於四靜慮已具雜修
20	133a27	巻第二十五	分別賢聖品第六之四	菩提分法の依地		初靜慮一切	未至除喜根
21	133b02	巻第二十五	分別賢聖品第六之四	菩提分法の依地	初禅	論曰	初靜慮中
22	142b03	巻第二十七	分別智品第七之二	四無礙解	詞無礙解	詞無礙解	唯依二地
23	142c02	巻第二十七	分別智品第七之二	辺際靜慮	第一因	正修學此靜慮時	從欲界心
24	144a26	巻第二十七	分別智品第七之二	通の果たる能化所化	能変化心	依初靜慮有二化心	欲界攝
25	144a26	巻第二十七	分別智品第七	通の果たる能化	能変化心		

			之二	所化			
26	148a13	巻第二十八	分別定品第八之一	生の上三靜慮の三識と発業心		生上三靜慮	起三識表心
27	148a29	巻第二十八	分別定品第八之一	等至の初得全得	禅定の初得	順退分	且初靜慮順退分攝
28	148b18	巻第二十八	分別定品第八之一	浄等の三種の等至の相生論	無漏等至より生ずる等至の数	無漏七等至中	從初靜慮
29	148b26	巻第二十八	分別定品第八之一	浄等の三種の等至の相生論	浄等至より生ずる等至の数	初靜慮	無間生七
30	149c09	巻第二十八	分別定品第八之一	有尋有伺等の三等持	有尋有伺	論曰	有尋有伺三摩地
31	150a25	巻第二十八	分別定品第八之一	四修等持[4]	現法楽住のための修等持	而經但説	初めの靜慮
32	151b09	巻第二十九	分別定品第八之二	八解脱	八解脱の依地	初二解脱	一一通依初二靜慮
1	相應法界	除尋與伺	欲界	初靜慮	有尋有伺	靜慮中間	無尋唯伺
2	初靜慮中	三品不收					
3	身色欲界	眼識初定	見初定色	身屬欲界	三屬初定		
4	四皆同地	見欲界色	三屬初定	色屬欲界			
5	除唯不善惡作睡眠	餘皆具有	唯不善	瞋煩惱	除諂誑?	所餘忿等及無慚愧	餘皆有者
6	具足	五支	具五支言	就一地説	非一刹那故無有過		
7	初靜慮地與初靜應爲同類因	乃至有頂與有頂地爲同類因					
8	初靜慮	善有表業及彼生等					
9	所發神通	往至自所生界梵世	非餘				
10	身異想異	人一分天	第一識住	一分天者	欲界天及初靜慮	除劫初起	
11	言想一	第二靜慮	由二善想故	言想異	第三靜慮	由異熟想故言想一	
12	初靜慮十	餘説如前	初靜慮中	唯成四喜	染不縁下香味境故	捨具成六	
13							
14	依處等一四洲	第二靜慮等小千界	第三靜慮等中千界				
15	法然得初靜慮	從靜慮起唱如是言	離生喜樂甚樂甚靜	餘人聞已皆入靜慮	命終並得生梵世中	乃至此洲有情都盡	是名已壞贍部洲人
16	乃至並得生梵世中	爾時彼天有情都盡	是名已壞大王衆天				
17	内災等彼故	初靜慮	尋伺爲内災	能燒惱心等外火災故			
18	通欲界初靜慮中	非上地中可言有表					
19	遇縁退失上三靜慮	以初靜慮愛味爲縁	命終上生梵衆天處	由於先世串習勢力	復能雑修第四靜慮	從彼處歿生色究竟	最初處歿
20							
21	具三十七	未至地除喜覺支	近分地中	勵力轉故	下地法	猶疑慮故	
22	欲界	初靜慮	以於上地無尋伺				
23	入初靜慮	次第順入乃至有頂	復從有頂入無所有	次第逆入乃至欲界	復從欲界次第順入	展轉乃至第四靜慮	名一切地遍所隨順
24	初靜慮						

[4] この段において、「初靜慮」の検索にかかるが、内容は「初靜慮」という概念ではなく、「初めの靜慮」の意味であり、本来ここに並べるべきものではない。西 義雄訳『阿毘達磨倶舎論 国訳一切経 毘曇部 26 下』, 大東出版社, 1935 rep. 1990, p.449, 注 287

25							
26	皆初靜慮攝	唯無覆無記					
27	離欲染時得	離自染時捨	退離自染得	退離欲染捨	從上生自得	從自生下捨	餘地所攝應如理思
28	無間生六	謂自二三各淨無漏					
29							
30	尋伺相應等持	初靜慮及未至攝					
31	擧初顯後	理實通餘					
32	能治欲界初靜慮中顯色貪故						
1	第二靜慮以上	地	乃至	有頂	無尋無伺	法界所攝	非相應法
5	如欲界説	中間靜慮	除前所除	又更除尋	餘皆具有		
19	生最後天	頓越中間	是全超義				
1	靜慮中間	伺					

[表 9]をもとに、『法蘊足論』『集異門足論』の「初靜慮」概念との比較を試みる。『倶舍論』になると「初靜慮」の語句が言及している範囲が、『法蘊足論』『集異門足論』の2論書にくらべて、圧倒的に広範囲にわたっているのが見て取れる。本来ならば、『発智論』『大毘婆沙論』等を同時に詳細に考察しなければ、意味がないものであろうが、指標としての参考にはなると考える。

「初靜慮」概念のなかで、『法蘊足論』『集異門足論』にもカテゴリーとしてある【尋】【伺】に言及している段を[表 9]から抽出すると、[表 10]のようになる。

［表 10］【尋】【伺】に言及したコンテキスト『倶舍論』

1	8a16	巻第二	分別界品第一之二	有尋有伺門	意根法界意識界	意界	意識界
	相應法界	除尋與伺	欲界	初靜慮	有尋有伺	靜慮中間	無尋唯伺
	第二靜慮以上	地	乃至	有頂	無尋無伺	法界所攝	非相應法
	靜慮中間	伺					
2	8a20	巻第二	分別界品第一之二	有尋有伺門	伺	伺	欲界
	初靜慮中	三品不收					
17	66c29	巻第十二	分別世品第三之五	大の三災	初定の内災	何縁下三定遭火水風災	初二三定中
	内災等彼故	初靜慮	尋伺爲内災	能燒惱心等外火災故			
30	149c09	巻第二十八	分別定品第八之一	有尋有伺等の三等持	有尋有伺	論曰	有尋有伺三摩地
	尋伺相應等持	初靜慮及未至攝					

これらのデータから『倶舎論』の言及が、『法蘊足論』『集異門足論』の2論書にみられた、「初静慮」そのものに対する説明に【尋】【伺】のカテゴリーが使われていたことにくらべて、【尋】【伺】そのものの付論や他のカテゴリーである【大の三災】【有尋有伺等の三等持】等の説明に使用されており、換言すれば、論証の仕方が逆転していて、そのままでの比較に支障をきたしているものであることが理解できるだろう。

Chap. 3 - 2 - 2. 小　結

初期アビダルマ論書のデータを検討可能な形で、テキストマイニングを行い、ネットワーク分析の手法を使用して、『品類足論』『集異門足論』、比較参考として『倶舎論』の論理構造解析を試みたものであるが、従来のように同一語句が同様な意味内容で使用されていたと楽観的に考えるには、各々の構造の違いが大きいことが見て取れる。「初静慮」概念に関しては、『法蘊足論』、『品類足論』、『倶舎論』の3論書にとって、扱われ方がまったく異なるっていることが理解できる。「愛染」概念に関しては、『法蘊足論』、『集異門足論』に同様の基底になるカテゴリーがみられ、論理構造上近しいものであろうことが理解されうるが、『倶舎論』にとっての「愛染」概念は、もはや概念整理後の残滓としてしかみることが出来なかった。

Chapter 4.　アビダルマ教理をめぐる諸問題

Chapter 4. アビダルマ教理をめぐる諸問題

以下の5項目の研究は、基本的にそれぞれ過去に各学会で発表したものであるが、発表紙数制限等で充分問題点を掘り下げることができなかったものもある。いまここで補足した形で取り上げ、アビダルマ教理の持つ諸問題について考察するものである。 Chap. 4 - 1. では、殺人命令者と殺人実行者との業の伝達[1] がアビダルマ教理においてどのように解釈されていたかを問うものである。自分自身の行為と他者の行為との関係性についてのアビダルマ教理の立場を明確にしようと考えた。Chap. 4 - 2. では、三世実有と現在有体過未無体という説一切有部 VS 経量部の一切法の成立における古典的問題に関して、新しく時空座標解釈のモデリングによりひとつの問題提起を試みた。Chap. 4 - 3. では、禅定体験の記号言語化という視点から、説一切有部があらゆる事象を言語に置き換えようとした試みを、禅定という限りなく個の主観的事象をひとつのケースとして、説一切有部がおこなおうとした論理展開について考察をすすめる。Chap. 4 - 4. では、『識身足論』の記述から「諸心起染」という有情の煩悩を起こす心の働きをもとに、身体と心の問題について考えてみる。そして Chap. 4 - 5. では、大不善地法成立に向けての論理構造分析という問題で、『集異門足論』『法蘊足論』『界身足論』のテキストから無慚・無愧の法を説く文脈においてコレスポンデンス分析を行い、大不善地法の論理構造を明らかにしようと試みた。これらの試行錯誤から、アビダルマ教理において、その論理と思考の範囲と限界を明らかにするためには、Chap. 1. 以降のテキストにおける詳細な考察なしにはなし得ないであろうことが理解される。

Chap. 4 - 1. アビダルマにおける業伝達の解釈[2] ——自己の行為から他者の行為へ

Chap. 4 - 1 - 1. 問題の所在

本研究は、アビダルマにおける「業」の問題を取り扱う。そのなかでも、ある一人の人間の行為が他の者にどのような影響を与え得るかということに注目し、お互いの行為の間の媒体に関して言及してみようとするものである。換言すれば、A が為した行為と B が為した行為において相互

---

[1] この問題は、1995年3月20日のオウム真理教による地下鉄サリン事件を頂点とした一連のオウム真理教事件について、私自身とても考えさせられた結果1998年に学会で発表したものである。当時流行の言葉であるがマインドコントロールされた信者たちが、教祖の教えのとおりに殺人を実行した場合、その業の伝達については、アビダルマにおいてどのようなメカニズムが働くのだろうかということ、また実行者に対して命令者にはどのような業がもたらされるのかということが、この研究の出発点にあった。

[2] 拙論「自己の行為から他者の行為へ——アビダルマにおける「業」伝達の解釈——」,『印度学仏教学研究』Vol.93(47-1), 日本印度学仏教学会, 1998, pp.147-149

に働く業の影響関係について、その伝達システムについてアビダルマがどのような解釈を為しているものかを考察する。

そこでひとつのモデルとして、通仏教的に悪として否定せられる十不善業道の一に数えられる「殺生業道」(prāṇātipāta-karmapatha)の成立要件を軸に、この殺生のもたらす業について、特に、自分自身で行う殺人ではなく、ある者に命令を下して殺人をなさしめた場合、その殺人が行われた時点での命令者に対する業の作用を考察する。とりわけ、実行者の殺人の成功もしくは失敗という、命令者における意志及び行為とは時間空間的にかけ離れたファクターにおいての業の影響、さらには、実行者の殺人の結果を命令者が永久に知り得なかった場合等の業への影響を問題としたいと思う。そのためアプローチ方法として、

ｉ） 命令者の意志の強弱と実行者の意志の強弱との関係

ii） 命令者と、異なる客体である実行者との相互に働く動因の主体

の2つの観点を使用する。

Chap. 4 - 1 - 2. 業と殺生業道

はじめに、アビダルマ教理のオーソドックスな業解釈の一例としてAKBh. 、『倶舎論』にある説一切有部の無表業實有論の第四證として、

【資料 I - I】

akurvataś ca svayaṃ paraiḥ kārayataḥ karmapathā na sidhyeyur asatyām avijñaptau. na hy ājñāpana-vijñaptiḥ maulaḥ karmapatho yujyate. tasya karmaṇo 'kṛtatvāt. kṛte 'pi ca tasyāḥ svabhāva-viśeṣād iti.[3] AKBh., p.196. ll.16-18,（T. vol.29, p.69a）

〔自ら進んで行わずに、他人によって行わしめたことは、無表（avijñapti）が無かったならば、諸の業道は完成しない。何故なら、命令の表（vijñapti）は根本業道（maulaḥ karmapatho）にふさわしくないからである。その業は実行せられてないからである。また、実行せられたときは、その自性（svabhāva）に特別の性質があるからである、と。〕

---

[3] na hy *ājñāpana-vijñapteḥ karma-patha upayujyate*. tasya prāṇâtipāt'ādi-*karmaṇo 'kṛtatvāt*. syān mataṃ. kṛte tasmin karmaṇi tadājñāpana-vijñapteḥ karma-patho bhaviṣyatîti. atra idam ucyate. *kṛte 'pi ca tasyāḥ svabhāvâviśeṣād* iti. pareṇa kṛte 'pi tasmin karmaṇi tasyā ājñāpana-vijñapter na kaścit svabhāva-viśeṣo 'sti. yena tadānīṃ karma-pathaḥ syāt. tasyāḥ svabhāvâviśeṣāt. yathai͡va pūrvavat karma-patho na vyavasthāpyate. tathai͡va paścād ity ato 'stîty abhyupagantavyā yā 'sau tadānīm utpadyate karma-patha-saṃgṛhītêti. AKVy., p.354. l.31-p.355, l.4

これに対して、経量部の破として、

【資料 I - II 】

tat prayogeṇa parêṣām upaghāta-viśeṣāt prayoktuḥ sūkṣmaḥ saṃtati-pariṇāma-viśeṣo jāyate yata āyatyāṃ samante 'pi bahu-tara-phalâbhinirvarttana-samarthā bhavatīti svayam api ca kurvataḥ kriyā-pala-parisamāptāv eṣa eva nyāyo veditavyaḥ. so 'sau saṃtati-pariṇāma-viśeṣaḥ karmapatha ity ākhyāyate.[4] AKBh., p.198. ll.3-5,（T. vol.29, p.69c）

〔その加行（prayoga）によって、他の人々の殺害という特別の性質から、命令者において微細（sūkṣma）な相続（saṃtati）の転変（pariṇāma）という特別の性質（viśeṣa）が生まれ、それによって未来における連続も、また、更に多くの果を引き起こす能力のあるものとなる。そして、自ら進んで行う場合には、実行の果が完了せられたことであり、これはまさに、道理であると知られるべきである。そのような、その相続の転変という特別の性質が業道（karmapatha）と名づけられたのである。〕

と説明する。これらの記述が説一切有部にあっては無表業論、経量部にあっては思の種子論の典拠のひとつとされていることは周知のことである。

以下のように、一般に殺生業道を成ずる相は、①殺害の意志を発し②他の有情にたいしてであり③明らかに他の有情であるという自覚を持ち④殺生の加行を起し⑤間違いなくその有情を殺害する[5] という 5 つを満たすものでなければならないとされている。

【資料 II 】

[prāṇātipātaḥ saṃcintya parasyâbhrānti-māraṇam.] yadi mārayiṣyāmy enam iti saṃjñāya paraṃ mārayati tam eva ca mārayati nânyaṃ bhramitvā. iyatā prāṇātipāto bhavati.[6]

AKBh., p.243. ll.12-14,（T. vol.29, p.86b-c）

---

[4] *kriyā-phala-parisamāptāv* iti. maula-karma-patha-prayogaḥ *kriyā*. maula-karma-pathaḥ *phalaṃ* tasya *parisamāptau*. *eṣa eva nyāya* iti. svayaṃ-prayogeṇa pareṣām upaghāta-viśeṣāt kartuḥ sūkṣmaḥ saṃtati-pariṇāma-viśeṣo jāyata iti sarvaṃ. *kārye kāraṇôpacārād* iti. *saṃtati-pariṇāma-viśeṣaḥ karma-patho bhavatî*ti saṃtati-pariṇāma-viśeṣaḥ *kāryaṃ*. karma-pathaḥ *kāraṇaṃ*. yo 'sau kāya-vācoḥ prayogaḥ. sa hi cetanā-lakṣaṇasya karmaṇaḥ panthā iti. tasmin kārye karma-patha iti *kāraṇôpacāraḥ*. *kāyika-vācikatvaṃ tu tasya* saṃtati-pariṇāma-viśeṣasya. *tat-kryā-phalatvāt*. kāya-vāk-kriyāyāḥ phalatvād ity arthaḥ. *yathā avijñaptivādinām avijñaptir* iti. *yathā* Vaibhāṣikāṇām *avijñaptivādinām avijñaptiḥ* karma-patha ity ākhyāyate. kārye kāraṇôpacārāt. kāyika-vācikatvaṃ tu tat-kriyā-phalatvād iti. AKVy., p.356. ll.23-33

[5] Op.cit., P.Pradhan. ed., p.243. ll.10-20,（T. vol.29, p.86c）

[6] *saṃjñāya* paricchidyêty arthaḥ. *nânyaṃ bhramitvê*ti. *na* bhrāṃtyā *'nyaṃ* mārayatîty arthaḥ. AKVy., p.404. ll.31-32

〔「殺生とは、決心して、他人を誤らずに殺すことである。」 ある者を殺そうと考えて（明瞭な概念をもってsaṃjñāya）他人を殺す、実にまた他に誤ることなく、その者を殺すというのであるならば、それ故に殺生ということになる。〕

殺生由故思　他想不誤殺
論曰。要由先發欲殺故思。於他有情他有情想作殺加行不誤而殺。謂唯殺彼不漫殺餘。齋此名爲殺生業道。
『順正理論』（T. vol.29, p.578b）

由二縁得。一起加行。二果究竟。若起加行果不究竟。或果究竟不起加行。皆不得殺罪。若起加行果亦究竟方得殺罪。問頗有亦起加行果亦究竟。而不得殺罪耶。答有。如能殺所殺俱時捨命。或能殺者前死。
『大毘婆沙論』（T. vol.27, p.617a）

これらからは、業を担うものが無表色であるか種子であるかの違いはあるが、説一切有部・経量部ともに、まさしく命令者においても殺害が確かに行われたならば殺生罪を獲すとされることは明らかである。この場合、刹那等起の一俱轉の思[7] が伴い殺生業道が成就[8] するわけである。

また一方、

【資料 III 】

[vipākahetur aśubhāḥ kuśalāś ca͡iva sāsravāḥ // 54 //]
akuśalāḥ kuśala-sāsravāś ca dharmā vipākahetuḥ. vipākadharmatvāt.

AKBh., p.89. ll.16-17,（T. vol.29, p.33a）

然表無表展轉不爲俱有因故異熟果別。於表業中七支等異。一一各別招異熟果。一一支等有多極微。一一極微有三世別。於一一世有多刹那。一一刹那異熟果別非俱有因故。無表業亦爾。前随心轉七支無表能展轉爲俱有因故同異熟果。此中所説表無表業。則亦攝彼随轉生等同一果故所受異熟如前應知。
『大毘婆沙論』（T. vol.27, p.96c）

このように、説一切有部の正義では、不善と善の有漏が異熟因を作る[9] ことから、殺害の命令者は命令を行った時点で、殺害の命令という不善から異熟因を形成し、それは無表色として命令者の身中にとどまるのである。けれども、この時点では殺害はなされておらず、したがって殺生業

---

7 Op.cit., P.Pradhan. ed., p.251. ll.9-10,（T. vol.29, p.89c）

8 See.『順正理論』（T. vol.29, pp.542c-543a）

9 Op.cit., P.Pradhan. ed., p.89. l.16.f.,（T. vol.29, p.33a）

道成立条件の⑤を欠くため殺生業道は成立しない。命令者は、実行者に命令という語業[10] によって同類因をあたえる。実行者においては、命令の執行という等流果と、新たに自分自身の意志による殺害の同意という不善の異熟因を形成し、殺害の実行という現行から殺生業道が成立するのである。前出の【資料 I 】【資料 II 】によれば、この時点で命令者においても殺生業道が成立するわけであるが、ここでは次の２点について問題にする。まず、無表の相続は初期の因等起心の強さによる、すなわち異熟因形成時の意志の強弱が、無表色形成の前提となることから[11]、ｉ）命令者の意志の強弱と実行者の意志の強弱との関係。また、ii）命令者と、異なる客体である実行者との相互に働く動因の主体を考察したいと考える。

Chap. 4 - 1 - 3.　命令者の意志の強弱と実行者の意志の強弱

そこで、ｉ）命令者の意志の強弱と実行者の意志の強弱との関係であるが、表【１】にあるように 4 つのケースを想定してみる。

表【１】 命令者の意志の強弱と実行者の意志の強弱との関係

		命令者（A）	実行者（B）	被殺害者
Case 1	殺害の意志	強	強	当人
	殺生業道	成就	成就	
Case 2	殺害の意志	強	弱	当人
	殺生業道	成就	成就	
Case 3	殺害の意志	強	強	別人
	殺生業道	不成就	成就	
Case 4	殺害の意志	弱	強	当人
	殺生業道	成就	成就	

10　この語業が殺生業道を得すのではないことはsee. ibid., p.196. ll.16-18,（T. vol.29, p.69a）

11　Cf. 三友健容,「アビダルマ仏教における無表業論の展開（三）」『法華文化研究』第3号（立正大学法華経文化研究所：1977）p.190

第1のケースとして、命令者（A）の意志が強く、実行者（B）の意志も強力であった場合、これはこれまでの理由から問題なく（A）（B）共に殺生業道が成立する。次に第2のケースとして、命令者（A）の意志が強く、実行者（B）の意志がそれほどでない場合、つまりは命令されて仕方がなく殺害を行った場合であるが、（B）は実行者であるので、やはり（A）（B）共に殺生業道が成立する。これは次の資料【 IV 】にみられるように、能殺者が団体、つまり戦争時の軍隊のように上官の命令で複数で殺害を行った場合でも同様とされるものである。

資料【 IV 】

[senādiṣv eka-kāryatvāt sarve karttṛvad anvitāḥ // 72 //]

yathai͡va hi karttā tathā sarve samanvāgatā bhavanty eka-kāryatvāt. arthato hi te 'nyon yaṃ prayoktāro bhavanti. yas tarhi balānn īyate so 'pi samanvāgato bhavaty anyatra y a evaṃ niścitya yāyāt yāvajjīvita-hetor api prāṇinaṃ na haniṣyāmîti

AKBh., p.243. ll.6-9,（T. vol.29, p.86b）

〔「軍隊においては、一つの目的においてなされるから、全ての人々において（殺生は）一人の破壊者がなしたように成就したものとなる。」 まさに一人の破壊者において、全ての者達が一つの目的によって（殺生を）成就したものとなる。実に、意味するところにしたがうならば、彼らは相互に行為者（prayoktāra）となるからである。そこでまた、諸々の力によって迫られた場合も成就するものとなる。ただし、（自らの）生命が尽きるという理由であったとしても「私は生き物を殺さない」と決心して行く場合を除く。〕

軍等若同事　皆成如作者

論曰。於軍等中若随有一作殺生事如自作者。一切皆成殺生業道。由彼同許爲一事故。如爲一事展轉相教故。一殺生餘皆得罪。若有他力逼入此中。因即同心亦成殺罪。唯除若有立誓要期。救自命終亦不行殺。無殺心故不得殺罪。

『順正理論』（T. vol.29, p.578a）

問若爲王等逼令行殺。得殺罪不。有説不得。所以者何。他力所制非彼意樂故。如是説者。亦得殺罪。除自要心。寧捨己命終不害他。如是則無罪。問若依先王所制法。令刑罰有過得殺罪不。答得王及法司。若遣他殺得殺生無表罪。彼所遣人。及若自殺俱得殺生表無表罪。

『大毘婆沙論』（T. vol.27, p.617c）

次に第3のケースとして、命令者（A）の意志が強く、実行者（B）の意志も強力であり、しかしながら（B）が誤って（A）の指示した者と違う者を殺害した場合はどうなるかということであるが、（B）には殺生業道が成立するが、⑤の理由で（A）には殺生業道が成立しないということになる。最後に第4のケースとして、命令者（A）の意志が弱かった場合、例えば、命令をする立場のものが、自

分の意志に反して命令を下さねばならなかった場合を考えてみる。この場合、実行者の（B）には殺生業道が成立するだろうが、はたして（A）に殺生業道が成立するのであろうか。残念ながら、この問いに対する明確な記述を、私は論書等から未だ見出せていないが、おそらく、そこに至る判断は別としても、命令者の地位にとどまるという意志（つまり、自分が命令することによって誰かが殺害されるだろうということよりも、自分が命令者の地位にありたい、もしくはあったほうがよいという判断あるいは意志）は命令者に存したであろうことから、異熟因たる無表を形成する前提は整うように思われる。したがって、資料【 IV 】の記述からも[12]、（A）にもきっちりと殺生業道が成立するはずである。私見ではあるが、例えば、これらは現代日本の民法等における責任の所在についての規定にくらべて、アビダルマの立場は意志を重視するという点において、より明確なものと考えることができよう。

Chap. 4 - 1 - 4. 命令者と、異なる客体である実行者との相互に働く動因の主体

それでは、これらのことを踏まえて、ⅱ）命令者と、異なる客体である実行者との相互に働く動因の主体に関する問題を考察したい。命令者（A）と実行者（B）とに関する殺生業道の成立要件は、これまでみてきたとおりであるが、（A）と（B）が同じ場所に居合わせた場合には、とくに問題は生じ無いのであるが、（A）と（B）が時間的・空間的に異なった場面での業の継承がどのように解釈されているかを考えてみたいと思う。すなわち、前生・今生・後生という個人の業の継承においては、アビダルマは中有を想定したり、非即非離蘊の補特伽羅、あるいは無表色・種子を立てたりするわけであるが、（A）と（B）という異なった2者間に働く行為の継承において、例えば、実行者（B）が資料【 II 】の殺生業道成立要件の⑤を成し遂げたその瞬間、時間的・空間的に離れた位置にある命令者（A）の業の成就に、どのようなファクターが働きかけるのであろうか。……この問題に関しての記述がほとんど見出せないのであるが、資料【 VI 】にあるよう『倶舎論』において、唯一、身業を生ずる勝因として、

---

[12] Cf. “yas tarhi balānn īyate so ’pi samanvāgato bhavaty”, Op.cit., P.Pradhan. ed., p.243. l.8,（T. vol.29, p.86b）

資料【 VI 】

smṛtijo hi cchandaḥ cchandajo vitarko vitarkāt prayatnaḥ prayatnād vāyus tataḥ karm êti

AKBh., p.477. ll.1-2,（T. vol.29, p.158c）

〔何故ならば、憶念（smṛti）によって意欲（chanda楽欲）が惹起せられ、意欲によって熟慮（vitarka尋）が惹起せられ、熟慮によって活動（prayatna勤勇）となり、活動によって風（vāyu）が広がったものが業（karman）というものである。〕

諸別計有加行心生。於身聚中勢力差別。爲身無間異方生因。即此生因。名爲身表。若爾身表。應非眼見。勢力差別即是風故。

『順正理論』（T. vol.29, p.535c）

然由先表及能起心爲加行故。後時教者。雖起善心多時相續。仍有不善。得相續生。使所作成時有力能。引如是類大種及造色生。此所造色生。是根本業道。即彼先表及能起心。在現在時。爲因能取今所造色。爲等流果。於今正起無表色時。彼在過去能與今果。唯彼先時所起思業。於非愛果。爲牽引因。後業道生。能爲助滿令所引果決定當生。如是所宗。可令生喜。

『順正理論』（T. vol.29, p.543a）

と説明している。AKBh.、『順正理論』ともに、憶念・意欲・熟慮という心の働きから勤勇の努力が起され、身業を引発する《風(vāyu)》という衝動の活動によって形色が形成される。あるいは、行為を行なう時に《力能》があって大種及び大種所造の色を生じるというのである。これらの主張を吟味してみると、業は《風》もしくは《力能》を媒体とするということから、命令者における業道の成就という、他者（つまり自分以外の客体）の無表に対する伝達手段の説明において不十分であるといわざるをえない。というのは、命令時における命令者自身の無表色（もしくは思の種子）の形成については説明可能としても、時間空間的に離れた実行者の行為が命令者の刹那等起の一俱轉の思にどのようにフィードバックされた影響を与え得るのか明らかではないからである。

説一切有部は、無表業の體を四大種所造の色とする。無表色が物質であった場合、刹那等起が他の場所で成就した時、その成就の刹那を知らせる何がしかの伝達システムが必要であるはずである。つまり《力能》というベクトルを伝えるインフラストラクチュアーがなければ、時間・空間を超えてなにがしかの作用が継承される必用条件が整わないのである。あるいは、経量部の説くように思の種子が業の主体であるならば、殺害完了の情報を命令者が知り得なかった場合に、

思の種子にいったい何が働きかけるのであろうか。

資料【 VII 】にあるように『大毘婆沙論』によれば、得(prāpti)は意識の所識であり、八智の所知で滅智と他心智を除くとされている。したがって少なくとも実行者の成就の正確な情報が世俗智として命令者に伝達された時点で、命令者の殺生業道は確かに成就する。しかしながら、実行者（B）が偽りの報告を命令者（A）にした場合どうなるであろうか。世俗智の情報のみが殺生業道の成立要件ならば、実行者（B）が殺害したにもかかわらず殺害していないという偽りの情報を命令者（A）に報告した場合、命令者（A）の殺生業道は成就しなくなるはずであるし、また逆に、実行者（B）が殺害していないにもかかわらず殺害したという偽りの情報を命令者（A）に報告した場合、命令者（A）に殺生業道が成就してしまうであろう。いいかえれば、命令者（A）の殺生業道の成就如何は実行者（B）の舌先三寸ということになってしまうのである。ここにおいても、世俗智の情報以外に《力能》というベクトルを伝えるインフラストラクチュアーがなければ、時間・空間を超えてなにがしかの作用が継承される必用条件が整わないことが見て取れるのである。

資料【 VII 】

問諸得幾識所識。幾智所知。幾隨眠之所随増耶。答諸得一識所識。謂意識法界法處行蘊攝故。八智所知除滅智。他心智以是有爲不相應故。三界五部有漏縁隨眠之所随増。以於得中無相應随増故。問諸非得幾識所識。幾智所知。幾隨眠之所随増耶。答諸非得一識所識。謂意識。亦法界法處行蘊攝故。七智所知。除滅智道智他心智。以是有漏不相應故。三界修所斷。及諸遍行隨眠之所随増。以非得唯修所斷故。　『大毘婆沙論』

（T. vol.27, p.805b）

Chap. 4 - 1 - 5. 小　結

説一切有部のように、業は三世に實有なる法の作用にほかならないとしても因等起のみでは殺生業道は成就するものでなく、やはり、資料【 II 】の殺生業道成立要件の⑤にあるとおり、刹那等起の一俱轉の思を前提とするものであることに変わりはない。（A）（B）2者間の業伝達システムの解釈、この点に関して、『大毘婆沙論』『倶舎論』『順正理論』その他、共にとても歯切れが悪いということがいえるだろう。煩瑣哲学と称されるアビダルマにおいても、個の内実に対する関心の高

さに比べて、個と個の関係、もしくは個と社会の関係に関する記述の少なさは、その限界を示唆しているものだといえるかもしれない。そして、それはそのままアビダルマ教理成立当時の時代性を持つものでもある。現代の私たちにとっては、それらをもとに歴史的価値概念の再評価の必要性にせまられるものであると、考えられるものである。

Chap. 4 - 2. 三世実有と現在有体過未無体[1] ——時空座標解釈からの一つの試み

Chap. 4 - 2 - 1. 問題の所在

アビダルマ思想にみられるsvabhāva（自性）の問題は、各部派間の教理の異同におけるトピックであるだけでなく、後に大乗の諸論師、あるいは他のインド思想の諸論師たちをも巻き込んだ、存在・時間論における主要なテーマであったことはよく知られている。当時もっとも有力な部派と推定される説一切有部(Sarvāstivādin)は、「三世実有法体恒有」と後世に膾炙される論理手法で、その問題を取り扱った。いわゆる存在する事物の変化、もしくは運動を、過去・現在・未来という3つの時間区分において表現しようとしたものであり、その「実有」性の解釈は『発智論』・『大毘婆沙論』を軸に展開される。その後、世親(Vasubandhu)のAKBh. と衆賢(Saṃghabhadra)の『順正理論』のテキストに残された論争は、各々基本的スタンスの相違から独自の論理を構築していったものであるのは周知のことである。

そこでまず本論は、①『大毘婆沙論』を基本テキストとして「実有」の用例がどのような場面で説一切有部の教理に組み込まれていったのか、言い換えれば、説一切有部は何をもって「実有」とし、「実有」であることから何を説明しようとしたのかをトレースする。

一方、世親と衆賢の論争は、「現在有体過未無体」の立場にあるとされる世親にたいして、再度衆賢が「三世実有」の論理で反駁を加えたものである。この点について、次に、②現在有体過未無体論と三世実有論の思想的立脚点に時空座標解釈の相違がひとつのモデルとして呈示されうることを立証する。

Chap. 4 - 2 - 2. 『大毘婆沙論』における実有

これまで説一切有部の実有論というと、いきおいAKBh. もしくは『順正理論.』所出の実有論を中心に、あるいはAKBh. の注釈書群・ADV. などの後期のテキストを主に取り扱った研究が多く、『大毘婆沙論』は参考程度とされた感が強かった。もちろん漢訳しか現存せず、サンスクリット原典・チベット訳を欠く『大毘婆沙論』は、その原語の推定に限界があることはいうまでもない。また、

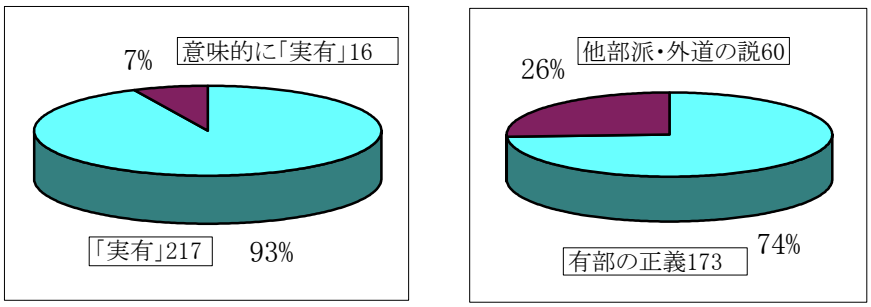
---

[1] 拙論「三世実有と現在有体過未無体——時空座標解釈からの一つの試み」,『仏教学』Vol.41, 仏教思想学会, 1999.12, pp.21-40

訳者玄奘の恣意的な語句の挿入の可能性も無視できるものではない[2]。しかしながら、説一切有部の身論とされる『発智論』のvibhāṣā であることからも、また、AKBh. 自体がその綱要書とされた伝承をもつことからも、いまいちど整理しておくことは必要なことである。

『大毘婆沙論』全巻に「実有」の用例は217例、意味的に「実有」である用例が16例、合計233例が確認できる[3]。そのうち説一切有部の正義とされるもの173例、他部派あるいは外道の説として破斥されるもの60例を数えることができた。

図Ⅰ．『大毘婆沙論.』所出の「実有」の用例〔総数233例〕



以下、説一切有部の正義とされるものの内訳を表Ⅰ．に掲げる。

表Ⅰ．『大毘婆沙論.』所出の「実有」〔説一切有部の正義〕 T. vol. 27

実有なるもの	論説個所	T. p.no.
五取蘊	薩迦耶見について	36a
法我、法性 一切法にして自性に住するもの	薩迦耶見について 邪見について、有の論証	41a 42b
内外法	法の内・外なると内處・外處の攝なるとの関係について	714a
有爲相	四有為相について	977b-c
四聖諦	邪見について 実有の事に於て諦の名を建立す	41c 399a
諸縁の性・體	三結乃至九十八隨眠各自の相縁関係について 八智各自相望むる時、幾縁となるやについて 大種蘊論述の所以について 四縁中の何れが諸の有為法の生滅時に作用するや	283a-b 555a 680c 702b

[2] 玄奘の訳出における原語の推定における試論として、拙論「《自性》の意味するところ―玄奘訳におけるゆらぎの問題」,『宗教研究』72 巻 319, 1999.3, pp.272-273

[3] 『大毘婆沙論』の漢訳テキストデーターベースとして、瑜伽行思想研究会（ホームページ開設責任者　早島　理, http:// www.edu.nagasaki-u.ac.jp/private/yugagyo/）作成のものを利用。大正新脩大蔵経の行末と行頭に単語がまたがる場合に検索不能のため、自作の検索プログラムを使用した。

	味相應の初静慮について 十想の無間に生ずる法について	833a 975a
因縁の體性 因縁の性・相	二心の因果・相縁関係、二心不俱起の理由 六因論一般について 有執受と無執受との大種の相互相縁論について 二十二根の因相應等の四句分別について 或る法に因縁となる法が、その法のために因縁たらざる時あるか	47a 79a 709b 747a 982b
所縁縁の體性	二心の因果・相縁関係、二心不俱起の理由 八智の一一は八智中、幾智を縁ずるやについて 縁有縁法・縁無縁法等の四句分別について 二十二根の縁・有縁等の四句分別について 或る法に所縁縁となる法が、その法のために所縁縁たらざる時あるか	48a 554c 704a 747b 983a
等無間縁	二心の因果・相縁関係、二心不俱起の理由 或る法に等無間縁となる法が、その法のために等無間縁たらざる時あるか	49b 982c
増上縁	或る法に増上縁となる法が、その法のために増上縁たらざる時あるか	983b
名句文身	名句文について	79a
過去・未来の體は實有、現在世は有爲法	同類因について 遍行因について 十二因縁論一般について 無学心の生ずる時、一切障を解脱する 心の変壊について 諸結の已繋・當繋・今繋について 退の実有論について、過去・未来の煩悩の性相実有 三世実有論について 学行迹は学の八支を成就するについて 三三摩地論一般について 八智相修論を提起せし因由について 七聖者の八智の三世における成就関係について 三世業の異熟果の三世分別について 三世の大種と造色との相互成就関係について 有執受と無執受との大種の相互相縁論について 得等に関する論究 正生正滅と称する法の三世分別について	85c, 86a 91b 116c 141b 190a 311c 312c 393a-b 479a 538a 551c 562c 613b 685a 709b 796b-797a 919b
擇滅と非擇滅と無常滅には實體有り	擇滅・非擇滅論について	161a
實に佛體有り	三帰依の真髄について	177a-b
涅槃の實有	三帰依の真髄について 無想天に生死する時、滅・起する心心所法の界繋分別	177b 784a
僧の體	三帰依の真髄について	177b-c
夢	夢一般論について	193b
生・住・老・無常の諸相の體	四相論について	198c
尋と伺	尋と伺について	219a
異生性の自體	異生性論について	231b-235a
退の自性	退の実有論について 学根を成就せずして学根を得るものについて 異生と聖者との退・不退について	313b 788c 933a
斷遍知	九遍知論について、無為法は実に自性有り	320c
中有	中有の有無に関する分別論者との問答	358a

	中有の七種門分別について	700a
化事	化及び化事について	696b
法處所攝の諸色	五蘊について	383b
表・無表業	表業・無表業の実有について 身語の表・無表は何の定によりて滅するやについて	634c-635a 860c
根律儀と根不律儀	業と不律儀及び律儀との関係について	985a
虚空	六界について	388c-389a
水・鏡等の中の所有の影像	有見法と無見法について	390c
世間所聞の諸の谷響等	有見法と無見法について	390c
所出の声	有見法と無見法について	390c
成就・不成就性	四十二章の成就・不成就論について 学行迹は学の八支を成就するについて 三三摩地論一般について 八智相互の成就関係について 七聖者の八智における成就関係について 三世の大種と造色との相互成就関係について 得等に関する論究 初静慮の成就について 三三摩地の成就に関する一行問答 不浄観乃至無学道等の事の未得・已得について	463b 479b-c 538a 550c 562a 685a 796b-797a 845c 919c 985a
相應、相應法の體	学支相應法と道支相應法との相互関係 因相應法・因不相應法等の四句について 二十二根の因相應等の四句分別について 意根乃至三無漏根・五力・七覚支・・・・と相應する根の数 十想は四静慮乃至三三摩地の幾と相應するやについて 十想の無間に生ずる法について	499c 703c 747a 785c 844c 974b
自性は自性に於て實有	八智の相攝関係について	550c
諸の覚慧は皆境を實に有する	四十二章の各自を知る智の十智分別について 心・身受を感ずる業について 楽の心受と不苦不楽の心受とを受くる時、如実に知る智	558a 599a 949c
觸	十六觸の自性並びに相攝関係について	760a-b
所通達と所遍知	所通達・所遍知と所斷と所修と所作證法とについて	976c
世俗の正見	見と相應する受に随増する隨眠について	978c

他に、他部派あるいは外道が「実有」としたもので、説一切有部の正義によって破斥されるものに、犢子部の補特伽羅・外道の有情の実有〔T. vol.27, p.8b, 41a, 55a, 174c, 707a, 997c-999b〕があり、また主に、諸縁・三世・成就・相應・擇滅等を非実有とした譬喩者の説[4]が破斥された。

表Ⅰ．からも理解されるよう、説一切有部が『大毘婆沙論』で実有としたものには、後に七十五法とまとめられる諸法(dharma)の自性(svabhāva)のみでなく、三世実有論の理論的骨格をなす四縁、三世、成就・不成就性などがある。

はじめに、四縁においては、巻第五十五結蘊第二中不善納息第一之十に「若執諸縁無實性

[4] T. vol.27, p.70a, 79a, 161a,193b, 198b, 198a, 198c, 390c, 479a, 680b, 696b, 760a, 796b, 833a

者。應一切法皆無實性。四縁具攝一切法故。謂因縁攝一切有爲法。等無間縁除過去現在阿羅漢最後心心所法。攝餘過去現在一切心心所法。所縁縁増上縁總攝一切法。」〔ibid. p.283a-b〕とあり、続いて、諸縁の性にして実有に非ざれば、「則一切法無甚深義。」、「應不施設三種菩提」、「覺慧應無三品轉義。」、「師應不能令弟子慧初劣後勝。弟子亦應常爲弟子不轉成師。然由諸縁性實有故。師令弟子慧得漸増。弟子有時得成師義。」〔ibid. p.283b〕とされる。

また、巻第七十六結蘊第二中十門納息第四之六には、もし過去・未来にして実有に非ざれば、「應無出家受具戒義。」、「應出家衆皆有正知而虚誑語。」〔ibid. p.393b〕とあり、さらに、過去・未来が実有でなければ、現在世も無となってしまう。もし三世が無ければ有為は無く、有為が無ければ無為も無い。有為・無為が無ければ一切法は無い。一切法が無ければ、まさに、解脱・出離・涅槃は無いという大邪見となってしまうと説かれるのである[5]。これらのことをふまえて、表Ⅰ.にある実有なるものの「四聖諦」「名句文身」「擇滅・非擇滅・無常滅」「佛體」「涅槃」「僧體」「世俗の正見」等の実有をあわせて考察すると、説一切有部の実有論の真意が、けっして形而上学的存在論のみにあるのではなく、あくまで仏教という宗教的目的に貫かれていることが看取できる。これは、世第一法論からはじまり、色心等が断にも常にもあらずとして中道を説く見蘊見納息で終る『発智論』『大毘婆沙論』の論述の構成からしても同様に、四聖諦の実践意義は明らかなことであるだろう。換言すれば、後の大乗仏教徒が新しい経典を編纂していった経緯に比べて、部派仏教徒たちは一見矛盾するアーガマの解釈をアビダルマという手法でもって再構築するにおいて、実有しなければならなかったものは、他ならぬ釈尊の言説であり、それなくしてはアビダルマという思考形態それ自体が成立しないであろうことは、なにより明白な事実である。

Chap. 4 - 2 - 3. 三世実有の論証

三世実有論に関しては、これまで枚挙にいとまがないほど多数の研究がなされてきた。三世における議論をのせるテキストも、北伝に限っても古くは『識身足論』『成實論』からAKTa. ADV.、その他大乗の諸論書まで数世紀の範囲の典籍に及ぶ。およそAKBh. の一語一句にしても膨大な注釈がなされ、ともすれば煩雑さに埋もれてしまい全体像の把握が困難になってしまいがちである。その理由を以て、本論では取り扱うテキストをまずAKBh. に絞り、そこに展開される議論を駁論とされる『順正理論』と、参考として漢訳『倶舎論』にトレースする。その際、なるべく従来研究

---

[5]「復次若過去未來非實有者。彼現在世應亦是無。觀過去未來施設現在故。若無三世便無有爲。若無有爲亦無無爲。觀有爲法立無爲故。若無有爲無爲應無一切法。若無一切法應無解脱出離涅槃。如是便成大邪見者。勿有斯過故知實有過去未來。」〔T. vol.27, p.393b〕

されてきた自明とされる成果は省略し、なにより後述の時空座標解釈の資料の導出を第一の目的とする。

従来AKBh. における説一切有部の三世実有の論証は、2教証・2理証とされる。

教証Ⅰ.

uktaṃ hi bhagavatā 'tītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ na 'bhaviṣyan na śrutavān ārya-śrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat. yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ tasmāc chrutavān ārya-śrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavati. anāgataṃ ced rūpaṃ na 'bhaviṣyat na śrutavān ārya-śrāvako 'nāgataṃ rūpaṃ na 'bhyanandiṣyat. yasmāt tarhy asty anāgataṃ rūpam iti vistaraḥ.
〔AKBh. p.295, ll.9-12〕

若過去色非有。不應多聞聖弟子衆於過去色勤脩厭捨以過去色是有故。應多聞聖弟子衆於過去色勤脩厭捨。若未來色非有。不應多聞聖弟子衆於未來色勤斷欣求。以未來色是有故。應多聞聖弟子衆於未來色勤斷欣求。〔『倶舍論』T. vol.29, p.104b〕

教証Ⅱ.

dvayaṃ pratītya vijñānasya utpāda ity uktam. dvayaṃ katamat. cakṣū rūpāṇi yāvat mano dharmā iti. asti vā 'tītânāgate tad ālambanaṃ vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syāt. evaṃ tāvad āgamato 'sty atītânāgataṃ yuktito 'pi. 〔AKBh. p.295, ll.14-16〕

又具二縁識方生故。謂契經説。識二縁生。其二者何。謂眼及色。廣説乃至意及諸法。若去來世非實有者。能縁彼識應闕二縁。〔『倶舍論』T. vol.29, p.104b〕

理証Ⅰ.

sati viṣaye vijñānaṃ pravartate na 'satī. yadi ca 'tītânāgataṃ na syād asad ālambanaṃ vijñānaṃ syāt. tato vijñānam eva na syād ālambanâbhāvāt. 〔AKBh. p.295, ll.18-19〕

以識起時必有境故。謂必有境識乃得生。無則不生。其理決定。若去來世境體實無。是則應有無所縁識。所縁無故識亦應無。〔『倶舍論』T. vol.29, p.104b〕

理証Ⅱ.

yadi ca 'tītaṃ na syāt śubhâśubhasya karmaṇaḥ phalam āyatyāṃ kathaṃ syāt. na hi phalôtpatti-kāle varttamāno vipāka-hetur asti iti. 〔AKBh. pp.295-6, ll.21-1〕

又已謝業有當果故。謂若實無過去體者。善惡二業當果應無。非果生時有現因在。
〔『倶舍論』T. vol.29, p.104b〕

この2教証は各々『雑阿含経』を引用して、釈尊の言説に実有の根拠を求めたものである。教証Ⅰ．では、過去・未来の色(rūpa)が実有でないならば、仏弟子たちが厭捨(anapekṣa)を修めたり、求めたりということはできないと主張する。また、教証Ⅱ．では、識(vijñāna)は眼(cakṣus　根)と色(rūpa　境)の二縁によって生じると説かれ、同様に六根・六境も過去・未来に実有しないならば、二縁を欠くことになるという。理証Ⅰ．はこの教証Ⅱ．を理論的に明かしたもので、識の起こるところかならず境があり、境が無ければ識は無からは生じないと論じている。さらに理証Ⅱ．でもって過去が実有でないならば、浄・不浄(śubhâśbha)の業(karman)の果(phala)は現在に及ばず、異熟因(vipāka-hetu)が成立しないとされる。したがって、これらのことからも三世実有論の底流にある、『大毘婆沙論』でみた実有の本質の一端を窺い知ることができるであろう。

さらに、AKBh. は『大毘婆沙論』にもみられる説一切有部の四大論師の説を掲げ、世友(Vasumitra)のavasthā　説を有部の正義とした。

> avasthā 'nyathiko vadanta-vasumitraḥ. sa kila 'ha. dharmo 'dhvasu pravartamāno 'vasthām avasthāṃ prāpyânyo 'nyo nirdiśyate avasthântarato na dravyântarataḥ. yathā ekā vartikā ekâṅke nikṣiptā ekam ity ucyate śatâṅke śataṃ sahasrâṅke sahasram iti.
>
> 〔AKBh. p.296, ll.19-21〕

> 尊者世友作如是説。由位不同三世有異。彼謂諸法行於世時。至位位中作異異説。由位有別非體有異。如運一籌置一名一置百名百置千名千。
>
> 〔『倶舎論.』T. vol.29, p.104c〕

世友によれば、法は三世において位(avasthā)から位へと動き(pravartamāna)つづけている。過去・現在・未来はその位に別があるのであって、自体(dravya)に別があるのではない。それはあたかもそろばんの玉が一の位にあるのを一と名づけ、百の位にあるのを百と名づけ、千の位にあるのを千と名づけるようなものだという。そして「法の作用(kāritra)のないものを未来といい。〔いま〕ある(kṛ)のを現在といい。あり終って滅したものを過去という。」[6] とした。以上が説一切有部の正義とされてきたもので、世親はこれにたいして疑義を呈したのである。

世親によれば、三世に法が実有するとは外道のアートマンの常住論とどこが異なるのであろう

---

[6] yadā sa dharmaḥ kāritraṃ na karoti tadā 'nāgataḥ. yadā karoti tadā pratyutpannaḥ. yadā kṛtvā niruddhas tadā 'tīta iti. 〔AKBh. p.297, ll.12-13〕

か[7]、と指摘する。また、世友の作用説にたいする難をあげ[8]、自らの正義である「法のいまだすでに生じていないものを未来といい、もし生じてあるものでいまだ滅していないところのものを現在といい、もし滅したところのものを過去という。」という現在有体過未無体論をAKBh.に展開した。[9]

これらにたいして、衆賢は『順正理論』において真っ向から対立する。衆賢は世親の論難にたいして三世実有の立場から、再度駁論を試みるのである。はじめに衆賢は、有(sat)に「実有」と「仮有」を分別し、「実有」に「唯有體」と「有作用」を、さらに「有作用」に「有功能」と「功能闕」の性

---

[7] kiṃ punar idam atītânāgatam ucyate 'sty atha na. yady asti sarva-kālâstitvāt saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaṃ prāpnoti. atha nāsti. kathaṃ tatra tena vā saṃyukto bhavati visaṃyukto vā. na saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaṃ pratijñāyate vaibhāṣikaiḥ saṃskṛta-lakṣaṇa-yogāt.〔AKBh. p.295, ll.2-5〕「若實是有則一切行恒時有故應説爲常。若實是無如何可説有能所繫及離繫耶。毘婆沙師定立實有。然彼諸行不名爲常。由與有爲諸相合故。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.104a〕

[8] [a-1] tena eva ātmanā sate dharmasya nityaṃ kāritra-karaṇe.〔AKBh. p.297, l.17〕「若法自體恒有。應一切時能起作用。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.105a〕

[a-2] yac ca tat kāritram atītânāgataṃ pratyutpannaṃ ca ucyate.〔AKBh. p.297, l.20〕「又此作用云何得説爲去來今。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.105a〕

[9] [b-1] yo hy ajāto dharmaḥ so 'nāgataḥ. yo jāto bhavati na ca vinaṣṭaḥ sa varttamānaḥ. yo vinaṣṭaḥ so 'tītaḥ iti.〔AKBh. p.298, ll.9-10〕「以有爲法未已生名未來。若已生未已滅名現在。若已滅名過去。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.105a〕

[b-2] kim asya pūrvaṃ na asīd yasya abhāvād ajāta ity ucyate. kiṃ ca paścān na 'sti yasya 'bhāvād vinaṣṭa ity ucyate. tasman na sidhyati sarvathā 'py atra 'dhvatrayam.〔AKBh. p.298, ll.15-18〕「故不許法本無今有有已還無則三世義。應一切種皆不成立。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.105a〕

[b-3] vayam api brūmo 'sty atītânāgatam iti. atītaṃ tu yad bhūta-pūrvam. anāgataṃ yat sati hetau bhavaṣyati. evaṃ ca kṛtvā 'sti ity ucyate na tu punar dravyataḥ.〔AKBh. p.299, ll.1-2〕「謂過去世曾有名有。未來當有。有果因故。依如是義説有去來。非謂去來如現實有。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.105b〕

[b-4]
na eva hi sautrāntikā 'tītāt karmaṇah phalôtpattiṃ varṇayanti. kim tarhi tat-pūrvakāt saṃtāna-viśeṣād ity ātmavāda-pratiṣedhe saṃpravedayiṣyāmaḥ.〔AKBh. p.300, ll.19-21〕「非經部師作如是説。即過去業能生當果。然業爲先所引相續轉變差別令當果生。破我品中當廣顯示。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.106a〕

[b-5]
adhvatrayaṃ vā. yathā tu tad-asti tathā uktam. atha asyaty atītânāgate kathaṃ tena tasmin vā saṃyukto bhavati tajja-tadd-hetv-anuśaya-bhāvāt kleśena tad-ālambane kleśânuśaya-bhāvād vastuni saṃyukto bhavati.〔AKBh. p.301, ll.8-10〕「彼所生因隨眠有故。説有去來能繫煩悩。縁彼煩悩隨眠有故。説有去來所繫縛事。若隨眠斷得離繫名。」〔『倶舍論.』T. vol.29, p.〕

質があると分類する。[10] この諸法の勢力にたいして「作用」と「功能」を厳密に定義する[11] ことから、世親の「本無今有有已還無」の解釈を破し、三世実有の正当性を主張した[12] ことは、つとに知られているものである。

Chap. 4 - 2 - 4. 時空座標解釈のモデリング

以下、前節でトレースしてきたような説一切有部の主張する三世実有論と、世親に代表される現在有体過未無体論の2つの論理の思想的立脚点に、ひとつの時空座標解釈のモデリングの呈示を試みる。

仏教における存在論は、その独自の縁起論を基礎におくことから、時間論と密接な関係を持ちながら成立していることはいうまでもないだろう。アビダルマの諸論師が、諸行無常を論証しようと有為・無為論、刹那滅論、極微論、六因四縁論等々の論争をいかに担ってきたかは史料の示すとおりである。また、近年時間論の立場からのさまざまな論文[13] も数多くなされてきた。しかしながら、私たちが現在日常体感している時間の概念と、西暦紀元前後のインドにおける日常の時間概念、もしくはA.D.5Cあたりと推定される世親・衆賢論争の背景となる時間概念は、はたして一様のものであるのか否かという問題が残されている。

---

[10] 「實有復二。其二者何。一唯有體。二有作用。此有作用復有二種。一有功能。二功能闕。由此已釋唯有體者。假有亦二。其二者何。一者依實。二者依假。」〔『順正理論.』T. vol.29, pp.621c-622a〕

[11] 「諸法勢力總有二種。一名作用。二謂功能。引果功能名爲作用。非唯作用總攝功能。亦有功能異於作用。」〔『順正理論.』T. vol.29, p.631c〕

[12] [c-1] 「我亦許法前後位中。自相雖同而有差別。故爲同喩其理善成。由此已成作用與體。雖無有異而此作用待緣而生。非法自體待緣生故。本無今有有已還無。・・・・・・以有爲法體雖恒存。而位差別有變異故。此位差別從緣而生。一刹那後必無有住。由此法體亦是無常。以與差別體無異故。要於有法變異可成。非於無中可有變異。如是所立世義善成。」〔『順正理論.』T. vol.29, p.633a〕

[c-2] 「諸有爲法差別作用。未已生位名爲未來。此纔已生名爲現在。此若已息名爲過去。差別作用與所附體不可説異。如法相續如有爲法。刹那刹那無間而生名爲相續。此非異法無別體故亦非即法。勿一刹那有相續故不可説無。見於相續有所作故。如是現在差別作用。非異於法無別體故亦非即法。有有體時作用無故不可説無。作用起已能引果故。」〔『順正理論.』T. vol.29, p.633a-b〕

[c-3] 「體雖恒有。而於位別有功能故。謂業能令果起殊勝。引果作用是業功能。作用已生名現在位。故於位別業有功能。若業能令無轉成有。招馬果業何不爲因。能令本無馬角成有。」〔『順正理論.』T. vol.29, p.634a〕

[13] 古典的なものとして、佐々木現順,『仏教における時間論の研究』, 清水弘文社, 1974. また、Anindita Niyogi Balslev, *A Study of Time in Indian Philosophy*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1983. etc.

佐々木[1974]は「時間に関する諸思想」というテーマ[14]で、時間概念を①自然的物理学的時間②心理学的時間③形而上学的時間④宗教的時間⑤精神物理学的時間というカテゴリーに分類し、仏教における時間論は⑤の精神物理学的時間であるとされた。詳細な内要は省略するが、これらの時間論は、時間軸の目盛をより客観的に等分のものに刻むか、より主観的に不等分のものに刻むかの違いこそあれ、固定された空間内での事物の変化をしるす指標として取り扱われている。そこで本論は、これらにたいし移動空間による新たな指標のモデリングを呈示する。

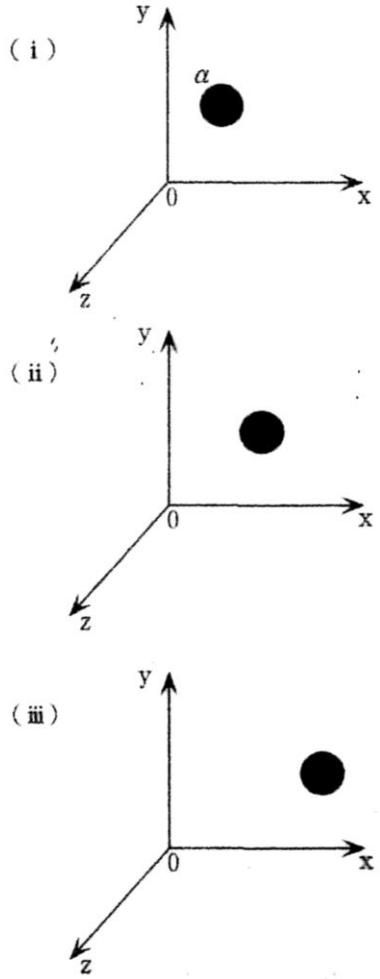
時間(kāla)を実体としてとらえた、ヴァイシェーシカ学派やジャイナ教と異なりアビダルマ一般は時間を実体として想定しない。したがって、事物の変化もしくは運動を認識するための《ものさし》（座標）として、あるいは現代の私たちと同様、空間概念と時間概念を予想したであろうことは理解できることである。

現在有体過未無体説と題した図Ⅱ-1は、固定された空間座標x, y, z軸上の事物αが（ⅰ）⇒（ⅱ）⇒（ⅲ）と時間経過とともに移動したことを表現したもので、それをまとめて現在時において図示したのが図Ⅱ-2である。図Ⅱ-2においてTimeとした時間座標軸上で、現在は刹那という法の顕現する最小単位によって表わされる。刹那は幅を持つた時間であり、生(jāti)という心不相応行法(citta-viprayukta-saṃskāra)によって顕現し、住(sthiti)・異(jarā)を経て滅(anityatā)するまでの間をいい、その顕現を現在と名づけるのである。

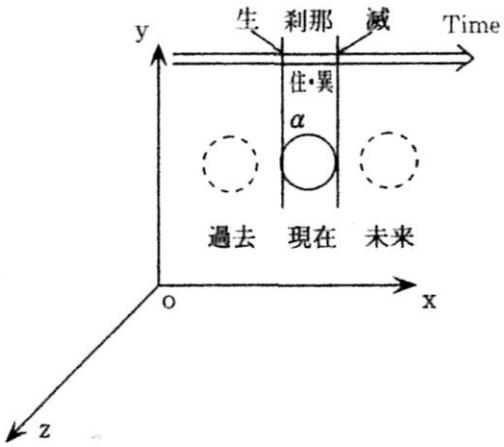
---

[14] ibid. 佐々木現順 [1974], pp.12-31

図Ⅱ-1　現在有体過未無体説

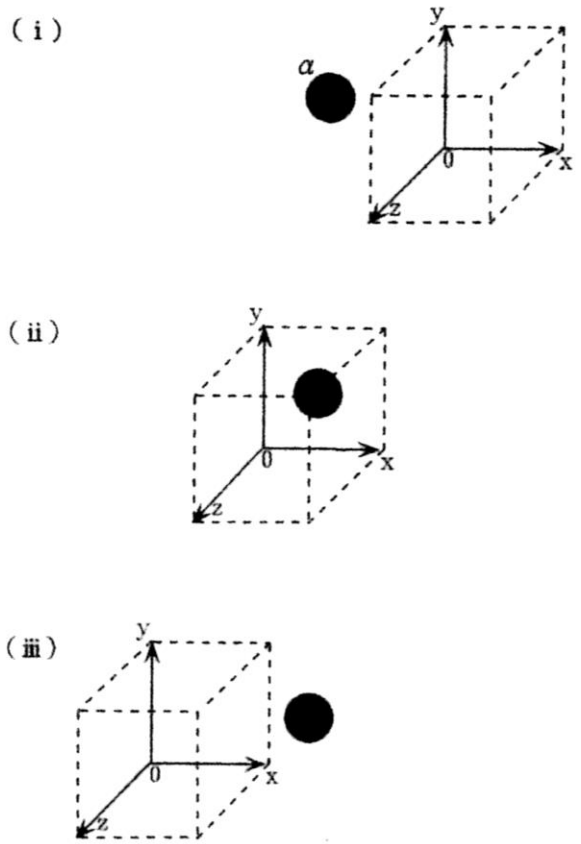


図Ⅱ-2　現在有体過未無体説

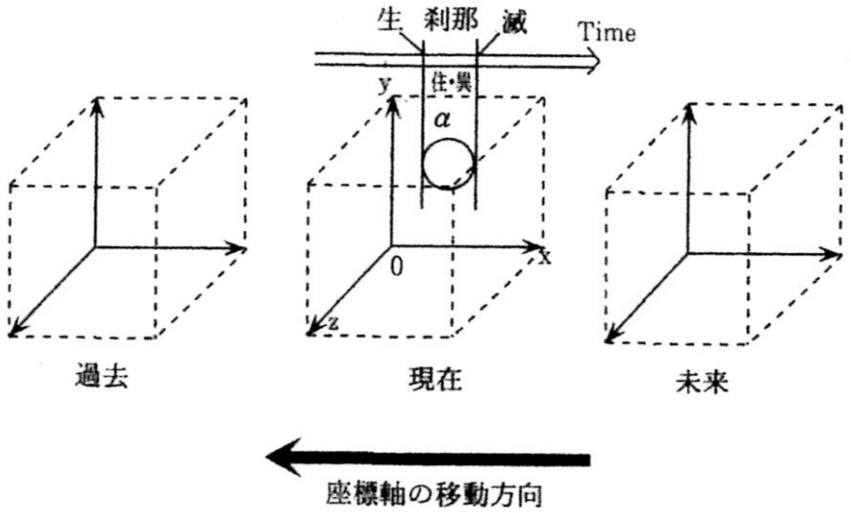


この時空座標系は現代の私たちが日常体感している時空座標系とほとんど同様のもので、おそらく世親の想定したものもこの座標系と思われる。空間座標は、あたかもニュートンの絶対空間の如く固定されており、時系列にしたがって事物が変化・移動する。この場合、運動の動因は事物に内在されなければならず、現在に実有する法体の内部に起因することが必要となる。いわゆる世親の種子説がそれをおぎなうものであることは、いまさら指摘するまでもないことかもしれない。図Ⅱ-2において点線で示したように、この座標系において過去・未来がある（実有する）とした場合、3つ以上の事物が同時に存在することとなり、運動・変化（諸行無常）の法則に矛盾が生じることになる。この矛盾が、そのまま世親の三世実有説にたいする論難と同じものであるという構図が、ここから見て取れるのである。

図Ⅲ-1　三世実有説



図Ⅲ-2　三世実有説



一方、三世実有説と題した図Ⅲ-1は、事物αにたいして、（ⅰ）⇒（ⅱ）⇒（ⅲ）と時間経過とともに移動する空間座標x, y, z軸を表現したもので、それをまとめて現在時において図示したのが図Ⅲ-2である。図Ⅲ-2においてTimeとした時間座標軸上で、現在は刹那という法の顕現する最小単位によって表わされるのは図Ⅱ-2の場合と同様である。図Ⅲ-2の右側にあるように、固定された事物αにたいして、空間座標が事物αを予期する状態を未来と名づける。そして中央の、いままさに空間座標が事物αを含み、共にある状態を現在と名づけ、さらに左側の、空間座標が事物αをすり抜けた状態を過去と名づけるのである。そこにおいて、事物αは固定されているにもかかわらず、空間座標軸が移動することによって、事物αにおいて運動・変化が観測されるのである。それはあたかも、駅のホームに立っている人を移動する電車の中から見た時、電車の進行方向とは逆に人が動いているのを観測するのと同じことである。したがって座標軸の移動方向とTimeとした時間座標軸の方向は逆になる。

この時空座標モデルから三世実有説を考えてみると、よりよく前述の世友のavasthā 説と適合するのが理解される。つまり、「法は三世において位から位へと動きつづけている。過去・現在・未来はその位に別があるのであって、自体に別があるのではない。それはあたかもそろばんの玉が一の位にあるのを一と名づけ、百の位にあるのを百と名づけ、千の位にあるのを千と名づけるようなものだ。」というそれである。世(adhvan)とは、空間座標軸の移動において、その空間座標の占める位置に過去・現在・未来という名前がつけられるのであって、過去・現在・未来という何か特別の《有るもの》があるのではないのである。さらに、この空間座標を《作用の場》と考えると、衆賢の主張の理解がより容易になる。過去・現在・未来という空間座標の位置は《作用の場》として存在し、まさに事物αを空間座標軸が横切っている状態が有功能たる現在であり、その他が功能闕たる過去および未来となる。

そして、この時空座標モデルの第一の特徴は、事物αが固定されている状態で空間座標軸の移動において事物αの運動・変化を表わすということから、それがそのまま事物αの三世における実有を表現していることにほかならないことである。事物αは、この場合svabhāvaであるわけであるが、三世に実有するとは、前述のように決して過去・現在・未来という同時に同じ3つ以上のsvabhāvaが存在するのではなく、図Ⅲ-2のようにあくまで1つのsvabhāvaが過去・現在・未来という、単に位置によって名前の異なる1つの《作用の場》（空間座標）において実有するという意味である。少なくとも説一切有部の論師たちは、そのように解釈していると考えていいだろう。[15]

図Ⅱ-2の現在有体過未無体説のモデルが、運動の動因を事物に内在するもの（例えば種子）

---

[15]「今定謂仁竊自造論矯託題以毘婆沙名。眞毘婆沙都無此語。又不如彼自率己情。妄説去來如現實有。三世實有性各別故。」〔『順正理論.』T. vol.29, p.634c〕

として必要としたのにたいして、図Ⅲ-2の三世実有説のモデルには内在因は必要がない。それではいったい、何が空間座標軸の動因たるのであろうか。実はこの点が、この時空座標モデルの第二の特徴でもあるのだが、ここにおいては本来的《有》(sat)がその動因であり、それは六因四縁および座標変換というシステムによって認識されるのである。説一切有部によれば、「無境の覺無し。」[16]「諸の所有の心心所法は唯自相共相を以て境と爲す。都て無法を境と爲して生ずるに非ず。」[17] とあるように、対象のない心はありえないということから、有為法における複数の存在物(対象)を認めるものである。一方、座標概念《ものさし》というのは、必ず2つ以上の比較可能な存在物があって成立する表象で、ゼロとか1だけでは意味をもつものではない。したがって、2つ以上の対象が存在した場合、その対象相互に関係の概念が成立し、座標概念が成立する。この関係の概念なるものが、説一切有部の用語において六因四縁というシステムであり、絶対無(ゼロ)からは何も生じるものでないことは、衆賢が『順正理論』巻五十の中で力説しているものである[18]。このような《有》(カオス)において、因は果を生じ、縁起する対象を認識するため時系列にしたがって座標軸が移動する。――それはあたかも現代物理学における時間の相対性のようなものと同義かもしれない。――この認識手段のための座標軸の移動という概念は、因なくして滅するという刹那滅論にも適合する。

事物αを現象における存在物として、運動を表わす場合において図Ⅲ-2は適切に思われるが、事物αをsvabhāvaとみた場合、少しモデルに手を加えた方がいいかもしれない。現在の刹那を表わす事物αのsvabhāvaは球体のままでかまわないが、未来・過去には雲状のもやのような図示が適当かもしれないからである。いいかえれば、未来世にある雲状のもやのようなカオスのsvabhāvaの集合体に六因四縁の作用が働き、一部が現在世において有功能として刹那に球体として顕現し、過去世に落謝するや否やまた同じ雲状のもやのようなカオスのsvabhāvaの集合体として実有するというモデルが想定し得るであろう。[19]

図Ⅱ-2、図Ⅲ-2ともにTimeとした時間座標軸上の表現形式は、まったく同じものとなっている。ここにこそ、現在有体過未無体論を主張する世親と三世実有論を主張する衆賢との論争の起点

---

[16]『順正理論.』T. vol.29, p.622a

[17]『順正理論.』T. vol.29, p.622b

[18]『順正理論.』T. vol.29, pp.620c-625b

[19] 表Ⅰにあるとおり『大毘婆沙論.』によれば、非擇滅無為も実有しているものであることから、非擇滅無為も同様に六因四縁の作用とともにある。

があるように思えてならない。各々拠って立つ時空座標解釈の相違があるにもかかわらず、表面的な時間モデルが同じであることから、どちらも引くに引けない論議を展開せざるを得なかったに違いないことが想像されるのである。

Chap. 4 - 2 - 5. 小　結

現在有体過未無体論と三世実有論の世親VS衆賢の論争は、もはや研究され尽くされた感の強い古典的なテーマである。特に新しいテキストの発見でもないかぎり、いまさら取り上げるのもはばかれる問題であることも事実であるだろう。しかしながら、いま、あえてここにこのテーマを取り扱う積極的理由に2つのものをあげることができる。第1のものは『大毘婆沙論』のテキストデーターベースが公開されたことである。これまでアビダルマ研究において、『大毘婆沙論』は200巻の大部であることから、必要性こそ指摘されていたにもかかわらず、なかなか手が付けられなかったのが現状であった。けれども今後はコンピューターによる用例の悉皆（全数）調査および解析が可能となったのである。本論においても「実有」の用例を検索にかけ、全用例から抽出した標本を分析することができた。そこにおいて、『大毘婆沙論』を中心とした説一切有部の実有にたいする真意が、いかにしてもゆずることのできない最後の一線として、《釈尊の言説》という宗教的目的に帰結することが浮き彫りにされたといえるだろう。今後、テキストデーターベースの信頼性の向上をはかる必要とともに、用例の悉皆（全数）調査の手法の確立が望まれるものである。

つぎに第2の理由は、時空座標解釈のモデリングに3D・コンピューターグラフィック・アニメーションの手法が使用できたことである。純粋な思想や教理、文献学という、これまでどちらかというと視覚化が不適当だと思われてきた分野で、その思想や教理の特徴を多角的にヴィジュアライズすることによって新しい切り口を探るという実験を行うことを目的とした。その結果、明らかに世親・衆賢論争の背景に時空座標解釈の相違を認めたとしたならば、争点をよりよく説明し得るモデルを呈示しえたと考える。今後の課題であるが、三世実有説と題した時空座標モデルは、もしかしたら輪廻転生を基礎におくインドオーソドックスの時間概念であったのではなかろうかという問題がある。世親型の時間概念に慣れ親しんだ私たちには奇異に思えるかもしれないが、死後49日で同じ世界のどこかに生まれ変わってしまう世界観は、本人にとっては連鎖の一貫であるには違いないが、総体にとっては進化・進歩とは対称的な極めて恒常・不変化な世界観である。そこにおいて図Ⅲ-2の事物αは、別の意味でアートマンたりえた可能性がある。このように考えていくと、説一切有部のインドオーソドックスに基礎をおいた時間論にたいして、世親がそれとは別の系譜の時間論――深源はヘレニスティックなものかもしれない――でもって解釈したところ、衆賢が再び保守的な時間論で対応したという構図が見えてくるかもしれない。その解明には今後、この分野でのいっそう詳細で緻密な研究を待たなければならないだろう。

Chap. 4 - 3. 説一切有部における禅定体験の記号言語化について[1]

Chap. 4 - 3 - 1. 問題の所在

説一切有部の言語表象は、三世に実有するとされる法の自性に名身(nāmakāya)・句身(padakāya)・文身(vyañjanakāya)を数え、またパーリ語によるSabbatthavādinが「一切の認識は必ず対象を持つとして言語によって表現する部派」[2]なる意味をもつとされることなどからも、そこには一見記述不可能と思える事象までも精力的に説示しようとする試みがみてとれる。もちろんこれらは、現代における実証主義あるいは形式論理学の手法とは、その方法論と目的において単純な比較を拒むものであることは確かである。本論稿はそれらをふまえながらも、禅定体験(experience in Yoga)という修道上最もポピュラーな実践手法において、説一切有部がいったいどのような論理構造を駆使し、その主観的世界観を客観として表象しようとしたかを考察するものである。そこでテキストとしてより多くの記述を有することを理由に、特に、『大毘婆沙論』を中心にみていくこととする。

Chap. 4 - 3 - 2. 説一切有部の記号言語化

はじめに言語化ということについて、資料[1-a]にあるよう、説一切有部は名身（単語）・句身（文章）・文身（文字）を心不相応行法の所攝の三種とたてる。

資料[1-a] 名句文について

有説。爲止他宗顯己義故。謂或有執名句文身。非實有法如譬喩者。或復有執名句文身。聲爲自性如聲論者爲止彼執顯名身等是實有法。是不相應行蘊所攝故作斯論。有説。欲顯世尊三無數劫所設劬勞有大果故。謂佛過去無量劫前應得滅度。所以經於三無數劫修習。百千難行苦行。但爲利他。夫利他者。必於名身句身文身。皆得善巧。以善巧故。能爲他説蘊界處等。令得涅槃究竟饒益是名大果。有説。爲欲建立三種菩提增上縁故。謂若以上品覺慧。覺名句文身名佛菩提。若以中品覺慧覺。名句文身名獨覺菩提。若以下品覺慧。覺名句文身名聲聞菩提。有説。欲顯佛是無量無邊説法者故。謂佛善達名句文身。能爲衆生説法無盡。有説。欲顯世尊異獨覺故。謂佛獨覺皆不由師自能覺悟。而於名等唯佛善知。獨覺不爾。有説。爲欲照了雜染清淨。二法性相令他知故。謂名身等是能照了染淨根本。若無名等雜染清淨不可顯示。有説。欲顯於名身等觀察。不觀察者引大義

---

[1] 拙論「説一切有部における禅定体験の記号言語化について」『印度学仏教学研究』Vol.95(48-1), 日本印度学仏教学会, 1999.12, pp.240-242

[2] 三友健容「説一切有部の成立」,『印度学仏教学研究』45-1, 日本印度学仏教学会, 1996.12, p.10

利大衰損故。謂修行者。若能觀察名句文身則能制伏。猶如積山煩惱惡行。雖遭罵辱能堪忍故。若不觀察名句文身。則煩惱惡行如河流不絶。如罵太子毘盧釋迦言。婢子何以昇我釋種堂。彼以不能觀察如是四五字故。索引無量百千衆生墮大地獄。

〔『大毘婆沙論』雜蘊第一中智納息　T. vol.27, p.70a-b〕

これはアビダルマという思考表象の特性から必然的に導き出されたものであり、アーガマという釈尊の言説の解釈学であることから、釈尊の言説の絶対性を位置づけたものとして捉えることができる。資料[1-b,c,d]によると、その中で名身等は、有情数・無執受・等流・業の増上果・無記であり、能説者がこれら名身等を成就するとされる。また、名は非色であり、四蘊であり、義は不可説とされる。その名称に、功徳名・生類名・時分名・随欲名・業生名・標相名・假想名・随用名・彼益名・從略名・生名・作名・有相名・無相名・共名・不共名・定名・不定名という性質があり、さらに説問については、資料[1-e]にあるよう「義利を引かず、善法を引かず、梵行に順ぜず、覺慧を發せず、涅槃を得」ない問いは捨置すべきとして、黙然として無記の答えありとした。

資料[1-b]

問名爲是有情數。爲非有情數耶。答是有情數。問名等爲有執受。爲無執受耶。答無執受。問名等爲是長養。爲是等流。爲是異熟生耶。答是等流。非長養非異熟生。問若名等非異熟生。契經云何通。如説。佛告阿難。我亦説。名從業生是業果。答名亦是業增上果故作如是説。謂作好業亦得好名。然非異熟。問名等爲善。爲不善。爲無記耶。答無記。非造業者故。思起故。如四大種。問誰成就名等。爲能説者爲所説耶。設爾何失。若能説者則阿羅漢。應成就染汚法。離欲染者應成就不善法。異生應成就聖法。斷善根者應成就善法。以阿羅漢等亦説染汚等法故。若所説者。則外事及無爲亦應成就名等。以彼亦是所説法故。答唯能説者成就名等。問若爾後難善通。前難云何通。答阿羅漢等雖成就染汚等名。而不成就染汚等法。以染汚等名皆是無覆無記法故。

〔『大毘婆沙論』雜蘊第一中智納息　T. vol.27, p.72b〕

資料[1-c]

問若名亦是義者。名義有何差別。答能顯是名所顯是義。復次名是非色。義通色非色。名唯無見。義通有見無見。名唯無對。義通有對無對。名唯有漏。義通有漏無漏。名唯有爲。義通有爲無爲。復次名唯無記。義通善不善無記。名唯墮三世。義通墮三世及離世。名唯欲色界繫。義通三界繫及不繫。名唯非學非無學。義通學無學非學非無學。名唯修所斷。義通見修所斷及不斷。復次名唯不染汚。義通染汚不染汚。如染汚不染汚。有罪無罪。有覆無覆是退非退。黒法白法亦爾。復次名無異熟。義通有異熟無異熟。名非異熟。義通異熟非異熟。名不相應。義通相應不相應。如相應不相應。有所依無所依。有所縁無所縁。有行相無行相。有警覺無警覺亦爾。復次名唯苦集諦攝。義通

四諦及非諦攝。由如是等。名義差別。問義爲可説。爲不可説耶。設爾何失。若可説者。説火應燒舌。説刀應割舌。説不淨應汚舌。説飲應除渴。説食應除飢。如是等。若不可説者。云何所索不顛倒耶。如索象應得馬。索馬應得象。如是等。契經所説復云何通。如説。我所説法初中後善。文義巧妙。答義不可説。問若爾前難善通。云何所索不顛倒耶。答劫初時人。共於象等假立名想。展轉傳來。故令所索而不顛倒。有説。語能起名名能顯義。語雖不能親説得義而依展轉。如子孫法故於象等。所索無倒。問契經所説復云何通。如説。我所説法初中後善。文義巧妙。尊者世友作是釋言。語能起文文能顯義。故作是説。復作是言。爲異外道故作是説。謂諸外道所説法。或少義或無義。世尊所説有義多義。是故説言。我所説法文義巧妙。復作是説。外道所説文義相違。世尊所説文義相順。欲顯異彼故作是説。問名句文身是不相應行蘊所攝。何故佛説四蘊名名。答佛於有爲總立二分。謂色非色。色是色蘊。非色即是受等四蘊。非色聚中。有能顯了一切法名。故非色聚總説爲名。有説。色法麁顯即説爲色。非色微隱。由名顯故説之爲名。然實名等唯不相應行蘊所攝。

〔『大毘婆沙論』雜蘊第一中智納息　T. vol.27, pp.72c-73b〕

資料[1-d]　名の名称について

名有六種。一功德名。二生類名。三時分名。四隨欲名。五業生名。六標相名。功德名者謂依功德立名。如解。或誦素怛纜者名爲經師。若解或誦毘奈耶者名爲律師。若解。或誦阿毘達磨者名爲論師。得預流果名爲預流。乃至得阿羅漢果名阿羅漢。如是等。生類名者。謂依生類立名。如城市生者名城市人。村野生者名村野人。刹帝利種中生者名刹帝利。乃至戍達羅種中生者。名戍達羅。如是等。時分名者。謂依時分立名。如童稚時名爲童子。乃至衰老時名爲老人。如是等。隨欲名者。謂隨樂欲立名。如初生時或父母等。或沙門等。爲其立名。如是等。業生名者。謂依作業立名。如善畫者名爲畫師。鍛金鐵者名金鐵師。如是等標相名者。謂依標相立名。如執杖者名執杖人。執蓋者名執蓋人。如是等。復次名有四種。一假想名。二隨用名。三彼益名。四從略名。假想名者。如貧賤者名爲富貴如是等。隨用名者。如腹行者名腹行蟲。如是等。彼益名者。如天神邊求得者名爲天授。因祠祀而得者名爲祠授。如是等。從略名者。如具五功德者名爲五德。繫屬王者名日王人。如是等。復次名有二種。一生名。二作名。生名者。如刹帝利婆羅門等。作名者。如父母等所爲立名有説。生名者。謂初生時父母等所立名。作名者。謂於後時親友知識所爲立名。復次名有二種。一有相名。二無相名。有相名者。如無常苦空無我等。無相名者。如我人有情意生等。若佛出世則有相名多無相名少。若不出世則無相名多有相名少。問火名爲是有相。爲是無相。答若云尸棄是有相名。若云阿耆尼。是無相名。復次名有二種。一共名。二不共名。不共名者。如佛法僧蘊界處等。共名者。謂餘世間共所立名。有餘師説。無不共名。以一法可立一切名。一切法可立一名故。名皆是共如共不共名。曾未曾名亦爾。復次名有二種。一定名。二不定名。定名者。如蘇迷盧大海洲渚等。不定名者。謂餘世間隨共立名。有餘師説無決定名。所以者何。蘇迷盧等。邊方亦爲作種種名。此方文頌亦作餘名。如是説者蘇迷盧等有決定名。劫初成時蘇迷盧等名已定故。問前劫壞時一切失壞。今劫成已誰傳彼名。答有諸仙人得宿住智。憶前劫事復傳彼名。或劫初人由法爾力。心想・有彼名現前。問諸所有名。爲皆先有展轉傳説爲新立耶。答蘇迷盧等諸名先有。餘名不定。或有新立。

〔『大毘婆沙論』雜蘊第一中智納息　T. vol.27, p.73b-c〕

資料[1-e] 捨置すべき問い

問何故於彼外道諸問應捨置耶。答彼問不引義利不引善法。不順梵行不發覺慧不得涅槃。是故彼問皆應捨置。問前三有答可名爲記。第四無答云何名記。答佛雖告言此不應記。而實已與答理相應。是根本答故亦名記。令彼問者得正解故。或有默然於理得勝。況酬彼問而非記耶。

〔『大毘婆沙論』雜蘊第一中智納息 T. vol.27, p.76c〕

このように説一切有部の言語概念が述べられるわけであるが、そこにおいて、これらの自性が過去・現在・未来という三世に実有することによって、客観的対象として把握し得るものとしてあることを示唆するのである。

Chap. 4 - 3 - 3. 禅定体験の記号言語化

説一切有部は瞑想の名目に、等引(samāhitā)・等持(samādhi)・等至(samāpatti)・静慮(dhyāna)・心一境性(cittaikāgratā)・止(śamatha)・現法楽住(dṛṣtadharmasukhavihāra)等の諸種を挙げるのは知られている。そして欲界・色界・無色界という三界の上二界が、八等至という、初静慮・第二静慮・第三静慮・第四静慮・空無辺處(ākāśānantyāyatana)・識無辺處(vijñānānantyāyatana)・無所有處(ākiṃcanyāyatana)・非想非非想處(naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana)という禅定体験の深化による世界観をなすものとされている。これらの世界観はもともとインドオーソドックスなもので、仏教はそれを下敷にしているものであるが、より仏教において特徴的なものは、四静慮論と無想定および滅尽定についての論及、さらには三三摩地論である。これらを解明するために取られた手法が諸門分別ならびに四句分別、また一行問答、歴六問答、大小七句問答と呼ばれるものである。

諸門分別のより完成した手法は『倶舎論』においてみることができるが、例えば『大毘婆沙論』において除色想観法を以下のように説明する。

資料[2-a] 除色想について

云何除色想耶。答謂有・芻起如是勝解。今我此身將死。已死將上輿。已上輿將往塚間。已往塚間將置地。已置地將爲種種蟲食。已爲種種蟲食。此種種蟲將散。已散彼於最後不見自身。亦不見蟲。是名除色想。謂彼由先多勝解力不見身相。亦復不見違害内身外諸蟲相。

〔『大毘婆沙論』大種蘊第五中具見納息 T. vol.27, pp.704c-705a〕

ある比丘がいて、このような勝解をなす。「我が此の身は將に死せんとす。已に死し、將に輿に上らんとす。已に輿に上り、將に塚間に往かんとす。已に塚間に往き、將に地に置かれんとす。已に地に置かれ、將に種々の蟲のために食はれんとす。已に種々の蟲のために食はる。此の種々の蟲、將に散ぜんとす。已に散ず。」という観をおこし、「彼れ最後において自身を見ず、また、蟲をも見ず」という除色想をなすところにおいて、次のように分別する。

資料[2-b] 除色想の諸門分別

問此除色想。自體云何。答彗爲自體。若爾何故以想爲名。由此聚中想用增故。如持息念身等念住。本性生念。宿住隨念。皆彗爲體。以念爲名。念用增故。彼亦如是已説自體。應釋其名。此以何故名除色想。由此能遣諸積集色令不現前。名除色想。界者色界。地者第四靜慮。所依者依欲界身。行相者不明了行相。所緣者緣欲界。問此緣欲界何法。答有説。即緣積坑等處。有説。即緣彼處空界。如是説者。即緣所除所有諸色。於中有説。唯緣所除自身諸色。念往者身念往。智者世俗智。等持者非等持俱。根者捨根相應。世者通三世。過去緣過去。現在緣現在。未來可生者緣未來。不生者緣三世。善不善無記者是善緣三種。有説。唯緣無記。三界繫不繫者是色界繫。緣欲界繫。學無學非學非無學者是非學非無學。緣非學非無學。見所斷修所斷不斷者是修所斷。緣修所斷。緣自身他身非身者。有説。唯緣自身。有説。緣自他身。有説。通緣三種。緣名緣義者唯緣義。加行得離染得者是加行得。非離染得。已離第四靜慮染者。若不加行求此想時。終不能起令現前故。有説。佛離染得。離有頂染時得故。餘加行得。有説。餘亦離染得。而加行現前。佛不加行獨覺下加行。聲聞或中或上。起處者在欲界。非色無色界。在人三洲非北洲。問此誰所起。答有説。唯聖者非異生。有説。異生亦起。異生有二種。一内法異生。二外法異生。内法者能起非外法。以外法異生。長夜執我怖畏無我。不樂遣除内所依色故。已説此想自性等門復應顯示有雜無雜。

〔『大毘婆沙論』大種蘊第五中具見納息 T. vol.27, pp.705c-706a〕

除色想の自體はなにか。慧を自體となす。名を釋せば、能く諸の積集の色を遣りて現前せざらしむるによる。界をいへば、色界。地をいへば、第四静慮。所依をいへば、欲界身に依る。行相をいへば、不明了の行相。所縁をいへば、欲界を縁ず。念住をいへば、身念住。智をいへば、世俗智。等持をいへば、等持と俱に非ず。根をいへば、捨根と相應す。世をいへば、三世に通ず。善・不善・無記をいへば、善にして三種を縁ず。三界繫・不繫をいへば、色界繫にして欲界繫を縁ず。学・無学・非学非無学なりやをいへば、非学非無学にして非学非無学を縁ず。見所断・修所断・不断なりやをいへば、修所断にして修所断を縁ず。自身・他身・非身を縁ずるやをいへば、三説あり。名を縁ずるや義を縁ずるやをいへば、義のみを縁ず。加行得・離染得なりやをいへば、加行得なり。起こる處をいへば、欲界にありて、色・無色界には非ず。――というものである。

いっぽう四句分別とは、一例として資料[3-a]に三三摩地を修する場合のものを挙げておいたが、より論理的に数学の集合論と同じもので、Aという集合、Bという集合、AかつBという集合、AにもあらずBにもあらずという集合の四句を作って論旨を明らかにするものである。

資料[3-a]　三三摩地の四句分別

若修空彼無願耶。設修無願彼空耶。答應作四句。有修空非無願。謂已得空現在前。……有修無願非空。謂已得無願現在前。若未得無願現在前不修空。……修有俱修。謂未得空現在前。若未得無願現在前修空。若未得無相及未得世俗智現在前修空無願。……有俱不修。謂已得無相現在前。若未得無相現在前不修空無願。若已得世俗智現在前。若未得世俗智現在前不修空無願。一切異生染汚心無記心在無想定滅盡定。生無想天

〔『大毘婆沙論』定蘊第七中一行納息　T. vol.27, pp.925c-926b〕

三三摩地は、周知の通り『大毘婆沙論』智蘊第三中他心智納息に説かれるもので、一般に三摩地は一なるものとして、大地法内にては三摩地と名づけ、五根中にては定根と名づけ、五力中にては定力と名づけ、七覚支中にては定覚支と名づけ、八道支中にては正定と名づけられる。また二、四、五、無量と分別によって様々に呼ばれる。そのなかで特に、對治・期心・所縁の三縁により三三摩地を建立することが知られている。有身見の近對治なるがゆえに空三摩地(śūnyatā-samādhi)を立て、諸々の修行者は期心して欲有・色有・無色有の三有の法を願わざるがゆえに無願三摩地(apraṇihita-samādhi)を立て、定の所縁が十相を離れるがゆえに無相三摩地(animitta-samādhi)が立てられるのである[3]。

これらの三三摩地の成就に関してなされた一行問答を資料[3-b]に、それを図示したものを表[1-a]に載せる。これは「A を成就するものであれば B をも成就するや否や」の設問形式であり、3種の順列をとり6通りの組合せをとるものである。

資料[3-b]　三三摩地の成就に関する一行問答

若成就空彼無願耶。答如是。設成就無願彼空耶。答如是。……若成就空彼無相耶。答若得。……設成就無相彼空耶。答如是。……若成就無願彼無相耶。答若得。設成就無相彼無願耶。答如是。

〔『大毘婆沙論』定蘊第七中一行納息　T. vol.27, p.919c〕

---

3 『大毘婆沙論』智蘊第三中他心智納息　T. vol.27, p.538a-c

表[1-a]　一行問答　　A…空　B…無願　C…無相

A ⇒ B	B ⇒ A
A ⇒ C	C ⇒ A
B ⇒ C	C ⇒ B

また同様に、歴六問答を資料[3-c]に、それを図示したものを表[1-b]に載せる。これは「過去の A を成就するものであれば未来の A をも成就するや否や」の設問形式であり、過去・現在・未来の三世において、12通りの組合せをとるものである。

資料[3-c]　三三摩地の成就に関する歴六問答

若成就過去空彼未來耶。答如是。……設成就未來空彼過去耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……若成就過去空彼現在耶。答若現在前。……設成就現在空彼過去耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……若成就未來空彼現在耶。答若現在前。……設成就現在空彼未來耶。答如是。……若成就過去空彼未來現在耶。答未來成就現在若現在前。……設成就未來現在空彼過去耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……若成就未來空彼過去現在耶。答有成就未來空非過去現在。有及過去非現在。有及現在非過去。有及過去現在成就。未來空非過去現在者。謂已得空未已滅。設已滅而失不現在前。……設成就過去現在空彼未來耶。答如是。……若成就現在空彼過去未來耶。答未來成就過去。若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……設成就過去未來空彼現在耶。答現在前。……如空歴作六句。應知無願無相亦爾。

〔『大毘婆沙論』定蘊第七中一行納息　T. vol.27, pp.919c-920c〕

表[1-b]　歴六問答(B,C は省略)　　A…空　B…無願　C…無相

過去 A ⇒ 未来 A	未来 A ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 現在 A	現在 A ⇒ 過去 A
未来 A ⇒ 現在 A	現在 A ⇒ 未来 A
過去 A ⇒ 未来・現在 A	未来・現在 A ⇒ 過去 A
未来 A ⇒ 過去・現在 A	過去・現在 A ⇒ 未来 A
現在 A ⇒ 過去・未来 A	過去・未来 A ⇒ 現在 A

同様に、小七句問答を資料[3-d]に、それを図示したものを表[1-c]に載せる。これは「過去のAを成就するものであれば過去の B をも成就するや否や」の設問形式であり、全部で42通りの組合せをとるものである。

資料[3-d] 三三摩地の成就に関する小七句問答

若成就過去空彼過去無願耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……設成就過去無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……若成就過去空彼未來無願耶。答如是。……設成就未來無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……若成就過去空彼現在無願耶。答若現在前。……設成就現在無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就……若成就過去空彼過去現在無願耶。答有成就過去空非過去現在無願。有及過去非現在。有及現在非過去。有及過去現在成就。過去空非過去現在無願者。謂空已滅不失。無願未已滅。設已滅而失不現在前。……設成就過去現在無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅。設已滅而失則不成就。……若成就過去空彼未來現在無願耶。答未來成就現在。若現在前。……設成就未來現在無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅設已滅而失則不成就。……若成就過去空彼過去未來無願耶。答未來成就。過去若已滅不失則成就。若未已滅。設已滅而失則不成就。……設成就過去未來無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅。設已滅而失則不成就。……若成就過去空彼過去未來現在無願耶。答有成就過去空及未來無願非過去現在。有及未來現在非過去有及過去未來非現在。有及過去未來現在成就。過去空及未來無願非過去現在者。謂空已滅不失。無願未已滅。設已滅而失不現在前。……設成就過去未來現在無願彼過去空耶。答若已滅不失則成就。若未已滅。設已滅而失則不成就。

〔『大毘婆沙論』定蘊第七中一行納息 T. vol.27, pp.920c-922c〕

表[1-c] 小七句問答(A⇒C,B⇒C は省略)　　A…空　B…無願　C…無相

過去 A ⇒ 過去 B	過去 B ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 未来 B	未来 B ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 現在 B	現在 B ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 過去・現在 B	過去・現在 B ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 未来・現在 B	未来・現在 B ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 過去・未来 B	過去・未来 B ⇒ 過去 A
過去 A ⇒ 過去・未来・現在 B	過去・未来・現在 B ⇒ 過去 A

同様に、大七句問答を資料[3-e]に、それを図示したものを表[1-d]に載せる。これは「過去の A かつ B を成就するものであれば過去の C をも成就するや否や」の設問形式であり、全部で7×7の49通りの組合せをとるものである。

資料[3-e]　三三摩地の成就に関する大七句問答

若欲於文有益於義有益亦成七七句者。應作是説。如以過去空無願對過去無相作初句。次對未來。次對現在。次對過去現在。次對未來現在。次對過去未來。後對過去未來現在無相爲第七句。復以未來空無願對未來無相作初句。次對現在乃至後對過去無相爲第七句。復以現在空無願對現在無相作初句。次對過去現在乃至後對未來無相爲第七句。復以過去現在空無願對過去現在無相作初句。次對未來現在乃至後對現在無相爲第七句。復以未來現在空無願對未來現在無相作初句。次對過去未來乃至後對過去現在無相爲第七句。復以過去未來空無願對過去未來無相作初句。次對過去未來現在乃至後對未來現在無相爲第七句。復以過去未來現在空無願。對過去未來現在無相作初句。次對過去乃至後對過去未來無相爲第七七句。若作是説則於文有益於義有益成七七句。應知諸七義則如是。

〔『大毘婆沙論』定蘊第七中一行納息　T. vol.27, p.925a-b〕

表[1-d]　大七句問答(全49通り、他省略)　　A…空　B…無願　C…無相

過去 A･B ⇒ 過去 C	過去･現在 A･B ⇒ 過去 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 過去 C
過去 A･B ⇒ 未来 C	過去･現在 A･B ⇒ 未来 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 未来 C
過去 A･B ⇒ 現在 C	過去･現在 A･B ⇒ 現在 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 現在 C
過去 A･B ⇒ 過去･現在 C	過去･現在 A･B ⇒ 過去･現在 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 過去･現在 C
過去 A･B ⇒ 未来･現在 C	過去･現在 A･B ⇒ 未来･現在 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 未来･現在 C
過去 A･B ⇒ 過去･未来 C	過去･現在 A･B ⇒ 過去･未来 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 過去･未来 C
過去 A･B ⇒ 過去･未来･現在 C	過去･現在 A･B ⇒ 過去･未来･現在 C	過去･現在･未来 A･B ⇒ 過去･未来･現在 C

このような論理論証形態でもって、説一切有部は三三摩地の成就関係を詳細に立証していくのである。

Chap. 4 - 3 - 4. 小　結

以上のことからまとめとして、禅定体験の記号言語化について、説一切有部は後の大乗唯識思想のように心識の仮法という主観的解釈をなさず、一切をあくまで実有する境（対象）をもつ客観的事物として取り扱おうとする。そこにおいて禅定体験は世俗の日常体験と同様、諸行無常の五蘊もしくは四蘊の和合として存在するものである。それは説一切有部において、自明の理として容認される。なぜならそれは、釈尊の言説、いいかえればアーガマのなかに名・句・文身として確かに実有するものだからである。その立場において問題とされるのは、説一切有部の展開する緻密な網の目のようなアビダルマに、いかにそれが適合するか否かということである。諸門分別の設問形態が、さとりへの階梯のどの段階のステージにあるものであるかということを問題にしているのは特徴的である。また、四句分別・一行問答・歴六問答・大小七句問答のような厳密なロジックとともに、捨置すべき黙然としての無記の答えを認めたことは、アビダルマ理解の上で特に重要だといえる。それはともすれば、アビダルマは形骸化した煩瑣で空虚な議論の積み重ねであるといった評があるなかで、アビダルマは形而上学的遊戯であるのでなく、実のところあくまでさとりをめざした仏教という、宗教的目的に貫かれている手法であることが看取できるからである。

Chap. 4 - 4. 諸心起染[1] ——識身足論再考

Chap. 4 - 4 - 1. 問題の所在

近年のアビダルマ研究は、なんといっても『阿毘達磨倶舎論』、AKBh.（Abhidharmakośabhāṣya）が中心に進められてきた事実がある。というのは『倶舎論』には、サンスクリット・チベット・漢文の完全な形のテキストが現存するものであり、それはそのままその成果が現在の文献学のおおきな足跡を示すものであるからである。さらには、同じくサンスクリット・テキストの残るAKVy.（Sphutārtha）や、漢文の『順正理論』、チベット・テキストの残るTA.（Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma）のように、『倶舎論』の優れた注釈書群が数多く現存しているだけでなく、チベット仏教のみならず中国・日本仏教の伝統においても、大乗の基礎学、仏教の基礎学としての倶舎学の系譜は脈々と継承されてきた歴史的背景をもつものである。

それに対して、『阿毘達磨識身足論』（Abhidharma-vijñānakāyapāda-śāstra）〔提婆設摩造（Devaśarman）〕は、古来「六足発智」と呼ばれ、『集異門足論』、『法蘊足論』、『界身足論』、『施設足論』、『品類足論』、『発智論』等とともに、説一切有部の最も権威ある基礎的根本聖典とされながらも玄奘訳漢文テキストのみしか現存しない実状から、これまであまり省みられてこなかったように思われる。本稿はいま一度この『識身足論』というアビダルマ最古の部類の論書のひとつをとりあげ、「諸心起染」という有情が煩悩を起こす心の動き、働きというものがどのように解釈されていたか、解釈されてきたのか、また、現代的意味において、心と身体の問題について考えてみる。

Chap. 4 - 4 - 2. 『識身足論』にみられる諸心起染

『識身足論』は玄奘の訳出年代にみると、『開元釈経録』に貞観二十三年一月十五日～八月八日、北闕弘法院－大慈恩寺、大乗光筆受とされ、初期の翻訳になる[2]。つづいて玄奘は『倶舎論』『順正理論』『大毘婆沙論』を訳し、最後に他の六足論を訳出した。つまり玄奘は、はじめに『瑜伽師地論』など唯識関連の論書を訳しており、アビダルマ関連は『識身足論』を最初に訳し、その後に、原テキストの成立年代を遡るように翻訳を手がけたのである。これは『識身足論』の翻訳用語の思想的適用範囲を計るのに充分気をつけるべき点であろう。

諸心の起染と離染について『識身足論』にまとまった形で述べられているのは、【資料Ⅰ】にある

---

[1] 拙論「諸心起染 —識身足論再考—」『宗教研究』Vol.81-4-355, 日本宗教学会, 2008, pp.289-290

[2] 玄奘の翻訳過程の詳細は、本論 Intro - 3 参照。

よう、巻十一雑蘊第五のところである。

【資料 I 】

有六識身。謂眼識耳鼻舌身意識。五識身唯能起染。不能離染。意識身亦能起染。亦能離染。那落迦趣。傍生趣。祖域趣。斷善根者。邪定性者。北拘盧洲。無想有情心。唯能起染不能離染。不定性者。正定性者。南贍部洲。東毘提訶。西瞿陀尼。諸有情心。亦能起染亦能離染。四大王衆天三十三天。夜摩天。覩史多天。樂變化天。他化自在天。梵世間天。光音天。遍淨天。無想有情。不攝廣果天。及諸中有。諸無色處諸有情心。亦能起染亦能離染。諸隨信行隨法行心。唯能離染不能起染。諸信勝解見得身證心。亦能起染亦能離染。諸慧解脱俱分解脱心。不能起染不能離染。有説。此二亦能離染。就遠分説

〔『識身足論』巻第十一雑蘊第五 T. vol.26, p.582b-c〕

ここでは、まず眼耳鼻舌身意の六識身のどれが起染し（煩悩を起こし）、離染する（煩悩から離れる）かが説かれる。つまり眼耳鼻舌身の五識身はただよく煩悩を起こし、煩悩から離れることができない。またアビダルマ一般で「こころ」そのものをあらわす意識身においては、またよく煩悩を起こし、またよく煩悩から離れることができるとある。さらにはただ煩悩を起こすのみで煩悩から離れることができない諸有情心として、那落迦趣（地獄界の有情）・傍生趣（畜生界の有情）・祖域趣（餓鬼界の有情）・断善根者等があげられ、煩悩を起こすが煩悩から離れることができるものとして不定性者（将来の運命の正邪が不定の者）・正定性者（将来の運命の正邪が正しい者）・南贍部洲等、また四大王衆天・三十三天・夜摩天・覩史多天等があげられている。

よく煩悩から離れることができ、煩悩を起こすことのない心として隨信行（七補特伽羅のひとつ、以下同様）、隨法行の聖なる心が説かれ、聖なる心ではあるけれども、煩悩から離れることができるが、煩悩を起こすことがある心に信勝解・見得・身證の心があげられ、また、慧解脱・俱分解脱の心は煩悩を起こすこともないし、したがって離れることもないと説かれた。

『識身足論』において起染の用語がもちいられるのは、この文脈のみだが、離染の用語についてはさらに、【資料 II 】にあるよう、冒頭の目乾連蘊第一に、目連の説とされる過去未来無体現在無為有体論を三世実有論で破す段でのみもちいられる。もちろん染汚心の現在前の問題であるとか、随眠の随増の問題とか詳細な記述は随所に見られるものだが、これもまた『識身足論』の特徴のひとつと考えられるのである。

【資料 II 】

沙門目連作如是説。過去未來無。現在無爲有。應問彼言。汝然此不。謂契經中世尊善語善詞善説。三不善根。貪不善根瞋不善根。癡不善根。彼答言爾。復問彼言。汝然此不。謂有能於貪。不善根已觀今觀當觀是不善。彼答言爾爲何所觀。過去耶未來耶現在耶。若言觀過去。應説有過去。不應無過去。言過去無。不應道理。若言觀未來。應説有未來。不應無未來。言未來無。不應道理。若言觀現在。應説有一補特伽羅非前非後二心和合。一是所觀。一是能觀。此不應理。若不説一補特伽羅非前非後二心和合。一是所觀。一是能觀。則不應説觀於現在。言觀現在。不應道理。若言不觀過去未來現在。則無能於貪不善根已觀今觀當觀。是不善。若無能觀。則無能已厭。今厭當厭。若無能厭。則無能已離染今離染當離染。若無能離染。則無能已解脱今解脱當解脱。若無能解脱。則無能已般涅槃今般涅槃當般涅槃。如不善如是結縛隨眠隨煩惱纏。所棄所捨所斷遍知亦爾。

〔『識身足論』巻第一目乾連蘊第一 T. vol.26, p.531a-b〕

比較として、『集異門足論』に 1 パラグラフ 3 例、『法蘊足論』に 2 パラグラフ 14 例、『発智論』に 1 例、『婆沙論』に 22 例、『倶舎論』に 7 例ある。

具体的に【資料 III 】にあるよう、『集異門足論』巻第十五では、六諍根を説く段で煩惱を起こすさまが説かれ、また【資料 IV 】『法蘊足論』巻第十二には、ケンダツバの故事と取蘊経に説かれる起染がしめされている。これらは、みな、愛、取、三事和合、觸といった文脈で説かれたものである。

【資料 III 】

六諍根法者。云何爲六。答謂有一類有忿有恨。若有忿恨。便於大師。不能恭敬供養尊重讃歎。若於大師不能恭敬供養尊重讃歎。即不見法。若不見法即不顧沙門。若不顧沙門便起染著。輕弄鬪諍由起染著。輕弄鬪諍爲所依止。令多衆生無義無利受諸苦惱。由此能引無量天人。無義無利諸苦惱事。如是諍根汝等若見。或内或外有所未斷。即應聚集和合精勤。方便求斷無得放逸。汝等應使如是諍根無餘斷滅。如先未起如是諍根。汝等若見或内或外皆悉已斷。即應發起正念正知。猛利之心精勤防護。令當來世永不復起。是爲正斷。善斷諍根如有忿恨。若有覆惱若有嫉慳。若有誑諂若有邪見倒見廣説亦爾。復有一類取著自見。起堅固執難教棄捨。若取著自見起堅固執難教棄捨。便於大師不能恭敬供養尊重讃歎。若於大師不能恭敬供養尊重讃歎。即不見法。若不見法即不顧沙門。若不顧沙門便起染著輕弄鬪諍。由起染著輕弄鬪諍爲所依止。

〔『集異門足論』巻第十五六法品第七之一 T. vol.26, p.431a-b〕

【資料 IV 】

是名受縁愛。復次取蘊經中。世尊又説。苾芻當知。若諸色中。都無味者。有情不應於色起染。以諸色中非都無味。是故有情於色起染。彼以色味受爲縁故。數復於色。隨順而住。由隨順故。數復於色。起貪等貪執藏防護堅著愛染。乃至若諸識中。都無味者。有情不應於識起染。以諸識中非都無味。是故有情。於識起染。彼以識味受爲縁故。數復於識。隨順而住。由隨順故。起貪等貪執藏防護堅著愛染。是名受縁愛。復次六處經中。佛作是説。苾芻當知。我於眼味。已審尋思。諸有於眼。或已起味。或今起味。我以正慧。審見審知。彼以眼味受爲縁故。數復於眼。隨順而住。由隨順故。數復於眼。起貪等貪執藏防護堅著愛染。乃至我。於意味。已審尋思。諸有於意。或已起味。或今起味。我以正慧。審見審知。彼以意味。受爲縁故。數復於意。隨順而住。由隨順故。數復於意。起貪等貪執藏防護堅著愛染。是名受縁愛。復次六處經中。世尊又説。苾芻當知。若諸眼中。都無味者。有情不應於眼起染。以諸眼中非都無味。是故有情。於眼起染。彼以眼味受爲縁故。數復於眼。隨順而住。由隨順故。數復於眼。起貪等貪執藏防護堅著愛染。乃至若諸意中。都無味者。有情不應於意起染。以諸意中非都無味。是故有情。於意起味。彼以意味受爲縁故。數復於意。隨順而住。由隨順故。數復於意。起貪等貪執藏防護堅著愛染。是名受縁愛。復次六處經中。世尊復説。苾芻當知。我於色味。已審尋思。諸有於色。或已起味。或今起味。我以正慧審見審知。彼以色味受爲縁故。數復於色。隨順而住。由隨順故。數復於色。起貪等貪執藏防護堅著愛染。乃至我於法味。已審尋思。諸有於法。或已起味。或今起味。我以正慧。審見審知。彼以法味受爲縁故。數復於法。隨順而住。由隨順故。數復於法。起貪等貪執藏防護堅著愛染。是名受縁愛。復次六處經中。世尊又説。

〔『法蘊足論』巻第十二縁起品第二十一之餘 T. vol.26, p.510b-c〕

Chap. 4 - 4 - 3. 小 結

このように、五感のように外界の認識で働くこころの動きと、内的な意識に働く煩悩との親縁関係が深く見られるのである。前五識心は煩悩を離れることができない、また、三悪趣・断善根者等も煩悩を離れることができない。意識身のみが煩悩を離れることができる。ここでは言及しえなかったが、アビダルマでは四禅でのみ涅槃に入れるが、非想非非想所等ではさとりは得られないとされる。最初期とされるアビダルマでは、心と身体とは不可分の同値の働き（五蘊）と捉えている。しかしながら、このアビダルマ的心と身体の認識は現代においてどのような意味を持つものであろうか。先端生命科学技術の発達において、個の問題において、どこまでが「私」という人格なのか。脳が心なのか、情報パルスが心なのか。諸心起染の問題は、いまなお新しさを失っていないものであるといえるだろう。

Chap. 4 - 5.　大不善地法成立に向けての論理構造試論[1]

Chap. 4 - 5 - 1. 問題の所在

アビダルマと称される初期インド仏教の思想群は、特に説一切有部（sarvāstivādin）の諸論書にみられるよう、その緻密な論理体系から、ともすれば論のための論といった重箱の隅をつつくがごとき煩瑣学という位置づけがなされてきた。それがためにか、日本仏教の伝統解釈、および、その要素を意識的にも無意識的にも引き継いだ日本の仏教学の現状において、いまだにアビダルマ研究とは、仏教における語義解釈、あるいは大乗仏教理解のための補助学にすぎないというような風調が残存している感がある。それにはいくつかの理由をあげることができるだろう。ひとつは周知のように、西暦紀元前後のインドにおいて展開した大乗仏教運動が、これまで主流であった部派仏教をいわゆる小乗仏教と毀謗したことから、中国・日本へと伝播した北伝仏教において、部派仏教の伝統は倶舎学と律においてのみしかほとんど伝わらなかったことにある。そして、より注目すべき要因として以下のことが考えられる。インドとその周辺地域において、すでに歴史時代のかなり早い時期に一般の社会制度として遊行、托鉢といった習俗が確立していた[2]。民衆たちには、仏教の僧侶であろうとバラモンやその他の宗教者であろうと、遊行者・托鉢者であれば、無条件で布施供養をすべきであるという社会通念が日常として受け入れられていた。そのような環境に育まれた仏教が異文化社会に伝播したとき、この仏教僧伽を支えた最も素朴な経済基盤であった、遊行、托鉢を保証した習俗が、他の地域においては簡単には実現できなかった事実を考慮すべきである。歴史上のブッダの行為や生きざまに、その理想的規範の基準をおく初期仏教・アビダルマの受容において、生活スタイルにおいて大きく異なった習俗・価値観をもった社会では、ブッダの行為や生きざまの再現は、そのままでは当然のこと困難であったに違いない。部派仏教が、後の大乗仏教が世界宗教として諸地域に受容されたことに比較して、その意味で固有の民族宗教としての側面を色濃く残すものであったことは否定できない。実際のところ部派仏教は、大乗仏教に対峙する正統イデオロギーとして歴史的に特殊な国家単位で伝播した東南アジア地域を除いて、他の文化圏に広まることはなかった。インド地域で仏教全体が、イスラームの侵入を機に王朝の保護を失うと同時に、ヒンドゥー教社会の秩序に飲み込まれ消滅した歴史からも、それをうかがうことができる。

---

[1] 拙論「初期アビダルマ論書における多変量構造解析――大不善地法成立に向けての論理構造試論」,『法華仏教と関係諸文化の研究　伊藤瑞叡博士古稀記念論文集』, 山喜房佛書林, 2013.2, pp.715-722

[2] 古い研究だが、宗教とインド社会の考察においてとても意欲的なものとして、
Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, II, Hinduismus und Buddhisms, 6., Photomechanish gedruckte Auflage(1. Auflage 1921), J.C.B. Mohr(Paul Siebeck) Tübingen, 1978, SS. V+378

さらにもうひとつの理由として、経（sūtra）の注釈であるアビダルマは、経にたいして様々な解釈を与えるものであるが、その本質として、経そのものを書き換える自由を持つものではない[3] ことである。もちろん、アーガマと呼ばれる経典群自体、部派によりその所存が多様であり、現存する写本が比較的新しいものばかりであることからも、アーガマの増広取捨、経そのものの増広取捨の可能性はありうべきこと[4] であるが、後の大乗経典群の成立や中国その他の地域に生じた偽経典群に比べて、その論理構造自体に大きな制約がある[5] といえる。歴史的に見て、①西暦紀元前後頃、『発智論』の成立から、その注釈とされる『大毘婆沙論』の成立時期と般若経典をはじめ初期大乗とされる経典群、大乗論師の登場、さらには、②4～5世紀頃、アビダルマ理論の新たなる展開としての『倶舎論』『順正理論』の成立と中観・唯識の大乗諸論書の成立は、ほとんど①②それぞれでアビダルマの精緻化と大乗の発展は同時期といっていい程で、おのおの絡まり、おそらく影響しあいながら成立していったという背景がある。いいかえれば、無尽蔵に編まれていった歴史上のブッダの言説に仮託された大乗経典群の成立過程自体が、アビダルマ論書の論書としての正当性を保証するということになったのである。歴史認識のとてもおおらかなインド文化の風土において、時の流れが経典の真偽問題を淘汰していったにちがいない。事実として、大乗経典はインドにおいてブッダの言説として広く認められていったのである。小乗仏教と毀謗された部派仏教は、インドにおける仏教文化の終焉とともに、南伝とされるいくつかの派を除き、西北インド地域に最大勢力を誇ったとされる説一切有部をはじめ、ことごとくが若干の文献を残して歴史から消え去ってしまった。そして周知のとおり、前述のよう北伝ルートにおいて大乗仏教が世界宗教として広まり、中国における教団組織不在の形而上的教相判釈の結果、小乗仏教は大乗仏教の補助学として理論づけられる。また、同様に玄奘三蔵が訳経事業の過程で、唯識思

---

[3] 「たしかに、神的啓示による章句を廃棄する自由を認めている聖典は、コーランをおいてはない」
M. Eliade, *Histoire des Croyances et des Idée Religieuses* 3, Paris, 1983,『世界宗教史III』鶴岡賀雄訳, 筑摩書房, 1991, p.85, この問題においての詳細は、拙論「『法華経』方便思想成立に関する一考察―比較文化論の視点から―」,『日蓮教学教団史の諸問題　松村壽嚴先生古稀記念論文集』, 山喜房佛書林, 2014.3, pp.(53)-(64)

[4] この指摘はとても古くからある。宇井伯壽『佛教思想研究』, 岩波書店, 1943

[5] 周知のとおり、ブッダは対機説法という手法で各人ごとに各人の機根にあわせて法を説いたため、その教えの内容には矛盾した表現が数多く見られる。しかしながら、「ブッダの言説には絶対に誤りはない」との立場から、確かに言語表現上は矛盾しているが、ブッダの真意はこのようなものであるという論理を展開するところに「論蔵」とされるアビダルマの本質がある。この論理構造は、新たなブッダの言説（経）そのものを創作してしまう大乗経典制作運動の立場とは、根本的に対立するものである。歴史上のブッダ本人から在世中に直接聞いた言葉を弟子から弟子へと伝えてきた、言説に絶対的信頼を置くアビダルマ論師たちにとって、おそらく大乗経典なるものは、たとえその内容がどれほど斬新で優れたものであろうと、ブッダの教えとしては決して認められない偽物である。参考として、初期大乗経典である『法華経』にみられる「方便説」は、大乗経典どうしにある矛盾を止揚しようとする論理構造として、アビダルマのそれと同様の構造をもつ。「ブツダの言説には絶対に誤りはない」との主張は、後の「自性清浄心」の教理へと連なるものである。それに対して、イスラームにおける神（アッラー）の「完全に自由、全知、全能である。・・・アッラーは自己矛盾を犯す自由さえもっている」 op. cit., M. Eliade, 1991, pp.96-97 という論理構造を見た場合、アビダルマとしては異質のものであるが、後の天台教学の十界互具の法門「仏のなかに地獄をもつ」という論理と比較してみると考えさせられることが多い。またあらためて論じたい。

想の基礎学問としての倶舎学としてアビダルマ論書を位置づけたことから、日本に冒頭の認識が生じた遠因となったのである。

これまで論じてきたように、新しく自由なかたちで経典を創作し、それぞれについて理論を深めていった大乗仏教思想群にたいして、アビダルマはアーガマの言説をひとつの体系に綜合し、論理づけ、秩序立てることに全勢力を注ぎ込むことになった。本論稿は、このような歴史状況をもつアビダルマの論理構造にたいしてのひとつの試論を目指すものである。

Chap. 4 - 5 - 2. 準備ならびにデータマイニング

そこで、個々のアビダルマ論書のもつ論理の組立て手法とその有効範囲を明らかにする目的で、

(1) ケーススタディとして、後に大不善地法として独立[6] する《無慚 āhrīkya》・《無愧 anapatrāpya》とされる法(dharma)に注目し、それぞれが個々の論書の中でどのように位置づけられているか数理解析をもとに考察する。

(2) そのためテキストとして玄奘訳『集異門足論[7]』・『法蘊足論[8]』・『界身足論[9]』を用い、テキスト上の全ての論説箇所において所出タームのデータマイニングを行う。

(3) 抽出データにコレスポンデンス分析[10] を用い多変量解析を試みる。

という方針にしたがって分析を試みる。

【文脈抽出】

[表1]

Sa1	集異門足論	巻一、二法品第三、無慚	Dr1	法蘊足論	巻一、學處品第一、無慚
Sa2	集異門足論	巻一、二法品第三、無愧	Dr2	法蘊足論	巻九、雑事品第十六、無慚
Sa3	集異門足論	巻一、二法品第三、慚	Dr3	法蘊足論	巻九、雑事品第十六、無愧

---

[6] 大不善地法は、現存の史料には『大毘婆沙論』に初めてみられ、無明・惛沈・掉挙・無慚・無愧の五種が説かれる。その後『雑心論』にいたって前三法が除かれ、無慚・無愧の二法のみに整理されて、『倶舎論』においてそれが定着した。西村実則「有部の法体系における不善法—大不善地法考」『大正大学綜合仏教研究所年報』第二号, 大正大学綜合仏教研究所, 1980, pp.37-45

[7] 『阿毘達磨集異門足論』玄奘訳 T. no.1536, Vol.26, 釋経論部下 毘曇部一

[8] 『阿毘達磨法蘊足論』玄奘訳 T. no.1537, Vol.26, 釋経論部下 毘曇部一

[9] 『阿毘達磨界身足論』玄奘訳 T. no.1540, Vol.26, 釋経論部下 毘曇部一

[10] 多変量解析の手法のひとつで、1970 年代初頭 J.P.Benzécri によって開発された。数量化理論III類と同系列のもので、定性的非連続データをグルーピングすることに有効な多次元データ分析法として知られる。同様に定性的非連続データをカテゴライズするクラスター分析とともに、文化研究の手法として多く用いられている。村上征勝『文化を計る—文化計量学序説』シリーズ〈データの科学〉5, 朝倉書店, 2002

Sa4	集異門足論	巻一、二法品第三、愧	Dr4	法蘊足論	巻十一、縁起品第二十一、無慚
Sa5	集異門足論	巻九、四法品第五、慚愧			
Sa6	集異門足論	巻九、四法品第五、慚愧	Dh1	界身足論	巻上、本事品第一、無慚無愧
Sa7	集異門足論	巻十六、七法品第八、慚	Dh2	界身足論	巻上、分別品第二、無慚無愧
Sa8	集異門足論	巻十六、七法品第八、愧	Dh3	界身足論	巻上、分別品第二、無慚無愧
Sa9	集異門足論	巻十六、七法品第八、慚	Dh4	界身足論	巻上、分別品第二、無慚無愧
Sa10	集異門足論	巻十六、七法品第八、愧			
Sa11	集異門足論	巻十七、七法品第八、無			
Sa12	集異門足論	巻十七、七法品第八、無			
Sa13	集異門足論	巻十七、七法品第八、慚			
Sa14	集異門足論	巻十七、七法品第八、愧			

[表2]

1.二法　2.五法　3.五受根　4.七財　5.七力　6.七非妙法　7.七妙法　8.無慚　9.無愧　10.慚
11.愧　12.如世尊説　13.可慚法　14.可愧法　15.不生慚　16.不生愧　17.惡法　18.不善法
19.順雜染　20.順後有　21.有熾然　22.苦異熟果　23.順當來生老死　24.無所慚　25.有所慚
26.無所愧　27.有所愧　28.無別慚　29.有別慚　30.無別愧　31.有別愧　32.無羞　33.有羞
34.無恥　35.有恥　36.無所羞　37.有所羞　38.無所恥　39.有所恥　40.無別羞　41.有別羞
42.無別恥　43.有別恥　44.無崇敬　45.有崇敬　46.無所崇敬　47.有所崇敬　48.無隨屬
49.有隨屬　50.無所隨屬　51.有所隨屬　52.於自在者有怖畏轉　53.於諸罪中有怖
54.於諸罪中不見怖畏　55.有畏　56.見怖畏　57.不怖　58.不畏　59.慚性　60.愧性　61.無慚性
62.無愧性　63.現前慚性　64.現前愧性　65.不現前慚性　66.不現前愧性　67.随順　68.不随順
69.印可　70.不印可　71.已忍樂　72.不已忍樂　73.當忍樂　74.不當忍樂　75.現忍樂
76.不現忍樂　77.心清浄　78.心不清浄　79.信　80.戒　81.聞　82.捨　83.慧　84.精進　85.念
86.定　87.不信　88.懈怠　89.失念　90.不定　91.悪慧　92.無瞋忿　93.正見　94.邪見　95.樂施
96.離慳貪　97.歓喜　98.迎奉　99.供養　100.恭敬　101.慈　102.悲　103.憐愍　104.不損害
105.無敬性　106.無自在　107.無自在性　108.尋　109.伺　110.識　111.樂根　112.苦根
113.喜根　114.憂根　115.捨根

上記[表1]は、『集異門足論』・『法蘊足論』・『界身足論』の三本のテキスト中において《無慚 āhrīkya》・《無愧 anapatrāpya》の法（dharma）が直接説かれている文脈の出現場所を表にしたものである。『集異門足論』14箇所、『法蘊足論』4箇所、『界身足論』4箇所の文脈を数える。つぎにこれら22箇所の文脈から、そこに論説されるタームをそれぞれ抽出し、重複を除いたものが[表2]の115種類のタームである。

これらSa1～Sa14、Dr1～Dr4、Dh1～Dh4の文脈と、そこに論説された1～115種類のタームによって 2,530 項目のコレスポンデンステーブルを作成する。そしてそれをもとにコレスポンデンス分析を行い、求められた次元1と次元2による対称的正規化の結果として、

［図1］ テキストの行ポイント

［図2］ Val(ターム)の列ポイント

［図3］ 行ポイントと列ポイントの合成

の3種類の分析図が求められた[11]。

要約

次元	特異値	イナーシャ	カイ２乗	有意確率	イナーシャの寄与率		信頼特異値	
					説明	累積	標準偏差	相関 2
1	.965	.931			.118	.118	.009	.567
2	.908	.825			.105	.223	.014	
3	.871	.758			.096	.319		
4	.861	.742			.094	.413		
5	.829	.687			.087	.501		
6	.768	.590			.075	.575		
7	.745	.556			.071	.646		
8	.661	.436			.055	.701		
9	.653	.426			.054	.756		
10	.610	.373			.047	.803		
11	.544	.296			.038	.840		
12	.510	.260			.033	.873		
13	.483	.233			.030	.903		
14	.402	.162			.021	.924		
15	.377	.142			.018	.942		
16	.375	.140			.018	.959		
17	.318	.101			.013	.972		
18	.297	.088			.011	.984		
19	.272	.074			.009	.993		
20	.236	.056			.007	1.000		
総計		7.877	2189.718	.999[a]	1.000	1.000		

a. 自由度2394

[11] 紙面の都合により、コレスポンデンステーブルは省略する。図[1]は p.167 から。

行ポイントの概要 [a]

TEXT	マス	次元の得点 1	次元の得点 2	要約イナーシャ	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 1	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 1	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 総計
Sa1	.076	-.249	.879	.342	.005	.064	.013	.155	.168
Sa2	.061	-.223	.500	.248	.003	.017	.012	.056	.068
Sa3	.076	-.451	.412	.431	.016	.014	.034	.027	.061
Sa4	.068	-.480	.205	.387	.016	.003	.039	.007	.046
Sa5	.047	-.807	-.834	.652	.032	.036	.045	.045	.090
Sa6	.032	-.762	-.712	.560	.019	.018	.032	.027	.059
Sa7	.058	-.548	.000	.155	.018	.000	.108	.000	.108
Sa8	.058	-.551	-.018	.155	.018	.000	.109	.000	.109
Sa9	.058	-.560	-.103	.144	.019	.001	.121	.004	.125
Sa10	.058	-.563	-.121	.144	.019	.001	.122	.005	.127
Sa11	.054	2.404	-1.065	.465	.323	.067	.647	.120	.767
Sa12	.054	2.405	-1.080	.465	.323	.069	.648	.123	.771
Sa13	.054	-.875	-1.696	.409	.043	.171	.097	.344	.442
Sa14	.036	-.985	-2.395	.531	.036	.227	.063	.353	.416
Dr1	.011	1.305	.258	.174	.019	.001	.102	.004	.105
Dr2	.050	-.050	1.735	.636	.000	.167	.000	.217	.217
Dr3	.022	.083	.738	.414	.000	.013	.000	.026	.026
Dr4	.022	.123	.531	.236	.000	.007	.001	.023	.025
Dh1	.022	.934	1.073	.404	.020	.027	.045	.056	.101
Dh2	.029	.945	1.158	.437	.027	.042	.057	.080	.137
Dh3	.011	.895	.904	.174	.009	.010	.048	.046	.094

行ポイントの概要 [a]

TEXT	マス	次元の得点 1	次元の得点 2	要約イナーシャ	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 1	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 1	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 総計
Dh4	.047	.849	.928	.314	.035	.044	.104	.117	.220
合計	1.000			7.877	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

列ポイントの概要 [a]

Val	マス	次元の得点 1	次元の得点 2	要約イナーシャ	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 1	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 1	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 総計
1	.018	-.115	.644	.039	.000	.008	.006	.175	.181
2	.004	.968	1.182	.163	.003	.006	.020	.028	.048
3	.004	.979	1.275	.121	.004	.006	.027	.044	.071
4	.007	-.569	-.010	.055	.002	.000	.041	.000	.041
5	.007	-.582	-.123	.055	.003	.000	.043	.002	.044
6	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
7	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
8	.032	.824	.783	.122	.023	.022	.174	.148	.322
9	.032	.842	.613	.134	.024	.013	.166	.083	.249
10	.022	-.691	-.538	.050	.011	.007	.200	.114	.315
11	.022	-.716	-.711	.056	.011	.012	.191	.177	.368

列ポイントの概要 [a]

Val	マス	次元の得点		要約イナーシャ	寄与率				
					次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		
		1	2		1	2	1	2	総計
12	.032	-.403	.280	.037	.005	.003	.138	.062	.200
13	.007	-.363	.711	.040	.001	.004	.023	.082	.104
14	.007	-.365	.389	.049	.001	.001	.019	.020	.039
15	.004	-.258	.968	.044	.000	.004	.005	.070	.075
16	.004	-.231	.551	.055	.000	.001	.003	.018	.021
17	.032	-.403	.280	.037	.005	.003	.138	.062	.200
18	.036	-.275	.354	.034	.003	.005	.077	.120	.197
19	.029	-.470	.241	.028	.007	.002	.216	.054	.270
20	.029	-.470	.241	.028	.007	.002	.216	.054	.270
21	.029	-.470	.241	.028	.007	.002	.216	.054	.270
22	.029	-.470	.241	.028	.007	.002	.216	.054	.270
23	.029	-.470	.241	.028	.007	.002	.216	.054	.270
24	.007	-.155	1.439	.052	.000	.016	.003	.259	.262
25	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
26	.007	-.073	.682	.106	.000	.004	.000	.029	.029
27	.004	-.498	.226	.049	.001	.000	.018	.003	.021
28	.007	-.155	1.439	.052	.000	.016	.003	.259	.262
29	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
30	.007	-.073	.682	.106	.000	.004	.000	.029	.029
31	.004	-.498	.226	.049	.001	.000	.018	.003	.021
32	.007	-.155	1.439	.052	.000	.016	.003	.259	.262

列ポイントの概要 [a]

Val	マス	次元の得点		要約イナーシャ	寄与率				
					次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		
		1	2		1	2	1	2	総計
33	.011	-.539	.113	.047	.003	.000	.065	.003	.067
34	.007	-.073	.682	.106	.000	.004	.000	.029	.029
35	.011	-.551	.024	.048	.003	.000	.065	.000	.065
36	.007	-.155	1.439	.052	.000	.016	.003	.259	.262
37	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
38	.007	-.073	.682	.106	.000	.004	.000	.029	.029
39	.004	-.498	.226	.049	.001	.000	.018	.003	.021
40	.007	-.155	1.439	.052	.000	.016	.003	.259	.262
41	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
42	.007	-.073	.682	.106	.000	.004	.000	.029	.029
43	.004	-.498	.226	.049	.001	.000	.018	.003	.021
44	.007	-.155	1.439	.052	.000	.016	.003	.259	.262
45	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
46	.004	-.258	.968	.044	.000	.004	.005	.070	.075
47	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
48	.004	-.258	.968	.044	.000	.004	.005	.070	.075
49	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
50	.004	-.258	.968	.044	.000	.004	.005	.070	.075
51	.004	-.467	.454	.044	.001	.001	.017	.015	.033
52	.007	-.259	1.182	.052	.001	.011	.009	.175	.183
53	.004	-.498	.226	.049	.001	.000	.018	.003	.021

列ポイントの概要 [a]

Val	マス	次元の得点		要約イナーシャ	寄与率				
					次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		
		1	2		1	2	1	2	総計
54	.004	-.052	1.911	.068	.000	.014	.000	.176	.176
55	.004	-.498	.226	.049	.001	.000	.018	.003	.021
56	.007	-.643	-.279	.075	.003	.001	.038	.007	.045
57	.004	-.052	1.911	.068	.000	.014	.000	.176	.176
58	.004	-.052	1.911	.068	.000	.014	.000	.176	.176
59	.004	-.906	-1.867	.063	.003	.014	.045	.181	.226
60	.004	-1.020	-2.636	.096	.004	.028	.037	.236	.273
61	.004	2.491	-1.173	.063	.023	.005	.341	.071	.413
62	.004	2.492	-1.189	.063	.023	.006	.342	.073	.415
63	.004	-.906	-1.867	.063	.003	.014	.045	.181	.226
64	.004	-1.020	-2.636	.096	.004	.028	.037	.236	.273
65	.004	2.491	-1.173	.063	.023	.005	.341	.071	.413
66	.004	2.492	-1.189	.063	.023	.006	.342	.073	.415
67	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
68	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
69	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
70	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
71	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
72	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
73	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
74	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878

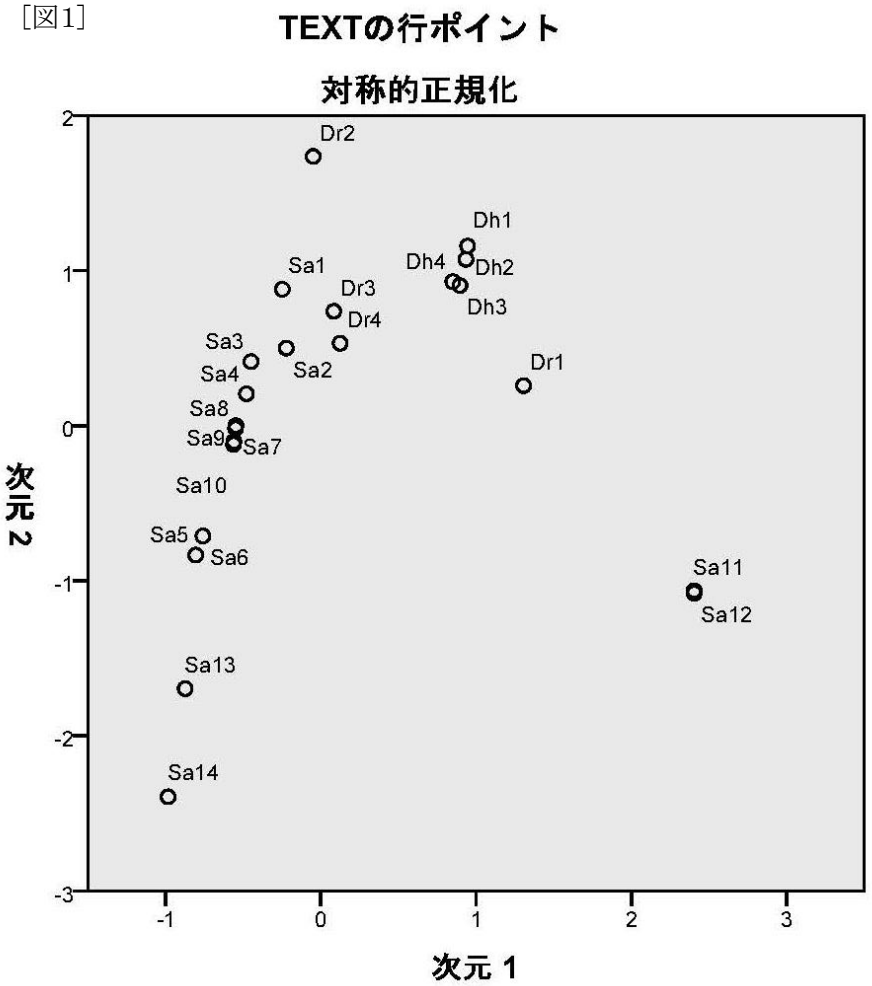
列ポイントの概要 [a]

Val	マス	次元の得点		要約イナーシャ	寄与率				
					次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		
		1	2		1	2	1	2	総計
75	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
76	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
77	.007	-.963	-2.252	.076	.007	.040	.085	.435	.520
78	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
79	.022	-.674	-.509	.044	.010	.006	.215	.115	.330
80	.014	-.691	-.431	.064	.007	.003	.104	.038	.142
81	.011	-.658	-.313	.057	.005	.001	.080	.017	.097
82	.007	-.569	-.010	.055	.002	.000	.041	.000	.041
83	.018	-.642	-.427	.045	.008	.004	.158	.066	.223
84	.014	-.715	-.724	.061	.008	.008	.116	.112	.228
85	.011	-.690	-.705	.053	.005	.006	.093	.092	.185
86	.011	-.690	-.705	.053	.005	.006	.093	.092	.185
87	.011	1.954	-.447	.059	.043	.002	.671	.033	.704
88	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
89	.011	2.112	-.692	.145	.050	.006	.321	.032	.353
90	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
91	.007	2.492	-1.181	.059	.046	.011	.725	.153	.878
92	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
93	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
94	.004	.128	.585	.163	.000	.001	.000	.007	.007
95	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071

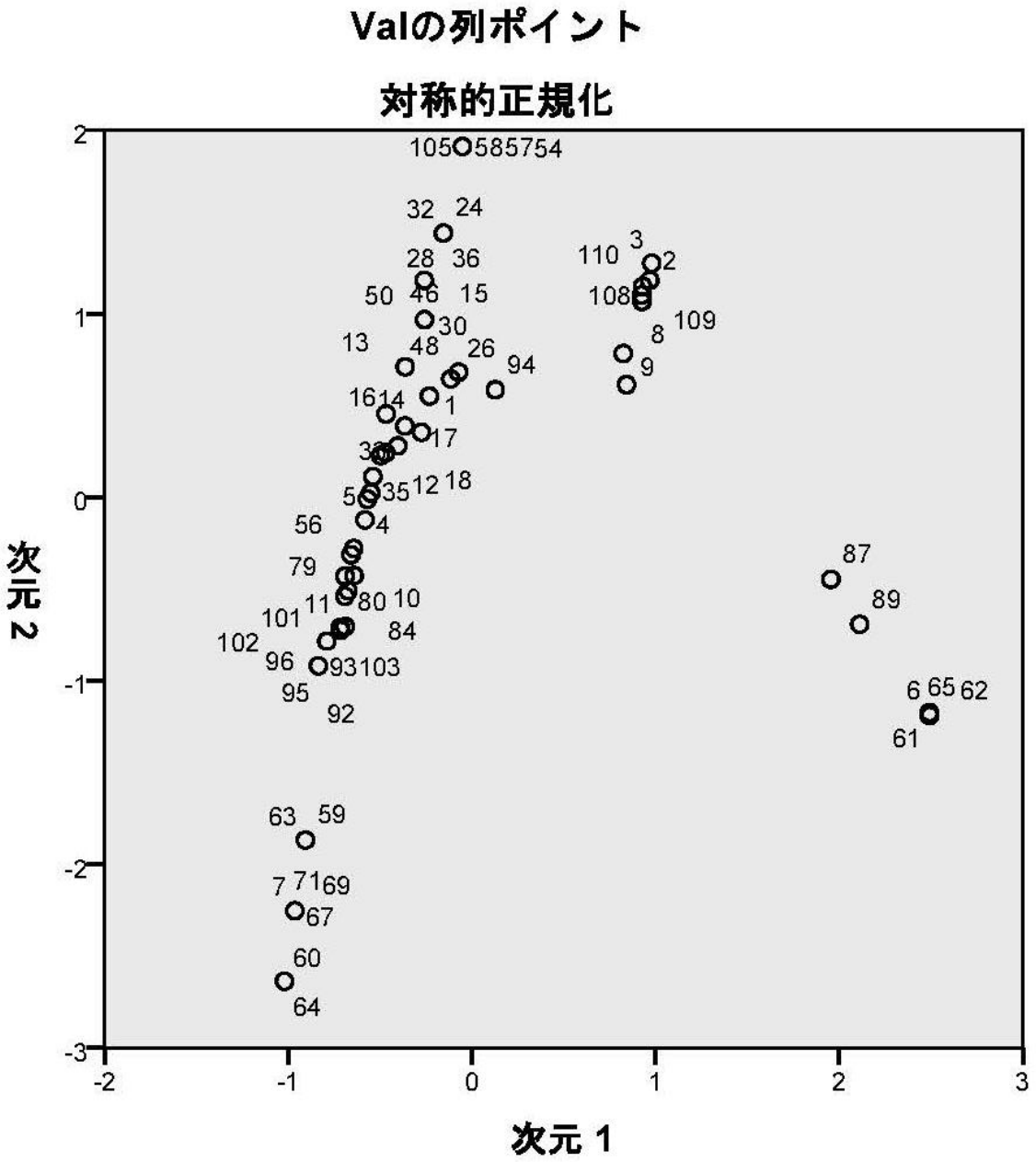
列ポイントの概要 [a]

Val	マス	次元の得点 1	次元の得点 2	要約イナーシャ	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 1	寄与率 次元のイナーシャに対するポイント 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 1	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 2	寄与率 ポイントのイナーシャに対する次元 総計
96	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
97	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
98	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
99	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
100	.004	-.836	-.919	.073	.003	.003	.033	.038	.071
101	.004	-.789	-.784	.108	.002	.002	.020	.019	.039
102	.004	-.789	-.784	.108	.002	.002	.020	.019	.039
103	.004	-.789	-.784	.108	.002	.002	.020	.019	.039
104	.004	-.789	-.784	.108	.002	.002	.020	.019	.039
105	.004	-.052	1.911	.068	.000	.014	.000	.176	.176
106	.004	-.052	1.911	.068	.000	.014	.000	.176	.176
107	.004	-.052	1.911	.068	.000	.014	.000	.176	.176
108	.007	.924	1.102	.115	.006	.010	.052	.069	.121
109	.007	.924	1.102	.115	.006	.010	.052	.069	.121
110	.011	.925	1.066	.182	.010	.014	.049	.061	.111
111	.007	.930	1.149	.094	.006	.010	.064	.092	.156
112	.007	.930	1.149	.094	.006	.010	.064	.092	.156
113	.007	.930	1.149	.094	.006	.010	.064	.092	.156
114	.007	.930	1.149	.094	.006	.010	.064	.092	.156
115	.007	.930	1.149	.094	.006	.010	.064	.092	.156
合計	1.000			7.877	1.000	1.000			

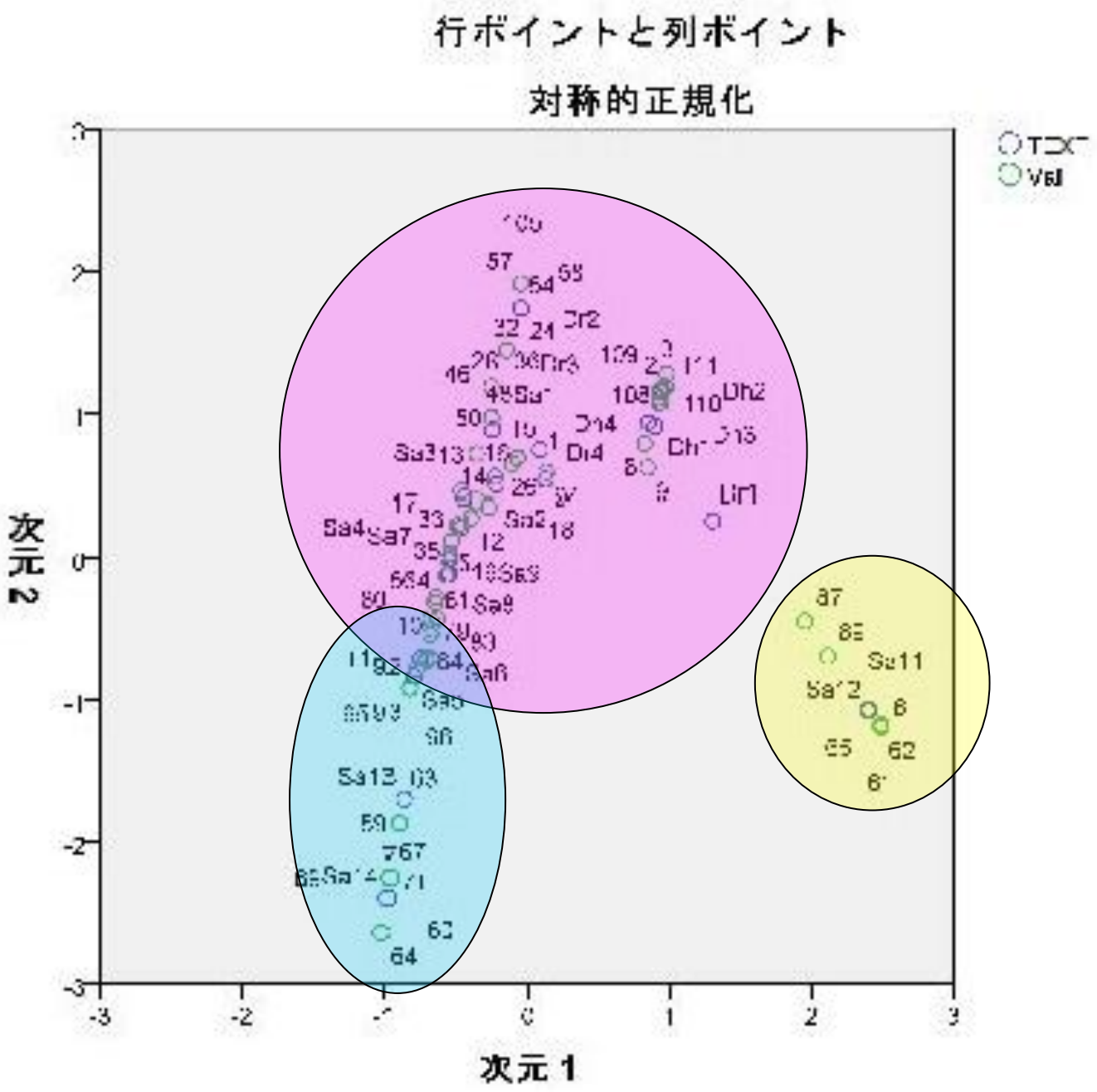
［図1］



［図2］


Valの列ポイント
対称的正規化
次元 2
次元 1
2
1
0
-1
-2
-3
-2
-1
0
1
2
3
105 58 57 54
32 24
28 36
50 46 15
30
13 48 26
94
16 14 1
17
12 18
35
56 4
79
11 80 10
101
84
102
96 93 103
95
92
110 3 2
108
109
8
9
87
89
6 65 62
61
63 59
7 71 69
67
60
64

[図3]



Chap. 4 - 5 - 3. コレスポンデンス分析結果

コレスポンデンス分析の結果は、[図1]から読み取れるよう Dh1～Dh4 の『界身足論』のテキストの傾向はかなり収束しており、ほとんどひと塊に集まっている。それを囲むように Dr1～Dr4 の『法蘊足論』のテキストの傾向がある。しかしながら、それでも『法蘊足論』の差分の幅は短く、Dr2・Dr3 の「巻九、雑事品第十六」と Dr4 の「巻十一、縁起品第二十一」のテキストの傾向にたい

して、Dr1「巻一、學處品第一」のテキストの傾向とは距離をおいている。それらとは対照的に Sa1～Sa14 の『集異門足論』のテキストの傾向は、様々な場面に拡散しているのがみえる。当然のことにも思えるが、Sa1～Sa4「巻一、二法品第三」、Sa5・Sa6「巻九、四法品第五」、Sa7～Sa10「巻十六、七法品第八」のテキストの傾向は各々収束しているが、Sa11・Sa12「巻十七、七法品第八、無慚・無愧」と Sa13・Sa14「巻十七、七法品第八、慚・愧」のテキストの傾向はお互い大きく距離をおき、『集異門足論』の他のテキストの傾向とも、『法蘊足論』・『界身足論』のテキストの傾向とも大きく距離をおいている。さらには『法蘊足論』のテキストの傾向を中心にして、『界身足論』のテキストの傾向と『集異門足論』「二法品・七法品」のテキストの傾向が反対位置に対峙していることなどが[図1]から読み取れるであろう。

同様に[図2]からは、

（ｉ） 24.無所慚・27.有所愧・28.無別慚・32.無羞・33.有羞・35.有恥・36.無所羞・40.無別羞・44.無崇敬・52.於自在者有怖畏轉・54.於諸罪中不見怖畏・57.不怖・58.不畏・105.無敬性・106.無自在・107.無自在性

（ⅱ） 1.二法・12.如世尊説・13.可慚法・14.可愧法・15.不生慚・16.不生愧・17.惡法・18.不善法・19.順雜染・20.順後有・21.有熾然・22.苦異熟果・23.順當來生老死・25.有所慚・26.無所愧・29.有別慚・30.無別愧・31.有別愧・34.無恥・37.有所羞・38.無所恥・39.有所恥・41.有別羞・42.無別恥・43.有別恥・45.有崇敬・46.無所崇敬・47.有所崇敬・48.無隨屬・49.有隨屬・50.無所隨屬・51.有所隨屬・53.於諸罪中有怖・55.有畏・94.邪見

（ⅲ） 2.五法・3.五受根・8.無慚・9.無愧・108.尋・109.伺・110.識・111.樂根・112.苦根・113.喜根・114.憂根・115.捨根

（ⅳ） 4.七財・5.七力・10.慚・11.愧・56.見怖畏・79.信・80.戒・81.聞・82.捨・83.慧・84.精進・85.念・86.定・92.無瞋忿・93.正見・95.樂施・96.離慳貪・97.歓喜・98.迎奉・99.供養・100.恭敬・101.慈・102.悲・103.憐愍・104.不損害

（ｖ） 7.七妙法・59.慚性・60.愧性・63.現前慚性・64.現前愧性・67.随順・69.印可・71.已忍樂・73.當忍樂・75.現忍樂・77.心清浄

（ⅵ） 6.七非妙法・61.無慚性・62.無愧性・65.不現前慚性・66.不現前愧性・68.不随順・70.不印可・72.不已忍樂・74.不當忍樂・76.不現忍樂・78.心不清浄・87.不信・88.懈怠・89.失念・90.不定・91.悪慧

境界上のものが多くあり分けにくいものもあるが、数理上大きくは以上のように5パターンのタームグループに分類可能であるだろう[12]。これらのデータをふまえ、テキストの行ポイントの結果とタームの列ポイントの結果を合成したものが[図3]である。

[図3]からは、

(1) 収束している Dh1～Dh4 の『界身足論』のテキストの傾向及び Dr1『法蘊足論』のテキストの傾向においては、(ⅲ)グループ〔2.五法・3.五受根・8.無慚・9.無愧・108.尋・109.伺・110.識・111.樂根・112.苦根・113.喜根・114.憂根・115.捨根〕との相関が強くみられる。

(2) また Dr2『法蘊足論』のテキストの傾向は、(ⅰ)グループ〔24.無所慚・27.有所愧・28.無別慚・32.無羞・33.有羞・35.有恥・36.無所羞・40.無別羞・44.無崇敬・52.於自在者有怖畏轉・54.於諸罪中不見怖畏・57.不怖・58.不畏・105.無敬性・106.無自在・107.無自在性〕との相関が強い。

(3) Dr3・Dr4『法蘊足論』のテキストの傾向は、Sa1～Sa10『集異門足論』のテキストの傾向とともに、(ⅱ)(ⅳ)グループと強い相関をもつ。細かく見れば、Dr3・Dr4『法蘊足論』のテキストの傾向と Sa1～Sa4『集異門足論』のテキストの傾向は、(ⅱ)グループと、Sa5～Sa10『集異門足論』のテキストの傾向は、(ⅳ)グループとの相関を示している。

(4) Sa11・Sa12『集異門足論』のテキストの傾向は、(ⅵ)グループ〔6.七非妙法・61.無慚性・62.無愧性・65.不現前慚性・66.不現前愧性・68.不随順・70.不印可・72.不已忍樂・74.不當忍樂・76.不現忍樂・78.心不清浄・87.不信・88.懈怠・89.失念・90.不定・91.悪慧〕と強い相関を示す。

(5) Sa13・Sa14『集異門足論』のテキストの傾向は、(ⅴ)グループ〔7.七妙法・59.慚性・60.愧性・63.現前慚性・64.現前愧性・67.随順・69.印可・71.已忍樂・73.當忍樂・75.現忍樂・77.心清浄〕と強い相関を示す。

(6) 以上(1)～(5)を踏まえたうえで、現実には、[図3]に図示したよう3パターンの重複した形での相関を考えたほうが有意性が高いと考える。

コレスポンデンス分析において、最初期とされるアビダルマ論書の不善法(慚愧)の論説から上記のような論理構造が読み取れるだろう[13]。

---

[12] 項目数が多く、図上では重なって示せない項目については、資料は省略せざるをえないが、行・列ポイントの次元得点により分類した。

[13] 『法蘊足論』巻第九、雑事品第十六(T. no. 1537, Vol.26, p.494c)には、不還を得す永断の一法として無慚、無愧など 80 の法を挙げる。

Chap. 4 - 5 - 4. 小　結

初期の仏教において、いわゆる「七仏通誡偈」を引用するまでもなく、善をなし、悪（不善）をなさないことが仏教の根本であることが説かれる。説一切有部の論書のうち、現存する最古層のひとつであり、ブッダの教説をはじめて体系だてて論じたものとして知られる『法蘊足論』は、その冒頭の「学處品第一」においてウパーサカの五学處（いわゆる五戒）を説く。部派仏教においてブッダの最高の真理とされる四諦八正道に導く前提として、最初に、ごく平凡な一般の人々に向けて、とるべき行為を示したものである。まさにこのことこそが、「善をなし、悪（不善）をなさない」ということを象徴するのであるが、その不善の判断基準として無慚無愧の法門がたてられるのである。実際、今回資料として扱った論書につづく『発智論』では、「無慚納息」の章がたてられ無慚無愧についていっそう深く論じられる。この「自らの行為を省みて恥じる心の動き（慚）」と「自らの行為を他にたいして恥じる心の動き（愧）」という心象が、まずはじめにあって、それ無しには煩悩を断つことなどできないという主張こそがここにあるのである。この無慚無愧の法門の論理は、他に超越神などを想定することなく、自らが《さとる》ことによってのみ、自らが《仏》になりうる、という仏教の根本理念をあらためて考えさせてくれるものである。

Conclusion:　初期アビダルマ論書における多変量構造解析

― 結論と展望とによせて ―

Conclusion: 初期アビダルマ論書における多変量構造解析
——結論と展望とによせて

Conc. 1 - 1. 思想史における非連続と連続[1]

Conc. 1 - 1 - 1. 問題の所在

これまで仏教思想を取り扱うにあたって、術語・概念等の形成・変容過程の描出を意味する《思想史》研究の手法が一般に敷衍されてきた。その有効性に対して、《思想》という極めて個人的、また、ある意味において自己完結的な表象を時系列の軸線上に据え直した《思想史》という作業において、それぞれの事象を比較検討することには細心の注意が必要であることは幾度となくいわれてきたことである。特に、他の思想分野に比べ宗教的価値体系を基底におく仏教思想の場合、その述語・概念等が時代背景や作者の著述意図を超えて、無意識的にも同一もしくは単一のものへと収斂されてしまうという構造をもつものであるということが指摘できよう。例えば、《縁起》・《空》・《仏》・《菩薩》といった術語を一瞥しただけで、その内包する意味内容が時代、地域、所属学派、あるいは個人によって異なるであろうにもかかわらず、ともすれば何の論証もまたずに、他の術語間のそれ以上に同質のものであるという暗黙の同意がなされてしまうのである。そしてその同意の背景には、以下に詳述する《連続性》の概念が潜むことが見い出される。本論稿は思想史研究のより有効な方法論として、従来無批判に想定されてきた思想史における連続性の容認という現状から、《非連続性》というキーワードを承認することによって、テキストをありのままのテキストとして、遡及的仮説・形式的類比・意味論的相似等に対して宙吊りにしておくことが可能となることを提示する。[2]

---

[1] 拙論「思想史における非連続と連続——『発智論』『大毘婆沙論』所出の異部宗」，平楽寺書店、『仏教を如何に学ぶか—』日本仏教学会編，2001, pp.65-82

[2] 具体的なケーススタディとして、【補-1】付論「『大毘婆沙論』見蘊見納足遡及の外道と異部」に資料をまとめた。この付論では、アビダルマ研究の一分野としての異部宗（部派の相異）の問題を『発智論』・『大毘婆沙論』という相関したテキストから、①術語の悉皆（全数）調査、②ひとつの部派の論理ではどのような整合性をもって異なる主張をもつものを異部宗となしたかに着目し、アビダルマの特性である有機的思考態を踏まえた、現象としての異部宗に対して論理的帰結としての異部宗を考察する。そこにおいて、固有名詞の悉皆調査の概要と見蘊見納息遡及の異部宗の資料か

そしてこの《非連続性》の概念を受け入れることによって、おそらく本来テキストの持つ、独立したテキストの境界を浮き彫りにすることが可能となる。そこにはじめて、異なる時代のテキスト間における同一用語の比較考察が意味を持つものになることが考えられるのである。 先走って言葉を選ぶなら、この論稿自体の構想が《非連続性》の概念を基底として成立しているといっても差し支えない。

Conc. 1 - 1 - 2. 思想史というカテゴリーにおける《非連続性》と《連続性》の問題

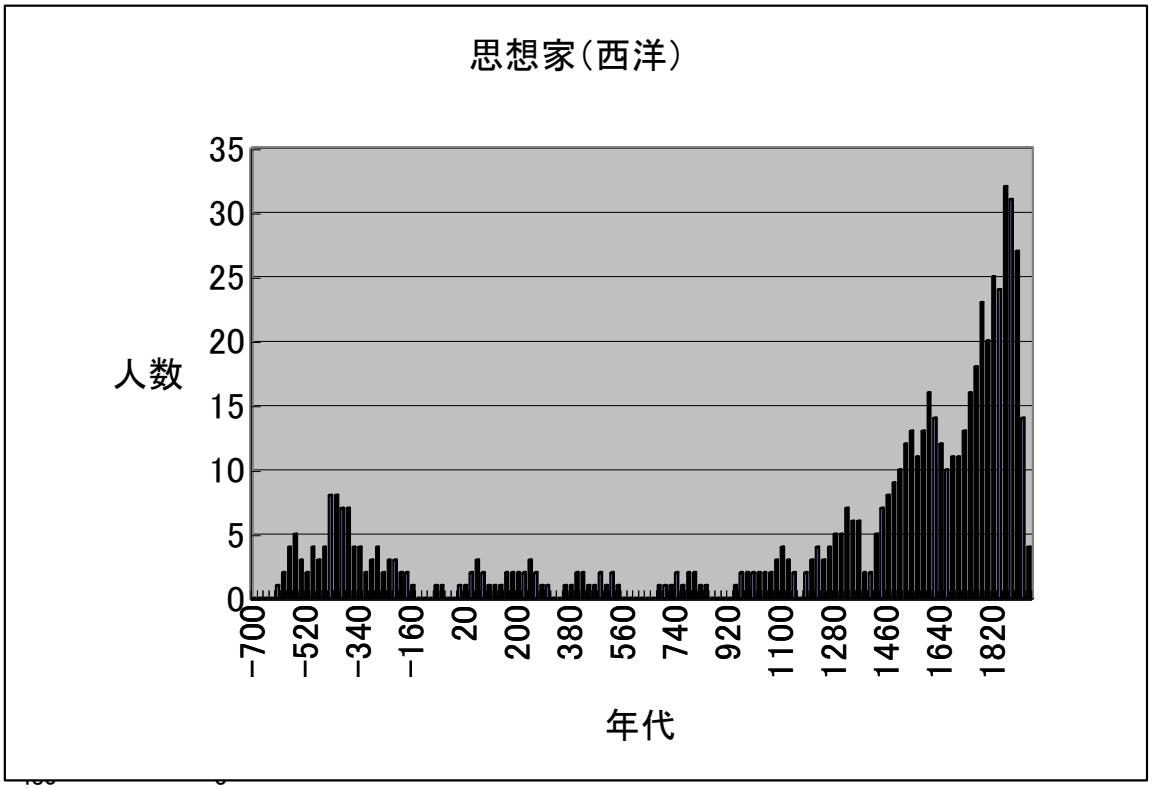
様々な術語、概念、あるいはテキストを取り扱う際に、一般にある思想が“発展”するとか“進化”するという視点を想定した場合、それは一見歴史的整合性を踏まえた問題の設定のように思われるが、実のところ何ものをも保証するものでないことが見てとれる。例えばテキストにおいて、確かに後代の著作は前代の著作を参照して創られるし、そのうえ大部分の経典・律・論書等は、一時に成立したものではないとされる。たとえ、一論師の名が冠されているものであっても、正確に全てのテキストがその著者に帰せられるものであるかどうかについては、十分吟味されねばならないことは論を待つまでもないだろう。テキストは時系列の軸線上に成立する。だからといって、時系的に後に書かれてある思想が、前に書かれてあるものにたいして、その背景が等質のものであるとか、あるいは歴史としての時代精神のようなものの混入であるとか、といった判断とは遠く隔絶されたものである、という溝を埋める手だてをひとつも提供するものではないことは明白である。

はじめにひとつの試みとして〔Graph Ⅰ〕〔Graph Ⅱ〕に載せたのは、「思想家の生存年代重複グラフ」と名づけたもので、Aという思想家が生きていた時期とBという思想家が同じく生きていた時期、その重なった時期の回数を年ごとにカウントしたものである。対象として、明らかに画家・文

ら、テキストに焼き付けられた語の存在条件を示し、その事象の境界を明らかにすることを目的とする。また、悉皆調査における既存のデータベースとその利用における問題点をも指摘する。特に付論では、導出のプロセスに論述の重点を置くものとした。

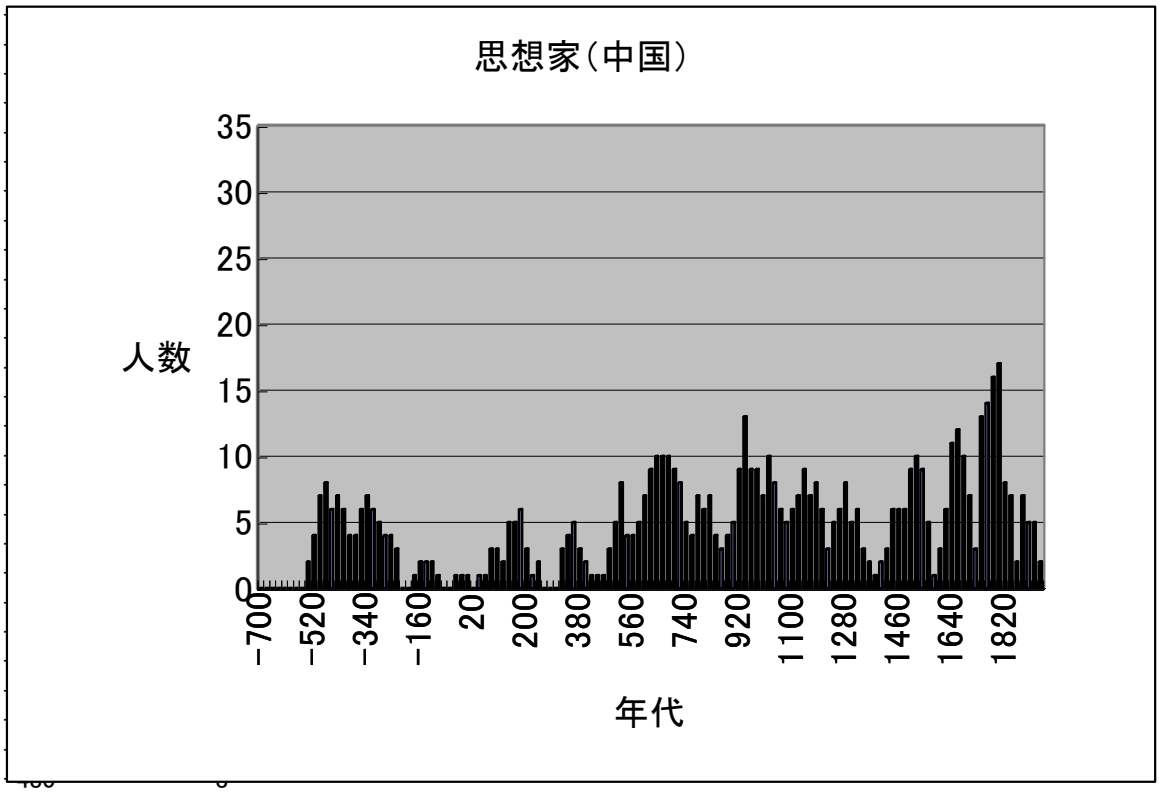
学者・音楽家といった人たちを除いた哲学者・宗教家等を幅広く数え、没年しかわからない者は一様に単純に－20 年したところから起算した[3]。生没年が比較的記録されている文化圏として西洋〔Graph Ⅰ〕と中国〔Graph Ⅱ〕の2つの文化圏を選び、それぞれ西洋 190 人、中国 205 人からデータを抽出し、20 年おきにB.C.700 年からA.D.1945 年以前に没した人々までをプロットしたのがこのグラフである。横軸に年代、縦軸にその年に生存していた思想家の人数を表わしている。

〔Graph Ⅰ〕 思想家の生存年代重複グラフ　　西洋：190 人



[3] 出典になるべく公平をきすため複数の専門辞典などを避け、より一般に広く利用されている『世界史年表・地図』（吉川弘文館,2000）のみから作成した。

〔GraphⅡ〕 思想家の生存年代重複グラフ　　中国:205 人



これらのグラフは非常に大局的な視点からのものであるが、とても興味深い幾つかの特徴を認めることができる。〔Graph Ⅰ〕の右側の出現率が高いのは、近代以降の記録及び思想の成果が西洋文化圏に偏っていることを表わしている。そして特に注目すべきは、〔Graph Ⅰ〕〔GraphⅡ〕共に規則的な山がはっきり認められるということ。これらからは著名な思想家達が一様に歴史に登場しているのではなく、ある時期に、ぽつぽつと非連続に固まって出現している事実が見て取れる。くわえて何より特徴的なことは、これらの山の間隔、つまり幅が非常に似通っているところにあるだろう。西洋も中国もほとんど同様な山と幅をもつものとなっている。この幅はおよそ 100～170,180 年ぐらいの間隔を示している。この期間は人の世代に置き換えると、4～5世代くらい。多く見積もって6世代。7世代までにはならないのではないかという期間であると推定できる。現実に4世代同居が可能であることから、この期間というのは、真ん中にある人物を挿んだとすれば、その前後、当人同士は直接知ることはなくとも、その真ん中の人物はお互いに直接相手を見知っ

ているであろうという、非常に短い期間であるといえるのである。これらのことを踏まえて、今一度《思想史》という問題を問い直してみると、例えば古典ギリシャ、諸子百家の時代、あるいはルネッサンス等々の百花繚乱の思想家の時代が、実は非常に期間もしくは世代の短い、ひとつの固まった時代であったものであることが確認される。これらの思想家たちはグラフの示す通り、およそ同時代を生きているのである。

仏教学のフィールドに着目すると、これら《思想史》の取り扱い方から、例えば“原始佛教からアビダルマ佛教へ”、“初期アビダルマ思想から後期アビダルマ思想へ”、“小乗佛教から大乗佛教へ”等々という既存の表現は、およそ注意が必要である。これらの文脈は同様に、一見歴史的整合性を踏まえた問題設定のように思われるが、やはり実のところ何ものをも保証するものでないことが理解できる。つまりここにも、ある思想が“発展”するとか“進化”するという無意識的にも底流に潜まされたいくつかの意味概念が内包されている。まず、そこには一つの方向性をもち、一様な座標をもった時間軸が想定される。そして連続性の適用、同一性、過去の原点の設定、未来の統一への希求、等々が暗黙のうちに、無批判に含意されるのである。そこではまた、思想史における非連続性、特殊性、インフレーション的時間系、未来の統一への青写真の放棄、等々をも同時に考慮に入れなければならない問題として提起されねばならないことが忘れ去られている。本来テキストの存在は、最低限そのテキストに記述されたということの確認にすぎないものである。

“ブッダ[4] の思想”といった表現も多義である。宗教という視点からすれば、一切智者である佛[5]の言説は一言一句もらさず信解し、その深い意味を汲み取らなければならない。実際に佛弟子たちはブッダの時世以来そうしてきたし[6]、現在でもそれは変わることはない。世俗においての解

---

[4] ここでは便宜的に、歴史上の個人であるGautama Siddhārthaに“ブッダ”の語を、思想・宗教上の概念として“佛”の語を使い分ける。

[5] e.g. 以一切種所知法性甚深微妙。非佛世尊一切智者。誰能究境等覺開示。〔『大毘婆沙論』巻 1 序 T. vol.27, p.1a〕

[6] e.g. 答世尊在世於處處方邑。爲諸有情以種種論道。分別演説阿毘達磨。佛涅槃後或在世時。諸聖弟子以妙願智。随順纂集別爲部類。〔『大毘婆沙論』巻 1 序 T. vol.27, p.1b〕

釈の違いこそあるものの、勝義としての佛の真理は普遍のものである。それはブッダの成道とともにこの世界に示され、ひとつとして欠けるものなく完成しており、その思想として付け加えるものも、隠されたものもないとされる[7]。そこでは“信”の体系の文脈での解釈がおこなわれ、本来静的(スタティク)な思索となる。ところが、それを思想史として位置づけた場合の、佛の側でなく私たちの側での“知”の体系としての文脈による解釈は、動的(ダイナミック)な要素としての前述の発展・進化のドグマに正面から対峙するものと考えられる。

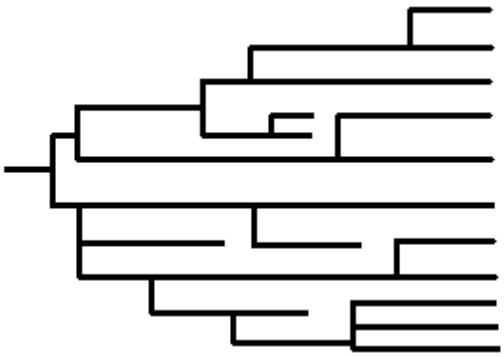
特にアビダルマ研究において、これまでの多くの諸先学の研究は、およそアプローチとして連続性を受け入れたことから、テキストから作者の言わんとする意図を汲み取ろうと、テキストの行間に秘められた思考を模索し、その背後にある体系を再構築しようと試みたものであった。それは例えば、アビダルマ思想における諸部派説のように、現存する限られた資料をあまねく渉猟し、その中から諸部派名を冠する記述あるいは関連項目を摘出し、比較考察することによって各部派の立脚する思想を再構成することを目的とした。しかしながら、現存資料の絶対量の不足、またインド文化特有の歴史年代の記述の欠如等々の問題からも、結果はいまだ十分だとはいいきれるものではないことが確かに指摘できるだろう[8]。そしてなにより、それらは無意識的にも想定された連続性の容認から、ともすれば成立時代、成立地域、著者、著者の属した立場などの異なるテキスト間に現れた同一名の固有名詞をそのまま同義のものと判断し、分析するといった危険を犯しているのである。――いうまでもなく例えば、いったい『集異門足論』の説一切有部と、『発智論』の説一切有部。また、『婆沙論』、Kv.、『雑心論』、『倶舎論』、AKVy.、TA.、ADV.、『異部宗輪論』の説一切有部などが同義、もしくは同一線上の歴史的に発展したものだと本当にいえるのであろうか。あるいは比較に付すための根拠、あるいはその保証をいったい何処に求めているのであろうか。いわんや情報量の極めて少ない他の部派においておやである。

---

[7] cf. DN.a. Mahā-Parinibbāna-suttanta. ie. 2. 25. p.100.

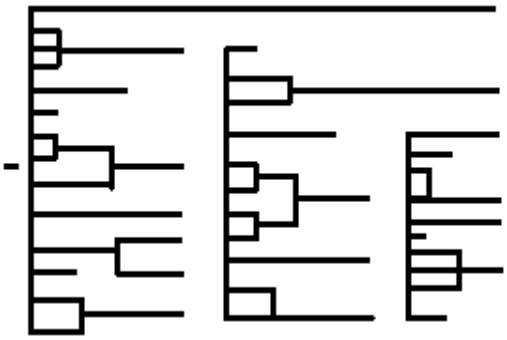
[8] インド一般に受け入れられた輪廻思想において、生き物は死後49日目には何がしかの世界に生まれ変わると信じられている。この思考形態からは、例えば一人においては進化・発展のダイナミズムを考えることが可能であるが、総体としてはあくまで静的な変化の無い世界観となる。アビダルマ特有の時間論については、See. Chap. 4-2., 拙論「三世実有と現在有体過未無体―時空座標解釈からの一つの試み」(『仏教学』41, 1999)

〔fig.1〕**連続性モデル**



→ Time

〔fig.2〕**非連続性モデル**



→ Time

〔fig.1〕に、従来の連続性の概念のモデルを図示したものを載せる。この連続性のモデルでは、一つの起点から時間の経過に従って、そのものを原点として系統図の様に枝葉が分かれていき、多様なものへと展開していくさまを表現している。例えば、この起点が歴史上のブッダとしたなら、そこから始まる仏教というものが時間とともに分派し、見解を異にしたことから、多数の部派や宗派に分裂していく様子を表わしたものである。ここで特徴的なことは、このモデルにおいて時間は一様に同じタイミングで時を刻んでいるということである。さらに、それぞれ連続しているということから時間を遡れば必ずその起点、この場合には、例えばどこか途中の時点からでも、ある種の操作を行なえば根源のブッダの思想へと遡れることを暗黙のうちにも了解していることを意味している。

これに対して、〔fig.2〕に非連続性の概念のモデルを提示する。この非連続性モデルは、連続性モデルと同様に起点は確かに一つなのであるが、次の瞬間に、まず可能な限りのヴァリエーションが同時期に一斉に出現することを示すものである。以後、連続性モデルのように枝分かれする場合もあるが、全体としてはある有力なものへと収束化、あるいは洗練化されていく過程を想定している。これはニュアンスとして経済学にいう収穫逓増の原理モデルに非常に近いもので、ある一定のラインを超えた企業は加速度的に肥大化する、金持ちはより金持ちに成り、しがない貧乏人はいつまでもそのままであるという原理モデルである。また、この収束・洗練化は、必ずしも論理的に正しいものへと収束するとは限らない。もちろん収束のためへの何がしかの選択が行なわれるわけであるが、その基準は論理性では決してなく、情報の受け手の存在において、流行と

いう受容者側の態度に起因すると考えられる。

〔fig.2〕という二次元の図表では表現し切れないものであるが、この非連続性モデルの時間軸は連続性モデルとは異なり、一様のものではなく、インフレーション的時間軸を想定している。現実の歴史において、ある重要な事件・変革がとてつもなく短期間になされることがある。例えば、20世紀末に起ったソビエト連邦の崩壊、東西ドイツの統一、南北朝鮮問題などの政治的事件は、いまから思えばほんの少し前までほとんど予測がつかなかったものばかりである。これらの歴史事象としてのインフレーション的時間系を思想史においても想定することが、思想史のダイナミズムに、より適合するであろうことが指摘できる。

最後に、この非連続性モデルは、始点に遡ることが不可能であるということを示したい。1回目のヴァリエーションの場合、起点が一つであるから遡及可能なようにも思われるかもしれないが、2回目のヴァリエーション以降はもはや不可能である。2回目のヴァリエーションの一本の軸が1回目のヴァリエーションのどの軸の後継者であるか、複数であるか、ひとつであるのか、特定する保証がまるでできないのである。現実にはこのヴァリエーションの数ももっと多く、かつ、非連続の階層ももっと様々な形で絡み合っているものと予測される。いま流行の言葉でいうなら、これらは複雑系のモデルとして提示できるかと思われる。

整理すると、非連続性モデルの特徴は、

◎ 非連続性であること

◎ 過去の原点の設定と未来の統一の放棄

◎ インフレーション的時間系の導入

◎ 遡及的仮説・形式的類比・意味論的相似等の棚上げ

◎ 情報の受容者の存在の確認

◎ テキストの特殊性の承認

などをあげることができる。

思想史において、この非連続性モデルをとる有効性は情報の受容者の存在の確認にある。思想という極めて個人的な作業は、口伝であれ書写であれ、テキストとして他者に示された場合、

極論としてその受け手の数だけヴァリエーションが生じる。そして、そのテキストがどのように解釈されるかは、受容者サイドの事柄として記録されていくのである。連続性モデルの場合は、どちらかといえば思想そのもの――それ自体テキストの特殊性という壁が存在するにもかかわらず――、いいかえれば受容者不在のままに、無造作に、各々を比較考察してしまう危険がある。こうした作業は思想史という概念とは本質的には異質のものであるはずである。

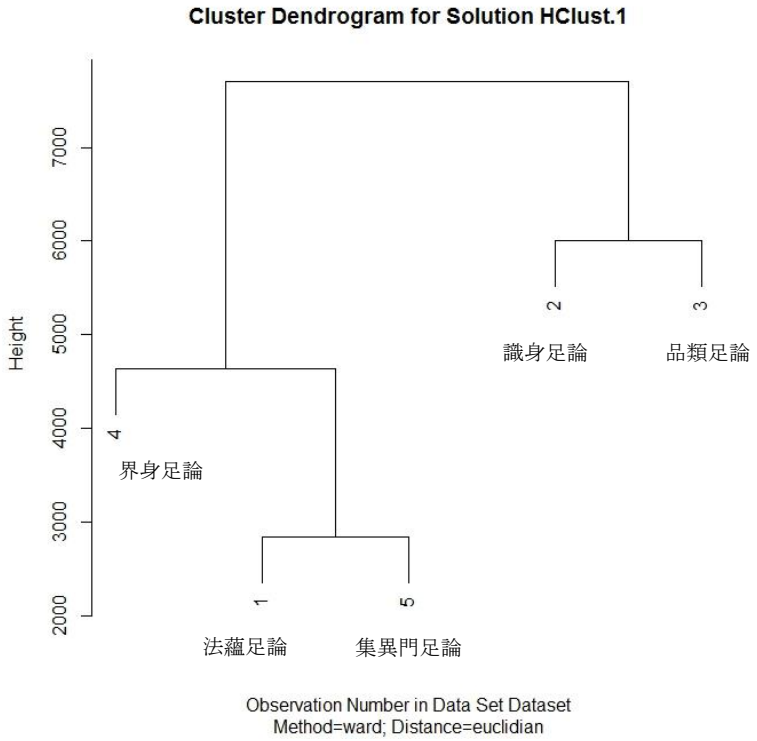
Conc. 1 - 1 - 3. 小　結

これらを仏教学、特に、部派分派のモデルとして考えると、まずブッダがいて、同様に次の時点では受容者側の問題として、おそらく可能な限り多数のタイプのヴァリエーションが生まれる。誤解を恐れずにいうなら、現在最初期の仏教とされているタイプの思想だけでなく、一般に後の大乗仏教や密教といわれるもののもととなるようなもののあらゆる要素までもが、あるいは、はたして仏教と名づけてよいのか判らないようなものの要素までが、ブッダの在世中という一時期に、ブッダの教えの名のもとに同時に存在した可能性を否定できない。換言すれば、そのヴァリエーションの存在を承認することの方がより自然な解釈のように思われる。それらのうち、時代のニーズに適合しなかったものは、次の世代へと受け継がれることはなく消え去り、またあるものは強力に支持者を獲得していく。生き残った思想は、より洗練され緻密さを加えていく。そしてある時期が来ると、生き残ったもののどれか、あるいは複数、もしくは他の原因からの影響で再び爆発的に多数のタイプのヴァリエーションが生まれる。それらは限りなく非連続的であり、特殊であり、これらの複合的システムが部派分派の構造だといえるのである。

Conc. 1 - 2. クラスター解析にみる初期アビダルマ論書

Chap. 3 - 1. で5論書の同一語を抽出した際、そのデータにクラスター解析をかけた。データは、資料編 クラスター解析結果及び Data 参照のとおりである。『法蘊足論』『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』の5論書すべてにわたって同一に出現した語句の全部について多変量解析を行ったものであり、クラスター解析[1] は、機械的にその語句の出方の近似性を整理する手法で、文化情報学の分野ではとてもオーソドックスな手法である。

図[A] 5 論書 クラスター解析結果 1



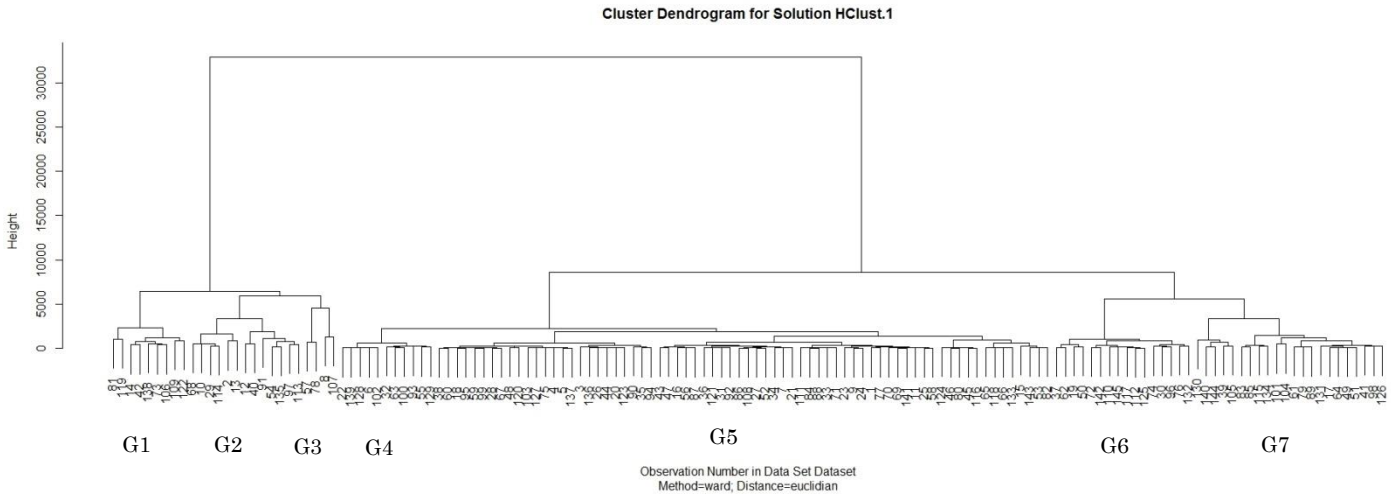
図[A]のデンドログラムにおいて 1:法蘊足論、2:識身足論、3:品類足論、4:界身足論、5:集異門足論であるが、この結果は、1:法蘊足論と5:集異門足論、2:識身足論と3:品類足論、4:界身足論は、1:法蘊足論と5:集異門足論のカテゴリーであるが別系統であるという、従来仏教学で言われてきた結果が、機械的分類の手法においても同様に確認されたことを意味する。

その結果の軸を反転させた結果が、図[B]のデンドログラムである。

---

[1] 村上征勝著『文化を計る 文化計量学序説―』, シリーズ〈データの科学〉5, 朝倉書店, 2002, pp.39-45

図[B] 5 論書 クラスター解析結果 2



とても細かい図表であるので、同じく資料編 クラスター解析結果及び Data に載せておいた。図[A]の結果を生む基となったデータであるが、詳しくみると左から、(上段は No. 下段は語句)

〔グループ1〕

81	119	14	42	138	73	106	109	122
是	名	於	此	爲	諸	彼	不	有

〔グループ2〕

68	10	29	114	2	13	12	40	91
所	因	及	亦	或	縁	云何	故	相應

54	135	97	113
識	攝	智	法

〔グループ3〕

57	78	8	107
若	心	謂	非

〔グループ4〕

22	139	128	6	102	32	63	100	93
眼識	爲縁	理	意識	如理	苦	集	道	即

55	129
捨	離

〔グループ5〕

38	60	18	95	59	99	28	67	48
現	趣	解脱	大	取	天	義	出離	事

120	103	127	75	4	5	137
問	念	欲	勝	依	意	樂

3	136	26	44	20	123	90	35	94
以	斷	起	作	皆	有情	相	慧	他

43	47	16	56	87	36	121	31	92
根	思	果	邪見	染汚	結	唯	俱	増上

86	108	27	52	34	7	21
舌	鼻	疑	耳	空	異	眼

111	84	88	33	71	23	9	24	1
不善法	精進	善法	具	所有	眼觸	一切法	眼觸所生受	愛

77	70	69	141	11	25	58
信	所生	所起	瞋	因縁	喜	寂靜

124	46	80	45	116	65	118	66	133
有身見	伺	尋	三界	無明	十二處	無爲	十八界	對

15	143	53	82
何	觸	自	性

〔グループ6〕

37	62	19	50	72	142	110	145	117
見	修	界	爾	所攝	蘊	不善	轉	無漏

112	125	74	30	96	76	132
分別	有漏	除	業	知	色	處

〔グループ7〕

130	140	144	39	105	83	85	115	134
了別	當	貪	言	能	生	説	無	已

101	104	61	79	89	131	17	64	49
如	乃至	受	身	想	令	我	住	時

51	41	98	126
而	行	定	由

といった結果である。語句には概念だけではなく、漢文特有の助詞や接続詞も含まれており、また例えば「我」というのは概念としての「我」なのか、もしくは「私」の意味の我であるか、「定」というのは禅定をあらわすのか、あるいは「定んで」の意味なのかは、機械的抽出であるので、厳密なものではない。それでも「精進」とか「不善法」はかなり限定された語句であるので、大量のデータの場合は誤差を考慮に入れても、一定の結果は有意であるだろう。

実際、概念と漢文特有の助詞や接続詞となりうる語句は、適宜分かれているかのようにみえている。それを踏まえて考察すると、5 論書同一の語句はどれも基礎的な概念であり、それは最初期の論書の特徴であるかもしれない。

Conc. 1 - 3.　ネットワーク分析結果よりみた初期アビダルマ論書の論理構造

あたりまえのことを、あたりまえにトレースする。文献学においては、テキストに記述されている以上のことは取り扱わないことが原則である。しかしながら、仏教典籍のように長期間にわたって成立したものとされ、また、個人の読解では限りがあるような膨大なテキストにたいして、どのように対峙したらいいかが、この研究の発端である。様々な時代によって増広され、また綱要書が編まれたアビダルマ文献群において、その論理性のみが基準となる。なぜなら最低限テキスト内において論理性を保てぬものは論書として残りえないからである。本来ひとつのテキスト内で完結するはずの論理が、他のテキストに対してどのような作用をもたらすであろうか。この視点でもって、本論稿は個別の論書のもつ、論理の構造形式を明らかにすべく努力したものである。

アビダルマ論書最古層のひとつである『法蘊足論』において、Chap. 2 で論じたケーススタディ〔I〕～〔V〕で示したネットワーク図そのものが、『法蘊足論』の論理構造を表わしている図表となる。ケーススタディ〔I〕の 12 枚のネットワーク図が表わすように、同一の概念に対する解釈の違いが理解できるだろう。また、その解釈の違いを際立たせるためにケーススタディ〔II〕で作成した複数概念のネットワーク図は、ケーススタディ〔III〕の全概念ネットワーク図とともに、『法蘊足論』における「愛染」概念のおおよその形が理解できる。

一方ケーススタディ〔IV〕で試みた論理概念ネットワーク図は、『法蘊足論』の「初静慮」概念における論理展開の構造様式を浮き立たせるものである。ケーススタディ〔V〕の全概念ネットワーク図とともに、『法蘊足論』における「初静慮」概念の全貌をみることができるであろう。

また、同様に『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』にたいしても、コンテキストデ

ータベースを構築し、Chap. 3 でネットワーク図の作成をおこない、比較考察を試みた。テキスト間における論理構造の違いは、その語句の意味範囲を限定することが見て取れる。『倶舎論』のような後代のテキストとは大きな違いを読み解くことができるであろう。

その結果、個別テキストにおける論理構造の把握にひとつのモデリングを提示できたように考える。この手法の結果は、テキスト記述のすべてを網羅するものであり、テキストに記述されていないものはひとつも含まないことを想定しているものである。

ネットワーク分析の図表そのものが、論理構造を浮き立たせているものであるが、今回はほんの小さな成果であることには変わりがない。ネットワークグラフを比較するうえで、目視においては限界があり、余り項目数を増やしてしまうとごちゃごちゃして形状が分からなくなってしまうのである。しかしながら、データのレベルではすべて揃っているのであるので、表現手段の方法を考える、あるいは、プログラミング等で自動的に判別できるようにする工夫が必要であるだろう。

初期アビダルマ論書は、思った以上に論理的にコンピュータになじむテキストに思える。コンピュータ機器の発達をふくめ、ようやく一歩を踏み出した程度の所であろうか。

Conc. 1 - 4. アビダルマ研究の今後の課題

アビダルマ研究は、もはや新テキストの発見か重箱の隅をつつくようなマイナーな研究しかなく、いいかえれば研究されつくされた感がいなめなかったが、実際のところまだまだ若い学問であることが見て取れる。既存の一部のテキストでさえ、本研究でなされたような再構成が可能である。また、非連続系という考え方も思想史においては重要に思える。従来の著名な研究を再認識するためにも、このような、テキストの範囲を厳密に確認する作業はしなければならないことと考える。今回は六足論という最初期の論書を取り扱ったが、『集異門足論』など、もう一回丁寧に考えなければならない。この研究と手法がもう少し整理されれば、もちろん『倶舎論』『順正理論』『発智論』『大毘婆沙論』のような大部の論書での全体的活用が可能であろう。また、今回は漢文典籍を取り扱ったが、コーパス資料としてサンスクリット語典籍、チベット典籍が活用可能ならば、すぐに転用できるものばかりである。コンピュータは基本的に言語体系を問わないものだからである。今回ははじめての開発ばかりであったので、手間がずいぶんかかってしまったが、コンピュータシステ

ムのもうひとつの特徴であるツールの再利用並びにシステムの進化によって、おそらく加速度的な研究成果も考えられるかもしれない。どちらにせよ、テキストをテキストのとおりに判断し、その事実の上に研究を重ねていくという基本的スタンスに、新しいツールと方法を提供できることを心から願ってやまないものである。

【補 - 1】付論、『大毘婆沙論』見蘊見納足遡及の外道と異部

【補-1】『発智論』・『大毘婆沙論』所出の異部宗[1]

今後、恐らく飛躍的に活用されるであろうコンピュータを利用した仏教学研究の分野では、特に、前述の非連続性モデル適用の必要性が重要である。なぜなら、大量のデータ解析から得られた結果は、ともすればテキストの特殊性を覆い隠してしまう可能性があるからである。しかしながら、十分注意された、また、きちんと確立された手法に基づくデジタルデータの活用は、これまで個々人の手作業ではとても見ることのできなかった領域に到達可能となる。

表に[A]載せたのは、これまで公開されているテキスト・データベースから検索したものの結果である[2]。この数値は単純にその単語の出現回数を示している。また資料[A]には、これまで研究されてきた、部派の教理として何回出現したものであるかを参考として引用する[3]。このような、大正新脩大蔵経にして1000ページ以上もの、膨大なテキストの全ての単語にわたる悉皆(全数)調査のデータは、そのテキストの境界を示す指針となるものである[4]。

表[A]

『阿毘達磨発智論』		『阿毘達磨大毘婆沙論』	
大衆部	0	大衆部	11

---

[1] 拙論「思想史における非連続と連続――『発智論』『大毘婆沙論』所出の異部宗」, 平楽寺書店、『仏教を如何に学ぶか―』日本仏教学会編, 2001, pp.65-82

[2] 『発智論』はSAT(大蔵経テキストデータベース研究会, 代表委員下田正弘), 2000-06、『大毘婆沙論』は瑜伽行思想研究会(開設責任者早島　理),1998-9公開のデータベースを利用。『大毘婆沙論』は検索語が2行にまたがった場合に検索不能となるため独自の検索プログラムを開発、使用。

[3] cf. 加藤純章(1989) pp.70-72. 川村昭光(1978) pp.168-169. 金倉圓照(1955) pp.55-69.

[4] ここで最も重要なことは、テキスト・データベース自体の信頼性の問題である。今回利用したSAT、瑜伽行思想研究会作成のデータベースにおいても誤入力の問題がある。現行のコンピュータの場合、入力ミスがあると検索にかからない可能性が非常に高い。また大正新脩大蔵経自体の誤植、区切りの問題、しいてはテキストクリニックの問題もある。従来の書籍での目視による確認では、研究者自身に確認の機会があるが、コンピュータ検索はその可能性すらない。データベースそのものがまだ作成途上のものであるためいたしかたのないことであろうが、その信頼性を評価する基準を設けるシステムの必要性が何より望まれるものである。また、異体字を含む複雑な漢字フォントの問題、台湾・韓国等のデータベースとの国家間における文字コードの相異による文字化け等、技術的なレベルでの未解決問題が指摘できるだろう。

犢子部	0	犢子部	17
法密部	0	法密部	7
化地部	0	化地部	3
飲光部	0	飲光部	3
經部	0	經部	4
譬喩者	0	譬喩者	89
分別論者	0	分別論者	125
（分別論師）	0	（分別論師）	3
（分別論宗）	0	（分別論宗）	4

資料［A］

『大毘婆沙論』全体…譬喩者86回、分別論者約50回、犢子部は13回、大衆部は7回、法密部は4回、飲光部3回、化地部は2回、經部は2回

ところで、このようにして得られたデータをもとに、そのまま部派の思想を論じることの妥当性の尺度が本論稿の関心事である。テキスト・データベースが広範囲に入手可能となった現在では、そのテキスト・データベースの信頼性の評価及び検索手法のレベルの提示[5]を前提として、今後、用語・用例の悉皆調査結果[6]を論文に掲載することが必須条件となることが予想される。少なくとも、そのテキストで使用された術語・概念を全てピックアップすることには、それだけで重要な意味があることはいうまでもない。しかしながら、それらをそのまま比較考察することには、まさに連続性のトラップへと身を投じてしまう危険をはらむのである。これらのことを踏まえて、ここではそのテキスト独自の、そのテキストに具わる論理的構造としての術語・概念の使用法を浮き上がらせるための手法として、厳密なかたちでテキストの記述から遡れる概念とその枠組をトレースすることを試みる。そしてテキストに書かれていることを書かれているがままに受止め、その記述された背景に隠された意味を問うのではなく、何故その記述が現われ、何故他のいかなるものも

[5] 全文一致検索の他に、あいまい検索、もしくは独自の検索技術を使用したかで検索のヒット率が異なる可能性がある。特に、サンスクリット語・パーリ語のように語形変化の複雑な言語において顕著である。悉皆調査の場合データベースの信頼性に加えて検索の信頼性の評価の基準づくりが必要である。

[6] 本来、辞書の編纂は事例・用例集づくりであるといえる。したがって、あるテキストの術語の悉皆調査結果は、そのテキストにとっての、索引であるだけでなく完全な辞書づくりに他ならない。

その場所を占め得ないのかを問題とする。そのテキストにおける概念の限界と、そこに記述されねばならなかった語の存在条件を示すことを目的とするものである。

ケーススタディとしてテキストを厳密に区切り、『大毘婆沙論』巻198～200の見蘊第八中、見納息第五[7]に説かれる「諸外道の諸見趣と其の對治道の論究」[8]において、『大毘婆沙論』の作者が外道説を破するためとした論拠を摘出し、『大毘婆沙論』における異部宗、あるいは異部宗とせざるを得なかった根拠を探る。そして、それはそのまま『大毘婆沙論』という出来事における異部宗と外道の境界、換言すれば、『大毘婆沙論』なるテキストが自ら正統を任ずる佛教の限界を浮き彫りにしようとするものである。なお、この研究自体は以前他の学会で報告[9]したので詳細は譲るとして、今回その手法をトレースすることに主眼をおくことにするものである。

『大毘婆沙論』見蘊見納息[10]は、大きく以下の三つのパートに分類される。

Ⅰ．	諸外道の見解学説	T. vol.27. pp.987c-996b
Ⅱ．	諸見趣の五種分類及び六十二見論	T. vol.27. pp.996b-1002b
Ⅲ．	諸見趣の断常二見分別及び見納息総括	T. vol.27. pp.1002b-1004a

Ⅰ．諸外道の見解学説では、ブッダ在世中の六師外道・婆羅門教哲学の所説をはじめとして、これまで説かれてきた諸種の異見異説を個別に35例あげ、その自性・對治・等起を述べる。

これらを自性・對治において整理すれば、

---

[7] T. vol.27, pp.987c-1004a

[8] K. 毘曇部vol.17. p.118 の章題を援用。

[9] See. 拙論「『大毘婆沙論』見蘊見納息遡及の外道と異部」(『宗教研究』71-4-315, 1998)

[10] cf. 対応個所として、『発智論.』見蘊第八中見納息第五 T. vol.26. pp.1027b-1029b 『八・度論.』阿毘曇見・度見跋渠第五 T. vol.26. pp.913a-914c

表［B］

謗因邪見	【1】【3】【4】【8-c】【9】【11】【13】【14】【19】【21】
謗果邪見	【2】【3】
謗道邪見	【5】【7】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】
謗滅邪見	【6】
邊執見斷見の攝	【8-a】【24】
邊執見常見の攝	【8-b】【15】【22】【23】【28】【32】
非因を因と計する戒禁取	【16】【17】【18】【20】
有身見	【25】【26】【27】
劣法を取りて勝となす見取	【29】【30】

表［C］

見苦所斷	【2】【3】【8-a】【8-b】【15】【16】【17】【18】【20】【22】【23】【24】【25】【26】【27】【28】【29】【30】【31】
見集所斷	【1】【3】【4】【8-c】【9】【11】【13】【14】【19】【21】
見滅所斷	【6】
見道所斷	【5】【7】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】

となる。

Ⅱ. 諸見趣の五種分類論及び六十二見論では、Ⅰ. において個別、もしくはある人物・学派の主張とされているものを、総論として論理的に整理・分類しようと試みた外道論が展開される。はじめに、五種分類論【Ⅱ-1～5】、次に、【α】遍常論 4.【β】一分常論 4.【γ】無因生論 2.【δ】有邊等の論 4.【ε】不死矯乱論 4.【ζ】有想論 16.【η】無想論 8.【θ】非有非無想論 8.【ι】断滅論 7.【κ】現法涅槃論 5. の六十二見論が述べられる。

Ⅲ. 諸見趣の断常二見分別及び見納息総括では、Ⅰ. Ⅱ. をもって見蘊における外道説の定義と提示をおこなったのち、その各々に対して“有見”(bhavadiṭṭhi, bhavadṛṣṭi) ＝ 常見と“無有見”

(vibhavadiṭṭhi, vibhavadṛṣṭi)＝断見の二見に分類する。

表［D］

常見	【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【15】【16】【17】【18】【20】【22】【23】【25】【26】【27】【28】【29】【30】【32】【33】【35】【Ⅱ-1】【Ⅱ-2】【Ⅱ-3】【Ⅱ-5】【α】【β】【δ】【ε】【ζ】【η】【θ】【κ】
断見	【8-a】【9】【10】【11】【12】【13】【14】【16】【17】【18】【19】【20】【21】【24】【33】【Ⅱ-4】【Ⅱ-5】【γ】【ι】

しかし、およそのものは、「有るが説く」として断常二品に入ると述べられる。つづいて命者と身との関係における見の断常分別がおこなわれ、最後に総括として見蘊の総まとめである、色・心等が断見でも常見でもない理由が説かれて『大毘婆沙論』は終わる。

これらの分類を参考にして、個別に異部宗教義との接点の抽出を試みる。はじめに、“謗因・謗果の邪見”（【1】【2】【3】【4】【8-c】【9】【11】【13】【14】【19】【21】）とされる所説においては、等起の有説などとして、主に［a］因果論、［b］三時業、［c］中有の存在についての3つの論点から考察される。そこからは、

表［E］

［a］因果論において、

諸外道	3	［a-1a］［a-5d］［a-6a］
譬喩者	6	［a-1b］［a-2a］［a-4a］［a-5a］［a-6b］［a-6c］[11]
阿毘達磨論師	1	［a-2b］
相似相續沙門	2	［a-3a］［a-4c］
外國諸師	1	［a-3b］
迦濕彌羅國諸論師	1	［a-3c］
分別論者	1	［a-4b］
大衆部	1	［a-5b］
飲光部	1	［a-5c］

[11] 但し、［a-6c］は「譬喩尊者」とある。

［b］三時業において、

譬喩者	1	［b-1a］
阿毘達磨論師	1	［b-1b］

［c］中有の存在についてにおいて、

分別論者	2	［c-1a］［c-3a］
應理論者	1	［c-1b］
譬喩者	2	［c-2a］［c-3a］
阿毘達磨論師	1	［c-2b］

などの諸説が見られる。次に同様に、“謗道・謗滅の邪見”（【5】【6】【7】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】）とされる所説においては、等起の有説などとして、主に［a］擇滅論、［b］學・無學、及び四沙門果についての2つの論点から考察される。これらからは、

表［F］

［a］擇滅論において、

譬喩者	1	［a-1a］
分別論者	1	［a-1b］

［b］學・無學、及び四沙門果についてにおいて、

犢子部	1	［b-1a］
分別論者	4	［b-1b］［b-1e］［b-2a］［b-3a］
涅槃轉變論者	1	［b-1c］
涅槃決定論者	1	［b-1d］
譬喩者	2	［b-3b］［b-4a］
大徳	1	［b-4b］

などの諸説。次に同様に、“邊執見常見の攝と邊執見断見の攝”（【8-a】【8-b】【15】【22】【23】【24】【28】【32】）、“有身見”（【25】【26】【27】）、及び“六十二見”（【α】【β】【γ】【δ】【ε】【ζ】【η】【θ】【ι】【κ】）

とされる常見と断見の所説においては、等起の有説などとして、主に[a]四相論、特に刹那と轉變、[b]無有愛(vibhavatṛṣṇā)についての2つの論点から考察される。

表[G]

[a]四相論、特に刹那と轉變において、

譬喩者	3	[a-1a][a-1g][a-2a]
分別論者	2	[a-1b][a-1g]
法密部	2	[a-1c][a-1g]
相似相續沙門	2	[a-1d][a-1g]
經部師	2	[a-1e][a-1g]
轉變外道	1	[a-2b]
疑を生ずるもの	1	[a-1f]

[b]無有愛について、

分別論者	2	[b-1a][b-1b]

などの諸説。最後に、“非因を因と計する戒禁取”(**【16】【17】【18】【20】**)、“劣法を取りて勝となす見取”(**【29】【30】**)とされる所説においては、等起の有説などとして、主に[a]宿作及び自在の変化、[b]現法涅槃論についての2つの論点から考察されるが、それに直接対応する外道もしくは異部宗の名の冠される諸説は見い出すことができない。

以上、資料のアウトラインを述べただけのものであるが、これらから指し示された

見蘊見納息遡及…譬喩者15回、分別論者12回、犢子部1回、大衆部1回、
法密部2回、飲光部1回、化地部0回、經部2[12]回

というデータは、『大毘婆沙論』見蘊見納息というテキストに焼き付けられたひとつの対象領域を見て取れるものである。これらの手続きを踏むことによって、単に名称、もしくは個別の教理の羅列ではなく、『大毘婆沙論』というテキストの、限定された、ひとつの論理的帰結としての異部宗の境界、並びに語の存在条

[12] 説としては1回。

件を提示可能に考えるものである。

むすび

仏教研究の方法論的反省という共同テーマに寄せて、これまでどうしても納得し切れなかったテキストの取り扱い手法に、自分なりの何がしかの方法論を摸索してみた。非連続性モデルは、ひとつのアプローチとして、思想史の構築に極めて有効なキーワードに考える。また、個々のテキストを共通化・平均化のもとにぼやかしてしまう不合理には、誰もが、いま一度真剣に対峙しなければならない課題である。ブッダの教えの捉え方は様々である。弟子として、宗教として捉える。あるいは哲学、思想として捉える。そして、教えの受け手サイドの人々の営みとして思想史として捉える。人文科学の一分野としての仏教学は、その意味でもまだ若い分野である。なんとなれば、思想家の生存年代重複グラフのひとつの山にも満たないのであるから。

資料【Ⅰ】

[A] 阿毘達磨の三蔵における地位

阿毘達磨性相所顕。謂阿毘達磨中應求諸法眞實性相。不應求彼次第縁起。‥阿毘達磨是無畏等流。‥分別諸法自相共相是阿毘達磨。‥相続已成熟者令得正解脱故説阿毘達磨。‥依超作意位説阿毘達磨。‥已受持学處令通達諸法眞實相故説阿毘達磨。是故三蔵亦有差別。

〔『婆沙論』巻1 序 T. vol.27, pp.1c-2a〕

[B] 阿毘達磨の自性

答無漏慧根。以為自性一界一處一蘊所攝。‥此中何者甚深阿毘達磨。謂無漏慧根‥謂空無我及如實覺。‥謂滅定退及如實覺。‥謂因縁性及如實覺。‥謂因縁性及彼寂滅并如實覺。‥謂諸見趣及如實覺。‥謂一切法性及如實覺。

〔『婆沙論』巻1 序 T. vol.27, pp.2c-3b〕

[C] 発智論の勝利、その相

答随順解脱断除繋縛。順空無我違我我所。顕無我理遮數取趣。開覺意息昏迷。遣愚痴生智慧。断疑網與決定。背雑染向清浄。訶流轉讃還滅。捨生死得涅槃。摧破一切外道邪論。成立一切佛法正論。

〔『婆沙論』巻1 序 T. vol.27, p.4c〕

[D]

契經既是此論依處。彼所不顕示者。今應廣分別之。由是因縁故作斯論。

〔『婆沙論』巻2 雑蘊・世第一法納息 T. vol.27, p.5b〕

資料【a- a】『阿毘達磨大毘婆沙論』見蘊見納息[13]の構成

Ⅰ．諸外道の見解学説

【1】 無施與無愛樂無祠祀　T. vol.27. p.987c

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

『婆沙論.』[14]…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī[15]

『長阿含.』[16]ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[17]ḷPūraṇa Kāśyapa

【2】 無妙行悪行果　T. vol.27. p.987c

自性…謗果邪見　對治…見苦所斷

『婆沙論.』…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī

『長阿含.』ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[18]ḷPūraṇa Kāśyapa

【3】 無此世無他世無化生有情　T. vol.27. p.988a

自性…謗因或は謗果邪見　對治…見集所斷或は見苦所斷

『婆沙論.』…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī

---

[13] cf. 対応個所として、『発智論.』見蘊第八中見納息第五 T. vol.26. pp.1027b-1029b『八・度論.』阿毘曇見・度見跋渠第五 T. vol.26. pp.913a-914c

[14] 以下、特に断らない限り　qtd.『婆沙論.』巻200. T. vol.27. p.1002b 、また、六師外道名の読みは Pāli. DN.Sp.による。

[15] DN.Sp.においてアジタの説はuccheda-vāda（断滅論）として、
‘Evaṃ vutte bhante Ajito Kesa-kambalī maṃ etad avoca: "N’ atthi mahā-rāja dinnaṃ n’ atthi yiṭṭhaṃ n’ atthi hutaṃ sukaṭa-du kkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko, n’ atthi ayaṃ loko n’ atthi paro loko, n’ atthi mātā n’ atthi pitā, n’ atthi sattā-opapātikā, n’ atthi loke samaṇa-brāhmaṇā sammaggatā sammā-paṭippannā ye imañ ca lokaṃ parañ ca lokaṃ sayaṃ abhiññā sacchikatvā pavedenti. Cātum-mahābhūtiko ayaṃ puriso, yadā kālaṃ karoti paṭhavī paṭhavi-kāyaṃ anupeti anupagacchati, āpo āpo-kāya ṃ anupeti anupagacchati, tejo tejokāyaṃ anupeti anupagacchati, vāyo vāyo-kāyaṃ anupeti anupagacchati, ākāsaṃ indriyāni s aṃkamanti. Āsandipañcamā purisā mataṃ ādāya gacchanti, yāva āḷāhanā padāni paññāpenti, kāpotakāni aṭṭhīni, bhassantâhut iyo. Dattu-paññattaṃ yad idaṃ dānaṃ, tesaṃ tucchaṃ musā vilāpo ye keci atthika-vādaṃ vadanti. Bāle ca paṇḍite ca kāyassa bhedā ucchijjanti vinassanti, na honti param maraṇā ti."〔DN. Sp. 2. 23. p.55〕cf. N. vol.6. pp.84-85.

[16] 以下、特に断らない限り　qtd.『長阿含.』巻17. (27)第三分沙門果經第八 T. vol.1. pp.108a-109a 、また、六師外道名の読みは Pāli. DN.Sp.による。

[17]『雑阿含.』巻7. 見相應(154) T. vol.2. p.43c 、また、以下の六師外道の比定及び名の読みはop.cit. 細田典明(1995)pp.111-112　による。

[18] ibid.『雑阿含.』

『長阿含.』ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[19] ḷPūraṇa Kāśyapa

【4】無父無母　T. vol.27. p.988b

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

『婆沙論.』…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī

『長阿含.』ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[20] ḷPūraṇa Kāśyapa

【5】世間無阿羅漢　T. vol.27. p.988c

自性…謗道邪見　對治…見道所斷

『婆沙論.』…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī

『長阿含.』ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[21] ḷPūraṇa Kāśyapa

【6】無正至　T. vol.27. p.988c

自性…謗滅邪見　對治…見滅所斷

『婆沙論.』…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī

『長阿含.』ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[22] ḷPūraṇa Kāśyapa

【7】無正行此世他世則於現法知自通達作證具足住。我生已盡梵行已立所作已辦不受後有。如實知　T. vol.27. pp.988c-989a

自性…謗道邪見　對治…見道所斷

『婆沙論.』…補刺拏(Pūraṇa Kassapa)　DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī

『長阿含.』ḷ末伽梨拘舎梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[23] ḷPūraṇa Kāśyapa

【8-a】乃至活有命者死已斷壞。無有此四大種士夫身廣説乃至[24]　T. vol.27. p.989a

---

[19] ibid.『雑阿含.』

[20] ibid.『雑阿含.』

[21] ibid.『雑阿含.』

[22] ibid.『雑阿含.』

[23] ibid.『雑阿含.』

[24]『発智論.』においてこの段は、「乃至活有命者。死已斷壞。無有此四大種。士夫身死時。地身歸地。水身歸水。火身歸火。風身歸風。根随空轉。輿爲第五。持彼死屍。往棄塚間。未焼可知焼已成灰。餘鴿色骨。愚者讃施。智者讃受。諸有論者。一切空虚妄語。乃至活有。愚智者死已。斷壞無有。此邊執見斷見攝。見苦所斷。」〔T. vol.26. p.1027b. f.〕とされる。cf.『八・度論.』T. vol.26. p.913a. f.

自性…邊執見斷見の攝　對治…見苦所斷

DN. Sp.ḷAjita Kesa-kambalī、『長阿含.』l阿夷陀翅舍欽婆羅(Ajita Kesa-kambalī)

『雜阿含.』[25]ḷPūraṇa Kāśyapa

【8-b】 死時地身歸地水身歸水火身歸火風身歸風根随空轉者。彼説衆生死時内大種身歸外地等。根無大種爲所依故便随空轉。譬如樹倒鳥即飛空　T. vol.27. p.989a. f.

邊執見常見の攝　見苦所斷

【8-c】 餘鴿色骨者謂若焼已便成灰燼。此中焼言若謂焼薪等者此即正見。若謂即焼火者此即邪智非見。若謂焼有漏業者此謗因邪見見集所斷。此謗道邪見見道所斷　T. vol.27. p.989b

謗因邪見　見集所斷

【8-d】 若謂焼無漏業者　T. vol.27. p.989b

謗道邪見　見道所斷

【8-e】 謗無成智者法　T. vol.27. p.989b

謗道邪見　見道所斷

【8-f】 謗無實語者法　T. vol.27. p.989b

謗道邪見　見道所斷

【9】 無因無縁令有情雜染。非因非縁而有情雜染　T. vol.27. p.989c

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

『婆沙論.』…末塞褐梨(Makkhali-Gosāla)　DN. Sp.…Makkhali-Gosāla[26]

---

[25] 『雜阿含.』巻7. 見相應(156) T. vol.2. p.44a

[26] DN.Sp.においてマッカリ・ゴーサーラの説はsaṃsāra-suddhi（輪廻浄化）として、

Evaṃ vutte bhante Makkhali-Gosālo maṃ etad avoca: "N' atthi mahā-rāja hetu n' atthi paccayo sattānaṃ saṃkilesāya, ahetu-apaccayā saṃkilissanti. N' atthi hetu, n' atthi paccayo sattānaṃ visuddhiyā, ahetu-apaccayā sattā visujjhanti. N' atthi attakāre n' atthi para-kāre, n' atthi purisa-kāre, n' atthi balaṃ n' atthi viriyaṃ, n' atthi purisa-thāmo n' atthi purisa-parakkamo. Sabbe s attā sabbe pāṇā sabbe bhūtā sabbe jīvā avasā abalā aviriyā niyati-saṅgati-bhāva-pariṇatā chass'evâbhijātisu sukha-dukkhaṃ p aṭisaṃvedenti. Cuddasa kho pan' imāni yoni-pamukha-sata-sahassāni saṭṭhiñ ca satāni cha ca satāni, pañca ca kammuno satān i pañca ca kammāni tīṇi ca kammāni kamme ca aḍḍha-kamme ca, dvaṭṭhi paṭipadā, dvaṭṭh' antara-kappā, chaḷâbhijātiyo, aṭṭha purisa-bhūmiyo, ekūna-paññāsa ājīva-sate, ekūna-paññāsa paribbājaka-sate, ekūna-paññāsa nāgâvāsa-sate,vise indriya-sate, t iṃse niriya-sate, chattiṃsa rajo-dhātuyo, satta saññi-gabbhā, satta asaññi-gabbhā, satta nigaṇṭhigabbhā, satta devā, satta mān usa, satta pesācā, satta sarā, satta paṭuvā,satta paṭuvā-satāni, satta papātā, satta papāta-satāni,satta supinā, satta supina-satāni, cullâsīti mahā-kappuno sata-sahassāni yāni bāle ca paṇḍite ca sandhāvitvā saṃsaritvā dukkhass'antaṃ karissanti.Tattha n' att hi: 'Iminâhaṃ sīlena vā vatena vā tapena vā brahmacariyena vā aparipakkaṃ vā kammaṃ paripācessāmi, paripakkaṃ vā kam

『長阿含.』ḷ彼浮陀迦栴延(Pakudha Kaccāyana)『雑阿含.』[27]…Maskarin Gośālīputra

【10】無因無縁令有情清浄。非因非縁而有情清浄　T. vol.27. p.989c

自性…謗道邪見　對治…見道所斷

『婆沙論.』…末塞褐梨(Makkhali-Gosāla)　DN. Sp.…Makkhali-Gosāla

『長阿含.』ḷ彼浮陀迦栴延(Pakudha Kaccāyana)『雑阿含.』[28]…Maskarin Gośālīputra

【11】無因無縁令有情無智無見。非因非縁而有情無智無見　T. vol.27. p.990a

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

『婆沙論.』…末塞褐梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[29]…Maskarin Gośālīputra

【12】無因無縁令有情智見。非因非縁而有情智見　T. vol.27. p.990a. f.

自性…謗道邪見　對治…見道所斷

『婆沙論.』…末塞褐梨(Makkhali-Gosāla)『雑阿含.』[30]…Maskarin Gośālīputra

【13】無力無精進。無力精進無士無威勢無士威勢。無自作無他作無自他作。一切有情一切生一切種。無力無自在無精進無威勢定合性變。於六勝生受諸苦樂。此若謗有漏力精進等。ḷḷ若謗無漏力精進等　T. vol.27. p.990b

自性…謗因邪見　對治…見集所斷　あるいは　自性…謗道邪見　對治…見道所斷

『婆沙論.』巻 200…末塞褐梨(Makkhali-Gosāla)　DN. Sp.ḷMakkhali-Gosāla

『婆沙論.』巻198ḷ無衣迦葉波(acelaka Kassapa, ājīvaka · ājīrvikaの説)

『長阿含.』ḷ彼浮陀迦栴延(Pakudha Kaccāyana)『雑阿含.』[31]ḷMaskarin Gośālīputra

【14】造教造煮教煮害教害。殺諸衆生。不與取。欲邪行。知而妄語。故飲諸酒。穿牆解結盡取所有守阨。斷道害村害城害國生命。以刀以輪擁略大地。所有衆生斷裁分

---

maṃ phussa phussa vyanti-karissāmîti. 'H'evaṃ n' atthi doṇa-mite sukha-dhkkhe pariyanta-kaṭe saṃsāre, n' atthi hāyana-vaḍḍhane n' atthi ukkaṃsâvakaṃse. Seyyathā pi nāma sutta-guḷe khitte nibbeṭhiyamānam eva phaleti, evam eva bāle ca paṇḍite ca sandhāvitvā saṃsaritvā dukkhass' antaṃ karissantîti.'〔DN. Sp. 2. 20. pp.53-54〕cf. N. vol.6. pp.82-83.

[27]『雑阿含.』巻7. 見相應(157) T. vol.2. p.44a

[28]『雑阿含.』巻7. 見相應(158) T. vol.2. p.44a. f.

[29]『雑阿含.』巻7. 見相應(159) T. vol.2. p.44b

[30]『雑阿含.』巻7. 見相應(160) T. vol.2. p.44b

[31]『雑阿含.』巻7. 見相應(152) T. vol.2. p.43c

解聚集團積爲一肉聚。應知由此無悪無悪縁。於▪伽南斷裁▪打。於▪伽北惠施修福應知由此無罪福。亦無罪福縁。布施愛語利行同時攝諸有情。皆無有福。T. vol.27. p.990c. f.

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

『婆沙論.』…珊闍夷(Sañjaya Belaṭṭhi-putta) DN.Sp.[32]ḷPūraṇa Kassapa SN.[33]ḷPūraṇa Kassapa

『長阿含.』ḷ補刺拏(Pūraṇa Kassapa)『雜阿含.』[34]ḷSañjayin Vairaṭṭīputra

【15】此七士身不作作不化化不可害。常安住如伊師迦安住不動無有轉變互不相觸。何等爲七。謂地水火風及苦樂命。此七士身非作乃至如伊師迦安住不動。若罪若福若罪福若苦若樂若苦楽不能轉變。亦不能令互相觸礙。設有士夫斷士夫頭亦不名爲害世間生。若行若住七身中間刀刃雖轉而不害命。此中無能害無所害。無能捶無所捶。無表無表處　T. vol.27. p.991a

自性…邊執見常見の攝　對治…見苦所斷

---

[32] DN.Sp.においてプーラナカッサパの説はakiriya(非作業論)として、

'Evaṃ vutte bhante Pūraṇo Kassapo maṃ etad avoca: "karato kho mahā-rāja kārayato chindato chedāpayato pacato pācayato socayato kilamayato phandato pandāpayato pāṇaṃ atimāpayato adinnaṃ ādiyato sandhiṃ chindato nillopaṃ harato ekâgārikaṃ karoto paripanthe tiṭṭhato paradāraṃ gacchato musā bhaṇato, karoto na karīyati pāpaṃ. Khura-pariyantena ce pi cakkena yo imissā paṭhaviyā pāṇe eka-maṃsa-khalaṃ eka-maṃsa-puñjaṃ kareyya, n' atthi tato-nidānaṃ pāpaṃ, n' atthi pāpassa āgamo. Dakkhiṇañ ce pi Gaṅgā-tīraṃ āgaccheyya hananto ghātento chindanto chedāpento pacanto pācento, n' atthi tato nidānaṃ pāpaṃ, n' atthi pāpassa āgamo. Uttarañ ce pi Gaṅgā-tīraṃ gaccheyya dadanto dāpento yajanto yajāpento, n' atthi tato nidānaṃ puññaṃ, n' atthi puññassa āgamo. Dānena damena saṃyamena sacca-vajjena n' atthi puññaṃ, n' atthi puññassa āgamo ti." 〔DN. Sp. 2. 17. pp.52-53〕cf. N. vol.6. pp.80-81.

[33] cf. 3. Ekam antaṃ ṭhito kho Asamo devaputto Pûraṇaṃ Kassapam ârabbha Bhagavato santike imaṃ gâtham abâsi゛゛ Idha chinditamârite゛ hatajânisu Kassapo゛ pâpaṃ na pan-upassati゛ puññaṃ vâ pana attano゛ sa ce vissâsam âcikkhi゛ satthâ arahati mânanan ti゛゛〔SN. Devaputta-Saṃyuttaa. nânâtitthiya-vagga 3. 10. 3. p.66〕cf. N. vol.12. pp.110-113.

[34]『雜阿含.』巻7. 見相應(162) T. vol.2. p.44b. f.

『大乘涅槃經』[35]｜Makkhali-Gosāla　DN.Sp.[36]｜Pakudha Kaccāyana

『雜阿含.』[37]｜Ajita Keśakambala

【16】十四億六萬六百生門。五業三業二業業半業。六十二行跡六十二中劫。百三十六地獄。百二十根。三十六塵界。四萬九千龍家。四萬九千妙翅鳥家。四萬九千異學家。四萬九千活命家。七有想藏。七無想藏。七離繫藏。七阿素洛。七畢舍遮。七天七人七夢七百夢七覺七百覺七池七百池七險七百險七減七百減七增七百增。六勝生類八大士地。於如是處經八萬四千大劫。若愚若智往來流轉乃決定能作苦邊際。如擲縷丸縷盡便住。此中無有沙門若婆羅門能作是説我以尸羅或以精進或以梵行令所有業未熟者熟熟者觸已即便變吐。以如是斛度量生死苦樂邊際不可施設有增有減。亦不可説或然不然　T. vol.27. p.991b. f.

自性…非因を因と計する戒禁取　　對治…見苦所斷

『婆沙論.』巻 198、巻 200｜無勝髪褐(Ajita Kesa-kambalī)

DN. Sp.｜Makkhali-Gosāla『雜阿含.』[38]｜Ajita Keśakambala

【17】一切士夫補特伽羅諸有所受。無不皆以宿作爲因　T. vol.27. p.992c. f.

自性…非因を因と計する戒禁取　　對治…見苦所斷

『婆沙論.』…離繫親子（尼・陀若提子、尼乾陀闍提弗多羅、Nigaṇṭha Nāta-putta）

『雜阿含.』｜Nirgrantha Jñātiputra　cf. AN. vol. 1. p.173

【18】一切士夫補特伽羅諸有所受。皆以自在變化爲因　T. vol.27. p.993b

自性…非因を因と計する戒禁取　　對治…見苦所斷

『婆沙論.』…離繫親子（尼・陀若提子、尼乾陀闍提弗多羅、Nigaṇṭha Nāta-putta）

---

[35]『大乘涅槃經.』巻39-40. T. no.374. pp.590c-600b.

[36] DN.Sp.においてパクダカッチャーヤナの説はaññena aññaṃ（相異なる）として、

‘Evaṃ vutte bhante Pakudho kaccāyano maṃ etad avoca: "Satt’ ime mahā-rāja kāyā akaṭā akaṭa-vidhā animmitā animmātā v añjhā kūṭaṭṭhā esikaṭṭhāyiṭṭhitā. Te na iñjanti na vipariṇamanti na aññamaññaṃ vyābādhenti nâlaṃ aññamaññassa sukhāya vā dukkhāya vā sukha-dukkhāya vā. Katame satta ? Pathavi-kāyo āpo-kāyo tejo-kayo vāyo-kāyo sukhe dukkhe jīva-sattame. Im e satta kāyā akaṭā aḳaṭa-vidhā animmitā animmātā vañjhā kūṭaṭṭhā esikaṭṭhāyiṭṭhitā. Te na iñjanti na vipariṇamanti na aññam-aññaṃ vyābādhenti nâlaṃ aññam-aññassa sukhāya vā dukkhāya vā sukha-dukkhāya vā. Tattha n’ atthi hantā vā ghātetā vā sotā vā sāvetā vā viññātā vā viññāpetā vā. Yo pi tiṇhena satthena sīsaṃ chindati na koci kiñci jīvitā voropeti, sattannaṃ yeva kāyānam antarena satthavivaraṃ anupatatîti." 〔DN. Sp. 2. 26. p.56〕cf. N. vol.6. pp.85-86.

[37]『雜阿含.』巻7. 見相應(161) T. vol.2. p.44b

[38]『雜阿含.』巻7. 見相應(163) T. vol.2. p.44c. f.

【19】一切士夫補特伽羅所受。皆是無因無縁　T. vol.27. p.993b

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

『婆沙論.』…▪迦多衍那（婆浮陀迦栴延　Pakudha Kaccāyana）

『雑阿含.』Kakuda Kātyāyana

【20】自作苦樂他作苦樂自他作苦樂　T. vol.27. p.993c

自性…非因を因と計する戒禁取　對治…見苦所斷

【21】所受苦樂非自作非他作無因而生　T. vol.27. p.993c

自性…謗因邪見　對治…見集所斷

【22】我及世間常恒堅住無變易法正爾安住　T. vol.27. p.994a

自性…邊執見常見の攝　對治…見苦所斷

『雑阿含.』巻7. 見相應(152) T. vol.2. p.43c

【23】諦故住故我有我　T. vol.27. p.994a. f.

自性…邊執見常見の攝　對治…見苦所斷

【24】諦故住故我無我　T. vol.27. p.994b

自性…邊執見斷見の攝　對治…見苦所斷

【25】我觀我眼色即我　T. vol.27. p.994b

自性…有身見　對治…見苦斷[39]

【26】我觀無我眼即我色爲衆具　T. vol.27. p.994b

自性…有身見　對治…見苦斷[40]

【27】無我觀我色即我眼爲衆具　T. vol.27. p.994b

自性…有身見　對治…見苦所斷

【28】此是我是有情。命者生者養育者補特伽羅意生儒童作者教者生者等生者起者等起者語者覺者等領受者。非不曾有。非不當有。於彼彼處造善悪業。於彼彼處受果異熟。捨此蘊續餘蘊　T. vol.27. p.994c

自性…邊執見常見の攝　對治…見苦所斷

---

[39]『発智論.』には見苦所斷とある。

[40] do. 58.

【29】受妙五欲名得第一現法涅槃　T. vol.27. p.994c

自性…劣法を取りて勝と爲す見取　對治…見苦所斷

『雜阿含.』巻7. 見相應(170) T. vol.2. p.45b. f.

【30】離欲悪不善法有尋有伺。離生喜樂入初静慮具足住名得第一現法涅槃。尋伺寂静内等淨心一趣性無尋無伺。定生喜樂入第二静慮具足住名得第一現法涅槃。離喜住捨正念正知身受樂聖説能捨。具念樂住入第三静慮具足住名得第一現法涅槃。斷樂斷苦先喜憂没不苦不樂。捨念清淨入第四静慮具足住名得第一現法涅槃 T. vol.27. p.995a

自性…劣法を取りて勝と爲す見取　對治…見苦所斷

『雜阿含.』巻7. 見相應(170) T. vol.2. p.45b. f.

【31】有九慢類乃至廣説[41]　T. vol.27. p.995b

【32】風不吹河不流火不燃乳不注胎不孕日月不出不没。離染清淨自性安住不増不減 T. vol.27. p.995c

自性…邊執見常見の攝　對治…見苦所斷

『雜阿含.』巻7. 見相應(164) T. vol.2. p.45a

【33】衆生執我作。乃至廣説[42]　T. vol.27. p.996a

【34】具慢衆生。乃至廣説[43]　T. vol.27. p.996a

---

[41]『発智論.』においてこの段は、「謂我勝。我等。我劣。有勝我。有等我。有劣我。無勝我。無等我。無劣我。我勝者。是依見起過慢。我等者。是依見起慢。我劣者。是依見起卑慢。有勝我者。是依見起卑慢。有等我者。是依見起慢。有劣我者。是依見起過慢。無勝我者。是依見起慢。無等我者。是依見起過慢。無劣我者。是依見起卑慢。」〔T. vol.26. p.1028b. f.〕とされる。また、『八・度論.』においてこの段は、「所謂此見我依豪依空見起増慢。我相似依空見起慢。我卑依空見起小慢。有勝我者依見起小慢。有以我者依見起慢。有卑我者依見起増慢。無豪我者依見起増慢。無以我者依見起増慢。無卑我者依見起小慢。」〔T. vol.26. p.914a〕とされる。

[42]『発智論.』においてこの段は、「如契經中説。衆生執我作。執他作亦然。各不能如實。觀知此是箭。etc.」〔T. vol.26. p.1028c〕とされ、我作または他作の二種の外道論の悪見を述べる。cf.『八・度論.』 T. vol.26. p.914a. f.

[43]『発智論.』においてこの段は、「具慢衆生。慢著慢縛。於見相逆。不越生死。etc.」〔T. vol.26. p.1028c〕とされ、七慢を具する外道の生死輪廻を述べる。七慢については cf.『婆沙論.』巻43 雜蘊思納息　T. vol.27. p.225c

【35】 得當得俱▪。乃至廣説[44]　T. vol.27. p.996b

またDN.Sp.における六師外道のNigaṇṭha Nāta-putta[45] とSañjaya Belaṭṭhi-putta[46] にそのまま対応する個所は『婆沙論.』には見出せない。

---

[44]『発智論.』において、外道の諸種の戒禁取及び見取を列挙する。cf.『発智論.』 T. vol.26. p.1029a. f. ,『八▪度論.』 T. vol.26. p.914b. f.

[45] cf. DN.Sp.においてニガンタナータプッタの説は cātu-yāma-saṃvara（四種の禁戒）として、

'Evaṃ vutte bhante Nigaṇtho Nāta-putto maṃ etad avoca: "Idha mahā-rāja nigaṇṭho cātu-yāma-saṃvara-saṃvuto hoti. Kathañ ca mahā-rāja nigaṇṭho cātu-yāma-saṃvara-saṃvuto hoti ? Idha mahā-rāja nigaṇṭho sabba-vārī-vārito ca hoti, sabba-vārī-yuto ca, sabba-vārī-dhuto ca, sabba-vārī-phuṭṭho ca. Evaṃ kho mahā-rāja nigaṇṭho cātu-yāma-saṃvara-saṃvuto hoti. Yato kho mahā-rāja nigaṇṭho evaṃ cātu-yāma-saṃvara-saṃvuto hoti, ayaṃ vuccati mahā-rāja nigaṇṭho gatatto ca yatatto ca ṭhitatto câti." 〔DN. Sp. 2. 29. p.57〕 cf. N. vol.6. p.87.

[46] cf. DN.Sp.においてサンジャヤベーラティプッタの説は vikkhepa（矯乱）として、

'Evaṃ vutte bhante Sañjayo Belaṭṭhi-putto maṃ etad avoca: " 'Atthi paro loko ' ti iti ce taṃ pucchasi, 'atthi paro loko ' ti iti ce me assa, 'atthi paro loko ' ti iti te naṃ vyākareyyaṃ. Evam pi me no. Tathā ti pi me no. Aññathā ti pi me no. No ti pi me no. No no ti pi me no. 'N'atthi paro loko ' ? ti . . . pe . . . 'Atthi ca n' atthi ca paro loko ? N' ev' atthi na n' atthi paro loko ? ØØ Atthi sattā opapātikā ? N' atthi sattā opapātikā ? Atthi ca n' atthi ca sattā opapātikā ? N' ev' atthi na n' atthi sattā opapātikā ? ØØ Atthi sukaṭa-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko ? N' atthi sukaṭa-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko ? Atthi ca n' atthi ca sukaṭa-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko ? N' ev' atthi na n' atthi sukaṭa-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko ? ØØ Hoti Tathāgato param maraṇā, na hoti Tathāgato param maraṇā ? Hoti ca na hoti ca Tathāgato param maraṇā ? N' eva hoti na na hoti Tathāgato param maraṇā ? ' ti iti ce maṃ pucchasi, 'n' eva hoti na na hoti Tathāgato param maraṇā' ti iti ce me assa, 'N' eva hoti na na hoti Tathāgato param maraṇā' ti iti te naṃ vyākareyyaṃ. Evam pi me no. Tathā ti pi me no. Aññathā ti pi me no. No ti pi me no. No no ti pi me no ti." 〔DN. Sp. 2. 32. pp.58-59〕 cf. N. vol.6. pp.88-89.

表[p- a] 自性において整理

謗因邪見	【1】【3】【4】【8-c】【9】【11】【13】【14】【19】【21】
謗果邪見	【2】【3】
謗道邪見	【5】【7】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】
謗滅邪見	【6】
邊執見斷見の攝	【8-a】【24】
邊執見常見の攝	【8-b】【15】【22】【23】【28】【32】
非因を因と計する戒禁取	【16】【17】【18】【20】
有身見	【25】【26】【27】
劣法を取りて勝となす見取	【29】【30】

表[p- b] 對治において整理

見苦所斷	【2】【3】【8-a】【8-b】【15】【16】【17】【18】【20】【22】【23】【24】【25】【26】【27】【28】【29】【30】【31】
見集所斷	【1】【3】【4】【8-c】【9】【11】【13】【14】【19】【21】
見滅所斷	【6】
見道所斷	【5】【7】【8-d】【8-e】【8-f】【10】【12】【13】

資料【a- b】

a. 諸見趣の五種分類論及び六十二見論

五種分類論[47]

a－1. 我は死後は有想であると執する、有想論。[常見]

a－2. 我は死後は無想であると執する、無想論。[常見]

---

[47]「如契經説諸有沙門婆羅門等。各依勝解起諸諍論。一切皆於五處而轉。何等爲五。一者執我死後有想。唯此諦實餘皆愚妄。二者執我死後無想。三者執我死後非有想非無想。四者執我死後斷滅。五者説有現法涅槃。彼五即三三即五。彼五即三者。謂彼有想論無想論非有想非無想論即此常見。彼斷滅論即此斷見。彼現法涅槃即此見取。三即彼五者。謂此常見即彼有想論無想論。非有想非無想論。此斷見即彼斷滅論。此見取即彼現法涅槃論。」〔『婆沙論. 』T. vol.27. p.996b〕

a－3. 我は死後は非有想非無想であると執する、非有想非無想論。［常見］

a－4. 我は死後は斷滅すると執する、斷滅論。［斷見］

a－5. 現法涅槃ありと説く、現法涅槃論。［見取］[48]

六十二見論

前際を分別する見　18.

【{】 遍常論　4.

1） 一由能憶一壞成劫或二或三乃至八十。彼便執我世間俱常。 T. vol.27. p.996c

2） 二由能憶一生或二或三乃至百千生事。彼便執我世間俱常。 T. vol.27. p.996c

3） 三由天眼見諸有情死時生時諸蘊相續。謂見死有諸蘊無間中有現前。復見中有諸蘊無間生有現前。又見生有諸蘊無間本有現前。本有諸蘊分位相續乃至死有。譬如水流燈焔相續。由不覺知微細生滅。於諸蘊中遂起常想故。便執我世間俱常。 T. vol.27. p.997a

4） 四由尋伺不如實知。謂我世間俱是常住。T. vol.27. p.997a

【β】 一分常論　4.

1） 一從梵世歿來生此間。由得宿住随念智通故作如是執。我等皆是大梵天王之所化作。梵王能化在彼常住。我等所化故是無常。 T. vol.27. p.997a

2） 二聞梵王有如是見立如是論。大種無常。心是常住。或翻此説心是無常大種常住。 T. vol.27. p.997a

3） 三有先從戯忘天歿來生此間。由得宿住随念智通故便作執是。彼天諸有不極遊戯忘失念者在彼常住。我等先由極戯忘念從彼處歿故是無常。 T. vol.27. p.997b

4） 四有先從意憤天歿來生此間。由得宿住随念智通故便作是執。彼天諸有不極意憤角眼相視在彼常住。我等先由意極相憤角眼相視從彼處歿故是無常。 T. vol.27. p.997b

---

[48] cf. MN. vol.2. 102. Pañcattyasuttaṃ pp.228-238. " Santi, bhikkhave, eke samaṇabrāhmaṇa aparantakappikā aparantānudiṭṭhino aparantaṃ ārabbha anekavihitāni adhivuttipadāni abhivadanti. Saññī attā hoti arogo param maraṇā ti itth' eke abhivadanti. Asaññī attā hoti arogo paraṃ maraṇā ti itth' eke abhivadanti. N' eva saññī nāsaññī attā hoti arogo param maraṇā ti itth' eke abhivadanti. Sato vā pana sattassa ucchedaṃ vināsaṃ vibhavaṃ paññāpenti. Diṭṭhadhammanibbānaṃ vā pan' eke abhivadanti. Iti santaṃ vā attānaṃ paññāpenti arogaṃ param maraṇā. Sato vā pana sattassa ucchedaṃ vināsaṃ vibhavaṃ paññāpenti. Diṭṭhadhammanibbānaṃ vā pan' eke abhivadanti. Iti imāni pañca hutvā tīṇi honti, tīṇi hutvā pañca honti. Ayam uddeso pañcattayassa.〔MN. 102. p.228〕. cf. N. vol.11上 pp.297-310.

【γ】無因生論　2.

1）　一従無想有情天歿來生此間。由得宿住随念通故雖能憶彼出無想心及後諸位。而不能憶出心以前所有諸位。便作是念。我於彼時本無而起。諸法如我亦應一切本無而生。 T. vol.27. p.997b

2）　二由尋伺虚妄推求。今身所更既皆能憶。前身若有。彼所更事今此身中亦應能憶。既不能憶故知彼無。𦍒由斯便執我及世間皆無因生自然而有。
T. vol.27. p.997b. f.

【δ】有邊等の論　4.

1）　由斯執便我及世間俱是有邊。即是二種有分限義。 T. vol.27. p.997c

2）　由斯執便我及世間俱是無邊。即是二種無分限義。 T. vol.27. p.997c

3）　由斯執便我及世間亦有邊亦無邊。即是二種俱有分限無分限義。 T. vol.27. p.997c

4）　我及世間俱不可説定是有邊定是無邊。然皆實有。 T. vol.27. p.997c

【ε】不死矯乱論　4.

1）　我若決定答彼所問。便爲妄語。 T. vol.27. p.998a

2）　我若撥無彼所問義。便爲邪見。 T. vol.27. p.998a

3）　我若不實印彼所問。彼或詰問。我便不知。T. vol.27. p.998b

4）　我性愚癡。若違拒他彼便別我。 T. vol.27. p.998b

<u>後際を分別する見</u>　44.

【ζ】有想論　16.

1）　我有色死後有想論 T. vol.27. p.998c

2）　我無色死後有想論 T. vol.27. p.999a

3）　我亦有色亦無色死後有想論 T. vol.27. p.999a

4）　我非有色非無色死後有想論 T. vol.27. p.999a

5） 執我有邊死後有想論 T. vol.27. p.999b

6） 執我無邊死後有想論 T. vol.27. p.999b

7） 執我亦有邊亦無邊死後有想論 T. vol.27. p.999b

8） 執我非有邊非無邊死後有想論 T. vol.27. p.999c

9） 我有一想 T. vol.27. p.999c

10） 我有種々想 T. vol.27. p.999c

11） 我有小想 T. vol.27. p.999c

12） 我有無量想 T. vol.27. p.999c

13） 我純有樂 T. vol.27. p.999c

14） 我純有苦 T. vol.27. p.999c

15） 我有苦有樂 T. vol.27. p.999c

16） 我無苦無樂 T. vol.27. p.999c

【η】無想論 8.

1） 執我有色死後無想 T. vol.27. p.1000b

2） 執我無色死後無想 T. vol.27. p.1000b

3） 執我亦有色亦無色死後無想 T. vol.27. p.1000b

4） 執我非有色非無色死後無想 T. vol.27. p.1000c

5） 執我有邊死後無想 T. vol.27. p.1000c

6） 執我無邊死後無想 T. vol.27. p.1000c

7） 執我亦有邊亦無邊死後無想 T. vol.27. p.1000c

8） 執我非有邊非無邊死後無想 T. vol.27. p.1000c

【θ】非有非無想論 8.

1） 執我有色死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001a

2） 執我無色死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001a

3） 執我亦有色亦無色死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001a

4） 執我非有色非無色死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001b

5） 執我有邊死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001b

6） 執我無邊死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001b

7） 執我亦有邊亦無邊死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001b

8） 執我非有邊非無邊死後非有想非無想 T. vol.27. p.1001b

【ι】断滅論 7.

1） 此我有色麁四大種所造爲性。死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

2） 此我欲界天死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

3） 此我色界天死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

4） 此我空無邊處天死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

5） 此我識無邊處天死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

6） 此我無所有處天死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

7） 此我非想非非想處天死後斷滅畢竟無有。齋此名爲我正斷滅 T. vol.27. p.1001c

【κ】現法涅槃論 5.

1） 謂現受用妙五欲樂。爾時名得現法涅槃 T. vol.27. p.1002a

2） 謂現安住最初静慮。爾時名得現法涅槃 T. vol.27. p.1002a

3） 謂現安住第二静慮。爾時名得現法涅槃 T. vol.27. p.1002a

4） 謂現安住第三静慮。爾時名得現法涅槃 T. vol.27. p.1002a

5） 謂現安住第四静慮。爾時名得現法涅槃 T. vol.27. p.1002a

資料【a- c】

b. 諸見趣の断常二見分別及び見納息総括

表［q］ 諸見趣の断常二見分別

常見	【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【15】【16】【17】【18】【20】【22】【23】【25】【26】【27】【28】【29】【30】【32】【33】【35】【a-1】【a-2】【a-3】【a-5】【{】【}】【ε】【®】【™】【⌉】【】【D】
断見	【8-a】【9】【10】【11】【12】【13】【14】【16】【17】【18】【19】【20】【21】【24】【33】【a-4】【a-5】【ω】【ı】

資料【b- a】 個々の問題点についての論究

☆ 謗因・謗果の邪見

［a］因果論

《a-̣》

而不見其因緣差別。便起是見ḷḷ。

〔【9】【10】【11】【12】【13】【14】『婆沙論.』巻198 T. vol.27. p.989b. etc.〕

《a-a》

然諸所受非無因緣。現見諸法因緣生故。非一切法一時生故。若無因緣應皆頓起。應一切法無差別故。若無因緣由何差別。故諸所受非無因緣。

〔【19】『婆沙論.』巻199 T. vol.27. p.993b〕

［a-1a］

謂諸外道或執諸法無因而生。或復執有不平等因。爲止彼意顯諸法生決定有因非不平等。

〔『婆沙論.』巻16 雜蘊智納息、T. vol.27. p.79a〕

［a-1b］

有作是説有執因縁非實有物如譬喩者[49]。爲止彼意顯示因縁若性若相皆是實有。

〔『婆沙論.』巻16　雑蘊智納息、T. vol.27. p.79a〕

［a-2a］

謂或有執心心所法。前後而生非一時起。如譬喩者[50]。彼作是説。心心所法依諸因縁前後而生。譬如商侶渉嶮隘路。一一而度無二並行。心心所法亦復如是。衆經[51]和合一一而生。所待衆縁各有異故。

〔『婆沙論.』巻16　雑蘊智納息、T. vol.27. p.79c〕

［a-2b］

阿毘達磨諸論師言。心心所法有別因故。可説衆縁和合有異有別因故。可説衆縁和合無異。謂心心所各各別。有生住異滅和合而生。是故可説和合有異。同依一根同縁一境而得生故。可説一切和合無異。是故一切心心所法。随其所應俱時而起。[52]

〔『婆沙論.』巻16　雑蘊智納息、T. vol.27. p.79c〕

［a-3a］

有説。此文爲遮相似相續沙門[53]意故。彼作是説善根唯與善根爲因。善根相應法唯與善根相應法爲因。爲遮彼意顯示善根與善根爲因。亦與相應法爲因。善根相應法與善根相應法爲因。亦與善根爲因。故作是説。

〔『婆沙論.』巻17　雑蘊智納息、T. vol.27. p.85c〕

［a-3b］

外國諸師[54]有作是説。一切色法無同類因。但藉餘縁和合力起。現見鑿地深踰百肘。従彼出泥日曝風吹。後逢天雨即便生草。又復現見屋背山峯。先無種子亦生草樹。故知色法無同類因。

---

[49]『六十巻婆沙.』には缺。以下cf. 河村孝照(1974) pp.451-491.

[50]『六十巻婆沙.』には缺。

[51] 三本、宮本ともに「縁」につくるのに随う。

[52] この後、相應因一般を述べる段において「或復有執」として、(1)「諸法各與自性相應非與他性」、(2)「自性於自性非相應非不相應」、(3)「力任持義是相應義」の3異執が述べられる。〔『婆沙論.』巻16　雑蘊智納息、T. vol.27. p.79c〕

[53]『六十巻婆沙.』には「相似法沙門」とある。

[54]『六十巻婆沙.』には「譬喩者」とある。

〔『婆沙論.』巻17　雑蘊智納息、T. vol.27. p.87c〕

［a-3c］

迦濕彌羅國諸論師[55]言。色法亦有同類因。唯除初無漏色。[56]

〔『婆沙論.』巻17　雑蘊智納息、T. vol.27. p.88a〕

［a-4a］

或復有執。遍行有二。一者無明。二者有愛。如譬喩者。彼作是説。縁起根本名爲遍行。無明是前際縁起根本。有愛是後際縁起根本故是遍行。

〔『婆沙論.』巻18　雑蘊智納息、T. vol.27. p.90c〕

［a-4b］

或復有執。五法是遍行。謂無明愛見慢及心。如分別論者[57]。

〔『婆沙論.』巻18　雑蘊智納息、T. vol.27. p.90c〕

［a-4c］

復次爲遮相似相續沙門意故。彼作是説。遍行随眠唯與随眠爲遍行因。彼相應法唯與随眠相應法爲遍行因。[58]

〔『婆沙論.』巻18　雑蘊智納息、T. vol.27. p.91b〕

［a-5a］

或有執。離思無異熟因離受無異熟果。如譬喩者。爲止彼執顯異熟因及異熟果俱通五蘊。

---

[55]『六十巻婆沙.』には「阿毘曇人」とある。

[56] これらの他に、同類因一般を述べる段において「或有執」として、(1)「過去未來非實有體」、(2)「現在是無爲法」、(3)「自類爲同類因。謂心唯與心。受唯與受餘法亦爾」の3異執が述べられ〔『婆沙論.』巻17　雑蘊智納息 T. vol.27. p.85b. f.〕、「過去現在は實有にして、及び現在世は是れ有爲法なることと、并に、自と他との類は、同類因と爲ることを顯示」しようと作論する。

[57]『六十巻婆沙.』には「毘婆闍婆提」とある。

[58] これらの他に、遍行因一般を述べる段において「或有執」として、(1)「一切煩悩皆是遍行」、(2)「五部煩悩。皆有是遍行有非遍行」、(3)「見苦集所斷一切煩悩皆是遍行見滅道所斷一切煩悩皆無漏縁」、(3)「若諸煩悩通三界者皆是遍行」、(4)「若諸煩悩通五部者名爲遍行。即是無明及貪瞋慢」の4異執が述べられる。〔『婆沙論.』巻18　雑蘊智納息 T. vol.27. p.90c〕

〔『婆沙論.』巻19　雜蘊智納息　T. vol.27. p.96a〕

［a-5b］

或復有執。唯心心所有異熟因及異熟果。如大衆部[59]。爲止彼執顯此因果亦通諸色不相應行。

〔『婆沙論.』巻19　雜蘊智納息　T. vol.27. p.96a〕

［a-5c］

或復有執。諸異熟因果若未熟其體恒有。彼果熟已其體便壞。如飲光部[60]。彼作是説。猶如種子芽若未生其體恒有芽生便壞。諸異熟因亦復如是。爲止彼執顯異熟因。果雖已熟其體猶有。

〔『婆沙論.』巻19　雜蘊智納息　T. vol.27. p.96b〕

［a-5d］

或復有執。所造善悪無苦樂果。如諸外道。爲止彼執顯善悪業有苦樂果故。作斯論。[61]

〔『婆沙論.』巻19　雜蘊智納息　T. vol.27. p.96b〕

［a-6a］

或有執。諸法生時無因而生。如諸外道。爲止彼執顯諸法生決定有因。

〔『婆沙論.』巻20　雜蘊智納息　T. vol.27. p.103c〕

［a-6b］

或復有執。諸法生時雖由因生。而諸法滅時不由因滅。如譬喩者[62]。爲止彼執顯諸法生滅無不由因。[63]

---

[59]『六十巻婆沙.』には「摩訶僧祇部」とある。

[60]『六十巻婆沙.』には「復有説」とある。

[61] これらの他に、異熟因一般を述べる段において「或復有執」として、(1)「唯心心所及諸色法。有異熟因及異熟果」、(2)「諸異熟因要捨自體其果方熟」の2の異執が述べられる。〔『婆沙論.』巻19　雜蘊智納息　T. vol.27. p.96b〕

[62]『六十巻婆沙.』には説者なし。

[63] これらの他に、能作因一般を述べる段において「或復有執」として、(1)「唯有爲法是能作因非無爲法」、(2)「諸能作因皆有作用取果與果」、(3)「自性於自性亦是能作因」、(4)「諸無爲法亦有能作因」、(5)「後法於前非能作因」の5の異執が述べられる。〔『婆沙論.』巻20　雜蘊智納息　T. vol.27. p.103c. f.〕

〔『婆沙論.』巻20　雑蘊智納息　T. vol.27. p.103c〕

［a-6c］

譬喩尊者[64]作如是説。生待因縁滅則不爾。如人射時發箭須力堕則不然。如陶家輪轉時須力止則不爾。

〔『婆沙論.』巻21　雑蘊智納息　T. vol.27. p.105a〕

［b］三時業[65]

《b-a》

然彼外道不善了知妙行悪行果有遠近故。於現見事中不如理尋思而起此見。

〔【2】【14】[66]『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.988a. etc.〕

《b-a》

然世福樂必由先時定不定業有施功力而不獲者以無先時業故。有不施功而便得者以有先時決定因故。

〔【13】『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.990c〕

［b-1a］

譬喩者説。此不決定。以一切業皆可轉故。乃至無間業亦可令轉。ll諸順現法受業不定於現法中受異熟果。若受者定於現法非餘。故名順現法受業。順生順後所説亦爾。ll一切業皆可轉。乃至無間業亦可轉。若無間業不可轉者。應無有能越第一有。然有能越第一有者。是故無間業亦應可轉。

〔『婆沙論.』巻114　業蘊悪行納息　T. vol.27. p.593b〕

［b-1b］

阿毘達磨論師言。諸順現法受業。決定於現法中受異熟果。故名順現法受業。順生順後所説亦爾。

---

[64]『六十巻婆沙.』には「譬喩者」とある。

[65] cf. 業と業道との自性を述べる段において、(1)「如勝論外道説五種業。謂取捨屈申行爲第五業。」、(2)「數論外道説九種業。謂取捨屈申擧下開閉行爲第九業。」、(3)「或有外道説十二處皆是業性。彼作是言。眼作何業。謂見色。色作何業。謂眼所行。廣説乃至。意作何業。謂能知法。法作何業。謂意所行。」、(4)「又譬喩者説。身語意業皆是一思。」(5)「又分別説部建立貪欲瞋恚邪見是業自性。」とある。〔『婆沙論.』巻113　業蘊悪行納息　T. vol.27. p.587a〕

[66] cf.「然善悪業果有遠近彼不善知便起此見。」〔『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.991a〕

〔『婆沙論.』巻114　業蘊悪行納息　T. vol.27. p.593b〕

［c］中有の存在について

《c-1》

或有説者。化生有情所謂中有。無此世他世者謗無生有。無化生有情者謗無中有。有諸外道言中有無。彼説但應從此世間至彼世間更無第三世間可得。此或撥無感中有業。或復撥無所感中有。或撥中有生有因。或撥中有爲死有果。

〔【3】『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.988a. f.〕

《c-a》

又彼獲得麁淺定故觀去來世時但見生有。不見中間中有之身。以微細故。

〔【4】『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.988c〕

［c-1a］

或有執。三界受生皆無中有。如分別論者[67]。ḷḷ謂如影光中無間隙死有生有應知亦然。

〔『婆沙論.』巻69　結蘊有情納息　T. vol.27. p.356c〕

［c-1b］

或復有説。欲色界生定有中有。如應理論者[68]。ḷḷ謂從此洲歿生北俱慮等。若無中有此身既滅彼身未生中間應斷。是則彼身本無而有。此身亦則本有而無。法亦應爾。本無而有有已還無。勿有斯過故有中有。

〔『婆沙論.』巻69　結蘊有情納息　T. vol.27. p.356c. f.〕

［c-2a］

譬喩者[69]説。中有可轉。以一切業皆可轉故。彼説所造五無間業尚可移轉。況中有業。若無間業不可轉者。應無有能出過有頂。有頂善業最爲勝故。既許有能過有頂者。故無間業亦可移轉。

〔『婆沙論.』巻69　結蘊有情納息　T. vol.27. p.359b〕

［c-2b］

---

[67]『六十巻婆沙.』には「毘婆闍婆提」とある。

[68]『六十巻婆沙.』には「育多婆提」とある。

[69]『六十巻婆沙.』には説者なし。

阿毘達磨諸論師[70]言。中有於界於趣於處皆不可轉。感中有業極猛利故。

〔『婆沙論.』巻69　結蘊有情納息　T. vol.27. p.359b〕

［c-3a］

謂譬喩者説。化非實。分別論者撥無中有。[71]

〔『婆沙論.』巻135　大種蘊具見納息　T. vol.27. p.700a〕

表［r］

［a］因果論において、

諸外道	3	［a-1a］［a-5d］［a-6a］
譬喩者	6	［a-1b］［a-2a］［a-4a］［a-5a］［a-6b］［a-6c］[72]
阿毘達磨論師	1	［a-2b］
相似相續沙門	2	［a-3a］［a-4c］
外國諸師	1	［a-3b］
迦濕彌羅國諸論師	1	［a-3c］
分別論者	1	［a-4b］
大衆部	1	［a-5b］
飲光部	1	［a-5c］

［b］三時業において、

譬喩者	1	［b-1a］
阿毘達磨論師	1	［b-1b］

［c］中有の存在についてにおいて、

分別論者	2	［c-1a］［c-3a］

---

[70]『六十巻婆沙.』には説者なし。

[71] これらの他に、中有中に受くる無間業の異熟果について述べる段において「或復有説」として、(1)「無有中有」、(2)「雖有中有而生悪趣者無」、(3)「生悪趣者雖有中有而生地獄者無」、(4)「生地獄者雖有中有而生造無間業者無」、(5)「生造無間業者雖有中有而中有中不受無間異熟者無」、(6)「雖住中有亦受無間異熟。而但受四蘊不受色蘊」の6種の僻執を遮し、「中有は有り、有色界の一切の生處に於て、皆有らざること無きと、中に於て亦、色蘊の異熟を受くることとを顯さんと」するとされる。〔『婆沙論.』巻119　業蘊害生納息　T. vol.27. p.618a〕

[72] 但し、［a-6c］は「譬喩尊者」とある。

應理論者	1	［c-1b］
譬喩者	2	［c-2a］［c-3a］
阿毘達磨論師	1	［c-2b］

資料【b- b】

☆　謗道・謗滅の邪見

［a］擇滅論

［a-1a］

或有執。擇滅非擇滅無常滅非實有體。如譬喩者。爲遮彼執顯三種滅皆有實體。

〔『婆沙論.』巻31　雜蘊愛敬納息　T. vol.27. p.161a〕

［a-1b］

或復有執。此三種滅皆是無爲。如分別論者[73]。爲遮彼執顯二滅是無爲無常滅是有爲故。

〔『婆沙論.』巻31　雜蘊愛敬納息　T. vol.27. p.161a〕

［b］學・無學、及び四沙門果について

《b-Ⅰ》

無正行此世他世者謂彼撥無四種正行則苦遲通等。此是謗有學道。餘是謗無學道。……然彼外道不知聖者有漏身異無漏身異涅槃寂樂非苦非無故。起如是差別邪見。

〔【7】『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.989a〕

《b-Ⅱ》

此即謗無成智者法……此即謗無實語者法

〔【8-e】【8-f】『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.989b〕

［b-1a］

謂或有執。涅槃有學有無學有非學非無學。如犢子部。爲遮彼執顯涅槃唯是非學非無

---

[73]『六十巻婆沙.』には「毘婆闍婆提」とある。

學故。

〔『婆沙論』巻33　雑蘊愛敬納息、T. vol.27. p.169a〕

[b-1b]

謂應理論者[74]辨分別論者所説有過。顯自無失。分別論者[75]所説有二。一説涅槃先是非學非無學後轉成學。先學後轉成無學。先是無學復轉成學。二説涅槃有三種。謂學者常是學。無學常是無學。非學非無學常是非學非無學。

〔『婆沙論』巻33　雑蘊愛敬納息、T. vol.27. p.169a〕

[b-1c]

遮説涅槃轉變不定有三種者意。

〔『婆沙論』巻33　雑蘊愛敬納息、T. vol.27. p.171a〕

[b-1d]

遮説涅槃體類差別有三種者意。

〔『婆沙論』巻33　雑蘊愛敬納息、T. vol.27. p.171a〕

[b-1e]

謂分別論者[76]。一説涅槃随位不定。一説涅槃三種性定是則涅槃體有常有無常故。成二分。

〔『婆沙論』巻33　雑蘊愛敬納息、T. vol.27. p.171a〕

---

[74]『六十巻婆沙』には「育多婆提」とある。

[75]『六十巻婆沙』には「毘婆闍婆提」とある。

[76]『六十巻婆沙』には「毘婆闍婆提」とある。

[b-2a]

或有説。四沙門果唯是無爲。如分別論者[77]。

〔『婆沙論.』巻65　結蘊有情納息、T. vol.27. p.336c〕

[b-3a]

有餘復執道是無爲。如分別論者。彼作是説唯一無上正等菩提常住不滅随彼彼佛出現世間。能證者雖異而所證無別。如一龍象妙飾莊嚴。雖有多人次第乘御。而彼龍象前後是一。[78]

〔『婆沙論.』巻93　智蘊學支納息、T. vol.27. p.479c〕

[b-3b]

或復有執。無實成就不成就性。如譬喩者。彼説有情不離諸法説名成就。離諸法時名不成就。俱假施設。如五指合假説爲拳。離即非拳此亦如是。[79]

〔『婆沙論.』巻93　智蘊學支納息、T. vol.27. p.479a〕

[b-4a]

或有説。諸心所法次第而生。非一時生。如譬喩者[80]。

〔『婆沙論.』巻95　智蘊學支納息、T. vol.27. p.493c〕

[b-4b]

大徳[81]亦説。諸心所法次第而生。非一時生。如多商侶過一狭路。要一一過非二非多。諸心所法亦復如是。一一各別生相所生。必無一時和合生義。

〔『婆沙論.』巻95　智蘊學支納息、T. vol.27. p.493c. f.〕

表[s]

[a]擇滅論において、

---

[77]『六十巻婆沙.』には「毘婆闍婆提」とある。

[78] この聖道無為説はKv. 6. 3. 、及び『宗輪論.』の大衆部と化地部の九無為説中に見出される。

[79] cf. 同じ段に、「謂或有執。過去未來無實自性。現在雖有而是無爲」がある。〔『婆沙論.』巻93　智蘊學支納息、T. vol.27. p.479a〕

[80]『六十巻婆沙.』には説者なし。

[81]『六十巻婆沙.』には説者なし。

譬喩者　　1　［a-1a］

分別論者　　1　［a-1b］

［b］學・無學、及び四沙門果についてにおいて、

犢子部　　1　［b-1a］

分別論者　　4　［b-1b］［b-1e］［b-2a］［b-3a］

涅槃轉變論者　　1　［b-1c］

涅槃決定論者　　1　［b-1d］

譬喩者　　2　［b-3b］［b-4a］

大徳　　1　［b-4b］

資料【b- c】

☆　常見と断見

［a］四相論、特に刹那と轉變

《a－Ⅰ》

尊者世友説曰。有諸外道於四大種及苦樂命相續。依因依縁和合故有刹那不住中不善了知。便計有我於中執持令無損害。彼所説命謂識相續。然彼不見身心相續刹那刹那因果轉中所有間隔。便執有我持令常住。捨此身已受彼身時。如樹倒時鳥集餘樹故。

〔【15】『婆沙論』巻198　T. vol.27. p.991b〕

《a－Ⅱ》

然彼所執我及世間皆非常住。實我我所不可得故。現見一切有情世間器世間物有轉變故。因縁生故。諸有生者。一切皆當有滅壞故。不應執我及世間常恒堅等言皆顯常義。[82]

〔【22】『婆沙論』巻198　T. vol.27. p.994a〕

《a－Ⅲ》

此正法中於無我空行聚。見空無我説言無我故非悪見。彼外道於無我空行聚中妄謂有我。但説彼我當來不有故是悪見。

〔【23】『婆沙論』巻198　T. vol.27. p.994b〕

---

[82] T. には「不應執我及世間常恒堅等。言皆顯常義諸有此見諦故」、K. には「應に我と及び世間は常・と執すべからず。恒・堅等の言は、皆常の義を顯すなり。」〔K. vol.17. pp.145-146.〕と訓じる。

《a-Ⅳ》

尊者世友説曰。有諸外道因不正尋思。執有實我微細常住遍一切處。於諸法中冥伏作動。見風河等吹流等時。謂是我作非彼能爾。如見樹動知風所爲。機關動時知人所作。

〔【32】『婆沙論』巻198　T. vol.27. p.995c〕

《a-Ⅴ》

大徳説曰。有諸外道因悪尋思。執有實我微細常住有勝作用轉變諸法。見風河等吹流等時。謂我令彼現如是相。如樹等動見影亦動。化主語時化身亦語。

〔【32】『婆沙論』巻198　T. vol.27. p.995c. f.〕

[a-1a]

或有執。諸有爲相非實有體。如譬喩者。彼作是説諸有爲相是不相應行蘊所攝。不相應行蘊無有實體。故諸有爲相非實有體。

〔『婆沙論』巻38　雜蘊相納息　T. vol.27. p.198a〕

[a-1b]

或復有執。諸有爲相皆是無爲。如分別論者[83]。彼作是説。若有爲相體是有爲性羸劣故。則應不能生法住法異法滅法。以有爲相體是無爲性強盛故。便能生法乃至滅法。

〔『婆沙論.』巻38　雜蘊相納息、T. vol.27. p.198a〕

[a-1c]

或復有執。三相是有爲。滅相是無爲。如法密部[84]。彼作是説。若無常相體是有爲性羸劣故。不能滅法。以是無爲性強盛故便能滅法。

〔『婆沙論.』巻38　雜蘊相納息、T. vol.27. p.198a〕

[a-1d]

或復有執。相與所相一切相似。如相似相續沙門[85]。彼作是説色法生住老無常體還是色。乃至識法生老住無常體還是識。

〔『婆沙論.』巻38　雜蘊相納息、T. vol.27. p.198a〕

[a-1e]

或復有執。色等五蘊。出胎時名生。相續時名住。衰變時名異。命終時名滅。如經部師[86]。

〔『婆沙論.』巻38　雜蘊相納息、T. vol.27. p.198b〕

[a-1f]

或有生疑。如得與法有同世者有異世者。相與所相亦應如是。[87]

〔『婆沙論.』巻38　雜蘊相納息、T. vol.27. p.198b〕

---

[83]『六十巻婆沙.』には「毘婆闍婆提」とある。

[84]『六十巻婆沙.』には「曇摩掘部」とある。

[85]『六十巻婆沙.』には「彼法沙門」とある。

[86]『六十巻婆沙.』には説者なし。

[87] cf. 得等に関する論究において、『婆沙論.』には、(1)「謂或有執。過未是無而説現在是無爲法」、(2)「或復有執。成就非實有法。如譬喩者作如是論。諸有情類不離彼法。説名成就此無實體。但是觀待分別假立。如五指合名之爲拳。離即非拳故非實有。如是有情不離彼法説名成就。離即不成就故體非實有」の2説がみられる。〔『婆沙論.』巻157　定蘊得納息、T. vol.27. p.796b〕

[a-1g]

謂説所相能相世同即遮經部[88]異時四相。説色等相非色等攝即遮相似相續沙門。説色等相還色等攝。説生等相皆是有爲。即遮法密部分別論者説生等相是無爲法。十門分別生等諸相一切皆遮譬喩者説生等諸相體非實有。

〔『婆沙論.』巻38　雜蘊相納息　T. vol.27. p.198c〕

[a-2a]

或有執。三有爲相非一刹那。如譬喩者。彼作是説。若一刹那有三有爲相者。則應一法一時亦生亦老亦滅。然無此理互相違故。應説諸法初起名生。後盡名滅。中熟名老。

〔『婆沙論.』巻39　雜蘊相納息　T. vol.27. p.200a〕

[a-2b]

若轉變故名異相者。應同轉變外道[89]所宗。……彼執諸行相續轉時前位不滅轉變爲後。如薪成灰乳爲酪等。

〔『婆沙論.』巻39　雜蘊相納息　T. vol.27. p.201c〕

[b]無有愛(vibhavatṛṣṇā)について[90]

---

[88] [a-1g]引用中の、「經部」「相似相續沙門」「法密部」「分別論者」「譬喩者」は、『六十巻婆沙.』には説者なし。

[89] 『六十巻婆沙.』には「外道義」とある。

[90] cf. 特に補特伽羅の理想態としての解脱心の本性について、(1)「謂或有執心性本浄。如分別論者。彼説心本性清浄客塵煩悩所染汚故相不清浄」〔『婆沙論.』巻27　雜蘊補特伽羅納息　T. vol.27. p.140b〕、(2)「有作是説。貪瞋癡相應心得解脱。問誰作是説。答分別論者。彼説染汚不染汚心其體無異。謂若相應煩悩未斷名染汚心。若時相應煩悩已斷名不染心。如銅器等。未除垢時名有垢器等。若除垢已名無垢器等。心亦如是」〔ibid.　T. vol.27. p.140c〕、また解脱心の実現する時について、(3)「謂於三世不了別者。撥無過去未來諸法。爲遮彼執欲顯實有過去未來」〔ibid. T. vol.27. p.141b〕、(4)「或復有執。無正生時及正滅時如譬喩者。彼説時分但有二種。一者已生。二者未生。復有二種。一者已滅。二者未滅。除此更無正生正滅。爲遮彼執欲顯實有正生滅位」〔ibid. T. vol.27. p.141b〕が見出される。(1)は『宗輪論.』において大衆部・一説部・説出世部・・胤部の本宗同義に「心性本浄客(三本は「客塵」につくる。)随煩悩之所雜染。説爲不浄。」〔T. vol.49. 15c〕、『十八論.』「心性自浄。佛爲客煩悩所染。」〔T. vol.49. 18c〕、『部執論.』「心者自性清浄客塵所汚。一随眠煩悩。二倒起煩悩。」〔T. vol.49. 21a〕とあり、木村博士によると、犢子部所伝とされる『舎利弗阿毘曇論』も心性本浄・客塵煩悩説を主張するとされる。また、(2)はKv. 3. 3. の案達羅派の主張とされ、また『婆沙論.』の(5)「謂或有執。但有一心如説一心相續論者彼作是説。有随眠心無随眠心。其性不異聖道現前。與煩悩相違不違心性。爲對治煩悩非對治心。如浣衣磨鏡錬金等物。與垢等相違不違衣等。聖道亦爾。又此身中若聖道未現在前。煩悩未斷故心有随眠。聖道現前煩悩斷故心無随眠。此心雖有随眠無随眠時異。而性是一。如衣鏡金等未浣磨錬等時。名有垢衣等。若浣磨錬等已。名無垢衣等。有無垢等時雖有異。而性無別。心亦如是」〔『婆沙論.』巻22　雜蘊智納息　T. vol.27. p.110a〕、の一心相續論者の説も同じとされる。〔K. vol.8. p.91-94. 注53. 59.〕 cf. この一心相續論者の説につづいて、有随眠心とその二随増(所縁及び相

［b-1a］

契經所言無有愛者。通見修所斷。如分別論者[91]。爲止彼執顯經所説。無有愛者唯修所斷故。

〔『婆沙論.』巻27　雜蘊補特伽羅納息　T. vol.27. p.138b〕

［b-1b］

有作是説。無有愛或見所斷或修所斷。云何見所斷。謂於見所斷法無有而貪。云何修所斷。謂於修所斷法無有而貪。問誰作此説。答分別論者[92]。彼説意言。三界無常説名無有。能縁彼貪名無有愛。無常既通見修所斷。能縁彼愛亦通二種。

〔『婆沙論.』巻27　雜蘊補特伽羅納息　T. vol.27. p.138b〕

應）についての論究で、（6）「或復有執。随眠不於所縁随増。亦不於相應法有随増義。如譬喩者彼作是説。若随眠於所縁随増者於他界地及無漏法亦應随増。是所縁故如自界地。若於相應法有随増義者。則應未斷已斷一切自随増。相應畢竟不相應故猶如自性」〔ibid. T. vol.27. p.110a〕、（7）「或復有執。随眠唯於補特伽羅有随増義。如犢子部彼作是説。補特伽羅名有随眠及無随眠。非心等法。補特伽羅有縛解故。爲止彼執顯唯心等有縛有解名有随眠及無随眠。非數取趣畢竟無故」〔ibid. T. vol.27. p.110b〕と述べられる。

[91]『六十巻婆沙.』には説者なし。

[92]『六十巻婆沙.』には「毘婆闍婆提」とある。

表［t］

［a］四相論、特に刹那と轉變において、

譬喩者	3	［a-1a］［a-1g］［a-2a］
分別論者	2	［a-1b］［a-1g］
法密部	2	［a-1c］［a-1g］
相似相續沙門	2	［a-1d］［a-1g］
經部師	2	［a-1e］［a-1g］
轉變外道	1	［a-2b］
疑を生ずるもの	1	［a-1f］

［b］無有愛について、

分別論者	2	［b-1a］［b-1b］

資料【b- d】

☆　戒禁取と見取

［a］宿作及び自在の変化

《a-Ⅰ》

謂彼外道現見世間有設功用而不獲果。有不希求自然而得。便作是念當知皆是宿作爲因非現功力。然彼不知善悪業類定與不定。及時分差別故起此執。

〔【17】『婆沙論.』巻198　T. vol.27. p.993a〕

《a-Ⅱ》

然諸法生非因自在。漸次生故。謂諸世間若因自在變化生者則應一切俱時而生。彼因皆有無能障礙令不生故。若謂自在更待餘因方能生者便非自在。如餘因故。若謂諸法皆從自在欲樂而生故不頓起。自在欲樂何不頓生。彼生欲樂自在恒有無能障故。若謂自在更待餘因方生欲樂便非自在。又應無窮彼因復待餘因生故。又若自在生諸法因無別故法應無別。若謂自在生初一法後從彼法轉復生多。彼法云何能生多法亦如自在體是一故。又所生法亦應是常果似因故。又自在體應不能生彼體。是常如虚空故。

〔【17】『婆沙論.』巻199　T. vol.27. p.993b〕

［b］現法涅槃論について

《b-Ⅰ》

謂有外道聞説涅槃是勝妙樂。便謂若得欲界色界五地樂者。即名已得現法涅槃故起此見。……此見依我見轉。執有我體受涅槃樂故。復次此於果處轉。執有漏果爲涅槃故。復次此迷苦諦。以苦法爲樂故。

〔【29】『婆沙論.』巻199　T. vol.27. p.995a. f.〕

資料【c】[93]

『婆沙論.』全体ḷ譬喩者86回、分別論者約50回、犢子部は13回、大衆部は7回、

法密部は4回、飲光部3回、化地部は2回、經部は2回

見蘊見納息遡及ḷ譬喩者15回、分別論者12回、犢子部1回、大衆部1回、

法密部2回、飲光部1回、化地部0回、經部2[94]回

---

[93] さらに参考として、[a]世第一法、[b]十二因縁、[c]四諦論、[d]主観は同時に客観たり得ざるについての論究における異部説を提示する。[a-1]世第一法について(1)「謂分別論者執信等五根唯是無漏。一切異生悉不成就。」、(2)「謂經部師。亦爲遮遣分別論者。如前所執故作是言。世第一法五根爲性。非唯爾所。」、(3)「此是犢子部宗。ḷḷ世第一法唯以信等五根爲性。a諸異生性一向染汚。謂欲界繫。見苦所斷。十種随眠爲自性故。b随眠體是不相應行。c涅槃有三種。謂學無學非學〔三本は「學非」につくる〕無學。d立阿素洛爲第六趣。e補特伽羅體是實有。」〔『婆沙論.』巻2　雜蘊世第一法納息　T. vol.27. pp.7c-8b〕、[a-2]世第一法について(1)「謂大衆部執。世第一法通欲色界繫。所以者何。彼謂若地有現觀邊諸世俗智。此地即有世第一法。」、(2)「若犢子部執。世第一法通色無色界繫。所以者何。彼謂若地有諸聖道。此地即有世第一法。」、(3)「若化地部執。世第一法三界繫。所以者何。彼謂若地有盡智時。所修善根。此地即有世第一法。」、(4)「若法密部執。世第一法通三界繫及不繫。所以者何。彼謂如是世第一法既名世故通三界繫。名第一故亦通不繫。即彼部中復有別執。世第一法非三界繫亦非不繫。所以者何。彼謂如是世第一法。名第一故非三界繫。以名世故亦非不繫。」〔『婆沙論.』巻3　雜蘊世第一法納息　T. vol.27. p.17a〕、[b]十二因縁について(1)「或有執過去未來體非實有。現在雖有而是無爲。」、(2)「或復有執。縁起是無爲如分別論者。」〔『婆沙論.』巻23　雜蘊智納息　T. vol.27. p.116c〕、[c]四諦の自性について(1)「阿毘達磨諸論師言。五取蘊是苦諦。有漏因是集諦。彼擇滅是滅諦。學無學法是道諦。」、(2)「譬喩者説。諸名色是苦諦。業煩悩是集諦。業煩悩盡是滅諦。奢摩他毘鉢舎那是道諦。」、(3)「分別論者作如是説。若有八苦相是苦是苦諦。餘有漏法是苦非苦諦。招後有愛是集是集諦。餘愛及餘有漏因是集非集諦。招後有愛盡是滅是滅諦。餘愛盡及餘有漏因盡是滅非滅諦。學八支聖道是道是道諦。餘學法及一切無學法是道非道諦。」〔『婆沙論.』巻77　結蘊十門納息　T. vol.27. p.397a. f.〕、(4)「謂諸外道説多道諦。如執自餓爲道。或執臥灰爲道。或執随日轉爲道。或執飲風飲水食果食菜爲道。或執露形爲道。或執臥刺棘等爲道。或執不臥爲道。或執著弊故衣爲道。或執服諸藥物斷食爲道。」〔『婆沙論.』巻77　結蘊十門納息　T. vol.27. p.399b. f.〕、[d]主観は同時に客観たり得ざるについては(1)「謂或有執。心心所法能了自性。如大衆部。彼作是説。智等能了爲自性故。能了自他。如燈能照爲自性故。能照自他。」、(2)「或復有執。心心所法能了相應。如法密部。彼作是説。慧等能了相應受等。」、(3)「或復有執。心心所法。能了俱有。如化地部。彼作是説。慧有二種。俱時而生。一相應。二不相應。相應慧知不相應者。不相應慧知相應者。」、(4)「或復有執。補特伽羅能了諸法。如犢子部。彼作是説。補特伽羅能知非知。」〔『婆沙論.』巻9　雜蘊智納息　T. vol.27. p.42c〕

[94] 説としては1回。

表[u]

1）謗因・謗果の邪見における（資料【b-a】）[a]因果論において
飲光部[a-5c]、（譬喩者6、分別論者1、大衆部1etc.）

2）常見と断見における（資料【b-c】）[a]四相論、特に刹那と轉變において
法密部[a-1c]、經部師[a-1e]、（譬喩者2、分別論者1etc.）

3）注81 [a-1]世第一法において
分別論者（1）、經部師（2）、犢子部（3）

4）注81 [a-2]世第一法において
大衆部（1）、犢子部（2）、化地部（3）、法密部（4）

5）注81 [d]主観は同時に客観たり得ざるについて（心心所法能了論）において
大衆部（1）、法密部（2）、化地部（3）、犢子部（4）

上記5ヵ所4論説譬喩者8回、分別論者2回、犢子部3回、大衆部3回、
法密部3回、飲光部1回[95]、化地部2回、經部2回

[95] 飲光部の他の2説は巻51と巻144に見られるが、内容はChap.2-1.[a-5c]と同様のものである。「或復有執。諸異熟因果。若熟已因體便無。如飲光部。彼作是説。諸異熟因果未熟位其體猶有。果若熟已其體便無。如外種子。芽未生位其體猶有。牙（三本及び宮本は「芽」につくる）若生已其體便無。」〔『婆沙論.』巻51 結蘊不善納息 T. vol.27. p.263c〕、「飲光部説。諸異熟因。異熟未生彼因有體。異熟生已彼因便失。如芽未生種猶有體。芽既生已種體便無。」〔『婆沙論.』巻144 根蘊根納息 T. vol.27. p.741b〕

Bibliography

Abe,S　阿部真也

[1998] 「倶舎論における無我説」.『印度学仏教学研究』46 (2): 621-4.

Bareau,A.

[1955] *Les sects bouddhiques du Petit Véhicule*, École française d'extréme-orient, Paris.

Banto,S　伴戸昇空

[1979] 「中有」.『印度学仏教学研究』27-2[54). 日本印度学佛教学会

Boslaugh, Sarah, and 黒川利明(1948-)

[2015] 『統計クイックリファレンス』第 2 版 ed. 東京: オライリー・ジャパン.

Buhaken,R.　立正大学大学院部派佛教思想研究会

[1996a]「Abhidharma文献におけるālocanaの用例」.『佛教学論集』20. 立正大学大学院仏教学研究会

[1996b]『部派佛教思想資料集成』第壱版. 部派佛教思想研究会

Dutt,N.

[1941] *Early Monastic Buddhism*, 2 vols, Culucutta

Ejima,Y.　江島恵教

[1986] 「スティラマティの「倶舎論」註とその周辺--三世実有説をめぐって」.

『仏教学 / 仏教思想学会 編』(19): p5-32.

Endo,S.　遠藤信一

[1995] 「『倶舎論』における外道観（1）」.『東洋大学大学院紀要』31. 東洋大学大学院

Foucault,M.

[1969] *L'Archéologie du savoir*, Éditions Gallimard, Paris, 中村雄二郎訳[1981)『知の考古学』河出書房新社

[1966] *Les mots et choses*, Éditions Gallimard, Paris, 渡辺一民・佐藤亮一訳[1974)『言葉と物』新潮社

Frauwallner,E.

[1964] *Abhidharma Studien* [Wienes Zeitschrift für die Kunde Süd und Ostasiens.]

Frauwallner, Erich, and 宮下晴輝.

[1984] 「アビダルマ研究(Abhidharma-studien)」.『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』.

(40): p89-106.

Frauwallner, Erich, and 那須円照.

[1997] 「アビダルマ研究(Abhidharma-studien)：V.der Sarvāstivādaḥ(説一切有部)(2)」.

『龍谷大学佛教学研究室年報』10 (03/31): 1-17.

[1996] 「アビダルマ研究(Abhidharma-studien)：V.der Sarvāstivādaḥ(説一切有部)(1)」.
『龍谷大学佛教学研究室年報』9 (03): 1-17.

Fujii,K. 藤井教公

[1987] 「天台智顗のアビダルマ教学: 四運心を中心として」『印度学仏教学研究』35 (2): 622-5.

Fujimoto,A. 藤本 晃

[1999] 「Petavatthu 註における善業と悪業」『日本仏教学会年報』(65): 147-64

Fujita,M. 藤田光寛

[1999] 「瑜伽戒における不善の肯定」『日本仏教学会年報』(65): 107-25.

Funabashi,K. 船橋一哉

[1972] 「倶舎論の教義についての二、三の覚え書き」.『佐藤博士古稀記念佛教思想論業』: 317-30.

[1966] 「主体的把握から客観的分析へ」.『金倉博士古希記念印度学仏教学論集』. 平楽寺書店

[1955] 「倶舎論随眠品の註釋的研究」.『山口博士還暦記念印度学仏教学論叢』. 法蔵館

[1954] 『業の研究』法蔵館

舟橋一哉. 1972..

Funao,A. 舟尾暢男

[2008] 『「R」commander ハンドブック』. オーム社.

[2005] 『The R tips: データ解析環境 R の基本技・グラフィックス活用集』. 九天社.

Guenther, H. V.

[1957] *Philosophy & Psychology in the Abhidharma*, Berkeley & London,

Halder, Aruna.

[1967] Abhidharmakosa,its place in eariy buddhist literature.
Journal of the Oriental Institute(17): 247-66.

Hakamaya,N. 袴谷憲昭

[1981] 『玄奘』. 大蔵出版. 桑山正進共著

Harada,W. 原田和宗

[1989] 「VasubandhuとDignāgaの交渉-1-vādavidhiとālambanaparīkṣā雑考」
『仏教学会報』. (14): p47-52.

Hayashidera,M. 林寺正俊

[1989] 「アビダルマにおける四念処--「念処とは何か」をめぐる部派の解釈」
『日本仏教学会年報』(70): 43-58.

Hirakawa,A. 平川 彰

[1991] 『原始仏教とアビダルマ仏教』. 春秋社

[1984] 『仏教学入門』. 大蔵出版

[1979] 『インド仏教史』下巻. 春秋社

[1974] 『インド仏教史』上巻. 春秋社

[1966] 「有刹那と刹那滅」.『金倉博士古希記念印度学仏教学論集』. 平楽寺書店

Hirose,T. 広瀬智一

[1988] 「「アビダルマディーパ」における菩薩論」『仏教学 / 仏教思想学会 編』(24): p1-28.

[1982] 「アビダルマにおける破邪の形態‥特に『大毘婆沙論』を中心として」. 日本仏教学会年報48

[1971] 「アビダルマ仏教における Bhājāna-loka について」.『印度哲学仏教学』 20 (1): 154-5.

Honjyo,Y. 本庄良夫

[2000] 「陳那作『アビダルマ要義燈』世品(1)」.『種智院大学研究紀要 / 種智院大学基礎教育研究室 編』(1): 121-30.

[1991] 「阿含と倶舎論--界品-3」.『仏教研究』(20): 107-23.

[1985] 「阿含と倶舎論--界品-2」.『南都仏教』(54): p1-17.

[1985] 「阿含と倶舎論--界品-1」.『密教学』(20-21): p27-40.

[1983] 「シャマタデーヴァの倶舎論註--根品 5--」.『法然学会論業』(4): 1-14.

[1982] 「シャマタデーヴァの倶舎論註--根品-4」.『南都仏教』(48): p28-46.

Hosoda,N. 細田典明

[1995] 「『雑阿含』見相応と『発智論』見納息」.『印度哲学仏教学』10号. 北海道印度哲学仏教学会

[1992] 「『梵網経』と『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』」.『印度哲学仏教学』7号. 北海道印度哲学仏教学会

[1991] 「梵文『雑阿含経』仏所説品外道相応(b)」.『印度哲学仏教学』6号. 北海道印度哲学仏教学会

Hukaura,S. 深浦正文

[1938] 「譯經の制規」.『日本佛教研究会年報』3. 法蔵館

Hukuhara,R. 福原亮厳

[1969] 『成實論の研究』. 永田文昌堂

Hyodo,K. 兵藤一夫

[1982] 「「心(Citta)」の語義解釈--特にヴァスバンドゥの立場を中心にして」.『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(36): p21-39.

Ikeda,R. 池田練太郎

[1987] 「『五事論』の成立と流布」.『高崎直道博士還暦記念論集』. 春秋社

[1982] 「チベットにおけるアビダルマ仏教の特色」.『東洋学術研究』21 (2): p128-142.

Inoue,T. 井上智之

[1990] 「チベット撰述のアビダルマ文献」.『日本西蔵学会々報』(36) (03/31): 13-8.

Ishida,M. 石田基広

[2008] 『R によるテキストマイニング入門』: 森北出版.

石田基広, and 金明哲(1954-)

[2012] 『コーパスとテキストマイニング』: 共立出版.

Jain, Padmanabh S.

[1959] The sautrāntika theory of bīja. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 22 (2): 236-49.

[1959] The vaibhasika theory of words and meanings. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 22 (1): 95-107.

[1958] On the theory of two vasubandhus. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 21 (1): 48-53.

Kaji,Y. 加治洋一

[1990] 「「三弥底部論」の研究--我に関する章-下」.『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(51): p32-53.

[1985] 「「三弥底部論」の研究--我に関する章-上」.『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(42): p46-61.

Kamiya,M. 神谷正義

[1973] 「勝鬘経における善心・不善心について」.『印度学仏教学研究』22 (1): 360-4.

Kasugai,S. 春日井真也

[1972] 「マウリヤ王朝治下における仏教の変容」.『仏教論業』(16): 101-4.

[1955] 「真諦三蔵のアビダルマ学」.『印度学仏教学研究』3 (6): 652-8.

[1954] 「羅什三蔵のアビダルマ学」.『印度学仏教学研究』2 (2): 687-99.

[1953] 「玄奘三蔵のアビダルマ学の特相」.『印度学仏教学研究』1 (2): 478-82.

Katou,K. 加藤宏道

[1989] 「アビダルマ仏教における生命観--命根の研究」.『日本仏教学会年報』(55): p33-52.

[1985] 「得・非得の研究」.『仏教学研究 / 竜谷仏教学会 編』(41): p40-68.

[1979] 「不善根と意不善業道」.『印度学仏教学研究』27-2[54). 日本印度学佛教学会

Katou,J. 加藤純章

[1997] 「アビダルマの存在理由(レゾン・デートル)と大乗仏教徒の苦悩」.『駒澤短期大學佛教論集』3 (10): 1-22.

[1997] 「東アジアの受容したアビダルマ系論書--『成実論』と『倶舎論』の場合」『仏教の東漸--東アジアの仏教思想 1』: 39-77.

[1989] 『経量部の研究』. 春秋社

[1987] 「アビダルマの肉体観--『倶舎論』を中心にして--」.『東洋における人間観』: 251-85.

[1987] 「アビダルマ文献からみた世親等諸論師の年代について」.『高崎直道博士還暦記念論集』. 春秋社

[1973] 「有漏・無漏の規定」.『印度学仏教学研究』21-2[42). 日本印度学佛教学会

Kanakura,E. 金倉圓照

[1995] 「外教の文献にみえる經部説」.『山口博士還暦記念印度学仏教学論叢』. 法蔵館

Katayama,K. 片山一良

[1995] 「原始仏教における善悪--『法句』第 183 偈の意味するもの」.

『日本仏教学会年報』(65): 179-94.

Kawamura,K. 河村孝照

[1995] 「阿毘達磨大毘婆沙論綱要(v19－v22)」.『東洋大学大学院紀要』31. 東洋大学大学院

[1989] 「阿毘達磨大毘婆沙論綱要」.『東洋大学大学院紀要』25. 東洋大学大学院

[1977] 「アビダルマ仏教における法経験--有部の修行論--」.『東西思惟形態の比較研究』. 148-71.

[1974] 『阿毘達磨論書の資料的研究』. 同朋社

[1971] 「阿毘達磨仏教における信について」.『印度学仏教学研究』19 (2): 69-73.

Kawamura,S. 川村昭光

[1981] 「アビダルマ仏教と十二巻眼蔵について」.『宗学研究』(23): p176-181.

[1978] 「Sautrāntikaの形色非実有論」.『印度学仏教学研究』27-1[53). 日本印度学佛教学会

Kimura,T. 木村泰賢

[1968a]『阿毘達磨論の研究』 木村泰賢全集 第4巻. 大法輪閣

[1968b]『小乗仏教思想論』 木村泰賢全集 第5巻. 大法輪閣

[1921] 「結集史分派史考」.『国訳大蔵経』 論部13巻附録

Kin,M. 金 明哲

[2009] 『テキストデータの統計科学入門』: 岩波書店.

[2007] 『R によるデータサイエンス: データ解析の基礎から最新手法まで』: 森北出版.

Koga,Y. 古賀英彦

[1972] 「有部教義学における禅定」.『禅文化研究所紀要』第4号

Kudara,Y. 百済康義

[1986] 「トカラ語 B によるアビダルマ論書関係の断片について-3- Abhidharmadīpa註」.

『印度学仏教学研究』34 (2): p882-875.

[1983] 「トカラ語 B によるアビダルマ論書関係の断片について-2- pañcavastuka註」.

『印度学仏教学研究』32 (1): p473-468.

[1982] 「ウイグル訳アビダルマ論書に見える論師・論書の梵名」.

『印度学仏教学研究』31 (1): p374-371.

[1978] 「五十二心所を説くウイグル訳アビダルマ論書断片」.

『印度学仏教学研究』26 (2): p1003-1000.

Kudo,M.　工藤道由

[1985] 「無表と思--Avijñapti and cetanā--」.『駒沢大学院仏教学研究会年報』21-2[42). (18): 1-8.

[1983] 「身表形色説--表業・無表業」. 『仏教学 / 仏教思想学会 編』(16): p1-21.

Kumagaya,E.　熊谷悦生(1965-), and 舟尾暢男(1977-)

[2008] 『「R」で学ぶデータマイニング』オーム社.

Kurisu,R.　栗須礼夫

[1973] 「カニシュカ二七八年説について」.『印度学仏教学研究』21-2[42). 日本印度学佛教学会

Kusama,H.　草間法照

[1982] 「原始経典にあらわれた邪見の種々相」.『日本仏教学会年報』48. 日本仏教学会

Kuwayama,S.　桑山正進

[1981] 『玄奘』. 大蔵出版. 袴谷憲昭共著

Lamotte,Étienne

[1958] *Histoire du bouddhisme indien, des origines à l'ère Śaka*, Louvain.

Maeda,E.　前田惠學

[1964] 『原始佛教聖典の成立史研究』. 山喜房佛書林

Maeda,S.　前田至成

[1978] 「敦煌本四法経論広釈のアビダルマ的性格」.『印度学仏教学研究』22 (1): 324-8.

Masuda,Y.　桝田善夫

[1978] 「発智・八犍度論見道説再考」.『印度学仏教学研究』27-1[53]. 日本印度学佛教学会

Matsuda,K.　松田和信

[1984] 「Vasubandhu における三帰依の規定とその応用」.
『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(39): 96-81.

[1984] 「Vasubandhu 研究ノートー1」.『印度学仏教学研究』32 (2): 1042-1039.

[1982] 「分別縁起初勝法門経(Avvs)」--経量部世親の縁起説」.
『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(36): p40-70.

Matsunami,Y.　松濤泰雄

[2001] 「『アビダルマコーシャの註釈である経に随順する(論)』について」.
『仏教学 / 仏教思想学会 編』(43): 1-18.

Matsusima,O. 松島央龍

[1978] 「『倶舎論』以前のアビダルマ論書における「色(Rūpa)」解釈」.『印度学仏教学研究』
56 (113): 374-1.

Minoura,A.　箕浦暁雄

[1978] 「アビダルマにおけるnimittaについて--nikāyaの用例に関連して」.
『大谷大学大学院研究紀要』(16): 67-86.

Mitomo,K.　三友健容

[2009]「『婆沙論』と『大智度論』」.『印度学仏教学研究』58 (119): 379-3.

[2009]「 パスパのアビダルマ理解」.『印度学仏教学研究』57[117]: 1053-45.

[2007]『アビダルマディーパの研究』. 平楽寺書店

[2007] 「『アビダルマディーパ』における『本論』」.『印度学仏教学研究』 55 (111): 875-67.

[2005]「『アビダルマディーパ』における無量寿説批判」.『印度学仏教学研究』 53 (106): 625-31.

[1996] 「『アビダルマのともしび』第一章界品翻訳研究(2)」.『勝呂信静博士古稀記念論文集』: 31-50.

[1994]「アビダルマのともしび」第 1 章界品翻訳研究」.『大崎学報』(150): p33-98.

[1989]「アビダルマディーパ」における仏道の体系--大乗批判を中心として」.『日本仏教学会年報』(54): p15-281.

[1989]「アビダルマディーパ」における滅不待因論争.『印度学仏教学研究』37 (2): p922-916.

[1987]「『アビダルマディーパ』の作者」.『仏教研究の諸問題/仏教学創刊十周年記念特輯』: 39-55.

[1980]「第五章　アビダルマ仏教における声聞成仏論と法華経」. : 281-322.

[1979]「『アビダルマディーパ』業品の検討-1」.『仏教学 / 仏教思想学会 編』(7): p65-93.

[1978]「『アビダルマディーパ』作者に対する二・三の問題」.『印度学仏教学研究』 27 (1): p221-225.

[1972]「倶舎論におけるsvabhāvaについて」 .『印度学仏教学研究』 21-1[41].

Miyashita,H.　宮下晴輝

[2002]「アビダルマの諸門分別--内外門」『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』. (76): 20-43.

[1994]「アビダルマにおける自性の意味--三世実有説の再検討」
『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』. (59): p126-98.

[1983]「アビダルマ教義学の一局面--「倶舎論」から「釈軌論」への展開例」
『大谷学報 / 大谷学会 編』 63 (1): p1-16.

[1983]「倶舎論註釈書 tattvartha の試訳--第七章第一偈より第六偈まで」
『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』. (38): p110-87.

Mizuno,K.　水野弘元

[1966]「舎利弗阿毘曇論について」『金倉博士古希記念印度学仏教学論集』. 平楽寺書店

Mizuta,K　水田恵純

[1977] 「名句文に関する論争」.『印度学仏教学研究』25-2[50). 日本印度学佛教学会

[1976] 「アビダルマ・ディーパにおける菩提心」.『印度学仏教学研究』24 (2): p666-667.

Mori,A　森祖道

[1999] 「パーリ文献に現われたいわゆる「七仏通誡偈」」.

『日本仏教学会年報』(65): 165-78.

Mori,S　森　章司

[1995] 『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』. 東京堂出版

[1973] 「新・旧『婆沙論』の引用経について」.『印度学仏教学研究』21-2[42).

Murakami,M　村上征勝

[2006] 『文化情報学入門』. 勉誠出版

[2004] 『シェークスピアは誰ですか?: 計量文献学の世界』. 文芸春秋

[2002] 『文化を計る: 文化計量学序説』. 朝倉書店

[1994] 『真贋の科学: 計量文献学入門』. 朝倉書店

Naitou,A　内藤昭文

[1985] 「Tspにおけるアートマン説批判-2-プトガラ説をめぐって-2-〔含 翻訳〕」.『仏教学研究』竜谷仏教学会 編』(41): 20-51.

Nakamura,H.　中村　元

[1994] 『原始仏教から大乗仏教へ』. 春秋社

[1974] 「愛」.『印度学仏教学研究』22 (2́) 135-41.

[1968] 『インド思想史』 第2版. 岩波書店

Nakamura,T.　中村隆敏

[1974] 「入阿毘達磨論におけるチベット訳と漢和の相違点」.『大正大学学報 』

36 (12/01): 73*-75.

Namikawa,T.　並川孝

[1977] 「アビダルマにおける「力」という語について」.『印度学仏教学研究』26 (1́) pp.138-139

Nisi,G.　西　義雄

[1975] 『阿毘達磨仏教の研究』. 国書刊行会

[1945] 『初期大乗仏教の研究』. 大東出版社

Nisimura,S.　西村実則

[2001] 「原始仏教・アビダルマにあらわれたカーマ(欲望)」

『三康文化研究所年報』. (32): 87-113.

[1987]「「アビダルマディーパ」第 5 章の考察」『印度学仏教学研究』36 (1): p36-41.

[1986] 「アビダルマの名色論」

『大正大學研究紀要.佛教學部・文學部 / 大正大学出版部 編』(72): p275-286.

[1980] 「有部の法体系における不善法: 大不善地法考」

『大正大学綜合佛教研究所年報 2』(03): 37-52.

[1979] 「有部の法体系における煩悩 ： 大煩悩地法考」
『大正大学綜合佛教研究所年報』(05): 47-66.
[1974] 「アビダルマにおける不善根」『仏教論業』(18): 170-5.

Nonome,R. 野々目了
[1973] 「阿毘達磨に於ける触処論」.『印度学仏教学研究』21巻2号[42).

Ogawa,H. 小川 宏
[1979] 「無爲法に就て」.『印度学仏教学研究』27-2[54). 日本印度学佛教学会

Okano,K. 岡野潔
[1999] 「初期仏教のコスモロジーと善悪」.『日本仏教学会年報』(65): 225-38.

Poussin,L. de la Vaiiée
[1930]Dogme et philosophie du Bouddhisme, Paris.

Saito,S. 齋藤 滋
[2008] 「『般若経』とアビダルマ仏教思想」.『宗教研究』81 (4) (03/30): 1064-5.
[2008] 「説一切有部における「アビダルマ」--『大毘婆沙論』と『倶舎論』」.
『印度学仏教学研究』57 (116): 350-44.
[2006] 「初期アビダルマ仏教における因果論--四縁を中心に」.
『駒沢大学仏教学部論集』(37): 464-49.
[2003] 「初期アビダルマ仏教における「命根」と「寿」」.『印度学仏教学研究』51 (102): 862-58.

Saitou,R. 齋藤龍裕
[1996] 「Āgamaの解釈——唯識観の源流に関する一仮説」.『部派佛教思想資料集成』第壱版.
部派佛教思想研究会

Sakamoto,Y. 坂本幸男
[1966] 「説一切有部の随眠論」.『金倉博士古希記念印度学仏教学論集』. 平楽寺書店

Sakurabe,S. 桜部 建
[1974] 「第一章 原始仏教･アビダルマにおける存在の問題」.
『講座仏教思想 第１巻「存在論・時間論」』. 17-53
[1973] 「説一切有部アビダルマにいう八種の「形色」について」.『佛教研究』(3): 48-53.
[1965] 「入阿毘達磨論の研究」.『大谷大学研究年報』(18): 163-227.
[1954] 「玄奘譯倶舎論における「體」の語について」.『印度学仏教学研究』2 (2): 617-9.
[1953] 「経量部の形態」.『印度学仏教学研究』2 (1): 115-6.

Satou,M 佐藤密雄
[1991]『論事附覚音註』. 山喜房佛書林

Shizutani,M. 静谷正雄

[1978]『小乗仏教史の研究』. 百華苑

[1977]「枝末分裂の伝承と部派仏教の成立」.『龍谷大学論集』411. 龍谷学会

[1965]『インド仏教碑銘目録・・グプタ時代以前の仏教碑銘』.

Shiradate,K. 白館戒雲

[2002] 「チベットにおける『アビダルマ集論』の研究--パン・ロツァーワの『註釈』を中心にして--」

『櫻部博士喜寿記念論集/初期仏教からアビダルマへ』: 401-14.

[1995] 「7 部アビダルマ(mngon pa sde bdun)という呼称の出典について」

『印度学仏教学研究』43 (2): p836-832.

Sotozono,K. 外薗幸一

[1996]「ギリシア思想とインド思想 ： 霊魂観をめぐって(故藤田宣隆教授追悼号)」.

『季刊社会学部論集』15 (1) (04/15): 61-108.

Sugimoto,T. 杉本卓洲

[1995]「法藏部と仏塔崇拝」.『印度哲学仏教学』10. 北海道印度哲学仏教学学会

Suzuki,T. 鈴木 努

[1977]『ネットワーク分析』: 共立出版

Tabata,T. 田端哲哉

[1977]「説一切有部の基本命題とsatkāyadṛṣṭi」.『印度学仏教学研究』25-2[50).

Takahashi,S 高橋審也

[1973]「アージーヴィカの業思想について1」『印度学仏教学研究』21-2[42).

Takeda,H 武田宏道

[2000]「世親の実我説批判 :『倶舎論』破我品の所説を中心にして」

『龍谷大學論集』456 (07): 52-76.

[1998]「『倶舎論』破我品の研究(1)」

『龍谷大学仏教文化研究所紀要 / 仏教文化研究所 編』(37): 17-40.

[1998]「犢子部のプトガラ説--「倶舎論」破我品の所説を中心にして」

『龍谷大学論集』(451): 1-36.

[1994]「アビダルマ仏教--研究の現況と今後の課題」

『仏教学研究 / 竜谷仏教学会 編』(50): p140-155.

Takeda,K 武田和博

[2000]「有部アビダルマにおける「随増」について」

『印度哲学仏教学 / 北海道印度哲学仏教学会 編』(15): 101-13.

[1998]「『大智度論』におけるアビダルマ説--煩悩説の場合」
『印度学仏教学研究』47 (93): 128-30.

Takezawa,K 竹澤邦夫
[2010]『R による画像表現と gui 操作』.カットシステム.

Takumi,H. 宅見春雄
[1972]「婆沙所収異部教義について」.『佐藤博士古希記念佛教思想論叢』. 山喜房佛書林

Tamai,T. 玉井 威
[1973] 「ミリンダパンハーに於ける霊魂説について」.『印度学仏教学研究』21 (2): 146-7.

Tanaka,K. 田中教照
[1987] 「部派仏教における智の展開」.『高崎直道博士還暦記念論集』. 春秋社
[1985] 「南北両アビダルマの縁起説」.
『平川彰博士古稀記念論集/仏教思想の諸問題』: 101-24.
[1982] 「初期アビダルマ論書における四念処論」.
『仏教教理の研究/田村芳朗博士還暦記念論集』: 195-215.
[1977] 「有部の無明論について」.『印度学仏教学研究』25-2[50]. 日本印度学佛教学会
[1976] 「南北両アビダルマの修行道論」.『宗教研究』50-2[229]. 日本宗教学会

Tatikawa,M. 立川武蔵
[2006] 「『倶舎論』における「アビダルマ」の意味について」.
『印度学仏教学研究』54 (108): 564-71.

Tazaki,K. 田崎國彦
[1987] 「経量部の択滅説 (一)-その定義と安慧満増の解釈をめぐって-」.
『印度学仏教学研究』35 (2): 555-7.

Teramoto,E. 寺本婉雅
[1974] 『蔵漢和三訳対校異部宗輪論』. 国書刊行会. 平松友嗣共編訳

Tomomatu,E. 友松圓諦
[1972] 「無尽財と部派」.『佐藤博士古希記念佛教思想論叢』. 山喜房佛書林

Tomotani,K. 智谷公和
[1996] 「『阿毘曇心論』「業品」における善・不善・無記について」.
『印度学仏教学研究』44 (2): 495-7.

Toyoda,H. 豊田秀喜
[2008] 『データマイニング入門-R で学ぶ最新データ解析』.東京図書.

Tsukamoto,K. 塚本啓祥

[1966]『初期仏教教団史の研究』. 山喜房佛書林

[1965]『梵語仏典の研究』 Ⅲ 論書編. 平楽寺書店. 松長有慶・磯田熙文共編

Ui,H. 宇井伯寿

[1965a]『印度哲学研究』 第2巻. 岩波書店

[1965b]『印度哲学研究』 第3巻. 岩波書店

Watanabe,B. 渡辺楳雄

[1954]『有部阿毘達磨論の研究』. 平凡社

Winston, Chang.

[2013]『Rグラフィックスクックブック--ggplot2によるグラフ作成のレシピ集』. Trans. 弓美子 石井, 崇瀬 河内, 雅人 戸山 and 敦 古畠オライリー・ジャパン.

Yagara,A. 柳楽敦祥

[1990]「倶舎論破我品中に説く破我と輪廻の関係について--犢子部のプドガラ説を主として」. 『仏教学会報』(15): p55-59.

Yamabe,Y. 山部能宜

[1999]「『瑜伽師地論』における善悪因果説の一側面--いわゆる「色心互熏」説を中心として」. 『日本仏教学会年報』(65): 127-46.

Yamamoto,K. 山本啓量

[1978]「原始仏教における解脱の構造に関する考察」.『印度学仏教学研究』27-1[53).

Yamashita,K. 山下幸一

[1980]「アビダルマ・ディーパ」に言及されるサーンキャ説について」. 『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(32): p67-80.

Yoshimoto,S. 吉元信行

[2000]「アビダルマ仏教における三十七菩薩分法の体をめぐって」. 『加藤純章博士還暦記念論集/アビダルマ仏教とインド思想』: 5-17.

[1994]「アビダルマ仏教における処・界の建立と八句義」.『大谷学報 / 大谷学会 編』74 (2): 1-13.

[1985]「滅諦の大乗アビダルマ的分析」.『印度学仏教学研究』34 (1): p367-362.

[1984]「心理概念の大乗アビダルマ的分析--遍行・別境心所--」.『宗教研究』(259): 170-2.

[1984]「心理的諸概念の大乗アビダルマ的分析--善心所」. 『佛教学セミナー / 大谷大学佛教学会 編』(39): 11-26.

[1982]「物質概念の大乗アビダルマ的分析--色蘊と変壊」. 『大谷学報 / 大谷学会 編』62 (1): 24-36.

[1982] 「物質概念の大乗アビダルマ的分析--色蘊の諸相」.
『印度学仏教学研究』31 (1): p326-329.
[1982] 「邪見と断善根」.『日本仏教学会年報』48. 日本仏教学会
[1981] 「アビダルマディーパ所引の法句教」.『宗教研究』(246): 249-50.
[1979] 「アビダルマディーパにおける三世実有論」.『印度学仏教学研究』28 (1): 332-336.
[1977] 「アビダルマ仏教的判釈の諸相」.『大谷学報 / 大谷学会 編』57 (1): p54-66.

Yosise,S. 吉瀬 勝
[1972] 「南北両伝における四禅定について」.『印度学仏教学研究』21-1[41).

Yosizu,N. 吉津宜英
[1970] 「中国仏教におけるアビダルマ研究の系譜」.『印度学仏教学研究』19 (1): 243-5.

Acknowledgements

この論文の着想を得たのは、もう 20 年近く前のことである。しかしながら、自らの力不足、また情報機器環境も何も整っていなかった。ところが個人のシステムでもこのような作業が可能であることは、ある意味驚きでしかたがない。時代の流れというのはものすごいものである。

形になるかどうかわからぬものに、長期にわたり励まし、ご指導いただいた恩師三友健容博士には言い尽くせないほどのお力を賜った。もはや恩返しということすら思いもよらぬものである。また、統計数理研究所以来、やはりいろいろご指導いただいた同志社大学村上征勝博士には、快く副査を引き受けていただき、これもまた望外の幸せである。さらには同じく副査を快諾いただいた、髙橋堯英博士にも甚深の謝意を表すものである。他にも大勢の皆様のご縁によって今の自分があるということを心から感じさせていただいた。

とくに、なにこれと細かい作業を手伝ってくれた息子 慧、娘 萌、そして妻智子の励ましが、このような形になったことを、なによりのものとありがたく思う次第である。

佐 野 靖 夫